

博士論文

中国語話者を対象とする漢語動詞の教育のための総合的研究

—母語の働き方と母語知識の活用に着目して—

一橋大学大学院言語社会研究科

博士後期課程

劉 倩卿

LD182004

目次

第一部 基礎編.....	1
第1章 序論.....	1
1. 研究動機.....	1
2. 問題の所在.....	2
3. 研究目標.....	5
4. 本論文の構成.....	6
5. 付記.....	7
5.1 用語について.....	7
5.2 記号と用例出典.....	10
第2章 先行研究の概観.....	11
1. 第二言語習得研究における母語の扱い方.....	11
1.1 「対照分析-誤用分析-中間言語」における母語の扱い方.....	11
1.2 母語の知識を活かした日本語教育.....	15
1.2.1 「母語の知識を活かした日本語教育」とは.....	15
1.2.2 「母語の知識を活かした日本語教育」の重要性.....	15
1.2.3 文法教育における母語知識の活かし方.....	19
1.3 まとめ.....	20
2. 日本語の漢語動詞.....	20
2.1 漢語動詞とは.....	20
2.2 漢語動詞の語構成.....	22
2.3 漢語動詞の自他.....	23
2.3.1 日本語の動詞の自他.....	23
2.3.2 漢語動詞の自他の認定.....	35
2.4 本研究の注目する対象.....	38
3. 漢語動詞の日中対照研究.....	39
3.1 日本語の漢語語彙と中国語の品詞のずれ.....	39

3.2 日本語の漢語動詞と中国語の自他のずれ	43
3.2.1 中国語と日本語の自他対応について	43
3.2.2 漢語動詞の場合	48
3.3 対照研究の盲点	49
4. 中国語話者による漢語動詞の習得研究	54
4.1 漢語動詞の習得難易度	54
4.2 漢語動詞の形容詞・名詞化	55
4.3 非対格自動詞の受身化	57
4.4 習得研究の問題点	59
第3章 本研究の立場とアプローチ	63
1. 研究の課題	63
1.1 中国語の視点からの漢語動詞との対照分析	64
1.2 中国語話者による漢語動詞の使用における母語の働き方	64
1.3 漢語動詞の教育における母語知識活用の実行可能性	65
2. 研究の方法	65
2.1 母語を活かした日本語教育の観点から	65
2.2 [対照分析—習得調査—教育試案] のアプローチ	66
第二部 対照分析篇	69
第4章 本研究の対照手法	69
1. 対照分析の流れ	69
2. 中国語の視点からの問題の特定	70
3. 意味から形式へ	70
3.1 意味領域の設定：「変化」	72
3.2 意味と形式の関係の見方	72
第5章 中国語における「変化」の表現	75
1. 「変化」に着目する理由	75
2. 「変化」とは	76

2.1	本研究における「変化」	76
2.2	「状態の変化」と「状況の変化」	77
3.	中国語の「変化」を表す語	80
3.1	「変化」を表す動詞	80
3.2	「変化」を表す形容詞	85
3.3	主体の変化と客体の変化	89
3.3.1	主体変化形容詞と客体変化形容詞	90
3.3.2	主体変化動詞と客体変化動詞	93
3.3.3	客体変化動詞と受身の関連性	94
3.4	中国語の「変化」を表す語のまとめ	96
4.	「変化」の表現と事象の捉え方	100
第6章	中国語の「変化」を表す表現に基づく漢語動詞の日中対照分析	104
1.	研究対象語の選別	104
1.1	選別の手順	104
1.2	同形同義語の認定	104
1.3	中国語の用法による抽出と分類	107
2.	日本語における特徴の分析	108
2.1	品詞と自他	108
2.2	「になる」「する」「される」の使用状況	112
2.2.1	「漢語+になる」の使用状況	112
2.2.2	「漢語+する」の使用状況	116
2.2.3	「漢語+される」の使用状況	119
第7章	対照分析に基づく問題所在の予測及び指導対策の予想	122
1.	中国語話者における問題の所在の予測	122
1.1	問題の所在	122
1.2	問題の分析	126
2.	発達段階別の特徴の予測	129
3.	母語の知識を活かした指導対策の予想	130

4. まとめ	133
第三部 調査篇	135
第8章 調査の概要	135
1. 調査の目的	135
2. 調査の方法	137
第9章 調査の結果と分析	140
1. 母語の働き方を把握するための質的調査	140
1.1 調査の概要	140
1.1.1 調査の目的	140
1.1.2 調査対象語と調査文	141
1.1.3 被験者	143
1.1.4 調査の手順	143
1.2 調査の結果と分析	143
1.2.1 使用実態と母語の相関性	144
1.2.1.1 全体的な使用傾向	144
1.2.1.2 使用実態の内訳	147
1.2.1.3 選択パターンの様相	151
1.2.2 判断基準と使用意識	153
1.2.3 誤用と正用の分布	157
1.3 質的調査のまとめ	160
2. 問題の所在と要因を解明するための量的調査	161
2.1 調査の概要	161
2.1.1 調査の目的	161
2.1.2 調査対象語と調査文	162
2.1.3 被験者	164
2.1.4 調査の手順	165
2.2 調査の結果と分析	165

2.2.1	誤用と正用が起こる環境の検証	165
2.2.1.1	誤用しやすい自動詞	165
2.2.1.2	正用しやすい他動詞とナ形容詞	174
2.2.2	学習環境と学習レベルによる変化	176
2.2.2.1	使用実態の変化	177
2.2.2.1	判断基準と使用意識の変化	179
2.2.3	日本語母語話者の使用状況との比較	181
3.	第9章のまとめ	182
第10章	総合的考察	185
1.	母語の働き方の様相	185
1.1	母語の用法と使用状況の相関性	185
1.2	潜在的な母語知識の働き	186
1.3	諸要因における母語の働きの位置付け	188
2.	母語の働きの変化	191
2.1	学習環境と学習レベルの影響	191
2.2	超級学習者における問題点	192
3.	問題の所在と原因の絞り込み	192
4.	学習者における問題の見方について	193
第四部	対策篇	194
第11章	現行の漢語動詞の教育における問題点	194
1.	教科書における問題点の考察	195
1.1	調査した教科書	195
1.2	教科書の記述	196
1.2.1	漢語動詞について	196
1.2.2	変化の表現について	199
1.2.3	受身について	201
1.3	教科書の問題点のまとめ	204

2. 中国国内の大学の日本語専攻における漢語動詞の指導の現状	206
第12章 中国語話者を対象とする漢語動詞の教育試案	209
1. 基本的な方針	209
2. 漢語動詞の指導試案	210
2.1 導入：基本内容の説明	210
2.2 帰納：母語知識に基づいた指導案と語彙リスト	212
2.3 発展：表現の精密化と理論的な内容	217
3. 日本語教師へのアドバイス	219
第五部 展望篇	219
第13章 結論	220
1. 本論文のまとめ	220
2. 本論文の意義	228
3. 今後の展望	229
参考文献	231
調査資料	237
付録Ⅰ 質的調査の文法テスト	238
付録Ⅱ 量的調査の自然さ判断テスト	240
付録Ⅲ 本研究で分析した漢語動詞の一覧	246
付録Ⅳ 教育資料の語彙リスト	252
謝 辞	255

第一部 基礎編

第1章 序論

1. 研究動機

筆者は、日本語学習者の一人として、自動詞と他動詞を一生懸命勉強してきたという記憶がある。形態対応、語形変化、構文、意味など、様々な規則を覚えてきた。ただし、和語動詞と比べ、漢語動詞については特に苦労した記憶がない。その理由はいくつかある。①漢字表記に親近感がある、②意味も推測できる、③形態的变化が複雑ではない(する、させる、される)、④中国語と同形同義でありながら、用法がずれるものがあるが、「緊張、普及、発展」など、普段よく使われる語に注意すれば、特に問題がないという印象である。

しかし、実際に使用する際に、問題が生じることがある。例えば、中国語の“充実”(充実する)、“中止”(中止する)は自他両用動詞であり、“充実”は形容詞としても使われている。(1)と(3)のような意味を表したい場合、日本語の「中止する」、「充実する」が自動詞であるか、他動詞であるかは確信がなく、辞書やネットを調べても、正解だと確信できる答えが得られないことがあると思われる。中国語の発想から推測すると、(2)と(4)の形式が全て使えるはずだという理解になるが、一方、日本語では、これらの形式の使用が限られている。(2)bの「充実される」、「充実になる」という形式は使えない。(4)aの「中止する」も「中止させる」も使えるが、「運動会を中止させる」と言えば、「誰かに運動会を中止させる」という意味になる。(4)bの「中止される」と「中止になる」は使えるが、「中止する」は使えない。

(1) a. 充実 了 内容。

充実する た 内容

b. 内容 充実 了。

内容 充実する た

(2) a. 内容を充実する。

内容を充実させる。

b. 内容が充実される。

内容が充実する。

内容が充実になる。

(3) a. 中止 了 运动会。

中止する た 运动会

b. 运动会 中止 了。

运动会 中止する た

- (4) a. 運動会を中止する。 #運動会を中止させる。
b. 運動会が中止される。 運動会が中止する。 運動会が中止になる。

このように、漢語動詞の教育では、一般的に自他の分類が規則として導入されているが、実際の使用にあたって矛盾が生じる場合がある。例えば、「充実」は、「～を充実する」と「～が充実する」が使えるため、「自他両用動詞」であるが、「～が充実される」という形の使用が少ない。また、漢語動詞の語幹は、名詞的特徴をもつため、「名詞+に+なる」という形式が使えるはずであるが、実際には、「中止になる」のように使える場合もあれば、「充実になる」のように使えない場合もある。つまり、漢語動詞は、自他の分類や関連の規則、漢語の名詞的特徴を知っていても、中国語話者には正しく使えるとは限らない。言い換えれば、自他などの規則のみで教育に貢献できるというわけではない。日本語教育に携わる人（特に非日本語母語話者）には、おそらくこのような経験があるのだろうと思われる。筆者も日本語教育経験者の一人であり、以上のような問題をめぐり、日本語の規則や、中国語と日本語の区別を学習者に説明するときに困ることがある。

筆者は、また研究者の立場に戻った後、関連の先行研究をレビューしたところ、中国語を母語とする日本語学習者において、漢語動詞の習得問題が普遍的に存在する現象であるとわかったが、教育現場に貢献できるような対策が見つからなかった。そこで、本論文の研究動機は、中国語話者の視点から、中国語話者による漢語動詞の習得状況を正確に捉えた上で、教育への有用な対策を提案することである。

2. 問題の所在

中国語話者にとって有用な教育対策を出すために、漢語動詞をめぐる日本語と中国語の対応関係、中国語話者による漢語動詞の習得状況を正確に把握することが前提となる。なお、従来の漢語動詞に関する日中対照研究、中国語話者による漢語動詞の習得研究では、習得における中国語の働き方が正確に把握されておらず、中国語話者にとって有用な対策が提案されているとは言えない。具体的には、以下のような3つの問題点が挙げられる。

〈1〉 言語間のずれが誤用の原因だとされているが、「ずれ」が誤用の唯一の原因ではない。なぜなら、ずれがない場合でも誤用が起こるためである。

中国語話者にとって漢語語彙は二面性があると思われる。即ち、漢語の知識があるために習得しやすい面もあれば、日本語との間にずれがあるために習得しにくい面もある。漢語動詞に関する日中対照研究（石・王 1984、中川 2005 など）によると、中国語と日本語の間に品詞や動詞の自他のずれがある。そのため、中国語話者が漢語動詞の品詞や自他を間違える場合があるとされている。

例えば、(5) a の「成熟する」は、日本語では自動詞であるが、中国語では「成熟」が形容詞であるため、中国語話者が「*成熟になる」と誤用しやすい(五味他 2006)。(5) b の「開通する」は、日本語では自動詞であるが、中国語では「開通」が他動詞であるため、中国語話者が「*開通される」と誤用しやすい(庵 2010)。

(5) a. *内面が成熟になる (五味他 2006 : 5)。

b. *家の近くに長いトンネルが開通されました (庵 2010 : 176)。

一方、中国語と日本語の間に品詞や自他のずれがない場合も、(5) のような誤用が起こっている。例えば、(6) の「消失する」と「出現する」は、中国語でも日本語でも自動詞であるが、「消失になる」、「出現される」といったような誤用が生じる現象が観察されている。このような現象は、両言語の品詞や自他のずれによって解釈できないのである。

(6) a. *娯楽産業がだんだん消失になる (五味ほか 2006 : 6)

b. *統計という言葉は、国の状態の意味であり、十七世紀に、ドイツに出現された。

(庵 2010 : 174)

<2> 学習者による事態の捉え方に関する考察が十分であるとは言えない。それは、形式化されない要素も誤用の原因になりうるためだと考えられる。

「漢語+になる」と「漢語+される」の誤用をめぐり、先行研究では、学習者による内省、即ち事態の捉え方からも考察されている。五味他(2006)は、中国語の発想では、自然に生起する事柄には「~になる」を用いると述べている。庵(2010)は、事態の成立に「外的な力」の存在を感じると「~される」を使い、自然に生起する場合は「~する」を使うと述べている。しかし、(7) は自然に生起する事態だと考えられないが、なぜ「される」、「する」ではなく、「になる」を使うのであろうか。つまり、中国語話者は、自然に生起する事態に受身形を使わないはずであるが、外力による事態の成立であっても、受身形を使うとは限らないということである。先行研究では、中国語話者による事態の捉え方と産出された形式との関係が明らかにされていないのである。

(7) a. *治安が改善になる。(五味ほか 2006 : 5)。

b. *労働力不足の問題が解決になる。(同上)。

以上のような「漢語+になる」と「漢語+される」の誤用は、「外力の関与なし」と「外

力の関与あり」に分けてみると、中国語の表現形式と中国語話者が使う形式は(8)と(9)の通りである。中国語では、外力の関与の有無を問わず、いずれも「漢語」に相当する語の後ろに完了アスペクト助詞“了”のみをつけ、「漢語+“了”」という形を使う。しかも、「になる」に相当する“变得”、「される」に相当する“被”などのような有形の標識が付いていない。なお、中国語話者の使う形式を見ると、「外力の関与なし」の場合に「になる」を使う。一方、「外力の関与あり」の場合に「される」も「になる」も使い、それは事態を「外力の関与」と「変化の生起」に分けて捉えるためであろうと考えられる。

(8) 「外力の関与なし」

- a. 内心 成熟 了。 → *内面が成熟になる。
内面 成熟する た
- b. 娱乐产业 消失 了。 → *娛樂産業が消失になった。
娛樂産業 消失する た

(9) 「外力の関与あり」

- a. 隧道 开通 了。 → *トンネルが開通された。
トンネル 開通する た
- b. 统计 这个词 出现 了。 → *統計という言葉は、出現された。
統計 この言葉 出現する た
- c. 治安 改善 了。 → *治安が改善になる。
治安 改善する た
- d. 劳动力不足 的 问题 解决 了。 → *労働力不足の問題が解決になる。
労働力不足 の 問題 解決する た

つまり、中国語話者が漢語動詞の形式を選択する際に、母語の影響を受けて「になる」や「される」と誤用するとされているが、母語の有形の標識による影響ではない。それより、事態をどのように捉えるかが、形式の選択に影響を与えられよう。そうすると、中国語話者の漢語動詞の習得において、母語の影響がどのように位置付けられているのか、新たに検討する必要がある。

〈3〉 学習目的の実現を目標とする研究が見当たらない。

両言語の対応関係、及び学習者の内面的な考察が十分ではないとしたら、教育現場にとって有用な対策を提案することも難しいのではないか。管見の限り、教育対策を導き出す研究

が見当たらない。漢語動詞に関する日中対照研究では、日本語と中国語の品詞や自他の対応関係が示されているが、それは、直接教育に活かすことができるというわけではない。なぜなら、1つは前述の通り、両言語の品詞と自他がずれていない場合も誤用が生じるためである。もう1つは、両言語の品詞や自他という文法的な概念を規則として教えるとしても、品詞や自他の説明自体が非常に複雑であるため、教えても受け入れられない可能性がある。しかも、個々の語を使う際に一々判断するのが極めて難しい。また、品詞や自他を規則として教える場合、矛盾が生じる恐れがある。例えば、自他両用動詞でも、自動詞と他動詞としてのすべての形式が使えるというわけではない。サ変動詞は、ナ形容詞のように「になる」が使えないのに、「中止になる」などのように使える場合がある。

第二言語習得研究の史的変遷において、学習者の母語の役割に対して様々な観点があり、膨大な議論がなされている。対照分析時代（1960年代）に、母語が外国語の学習を阻害する「悪者」であるとされていたが、誤用分析時代（1970年代）に入ると、誤用が単に母語からの干渉のみで説明できないことが明らかになった。さらに、母語の影響には正の転移と負の転移があり、習得に関わる諸要因において母語の影響はその中の一つに過ぎず、しかも、発達につれて変わりつつある、という習得の全体像を見る中間言語分析の時代になった。そのような中で、母語別の日本語教育において、学習者の母語を十分に考慮し、母語の知識を活かして日本語の規則を説明するという理念が注目されている（井上2005、張2011、庵2015、2016、2019a など）。母語の違いによって、学習者の視点が異なり、学習者の視点からの日本語教育文法も異なるはずである。母語の知識を適切に使って、日本語の言語事実を記述して学習者に伝えることが重要であり、教育に効果的であると考えられる。本研究でとりあげる漢語動詞の問題は、中国語話者にとって漢語の知識を用いて日本語の漢語動詞を考えるのがごく自然なことであり、そのような知識を活かして教育対策を立てることも可能であると考えられる。

まとめれば、中国語話者による漢語動詞習得の問題を解決するには、今までの研究では、日中両言語の対応関係、及び中国語話者の習得における母語の働き方が正確に把握されていないという問題点が残されている。本研究では、習得状況の実態及びその要因を全体から把握した上で、母語がどのように働くか、どれほど働くかを考察する必要があると考える。それに基づき、習得上の肝心な問題点に対処する上で、学習の負担を軽減させ、効率的な教育対策を提案するという点に意義があると考えられる。

3. 研究目標

本研究では、中国語話者が漢語動詞を使用する際に、(10)のような「漢語+になる」や

「漢語+される」の誤用が生じるという現象を取り上げ、その中に潜在している中国語と日本語の異同、中国語話者の習得メカニズムにおける母語の働き方を明らかにし、教育の対策を提案することを目指す。

- (10) a. *授業の内容が充実になった。
- b. *授業の内容が充実された。

前に述べた研究動機と問題の所在に基づき、次の3つの目標を設定する。

- <1> 中国語の視点から、日本語の漢語動詞との対照分析を行うことによって、問題となりやすい語を選別し、誤用の原因を予測する。
- <2> 中国語話者を対象に調査を行うことによって習得状況を正確に捉え、習得上の困難点を明確にする。
- <3> 中国語の知識を活用し、教育現場のための指導対策案を作成する。

4. 本論文の構成

本論文は、五部に分けられており、13章からなる。

第一部は「基礎編」である。第1章では本研究の動機と目標を紹介する。第2章では先行研究を概観する。まず、第二言語習得研究における母語の扱い方の変遷をふりかえり、本研究の立場を明確にする。そして、日本語の漢語動詞の基本的な性質を示し、特に自他対応をめぐる形態的、統語的な特徴、及び事態の捉え方をまとめる。次に、漢語動詞に関する日中対照研究を概観し、両言語の相違点をまとめる。最後に、中国語話者による漢語動詞の習得研究を概観し、問題点を指摘する。第3章では、先行研究を概観した上で、本研究全体の課題とアプローチを提示する。

第二部は「対照分析編」であり、対照分析によって仮説を立てる。第4章では本研究の対照手法及び特色を提示する。即ち、中国語の視点から誤用が生じうる漢語動詞を絞ることによって、全体から問題を正しく把握することができる。第5章では、まず中国語では「変化」とは何か、「変化」を表す際に、どのような種類の語や表現形式を使うかをまとめる。第6章では、日本語の漢語動詞から、中国語の「変化」を表す語を選別する。その上で、両言語における用法によって分類し、両者の対応関係を示す。第7章では、両言語の対応関係に基づき、中国語話者による使用状況及び習得上の困難点を予測し、母語を活かした教育対策の実行可能性を予想する。

第三部は「調査編」であり、調査によって前述の仮説を検証する。第8章では調査の目的、方法などの概要を説明する。第9章では上級及び超級の学習者を対象に、「漢語+にな

る」「漢語＋する」「漢語＋される」の使用実態及び学習環境、学習レベルによる変容に関して、三種類のタスクによるアンケート調査、フォローアップインタビューを実施した結果を報告する。また、日本語母語話者の使用実態と比較し、中国語話者の使用実態における問題点を明らかにする。第 10 章では誤用及び正用の内実を考察し、特に母語がどのように働くのかを解明し、習得上の困難点及びその原因を考察する。

第四部は「対策編」である。第 11 章では現行の教科書と指導方法の問題点を指摘する。第 12 章では学習目的の実現と負担の軽減を考慮しながら、母語の知識を活かした教育対策案を作成する。

第五部は「展望編」である。第 13 章では本研究の結論をまとめ、研究の意義を明確にする。また、残された課題と今後の展望を述べる。

5. 付記

5.1 用語について

本論文で使う主要な用語について述べておく。

・「漢語動詞」

漢語動詞とは、いわゆる「漢語サ変動詞」のことである。形式的には、「漢語＋する」という形をとる（張 2014 : 7）。例えば、「愛する」、「散歩する」、「発展する」、「重要視する」、「永久保存する」など。影山（1993）、小林（2004）は、「動名詞」という用語を使っている。「動名詞」は、いわゆる「漢語＋する」の「漢語」の部分である。影山（1993）は、「動名詞」は日本語の主要な語彙範疇の一つであると位置付けている。「動名詞」は「する」と複合するという特別な資格があり、形態論的な基準を第一に見据えて「動名詞」という特別の範疇を設定するという（影山 1993 : 26 を参照）。

本論文では、漢語語彙の品詞（ナ形容詞か動詞か）、漢語動詞の自他を問題にするため、張（2014）に倣い、「漢語動名詞＋する」を漢語動詞と呼ぶことにする。

・「母語の働き方」と「母語の知識」

成人の第二言語習得に現れる「母語の影響」は、「転移」(transfer) と呼ばれている (Odlin 1989、奥野 2005 など)。母語の転移には、転移した結果が正用を導く正の転移 (positive transfer) と転移の結果が誤用につながる負の転移 (negative transfer) がある (庵 2017 : 142)。本論文で使う「母語の働き」には、結果としては母語の正の転移と負の転移が含まれるが、その結果にとどまらず、学習者における言語処理の過程、言語習得の発達において、母語がどのように働くのか、ほかの諸要因においてどのように位置付けている

のかも検討するため、「母語の働き方」という言葉を使うことにする。

「母語の知識」は、学習者が持つ母語の知識を指す。ただ、母語の知識には顕在的な知識 (implicit knowledge) と潜在的な知識 (explicit knowledge) があるとされている (Ellis1994)。顕在的な知識とは、意識的に把握することができ、言葉で説明できる知識で、教室における形式指導の直接的な結果として学習者が学ぶものを典型とする。潜在的な知識とは、意識的に把握することのできない直感的な知識で、自然な学習環境の中で自ずと身につく種類の知識である (山岡 2004)。また、「明示的知識」と「暗示的知識」(谷口 2005)¹という用語を使う場合がある。

本論文では、「母語の潜在的な知識」という用語が使われているが、中国語話者が言葉で説明できないが、母語ではそのように言えると確信する場合に、母語の潜在的な知識が働く可能性があると考えられる。

・「習得」

Krashen and Terrell (1983) は、「学習 (learning)」と「習得 (acquisition)」を区別している。教室などでの文法の学習などで意識的に言葉を学ぶことは「学習」であり、幼児が母語を習得するときのように、自然に無意識的に言葉が学ばれることは「習得」である (大関 2010 : 57-58)。外国語を学習する人は、どのような基準をもってある単語や文法項目を「習得した」と判断すればいいか、という課題がある。一般的には、「習得」とは、主として、何か意味を伝えようとして話しているとき、つまり文法や形のことをあまり考えないで話しているときでも、それらを使わなければならないところで正確に使えるようになることであるとされている (大関 2010 : 41)。

本論文で使う「漢語動詞の習得」は、何かの意味を表す際に、漢語動詞を用いて正しい文を作って話したり、書いたりすることができることを指す。ただし、本研究の調査結果によると、正しい形式を使うとしても正しく理解できない場合もあれば、文法テストで正しい形式を選ぶと同時に、ほかの誤った形式も正しいと思って選ぶという場合もある。そういった場合は、「習得」とは言えず、別の側面から考察する必要がある。

・「理解」と「産出」

外国語の教育では、理解レベルと産出レベルを区別することが重要である。庵 (2017、2018) では、言語を構成する基本的な要素である、音声・音韻・語彙・文法 (形態及び統語) において、語彙と文法には、意味がわかれば良い理解レベルと、意味がわかった上で使える

¹ 日本語教育学会編『新版日本語教育事典』(2005 : 694) を参照した。

必要がある産出レベルの違いがあると述べられている。そのような違いは、母語話者と比べ、学習者にとってより顕著であり、言語教育では重要視すべきであると指摘されている。

本研究でいう「漢語動詞の教育」は、主に産出レベルのことを指す。つまり、漢語動詞の意味がわかった上で使えるという目標を目指す教育のことである。

・「無標」と「有標」

ことばに関する規則を考えていくと、「〇〇の場合は～、そうでない場合は…」という形にできることは、有標 (marked) と無標 (unmarked) という概念が関連している。つまり、他の部分が共通で、1つの部分だけが、それがあかないかという形で異なる場合、異なる部分を持たない方が無標であり、それを持つ方が有標であり、両者が相補分布をなしている (庵 2017)。この2つの概念に基づき、使い分けの文法規則を記述すれば、学習者の負担を大幅に減らすことができるということが示唆されている (庵 2015、2016)。

本研究では、「無標」と「有標」を使う場合、以上の概念を指す。つまり、1つのカテゴリーには、AとBの2つの形式がある場合、一般的にはAを使うが、条件付きでBを使うこともあるということである。Aは無標に使う形式であり、Bは有標的使用である。また、無標の場合、デフォルト (基本状態) という言葉を使うこともある。一方、文において、Aを形式化するかどうかという区別に関して、形式化する場合を有形、形式化しない場合を無形というように、「無標」と「有標」と区別している。

・「正用」と「誤用」

正用と誤用は、どのような基準で判断するか、はっきりと区別できない場合がある。学習者が誤用しやすいという場合は、母語話者の中にもそういった使用が見られると、学習者の使用が誤用と言い切れない。庵 (2017) は、正用を「規範」、「誤用」と「非用」(形式の不使用で不自然になる場合) を規範からの「逸脱」と呼んでおり、「規範」を認めない限り、言語教育は原理的に不可能であると指摘されている。

本研究では、中国語話者による漢語動詞の使用を検討する際に、正用と誤用という用語を用いることがある。それは、庵 (2017) の「規範」という立場をとり、コーパスや母語話者の使用における「無標」に使う形式を「正用」と見なす。一方、学習者には一般的に使う傾向がある形式が、日本語の「無標」の使用形式と異なる場合、それを「誤用」と見なす。

・「JSL」と「JFL」

JSL (Japanese as a Second Language) は、第二言語としての日本語のことであり、日本国内で生活に使う言葉として学ばれる日本語のことを指す。JFL (Japanese as a Foreign

Language) は、外国語としての日本語のことであり海外の学校での外国語科目として学ぶ場合などを指す(大関 2010)。本論文では、これらの言葉を援用し、それぞれの学習者を、JSL 学習者と JFL 学習者と呼ぶことにする。

5.2 記号と用例出典

本論文で使う記号の意味は以下の通りである。

* : 正しくない表現である。または母語話者にとって一般的な使い方ではない。

? : 正しくないとは言えないが、不自然である。

?! : 正しくないとは言えないが、極めて不自然である。

: 正しい、かつ自然であるが、特別な理由が付いている。

本論文で使う用例出典は、次のように示す。

- ・ 先行研究の用例を引用する際に、先行研究と用例のページ数を示す。
- ・ コーパスの用例を使う際に、レジスターとサンプル ID を示す。
- ・ 筆者の作例は、特に表示しないことにする。

第2章 先行研究の概観

1. 第二言語習得研究における母語の扱い方

本節では、第二言語習得研究における母語の扱い方に関する観点をふりかえり、本論文における立場を提示する。

1.1 「対照分析-誤用分析-中間言語」における母語の扱い方

外国語を使えるようになるための効果的な教育方法が本格的な研究の対象になったのは、1940～50年代のころだということである（大関 2010）。その後、対照分析、誤用分析、中間言語という時代を経て、母語に対する観点も変わりつつある（渋谷 1988、奥野 2005、大関 2010、張 2011 など）。

<「対照分析仮説」とその批判>

Lado (1957)、Lado(1964)に代表される対照分析は、母語と目標言語を比較し、その違いが学習者の誤りの原因であるという主張である。また、学習者の誤りは、母語と目標言語の違いから予測できるものであると考えられている。Wardhaugh (1970) は、このような主張を「対照分析仮説 (Contrastive Analysis Hypothesis) と呼んでいる。対照分析の理論的枠組みは、(1) のとおりである。

(1) 「対照分析の理論的枠組み」

- ①言語学習は習慣形成によってなされる。
- ②言語間には様々なレベルで違いが存在する。
- ③母語と目標言語の類似点は学習を促進し、相違点は学習を阻害する。
- ④外国語学習の困難点の大きな原因は母語の干渉（負の転移）である。
- ⑤困難度は言語間のずれの大きさに比例する。
- ⑥類似点と相違点を明らかにすることで困難点を予測し、効果的な教授法が導き出される。

(Lado1964, 奥野 2005 より)

しかし、その後の実証的な研究によって、対照分析仮説の主張及びその有効性が疑問視されるようになった。渋谷 (1988) によると、(2) のような「対象分析への疑問」があった。

(2) 「対照分析への疑問」

- ①母語と学習言語に類似する構造があるにもかかわらず正の転移が起こらない場合がある。
- ②母語と学習言語の構造が大きく異なるにもかかわらず学習がスムーズに運ばれることがある。
- ③母語からの転移ではどうしても解釈できない（学習者間に共通する）エラーが見出される。

(渋谷 1988 : 177)

< 「誤用分析」 とその限界 >

対照分析に対して疑問視されている中、学習者の誤用に焦点を当て分析する必要があるという主張が現れた。いわゆる「誤用分析」の時代に入るのである。Corder (1967) は、第二言語習得研究における誤用の重要性を、それぞれ教師、研究者、学習者の視点から、以下のように述べている。

(2) 「誤用分析の重要性」

- ①教師にとって：学習者の作り出す誤りを体系的に分析することで、学習者の到達段階を知ることができ、今後さらに何を学習すべきかを判断できる。
- ②研究者にとって：学習者の言語習得の過程やその手順、方略を知るうえでの貴重な資料を得ることができる。
- ③学習者にとって、誤りが見られるということは、学習者が学習の対象となっている言語のシステムについての仮説の検証を行っている証拠であり、学習が進行中であることを自ら確認することができる。

誤用分析がもたらした大きな成果は、学習者の産出する誤用が単に母語からの干渉のみで説明できないことを明らかにした点にある (Ellis 1994)。対照分析は教師側に視点を置いたのに対して、誤用分析が学習者側に視点を置いた (Selinker1972, 渋谷 1988 より)。

しかし、その後、誤用のみを対象とする誤用分析の限界が指摘されてきた。1つは、表面に現れる誤用のみならず、自信がない形式を使わないため不自然な文になる現象もあり、「回避 (avoidance)」 (Schachter 1974) や、「非用」 (水谷 1985) と呼ばれている。もう1つは、誤用があくまでも学習者の言語全体のごく一部しかないので、学習者は目標言語に関してどんな能力を持っているのか、どう使っているか、どのように学んでいくのか、といった全体像がわからない (cf. 大関 2010 : 7)。そのような指摘の中、誤用だけでなく、正用、

非用を含めた学習者言語の全体像を見る「中間言語分析」の時代に入った。

<「中間言語」の多様性と動態性>

中間言語 (interlanguage) とは、学習者がそのような進歩の途中で産み出す、母語とも目標言語とも異なる特有の言語体系である (Selinker 1972)。「中間言語」は、第二言語学習者が一時点で持つ学習者独自の規則体系という意味と、その規則体系が一つの連続体として目標言語に徐々に接近しようとする中間言語連続体 (interlanguage continuum) であるという二つの意味として解釈されている (奥野 2005)。つまり、中間言語分析では、学習者言語の多様性 (体系性) と動態性 (連続性) が重要視されている。

まず、多様性を求めるため、学習者言語における現象について、誤用のみならず、正用、非用も含めた全体像を示す。そして、中間言語に及ぼす要因について、言語転移、過剰般化、訓練上の転移、学習方略、コミュニケーション方略 (Selinker 1972) などから検討する。その中では、特に言語転移の多様性に注目を集めている。Odlin (1989) でいう言語転移の「多様性」は以下のように、従来の対照分析、誤用分析の不足を補うための主張だと考えられる。そのような考えに基づき、言語転移の認証方法が極めて複雑になる。奥野 (2005) では、言語転移 (母語の転移に限る) を認証するため、ほかの言語話者と比べること、習得レベルを統制すること、複合的な諸要因を考慮することが必要であると指摘されている。

(3) 言語転移の多様性 (Odlin1989)

- ①単なる干渉ではない (正の転移も負の転移も)。
- ②単なる母語の依存ではない (回避、促進的な作用も)。
- ③必ずしも母語の影響ではない (母語以外の既知の言語も)。

(4) 言語転移認証の方法 (奥野 2005)

- ①言語構造を踏まえ、少なくとも 3 言語以上を対象とする。
- ②ある特定の現象を扱う場合、母語に関わらず学習者に共通して見られる可能性や、ある特定の習得レベルに出現するものである可能性をふまえ、習得レベルの統制に配慮する。
- ③第二言語習得過程には様々な要因が関与しており、言語転移はそれらの一つであることを認識し、言語転移をとり巻く諸要因を考慮するとの関連性にも十分考慮する。

次に、学習者言語の体系が動的であると認識する必要があるとされている。つまり、学

習者が自分の中に「新しい言語体系」を作っていくということである（大関 2010）。中間言語の連続性は、主に以下のような特徴があるとまとめられる（cf. 山岡 1997）。

(5) 中間言語の動態性（山岡 1997 より）

- ①浸透性：中間言語の体系は不完全で流動的であり、新しい言語形式や規則及び、学習者の母語の浸透を受ける。
- ②遷移性：中間言語の連続体は、浸透性の結果として、絶えず改定されてゆく。
- ③化石化：中間言語の体系には化石化が伴う。

以上述べてきた内容をまとめると、表 2-1 のとおりである。つまり、第二言語習得研究という分野が生まれて以来、ますます体系化されてきた。今でも、中間言語分析は、学習者の言語習得のメカニズムを解明するための有力な方法であると言えよう。

表 2-1 「対照分析-誤用分析-中間言語」における母語の扱い方

年代	分野	主張	母語の扱い方
50～60	対照分析	母語と目標言語との違いが学習者の誤りの原因である。	母語と目標語の違いの重視
60～70	誤用分析	誤用を材料として分析し、誤りが言語間の相違によるもののみではない。	慎重な母語の扱い
70～90	中間言語	<ul style="list-style-type: none"> ・誤用のみならず、正用を含めた学習者言語の全体を捉える。 ・一定の決まった発達の段階の道筋を通る。 ・母語転移の様相の多様性、母語を含めた習得に関わる諸要因の多様性の特徴を有する 	母語を含めた多様性の重視

なお、多様性や体系性が求められるとともに、母語への重視が弱まりつつある。山岡（1997）では指摘されているように、「中間言語の体系は普遍的な言語的制約に従った体系であり、母語の影響は少ない。ただし、母語の影響を全て排除するものではない」。このような考え方が普及する過程では、学習者の言語は中間言語という考え方だけで説明できるので、母語の違いを考える必要はない、といった誤解が生まれた（庵 2017）。少なくとも日本国内の日本語教育では、学習者の母語に言及することはこれまで一種のダブーとなってきた感がある（庵 2015）。そのような中では、世界各国における日本語教育はほとんどモノリンガルの

環境であり、母語を介在させるのがごく自然であるし、母語の知識を活かして外国語の教育を行うのが重要であると指摘されており、「再び母語転移へ」という呼びかけが現れた。

1.2 母語の知識を活かした日本語教育

日本語の習得に関して考えると、確かにどの話者にも同じように見られる誤用も数多く存在するが、特定の母語の話者によく見られる誤用もある。中間言語では母語転移を否定的に捉えられているが、広く知られているように、母語転移には正の転移と負の転移がある。さらに、正の転移の方が相当高い割合を占めるということもわかっている（庵 2015、2016 など）。したがって、母語知識を活かして日本語教育を行うことが可能であるという理念が誕生した。次は、「母語の知識を活かした日本語教育」とは何か、なぜ母語の知識を活かすことが重要なのか、どのように母語の知識を活かせばいいかについて述べていく。

1.2.1 「母語の知識を活かした日本語教育」とは

庵（2017）は、「母語の知識を活かした日本語教育」の理念を以下のように述べている。

(6) 「母語の知識を活かした日本語教育」

母語と目標言語との対応関係を正確に調べ、負の転移が起こる環境を把握することによって、正の転移を活かした効率的な文法教育が可能になる。

庵（2017：144）

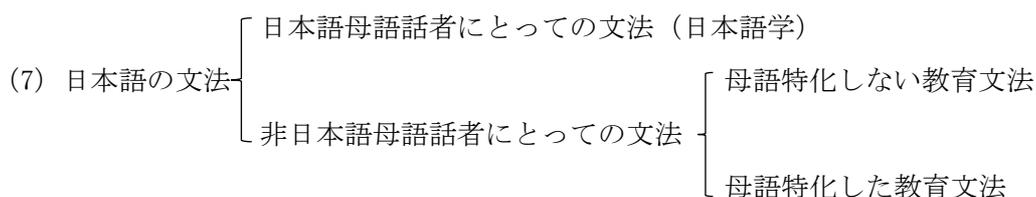
この理念は張（2011）の提唱した「三位一体の習得研究」という考え方を敷衍したものである（庵 2017）。「三位一体の習得研究」とは、1) 母語と目標言語の体系の異同を正確に把握し、ズレが生じている箇所を特定して誤用が現れる可能性を予測する（対照研究）、2) 1) の予測を学習者コーパスを用いて検証する（誤用観察）、3) 1) と 2) で得られた結果を調査で確認する（習得研究）、という3つの手法を合わせた調査が必要であるという主張である（庵 2017 より）。「三位一体の習得研究」の理念は、中国語話者に限定して、母語転移（正の転移）を日本語習得に積極的に活かそうとする試みであり、「言語教育のための習得研究」を行う必要性が示唆されている。

1.2.2 「母語の知識を活かした日本語教育」の重要性

なぜ、言語教育では母語の知識を活かすのが重要であるのか。第二言語習得には学習者の母語が大きく影響するが、母語は習得を邪魔する悪者ではなく、新しい言語を母語とは別にゼロから学ぶわけではなく、母語知識をフルに活用しながら外国語を学んでいく（大関 2010）

ためであると言えるのではないか。

また、特に日本国内の日本語教育は、母語が異なる学習者が同じ教室に混在し、一律の文法が用いられるということである。このような状況の中で、「日本語母語話者にとっての文法」と「非日本語母語話者にとっての文法」、「母語特化しない文法教育と母語特化した文法教育」を区別する必要があると、様々な議論がなされている。これらの概念の関連性は、(7)のように示すことができる。



庵 (2017) では、「日本語母語話者にとっての文法」と「非日本語母語話者にとっての文法」という観点から、日本語教育における文法とはどのようなものであるべきかについて詳しく述べられている。

まず、チョムスキーの言う「文法能力 (grammatical competence)」を引用して母語話者の文法能力を述べている。文法ということについて考える際に、この2点を前提とする必要があると指摘されている。(8) a は母語話者が持っている内省能力を述べたものであり、(8) b は母語話者が修正 (モニター) を加えた後産出した文は文法的に正しい文だけであることを述べたものである。この2点が成り立たないと、内省や用例に基づく文法研究ができなくなるというわけである。

(8) 「文法能力」

a. 母語話者は母語の任意の文について、その文が文法的に正しい (= 文法的である grammatical) かどうかを判断することができる。

b. 母語話者はモニターができる環境では文法的な文だけを産出する。

(庵 2017 : 138)

次に、(9) の白川 (2002) の説をもって母語話者にとっての文法と非母語話者にとっての文法の区別を述べている。つまり、母語話者にとって、①はわかるが、②の「なぜなのか」はわからないのが普通なので、②を示すことは母語話者にとって意味がある。一方、非母語話者にとって、①についての内省能力がないため、②を示すことも意味がない。

- (9) ①A とは言いますね。B とは言いませんね。
②それはなぜかという、C だからです。

したがって、母語話者にとっての文法は、母語話者が持っている文法能力が利用できる。そのため、文法規則はその言語の全体像を知るために、「体系的」で「網羅的」であることが求められる。その方略として、(10) のように、例外が見つかるたびにそれに対応する規則を作っていくことと、多義語の説明などにおいて、認知言語学で言う「スキーマ」のように、共通性を抽象化することが挙げられている。

- (10) [母語話者にとっての文法の規則の性質]
a. 規則の数を増やす。
b. 規則を抽象化する。

(庵 2017 : 138)

一方、非母語話者にとって、規則の数を増やすと、覚えきれなくなるという弊害が生じるし、ある規則では一方の形式が選ばれるのに、別の規則ではもう一方の形式が選ばれるといった形の矛盾が生じやすくなる。また、膨大な議論がなされている文法項目の記述は、非母語話者にとって意味があるとは言えない。例えば、「のだ」の意味が「説明」であるという記述は、非母語話者にとって「いつ／どのように「説明」を行うのかがわからないと意味がない。言語によって「説明」という概念、表現形式、使用場面などが異なるからである。そのため、非母語話者にとっての文法は、例外をなくすために規則の数を少なくし、具体的なものにすることが必要である。庵 (2011, 2015) では「100%を目指さない文法」と呼ばれている。

- (11) [非母語話者にとっての文法の規則の性質]
a. 規則の数は可能な限り少なくする。
b. 規則は具体的なものにする。

(庵 2017 : 140)

「非母語話者にとっての日本語教育文法」について、井上 (2005) では、「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」の必要性が指摘されている。「日本語教育文法は、学習者の視点から発想されたものではない。そして、学習者の視点は、学習者の母語によって異なる。当然、学習者の視点から発想された日本語教育文法は、学習者の母語によって違ったものになるはずである」と述べられている。まず、学習者の母語を考慮しない一律の

文法は、(12) の2つの点で学習者のためにならない。それに対して、学習者の母語を考慮した日本語教育文法では、(13) の4点を考える必要があると指摘されている。

(12) 「一律の文法」

- ①学習者にとって不要なことを書かれ、肝心なことが書かれない。
- ②教師にわかりやすい文法であり、学習者にわかりやすい文法ではない。

(13) 「母語別の日本語教育文法」

- ①不要な文法説明をなくし、その分、学習者にとって重要な情報を提供すべきである。
- ②学習者の母語を活用して、表現の使用の動機や、具体的な場面での使用の可否がわかる説明にすべきである。
- ③日本語の感覚を学習者に理解させるよりも、説明の仕方を学習者の母語の感覚に合わせるべきである。
- ④母語別の日本語教育文法は、「言語の対照研究の成果を日本語教育に生かす」という観点からではなく、「学習目的の実現のために学習者の母語をどう考慮するか」という観点から考えるべきである。

(井上 2005 : 83-84)

また、張 (2017) では、(14) の「母語に特化しない日本語教育文法」と「母語に特化した日本語教育文法」という区分が提案されている。bはaのもとに、当該の母語話者にとって理解しにくい点(負の転移が生じやすい点)を修正する形で作られるものであり、このような考え方が「母語の知識を活かした日本語教育」には有効である(庵 2019 : 6より)。

(14) a. 母語に特化しない日本語教育文法

b. 母語に特化した日本語教育文法

以上見てきたように、研究や応用の目的によって、日本語の文法に関する見方がまったく異なっている。日本語母語話者にとっての文法、即ち日本語学という分野における文法は、網羅性、体系性、抽象性が必須である。一方、非日本語母語話者にとっての文法、即ち日本語教育という分野における文法は、簡潔性、具体性が必須である。さらに、日本語教育文法は、学習者の母語を考慮するかどうかによって考え方も異なり、母語を考慮した教育文法では、必要な情報を絞り出し、母語の感覚を合わせながら学習目的の実現に支援する必要があると考えられる。

1. 2. 3 文法教育における母語知識の活かし方

実際の文法教育において、母語知識をどのように活かせばいいのか。(6)で示したように、<1>母語と目標言語との対応関係を正確に調べる、<2>負の転移が起こる環境を把握することによって正の転移を活かす、という2点が基本であるが、その他に、<3>注意すべきことがある。具体的には、以下の通りである。

<1> 母語と目標言語との対応関係を正確に調べる。

この中では、対照研究が重要な役割を果たしているのである。庵(2019)によると、対照研究に当たって、まず機能主義の観点(Halliday1994)から、同じ意味が異なる言語間でどのように写像されるかを考える必要がある。それから、「こう考えれば、両者を公平に見ることができる」という落としどころを見出す(井上2013、2015)必要がある。

<2> 負の転移が起こる環境を把握することによって、正の転移を活かす。

前述の通り、母語転移では、実は負の転移と比べ、正の転移を占める割合が相当高い。例えば、庵(2015)では「的」について考察された結果、中国語話者の誤用が多いことで知られている日本語の「的」を80%以上のカバー率で正しく使えることがわかってきている。つまり、正の転移を積極的に認め、活用することを重要視すべきである。

具体的には、庵(2018)では次のような方針が指摘されている。母語転移には、転移の結果が目標言語で正用を導く正の転移(positive transfer)と転移の結果が誤用につながる負の転移(negative transfer)がある。転移を言語習得に結びつけるためには、1)正の転移を奨励する、2)負の転移を抑制する、の2つが必要であるが、特に重要なのは2)である。それは、正の転移は無標で、負の転移は有標であると考えられるからである。重要なのは、正の転移を「無標」、負の転移を「有標」と見なして、無標の場合には母語の知識を転移させればよいのだということを学習者に伝えることと、有標の場合のみを明示的に、リストなどの形で教えるのをセットで行うのが効果的であるということである(庵2015)。

(15) a. 基本的には母語の考え方を使得よい(無標)

b. aに当てはまらない場合だけ注意する(有標)

(庵2018:158)

<3> 母語知識の利用に注意すべきこと

庵(2015)によると、母語知識の利用にあたって、以下の2点で注意する必要がある。

1 点目は、母語の知識を活かすというのは、「母語による教育」のことではない。教授言語は母語でもいいし、目標言語でもいい。重要なのは、母語の知識を適切に使って日本語の言語事実を記述し、その内容を学習者に伝えるということである。

2 点目は、いわゆる母語の知識は、ごく一般的な母語話者が母語について持っている知識を利用することである。母語の知識を利用する際には、抽象的な（言語学的で専門な）用語の使用などは極力避けなければならない。言い換えると、母語についての知識を使うために、新たに別の知識が必要になるような記述では意味がないということである。

1.3 まとめ

本節では、今までの第二言語習得研究における母語の扱い方をレビューした。1950 年代の対照分析時代から、第二言語の学習者の母語に対する観点は、「母語を重要視する」（対照分析）、「母語を慎重に扱う」（誤用分析）、「母語より他の諸要因を合わせた多様性を重要視する」（中間言語）、「再び母語を重要視する」（母語の知識を活かす）というように変遷してきた。2.1.2 節で述べたように、学習者の母語は、第二言語の学習では大きな影響を与えているが、必ずしも悪い影響のみではない。そのため、適切に母語の働き方を考察し、第二言語の学習では合理的に母語の知識を活かせば、効率的に学習の目的が実現できるのではないかと考えられる。

2. 日本語の漢語動詞

本節では、先行研究を踏まえながら、日本語の漢語動詞の特徴を概観する。主として、漢語動詞の形態的特徴、語構成、及び自他の認定についてまとめておく。特に注目したいのは、動詞の自他と事象の捉え方の関連性である。なぜなら、本研究では、中国語話者による漢語動詞の使用が事象に対する認識と密接に関係していると考えられるため、日本語における自他対応の体系、それに基づいた事象把握の特徴を明らかにする必要があるからである。また、和語動詞（切る/切れる）と比べ、漢語動詞は自他が判定できる形態的指標がないため、その自他がどのように認定されているのかを明らかにしておきたい。

2.1 漢語動詞とは

漢語動詞とは、いわゆる「漢語サ変動詞」のことである。形式的には、(16) のように「漢語＋する」という形を取る（張 2014:7）。

- (16) a. 愛する、制する、信ずる、応ずる、…
b. 散歩する、発展する、増税する、骨折する、…

- c. 映画化する、重要視する、急上昇する、再調査する、…
- d. 空中爆発する、永久保存する、大量生産する、私費留学する、…

(張 2014 : 7)

漢語の部分、動名詞 (Verbal Noun) と称することがある (影山 1993、小林 2004)。即ち「サ変になり得る名詞」のことである。動名詞と称するのは、名詞的な性質と動詞的な性質をともに有するということである。小林 (2004) は、影山 (1993) に基づき、動名詞の名詞的特徴と動詞的特徴を、以下のように述べている。

(17) 「動名詞の名詞的特徴」

- a. 「～が」や「～を」という形で使える (単独で主語や目的語として使える)
 - 動名詞：予想する、投票する、換金する
 - 名詞的特徴：予想が…。 投票が…。 換金が…。
- b. 用途を表す「～用」との結合
 - 名詞+用：自転車用、専門家用、鍋もの用、…
 - 動名詞+用：料理用、洗顔用、連絡用、…
 - 動詞+用：*食べ用、*歩き用、*調べ用、…

(18) 「動名詞の動詞的特徴」

- a. 「～中に」、「～後」などの時間節で、動名詞は、「NP を」や「NP に」といった形式を従えることができる。
 - 動名詞：パソコンに 資料を 入力中…。
 - 群馬方言を 調査後…。
 - 動詞： パソコンに 資料を 入れる。
 - 群馬方言を 調べる。
- b. 「お/ご～になる」という尊敬語、「お/ご～下さい」という依頼表現で、動名詞は、動詞 (連用形) と同様に振る舞う。
 - 動名詞： ご乗車になる、ご検討ください
 - 動詞： お乗りになる、お話してください

(小林 2004 : 14-17)

なお、漢語動詞は、語幹の部分 (動名詞) に「する」を加えるという構造をしているため、動詞として使うことも名詞として使うこともできると考えられるが、常に一般的な名詞と

同じく使われるというわけではない。庵ほか (2000) によると、サ変動詞は名詞として使うとき (名詞化)、(19) のような基本的な規則がある。また、このような名詞化された表現は動詞による表現より硬いものになるとされている。

(19) N {が/を} VNする → NのVN

a. ジャイアンツが優勝したのは4年ぶりだ。

b. ジャイアンツの優勝は4年ぶりだ。

N {に/へ} VNする → NへのVN

c. 彼は審判に抗議した。

d. 彼の審判 {への/に対する} 抗議は認められなかった。

N {で/から/まで/と} VNする → N {での/からの/までの/との} VN

e. 彼らはミクロネシアで調査をしている。

f. ミクロネシア {での/における} 調査の結果が公表された。

(庵ほか 2000 : 551)

また、使用頻度で言えば、漢語動詞の語幹は、二文字のものが最も多いとされている。小林 (2004) によると、1989年1年分の朝日新聞の社説において、二字漢語動名詞は異なり語数が82%、延べ語数が95%を占める。しかも、「二字漢語の多くは、現代語では単純語的なものとして意識されやすい傾向をもっている (西尾 1988) ため、二字漢語の分析が、三字漢語動詞と四字漢語動詞を分析する基礎になると思われている (小林 2004、張 2014)。なぜなら、三字漢語動詞と四字漢語動詞の語構成を観察すると、三字漢語動詞の多くは二字漢語動詞の前後に接辞がついた構造を取り、四字漢語動詞の場合は三字漢語動詞の前後に接辞がついた構造を取ったり、二字漢語と二字漢語動詞の組み合わせという構造をとったりする (張 2014) ためである。

本論文では、「発展する」のような二字漢語動詞を研究対象とする。説明の便宜上、「漢語動詞」という名称を用いることにする。

2.2 漢語動詞の語構成

漢語動詞の語構成とは、漢字部分の構成要素の品詞性及び構成要素間の関係のことである (張 2014)。野村 (1999) では、漢字1字で表記される最小の意味を持った単位が「字音形態素」と呼ばれ、その下位分類として「語基」と「接辞」の2種に分けられた。構成要素の品詞性、構成要素間の関係は以下の (20) と (21) のように分類され、語構成のパターンは22タイプに分けられ、例えば、(22) のようなパターンがある。

(20) 「構成要素の品詞性」

事物類 (N) : 叙述の対象となる物や事を表す

動態類 (V) : 事物の動作・作用を表す

様態類 (A) : 事物や精神の性質・状態を表す

副用類 (M) : 動作や状態の程度・内容を限定・修飾する

(21) 「構成要素間の関係」

補足関係 (+)、修飾関係 (V)、並列関係 (・)、対立関係 (-)、反復関係 (=)

(22) 「語構成パターン」

N+V (骨折など)、A>V (軽視など)、V・V (引退など)、V-V (開閉など)、

A=A (清々など)

漢語動詞の語構成は、動詞の自他との関連性があるとされている (張 2014)。そして、同形同義の中国語との間に品詞のずれがあるのは、日中語の語構成の規則が異なるためであるとされている (中川 2005、熊 2012、許 2016)。

2.3 漢語動詞の自他

この節では、日本語の漢語動詞の自他がどのように認定されているのか、それは外界の事象がどのように把握されていることを意味するのかを明らかにすることを目指す。ただし、動詞の自他の定義や、自他対応のシステムなどに関する先行研究は、主に和語動詞をめぐって考察されている。自他対応の規律として、和語動詞と漢語動詞が同様であるはずだと考えられるため、まずその規律を明らかにしておきたい。その上で、漢語動詞の特徴を対象とする先行研究をまとめることにする。

2.3.1 日本語の動詞の自他

「動詞の自他」という言い方は、一般的な理解における「自動詞と他動詞」を指すだけでなく、「自動詞と他動詞」に関わる動詞の性質を広く指すものとして使われる (須賀・早津 1995 : 208)。自動詞と他動詞をめぐり、日本語学や日本語教育において膨大な議論がなされており、日本語学習者にとって重要な項目であり、習得の困難点であるとされている。以下、「自動詞と他動詞の区別」、「自他対応」、「自動詞の下位分類」、「自他と受身、使役の関係」、「自他の選択」について、先行研究の記述をまとめる。

<自動詞と他動詞の区別>

日本語記述文法研究会（2009）では、動詞は、補語²の取り方によって他動詞と自動詞に分かれるとされている。具体的には、他動詞と自動詞について、(23)と(24)の通りに記述されている。

(23) 「他動詞」

- a. 補語として働きかけられる対象をとる動詞を他動詞という
- b. 典型的な他動詞は「が、を」文型をとり、直接受身文にすることができる。
例：コーチが選手をしかった。→選手がコーチにしかられた。
佐藤がパソコンを壊した。→パソコンが佐藤に壊された。
- c. 「が、に」文型をとるものもあり。直接受身文にすることもできる。
例：犬が僕にかみついた。→僕が犬にかみつかれた。
弟が父にさからった。→父が弟にさからわれた。
- d. ヲ格名詞は、働きかけられる対象を表している。
- e. 典型的な他動詞の意味は、主体からの働きかけによって対象に変化が生じるといったものである。

(24) 「自動詞」

- a. 他動詞以外の動詞を自動詞という。
- b. 典型的な自動詞は「が」文型をとる。
例：父は健康のために1時間ほど歩く。
柿の実が落ちた。
- c. 自動詞には「が、に」文型や「が、と」文型をとるものもあり、着点や相手を必須的にとる動詞である。
例：呼び出されて、急いで駅に行った。
妹とけんかしている。
- d. 「が、を」文型をとる自動詞もある。ヲ格名詞が空間的、時間的な経過域や起点を表すようなものである。

² 述語が事態を描くのに必要な要素をその述語の補語という。例えば、「昨日、公園で太郎が男の子を殴っていたよ。」という文では「昨日」「公園で」「太郎が」「男の子を」が動詞「殴る」の補語である。(庵 2012 : 62-63)

例：トラックが高速道路を走っている。

楽しい時間を過ごした。

今朝は7時に家を出た。

- e. 典型的な自動詞は、対象に影響を及ぼさない、主体による意志的な行為やある事態の発生という意味を表すものである。

(日本語記述文法研究会 2009 : 23-25 よりまとめ)

このように、自動詞と他動詞は、構文的・意味的な特徴が対立している動詞の分類であると言える。両者の区別の仕方はいろいろなものがあるが、例えば、ヲ格目的語を取るかどうか、直接受身が作れるかどうかといったようなことが判断基準とされているが、最も一般的な基準といえば、ヲ格を取るかどうか、ヲ格の意味をもって判断することであると考えられる。例えば、庵 (2012) では、以下のように自動詞と他動詞を定義されている。

(25) 自動詞： <ガ (動作主)、ヲ (対象)> という格枠組み³を含まない動詞

他動詞： <ガ (動作主)、ヲ (対象)> という格枠組みを含む動詞

(庵 2012 : 131)

(26) [他動詞]

a. 健が純に本を贈った。 <ガ (動作主)、ニ (相手)、ヲ (対象)>

b. 健が壁に絵を掛けた。 <ガ (動作主)、ニ (場所)、ヲ (対象)>

c. 泥棒が宝石を盗んだ。 <ガ (動作主)、ヲ (対象)>

[自動詞]

d. 鳥が空を飛んでいる。 <ガ (動作主)、ヲ (通過域)>

e. 犬が太郎に噛みついた。 <ガ (動作主)、ニ (相手)>

f. 絵が壁に掛かっている。 <ガ (動作主)、ニ (場所)>

g. 妻が会社 {に/へ} 来た。 <ガ (動作主)、ニ/へ (場所)>

h. 太郎がはなこと結婚した。 <ガ (動作主)、ト (場所)>

i. 子供が遊んでいる。 <ガ (動作主)>

j. コップが割れた。 <ガ (対象)>

(例文は庵 2012 : 130 より)

³ 「格枠組み」とは、ある動詞が取る必須補語のリストをその動詞の格枠組みという (庵 2012 : 63)。例えば、「殴る」の格枠組みは [殴る<が、を>] のように表される。

<自他の対応>

自動詞と他動詞は、「壊れる—壊す」「閉まる—閉める」のように、意味的に関係があり、かつ、形の上でも共通性を持つものを指す、というような関係がある場合「自他の対応がある」と言う（庵 2018 : 34）。例えば、

- (27) a. 花瓶が割れた。 (自動詞文)
b. 太郎が花瓶を割った。 (他動詞文)

(庵 2012 : 132)

まず、自他の対応における意味的な関係とは、自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である（佐藤 2005）ことを指す。「同一の事態の側面」は、自他の対応がある場合の自動詞と他動詞の意味に現れている。(28) のようことである。

- (28) a. 自動詞 : 事態が非意志的 (≡自発的) に起こることを表す。主体は通常「もの」
b. 他動詞 : 動作種が意志的に事態を引き起こすことを表す。主体は通常「有情物 (人間及び動物)」

(庵 2012 : 132)

具体的にいえば、自他の対応がある自動詞と他動詞、自他の対応がない自動詞と他動詞は、それぞれの意味特徴が異なっている。早津 (1987、1989) によると、対応の有無によって自動詞と他動詞は、「有対自動詞、無対自動詞、有対他動詞、無対他動詞」に分けられ、それぞれの意味的特徴は、以下のとおりである。

(29) 「有対自動詞、無対自動詞、有対他動詞、無対他動詞」の意味的特徴

有対自動詞 : 働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を表すものが多い。(物も物理的状態の変化、存在場所の変化、二者間の位置関係の変化などを表す動詞、(人の活動によって成立する) 事象そのものの変化を表す動詞が多い。)

例 : 曲がる、壊れる、乾く、固まる、上がる、移る、…

無対自動詞 : 動きや変化を伴わない静的な状態、人の動作・行為・表情・感情など、広い意味の自然現象を表す動詞が多い。

例：ある、そびえる、歩く、笑う、怒る、晴れる、(時間が) 経つ、…
有対他動詞：働きかけの結果の状態に注目する動詞が多い。

例：曲げる、壊す、乾かす、固める、上げる、移す、…
無対他動詞：働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い。

例：調べる、味わう、話す、喜ぶ、殴る、もらう、…

早津 (1987 : 88、1989 : 232 より)

また、自他の対応における形態的な関係は、一般的には語形に共通性を持つということを目指す。日本語の自動詞と他動詞の形態上の対応には複雑な規律があると指摘されてきた(西尾 1954、奥津 1967、野田 1991) が、一般的な規律として、以下のような3点が原則である(寺村 1982、庵ほか 2000)。

(30) ①-aru で終わるものは全て自動詞であり、-aru を-eru に変えると他動詞になる。

②-reru で終わるものは全て自動詞である。

③-su で終わるものは全て他動詞である。

(庵ほか 2000 : 97)

(31) ①： [上がる—上げる]、[高まる—高める]

②と③： [壊れる—壊す]、 [倒れる—倒す]

<自動詞の下位分類>

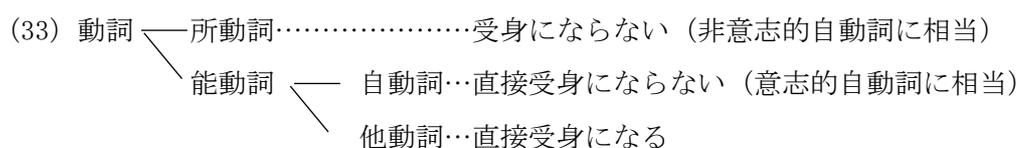
自動詞は、さらに2種類に分けられている。(32)のように、分類の角度によって、異なる名称が使われている。基本的に同じような動詞の種類の対立を指すと考えられる。

(32) [自動詞の下位分類]

- a. 非意志的動詞と意志的自動詞
- b. 所動詞と能動詞
- c. 非対格動詞と非能格動詞

(32) a は、意志性の有無による分類である。自他対応を持たない「飛ぶ、走る、歩く」などは、有情物が意志的に行う動作を表す「意志的自動詞」であり、一方、自他の対応を持つ自動詞は通常「非意志的自動詞」である(庵 2012 : 133)。つまり、(29)で示した有対自動詞は、一般的には非情物の変化を表す「非意志的自動詞」である。また、(32) b は、三上(1953)の主張であり、自動詞と他動詞の2分類だけでは日本語の分類が不十分であり、受

身を基準にして区別する必要があるということである。庵 (2012) では、所動詞と能動詞の区別、及び非意志的自動詞と意志的自動詞との対応が、(33) のように示されている。つまり、能動詞は直接受身になるかいないかによって分けられ、直接受身にならないのは自動詞、直接受身になるのは他動詞である。能動詞の自動詞は、直接受身にならないが、間接受身になるタイプであり、意志的自動詞に相当する。一方、所動詞は直接受身にも間接受身にもならないタイプであり、非意志的自動詞に相当する。



(庵 2012 : 133)

また、(32)c の非対格動詞(unaccusative verbs)と非能格動詞(unergative verbs)の分類は、「非対格性の仮説 (Unaccusative Hypothesis)」(Perlmutter 1978) と呼ばれる。影山 (1996) では、両者の区別が (34) の項構造⁴に示されている。つまり、他動詞の項構造と比べると、非能格自動詞と非対格自動詞の区別がより明らかになる。影山 (1996) によると、他動詞は外項と内項⁵の両方を備えているのに対して、非対格自動詞は内項だけを持ち、非能格自動詞は外項だけを持つと規定できる。非対格自動詞は、項が D-構造 (深層構造) では目的語であるが、S-構造 (表層構造) では主語の位置に移動する。非能格自動詞は、D-構造でも S-構造でも項が主語の位置にある。S-構造では、非対格自動詞と非能格自動詞は同じ形を取る。

(34)		<u>外項</u> <u>内項</u>	
	他動詞の項構造 :	(x <y>)	[動作主<対象>]
	非対格自動詞の項構造 :	(∅ <y>)	[∅ <対象>]
	非能格自動詞の項構造 :	(x <∅>)	[動作主 < ∅ >]

(影山 1996 : 21 により改正)

⁴ 「項構造」(argument structure) は、統語構造と意味構造の間をとりもつものである (影山 1996 : 21)。

⁵ 外項 (external argument) と内項 (internal argument) は、主語と目的語と同じように考えられ (影山 1996 : 22 より)、意味上では動作主と対象と考えても良いと思われ、(3) の中に動作主と対象を加えた。

意味上では、非能格自動詞は、主語が意図的な動作・行為を意味する動詞と人間の生理的な活動を意味する動詞であり、非対格自動詞は主として状態や位置が変化するもの一対象物 (Theme) と呼ばれる一を主語に取る動詞であり、これらの主語は自分の意志で動作するのではなく、状態や位置が変化するという意味を表す (影山 1996:21)。

非対格自動詞と非能格動詞の分類は三上 (1953) で言う所動詞と能動詞の考え方に通じると考えられる (庵 2012)。非対格自動詞と非能格動詞も、所動詞と能動詞と同様に、間接受身が作れるかどうかという点で区別されている。例えば、影山 (1996) では、非能格動詞が迷感受身になるのに対して、非対格動詞はこの構文に適合しないと指摘されている。

- (35) a. 隣の住人に夜おそくまで騒がれて困った。 (非能格動詞)
b. *突然、大地震に起こられて、動転した。 (非対格動詞)

(影山 1993 : 31)

<自他の対応と受身、使役>

自他の対応と受身、使役とは密接な関係があるとされている。野田 (1991) には、(36) のような指摘がある。つまり、自動詞の機能を果たす受身、他動詞の機能を果たす使役があるということである。

- (36) 対応する自動詞のない他動詞の受動形 (たとえば「飾られる」) は、自動詞と同じような働きをすることがあり、対応する他動詞のない自動詞の使役 (たとえば「座らせる」) は、他動詞と同じような働きをすることがある。

(野田 1991 : 212)

庵 (2018) では、自他と受身、使役の関連性は、(37) のように示されている。つまり、自動詞文から他動詞文を見ると項の数が 1 つ増えており、他動詞文から自動詞を見ると項の数が 1 つ減っていること同様に、非使役文から使役文を見ると項の数が 1 つ増えており、使役文から非使役文を見ると項の数が 1 つ減っている。そして、受身には、「項の数を一つ減らす」という点で自動詞に近いというタイプがある⁶。例えば、(38) の「発展する」が自動詞であり、その使役形「発展させる」が対応する他動詞に相当する。(39) の「発売する」が他動詞であり、その受身形「発売される」が対応する自動詞に相当する。

⁶ 野田 (1991) では、「増減型」のヴォイスと呼ばれており、語根を共有しながらも、項の数が互いに 1 つ違う動詞のペアによる対立のことである。

- (37) 他動詞
 +1 使役 ↑ ↓ 受身 -1
 自動詞

(庵 2018 : 40)

- (38) 自動詞文： コップが割れた。
 他動詞文： 太郎がコップを割った。
- (39) 自動詞文： A 国の経済が発展した
 使役文： 彼は A 国の経済を発展させた。
- (40) 受身文： 新しいゲームが発売された。
 他動詞文： X が新しいゲームを発売した。

(庵 2018 : 40-41)

日本語の使役と受身は、様々な分類がなされている。以上のような他動詞文に相当する使役文、自動詞文に相当する受身文は、それらの分類の一種である。

まず、他動詞文に相当する使役文は、日本語記述文法研究会 (2009) によると、使役者が事態の成立に直接関与する使役文である。1 つは、ある事態が起き、その事態が原因となって後続する事態が直接に起こされたという意味を表す「原因的使役文」である。もう 1 つは、使役者の動作や働きかけが直接対象の変化を引き起こすという意味であり、他動詞と同様な文型である。また、他動詞文に相当する使役文は、書き言葉での使用が多いと言われている (森 2012)。

(41) [他動詞文に相当する使役文]

- ・ 鈴木の突然の来訪がみんなを驚かせた。(原因的使役文)
- ・ 私は車を走らせた。(他動的使役文)

(日本語記述文法研究会 2009 : 261)

また、自動詞に相当する受身は、益岡 (1987) で言う「降格受動文」に当たると考えられる。益岡 (1987) では、(42) のように、影響の受け手を主語とすることに動機づけられるものは「昇格受動文」と呼ばれ、それに対して受け手のみに関心があり、動作主を背景化とすることに動機付けられる「降格受動文」というタイプがあると分類されている。また、「降格受動文」は、自動詞文の機能と近いタイプであると指摘されている。たとえば、(43) の

ように、「原因が解明された」は、「原因が明らかになった」と同様である。

(42) [益岡 (1987) による受身の分類]

- a. 昇格受動文 (ニ格受動文) : 昇格 (ガ格以外の名詞句のガ格化) が主たる動機
 - ・ 太郎が兄に叱られた。(受影受動文)
 - ・ この雑誌は、10代の若者によく読まれている。(属性叙述受動文)
- b. 降格受動文 (非ニ格受動文) : 降格 (ガ格名詞句の非ガ格化) が主たる動機
 - ・ 事故の原因が発表された。

(益岡 1987 : 182)

(43) [自動詞文に相当する受身文]

今回の調査の結果、原因が解明された。

→今回の調査の結果、原因が明らかになった。

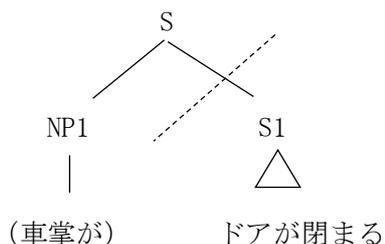
(益岡 1987 : 192)

<自他の選択>

日本語は、自動詞表現が好まれる言語である (寺村 1976、池上 1981)。自動詞文による表現を好む言語は「「なる」型言語」、他動詞文による表現を好む言語は「「する」型言語」と呼ばれており、日本語は「「なる」型言語」であり、英語は「「する」型言語」であるとされている (池上 1981)。

庵 (2018) では、自動詞と他動詞の関係が (44) のような図で示されている。つまり、点線より下だけで (動作主を含めずに) 表現すると自動詞文になり、動作主を含めて表現すると他動詞文になる。これが同じ内容を自動詞文でも他動詞文でも表せる理由となる。一方、自動詞文には動作主がおらず、したがって、「出来事がひとりでに起こる」ことが表されるのに対し、他動詞文には動作主が含まれ、「動作主が出来事を引き起こす」ことが表されると指摘されている。

(44) 自動詞と他動詞の関係 (庵 2018:37)



(動作主) 自動詞文

たとえば、(45) のような場合、日本語の電車の中で流れるアナウンスであるが、a の自動詞文を使うのが一般的である。その理由として、日本語では、他動詞文は責任を明らかにすることに動機付けられ、そのような特別な理由がないかぎり、自動詞表現が好まれる (庵 2018 : 38)。他動詞表現と比べ、自動詞表現は動作主の存在を隠すのが丁寧な表現として好まれる (庵 2012 : 136) ⁷。

(45) a. ドアが閉まります。ご注意ください。(自動詞文)

b. ドアを閉めます。ご注意ください。(他動詞文)

(庵 2018 : 38)

また、野田 (1991) では、自動詞 (たとえば「閉まる」) と他動詞の受動形 (たとえば、「閉められる」)、あるいは他動詞 (たとえば「止める」) と自動詞の使役形 (たとえば「止まらせる」) は、同じような事態を表すが、微妙な意味の違いがあると指摘されている。そういう場合は、他動詞の受動形より自動詞が優先され、自動詞の使役形より他動詞が優先されると指摘されている⁸。例えば、(46) のような場合、原則として「なる」のほうが優先され、「される」はあまり使われないという。(47) のような場合、原則として「する」のほうが優先され、「ならせる」は使われない。

(46) a. ?この辺りがゴルフ場にされる。

b. この辺りがゴルフ場になる。

(47) a. *会社がこのあたりをゴルフ場にならせる⁹。

b. 会社がこのあたりをゴルフ場にする。

(野田 1991 : 223)

寺村 (1976) では、[仕手・原因・責任者] の「不問」と [不明・不特定] によって自動詞文と受身文の異同が説明されている。つまり、何かの外力によって変化が起こった、とい

⁷ 「私たちは今度結婚することになりました」のように、話し手の意志的な動作であるが、「～ことになる」を使う場合も、動作主を含めない自動詞表現が丁寧なためである (庵 2012 : 136)。

⁸ 野田 (1991) は、受身や使役を「文法的なヴォイス」、自動詞と他動詞の対応を「中間的なヴォイス」、「殺す—死ぬ」「勝つ—負ける」のような対立を「語彙的なヴォイス」と呼んでいる。

⁹ 定延 (2000) では、「使役余剰」と呼ばれている。

う事象を前にして、その変化を受けた対象を主役に見立てる点までは、自動詞文と受身文の場合と同じだが、違うのは、その変化を生ぜしめた原因・仕手・責任者が不問に付与されている点であり、受身の場合の「不明」「不特定」とは区別されるべきだろうということである。例えば、(48) a のように、他動詞を自動詞にかえる場合は、仕手・責任者の不問に動機付けられている。それに対して、原因・責任者は、不明 ((48) b) か不特定 ((48) c) の場合は、当然文には現れないということである。要するに受身というのは「サレル」という表現であり、自動詞表現は自然に「ナル」という表現だと指摘されている。

- (48) a. (太郎がガラスを割った) → ガラスが割れた。 (仕手・責任者の不問)
 b. この寺は 600 年頃に建てられた。 (原因・責任者の不明)
 c. この新聞が日本では一番広く読まれている。 (原因・責任者の不特定)
 (例文は寺村 (1976 : 220-221) より)

さらに、寺村 (1976) では、日本語と英語 (や中国語) との違いを取り上げて、日本語では「ナル」表現が好まれると指摘されている。まず、日本語では他動詞と自動詞とが、ある部分 (「語根」kowa-, war- など) を共有しつつ形態的対立をなしているのに対し、英語や中国語では、同じ動詞の形が他動詞としても自動詞としても使われることが多いというような相違点がある。例えば、

- (49) a. They open / close the gates at 6.
 b. The gates open / close at 6.
 (50) a. 他摔了瓦。(彼が瓦を割った)¹⁰
 b. 瓦摔了。(瓦が割れた)

(寺村 1976 : 222)

また、仕手が不定、不明、不問の場合に、英語でも日本語でも対象を主語にとりたて、動詞の受身形にする (そして仕手の表現を省く) か、あるいは自動形にするか自動詞として使うかの二通りがあるが、英語では一般的に受身表現の方がふつうで、日本語では自動詞表現がふつうだということである。例えば、(51) のような場合、英語では受身表現が使われるが、日本語では、(52) のように、「建てられた」というより「建った」というの

¹⁰ 中国語のイメージでは、「割る／割れる」だけでなく、「落として割る／落として割れる」である。」

が自然なようであると指摘されている。

(51) Many ‘mansions’ of that type have been built in the past few years.

(寺村 1976 : 230)

(52) 「このあたりもずいぶん変わりましたね。」

「ええ、ああいうマンションが最近急にたくさん建てられましたからね」

(→建ちました)

(寺村 1976 : 213 より)

このように、英語は「スル」(その逆方向として「サレル」)という表現を好むのに対し、日本語はできるかぎり「ナル」表現をとることを好む体質を持っているということであり、前者は事象の「原因」に常に関心を持ち、後者は「結果」「現在の事態そのもの」に関心を持つ表現だという相違点により、日本語らしい日本語を教えるとなると、特に英語のような言語の中で育った学習者には、早く上のような考え方、事象の感じ方に慣れさせることが大切であると、寺村(1976)では示唆されている。ただし、英語と比べ、中国語では自他同形の語が多いという点は共通しているが、形式化された受身表現(“被～”など)より、(50) bのような自動詞的表現が多く使われる一方、意味上では受身を表すという現象がある。この点について後述する。

まとめて言えば、日本語の動詞の自他に関して、以下のような特徴が挙げられる。

①動詞の自他の区別は、一般的には対象を表すヲ格をとるかどうかを基準とされている

②自他の対応は、自動詞と他動詞の形態的、意味的な対応のことである。形態的な対応は、語形の規律的な対応を指し、意味的な対応は、「物の変化が起こる」と「人がものの変化を引き起こす」という対立を指す。

③広い意味では、受身と使役も自他の対応に含まれる場合がある。対応する自動詞のない他動詞の受身形は、自動詞の代わりとして使われる(降格受動文)。対応する他動詞のない自動詞の使役形は、他動詞の代わりとして使われる(原因的使役文、他動的使役文)。

④自動詞の下位分類として、意志的動詞と非意志的動詞(能動詞と所動詞、非能格動詞と非対格動詞とも呼ばれる)があり、自他対応のある自動詞は、基本的に非意志的動詞である。

⑤日本語は、自動詞表現が好まれる言語である。同じ事象(何かの外力によって変化が起こった)を描く際に、自動詞文は、他動詞文や受身文より優先される。それは、他動詞表現は責任を明らかにする場合に使われるためである。他動詞から作った受身文もあまり使わ

ない。日本語のこのような事象の感じ方は、日本語教育では重要なポイントである。

2.3.2 漢語動詞の自他の認定

一般的には、漢語動詞に自動詞（のみ）、他動詞（のみ）、自他両用動詞があるとされている。影山（1996：202）では、以下のように挙げられている。

(53) a. 自動詞のみ

事故が発生する、水が蒸発する、株価が暴落する、…

b. 他動詞のみ

ビルを爆破する、通行人を殺害する、顔を整形する、…

c. 自他両用

拡大する、縮小する、変形する、完備する、完成する、回転する、実現する、…

また、漢語動詞の自他の対応について、和語動詞のような形態的な対応がないため、自他同形の他、使役形を他動詞として使い、受身形を自動詞として使うことがある。庵（2008）では、漢語動詞の自他対応が以下の通りになると指摘されている。

- | | | | |
|-------------|---|---------|----------|
| (54) 自動詞：する | — | 他動詞：させる | （自動詞が原型） |
| 自動詞：される | — | 他動詞：する | （他動詞が原型） |
| 自動詞：する | — | 他動詞：する | （自他同形） |

（庵 2008：49 より）

さらに、漢語動詞の自他に対する判定が難しいとされており、先行研究には主に2種類の判定方法が取り上げられている。1つは、(54)の形の対立を全て取り入れて判定の基準とする手法である（楊 2007）。もう1つは、ヲ格目的語を取るかどうかによって自他を分け、自動詞用法と他動詞用法の実際の出現頻度を基準として判定する手法である（張 2014）。

楊（2007）では、ヴォイスの対立の観点から、漢語動詞の自他、特に自他両用動詞を分類した。各タイプの「する」形と「させる」形、「する」形と「される」形の対応関係は、表2-2のように示されている。その結果、自他両用動詞が「自動詞性の強いタイプ」、「中立タイプ」、「他動詞性の強いタイプ」という三つのタイプに分けられている。

表 2-2 楊（2007：84）における漢語動詞の自他の分類

動詞	「される」	自動詞文	他動詞文	「させる」	分類
腐敗する	×	○	×	○	自動詞
成長する	×	○	×	○	
回復する	×	○	△	○	両用動詞
半減する	×	○	△	○	
増加する	×	○	△	○	
停止する	○	○	○	○	
中断する	○	○	○	○	
解決する	○	△	○	×	
拡大する	○	△	○	×	他動詞
分解する	○	△	○	×	
発明する	○	×	○	×	
表示する	○	×	○	×	

注：「△」は、自動詞用法または他動詞用法に制限があることを示す。

(55) 「自動詞」

- a. *肉が腐敗された。
- b. 肉が腐敗した。
- c. *太郎が肉を腐敗した。
- d. 太郎が肉を腐敗させた。

(56) 「自他両用動詞」①：自動詞性が強いタイプ

- a. *原油生産が半減された。
- b. 原油生産が半減した。
- c. アラブ産油国が原油生産を半減した。
- d. アラブ産油国が原油生産を半減させた。

(57) 「自他両用動詞」②：中立タイプ

- a. エンジンが停止された。
- b. エンジンが停止した。
- c. 太郎がエンジンを停止した。

d. 太郎がエンジンを停止させた。

(58) 「自他両用動詞」③：他動詞性が強いタイプ

a. 問題が解決された。

b. 問題が解決した。

c. 太郎が問題を解決した。

d. *太郎が問題を解決させた。

(59) 「他動詞」

a. 新しい技術が発明された。

b. *新しい技術が発明した。

c. 太郎が新しい技術を発明した。

d. 太郎が新しい技術を発明させた。

(楊 2007 : 76-84 より)

張 (2014) は、(60) のように、ヲ格の目的語を取る漢語動詞を他動詞、ヲ格の目的語を取らない漢語動詞を自動詞としている。たとえば、「増強」は目的語「生産能力」を取る他動詞であり、「高騰」は変化の主体(「原油」)しか取らない自動詞である。「拡大」は自他両用動詞である。その上で、張 (2014) では、自他の用法について客観的に集計されており、自動詞と他動詞の割合が(99 : 1) であっても、自他両用動詞とみなされている。このような網羅性を求める集計方法によって、全体像が見えていると言える。

(60) a. N_1 が N_2 を V_t (他動詞)

b. N_2 が V_i (自動詞)

(61) a. シャープは買収を通じて主要部品を内製化し、液晶パネルの生産能力を増強する。

b. その後、省エネや代替エネルギーの開発が進み、産油国の影響力は低下したものの、最近もパレスチナ情勢の緊迫で原油が高騰し、景気回復への悪影響が懸念されている。

c. 環境破壊が水害や干ばつ被害を拡大し、貧困から抜け出せないのだ。

d. 英国では今年2月、感染した豚が20年ぶりに発見され、フランス、オランダなど周辺諸国にも被害が拡大した。

張 (2014 : 24)

また、張（2014）では、読売新聞コーパスの2000年に発行された分を用いて行った調査をもとに、漢語動詞の自他の分布について、表2-3の通りにまとめられている。

表 2-3 二字漢語動詞の自他の分布状況（張 2014：28）

自他	語数	割合	出現頻度の合計	平均出現頻度
他動詞	2,284	52.1%	495,058	217
自動詞	1,830	41.8%	185,094	101
自他両用動詞	260	6.1%	93,001	346
計	4,383	100.0%	773,243	176

さらに、漢語動詞の語構成と自他の関連性について、張（2014：169-170）では（62）のような基本的な規則が指摘されている。「AV型」などは、前述した（20）の構成要素の組み合わせのことを指す。このような規則によると、漢語の部分に含まれた動詞的要素の自他が、漢語動詞の自他を決めるのに重要な地位を占めると分かった。

（62）「漢語動詞の語構成と自他の関連性」

- a. AV型漢語動詞：動詞的要素の自他がAV型漢語動詞の自他を決める。
- b. VN型漢語動詞：デフォルト的に自動詞になるのが基本である。
- c. VV型漢語動詞：後項要素の自他がVV型漢語動詞の自他を決める。
- d. MV型漢語動詞：動詞的要素の自他がMV型漢語動詞の自他を決める。

2.4 本研究の注目する対象

本研究では、中国語話者における「漢語+になる」と「漢語+される」という誤用問題を取りあげた。例えば、（63）のような場合である。

- （63） a. 洋服が普及した。 → *洋服が普及になった／*洋服が普及された。
 b. 色が統一されている → *色が統一になっている。

つまり、日本語では「～が+漢語+する」と「～が+漢語+される」の2種類の形式を使用する場合に注目する。（63）aの場合、非意志的自動詞（非対格動詞）に当たり、（63）bの場合、他動詞の受身形であり、降格受動文に当たるものである。つまり、物事に何らかの変化が起こることを表す際に、漢語動詞は{①する、②される}、どちらの形式を使う

のか、中国語話者がそれらの形式を使う際に、どのような問題が生じるのかに注目するのである。(63) のような誤用が生じるのは、その漢語の中国語と日本語における用法の相違によるものだと考えられるため、次節では、それに関する日中対照研究を概観する。

3. 漢語動詞の日中対照研究

日中同形語は、中国語話者にとって、両言語の「文法的な振る舞い」の違いが習得上の困難点であるとされている。このような問題をめぐり、日中同形語の品詞と自他に関する対照研究が多く見られる。

3.1 日本語の漢語語彙と中国語の品詞のずれ

石・王 (1984) では、中国人学生の作文の誤用例に、日本語の漢語語彙の品詞の取り違えに起因するものと観察され、日中同形語における文法的なズレを検討した。日本語学習歴が4年から6・7年である中国語話者20人を対象にし、「繁栄」などのような日中同形語50語について、中国語の品詞と日本語の品詞を書かせるという調査が行われた結果、母語の干渉が強いと示唆された。さらに、何冊かの中国小説およびその和訳本から日中両国語で品詞の異なる同形語の107語を選び、対照し、分類した。その結果、表2-4のような対応関係となっている。

表 2-4 石・王 (1984) の品詞分類

タイプ	中国語	日本語	例
1	形容詞	自動詞	緊張
2	副詞	動詞	徹底
3	形容詞・他動詞	形容詞	豊富
4	他動詞/自他両用	自動詞	発展
5	他動詞	自動詞	同情
6	動詞	名詞	打撃
7	自他動詞	自動詞	感動
8	名詞	動詞	提案

品詞のずれによる誤用について、石・王 (1984) では、以下のような例が提示されている。例えば、(64) の「緊張」について、日本語では状態を表す動詞であると同時に瞬間動詞でもある。連体修飾の場合は「～した」の形をとり、述語になる場合は「～している」の形を

とる。なお、一部の語は、日本語ではその動詞性が明確であるが、中国語では、形容詞なのか、自動詞なのか、あるいは形容詞と自動詞に兼属しているのか不明確であり、学習者はこのような日本語を往々にして形容詞として使ってしまふようであると述べられている。

- (64) { 当时, 我非常紧张。
 { その時私は非常に緊張 { ×でした
 { ○していた

侯仁鋒 (1997) は、品詞の違いが誤用を引き起こすという観点を持ち、日中同形語の品詞を分類し、両者の対応関係を表の 8 種類に示した。しかし、品詞判断の基準について明記しておらず、石・王 (1984) の分類とはずれるとことがあるのである。

表 2-5 侯 (1997) の品詞分類

タイプ	中国語	日本語	例
1	動詞	名詞	根拠
2	名詞	名詞・動詞	提案
3	名詞・形容詞	名詞・動詞	疲労
4	形容詞・副詞	名詞	積極
5	形容詞・副詞	動詞	緊張
6	他動詞	自動詞	干涉
7	自他両用	他動詞	発展
8	副詞	タルト形容動詞	黯然

熊・玉岡 (2014) では、両言語の意味の違いが検討されておらず、同形異義語もその考察範囲に入っている。品詞のデータベース (<http://tamaoka.org/websearch/>) (朴・熊・玉岡 2014) のに含まれた二字漢字語は、『日本語能力試験出題基準』(改訂版) の 4・3・2 級の範囲で抽出された語である。日中語の品詞は、5 冊の日本語国語辞典、2 冊の中国語の辞書に載せてある品詞情報にしたがって判定された。その結果、1383 語が特定された。両言語の品詞の包含関係を 5 つのパターンに分けている。

(65) 「日＝中」：日中両言語で品詞が完全に同じである

「日<中」：両言語で同じ品詞もあるが、日本語独自の品詞がある

「日≡中」：両言語で同じ品詞もあるが、中国語独自の品詞がある

「日∪中」：両言語で共通する品詞性もあるが、日本語と中国語でそれぞれ独自の品詞もある

「日≠中」：日本語と中国語の品詞性が全く異なる

表 2-6 日中同形二字漢字語の品詞の包含関係（熊・玉岡 2014）

品詞の包含関係	語数	割合	日	中	例
日＝中	802	57.99%	名詞 形容動詞 名詞・自動詞 など	名詞 形容詞 名詞・動詞 など	椅子 奇妙 生活
日⊂中	67	4.84%	名詞 名詞 名詞 など	名詞・動詞 名詞・形容詞 名詞・副詞 など	感覚 科学 時刻
日⊃中	399	28.85%	名詞・自動詞 名詞・他動詞 名詞・形容動詞 など	名詞 動詞 名詞 など	電話 掃除 傑作
日∪中	36	2.60%	名詞・形容動詞 名詞・自他両用 名詞・形容動詞 など	名詞・動詞 動詞・形容詞 名詞・形容詞 など	上手 勉強 便利
日≠中	79	5.71%	名詞・代詞 形容動詞 名詞 など	動詞 名詞 形容詞・副詞 など	自分 丈夫 専門

許 (2016) では、(66) のような中国語話者における日本語の誤用と日本語話者における中国語の誤用が問題として提起され、誤用の原因は母語の品詞をそのまま目標言語に持ち込むことであることと述べられた。そのため、日中同形語の品詞のズレに対する考察が日本語教育および中国語教育に役立つという観点が提示されている。

- (66) a. 敦煌は雨が少なくて空気が乾燥です（乾燥している）。
 b. 労働力も、品物も過剰する（過剰になる）のは不可避のことである。
 c. 我的大学生活一直高兴，同时我也经验（经历）了痛苦事。
 （大学生活がずっと楽しかったですが、つらいことも経験（中：経歴）した）

(許 2016 : 1, c の和訳は筆者)

また、許 (2016) は、日中同形語の品詞性に言及する研究では、日中双方の国語辞典の品詞表示がそのまま利用されるため、品詞判定の基準にゆれがあると指摘し、コーパスを用いて用例を精査することによって両言語の品詞性を比較する必要があると述べられた。調査の結果は、表 2-7 の通りにまとめられている。コーパスにおける使用実態を見ると、品詞性が確かに辞書の基本用法より多様性を呈していることがわかった。さらに、同形語の語構成の特徴、古代中国語の出典の有無などの角度から、両言語の品詞のズレが生じる原因も考察された。日中同形語の品詞の対応について、全面的に把握されていると言える。

表 2-7 辞書とコーパスから見た日中同形語の品詞のズレ (許 2016 よりまとめ)

	辞書		コーパス		例
	日	中	日	中	
名詞と動詞のズレ	名詞・動詞	動詞	名詞・動詞 名詞 動詞 名詞・動詞 形容詞・動詞	動詞 動詞 動詞 名詞・動詞 形容詞	出現、上昇 送別、查收 匹敵、附載 回答、調査 在職、私有
	名詞・動詞	名詞	名詞・動詞 名詞・動詞 名詞	名詞 名詞・動詞 名詞	意見、位置 起因、貿易 形状、増刊
	名詞	動詞	名詞 名詞・動詞 形容詞 形容詞 名詞	動詞 動詞 動詞 形容詞 名詞・動詞	愛国、初学 習字、従業 応急、匿名 空前、絶版 絵画、危害
	名詞	名詞・動詞	名詞 名詞・動詞	名詞・動詞 名詞・動詞	降水、予算 確証、犠牲
名詞と形容詞のズレ	名詞・形容詞	形容詞	名詞・形容詞 形容詞	形容詞 形容詞	安全、健康 巧妙、正確
	名詞	形容詞	名詞 形容詞 名詞・形容詞	形容詞 形容詞 形容詞	快樂、痛苦 永久、公立 寒冷、全盛
	名詞	名詞・形容詞	名詞 名詞・形容詞	名詞・形容詞 名詞・形容詞	芸術、正義 全面、必然
動詞と形容詞のズレ	名詞・動詞	形容詞	名詞・動詞 名詞 動詞・形容詞 形容詞	形容詞 形容詞 形容詞 形容詞	乾燥、混乱 悲傷、愉悦 偶発、野生 先遣、草食

	名詞・動詞	動詞・形容詞	名詞・動詞	形容詞・動詞	安定、緩和
--	-------	--------	-------	--------	-------

以上述べてきたように、日中同形語の品詞の対応関係に関して、先行研究では辞書による調査、中国語話者を対象とするアンケート調査、コーパスによる調査といった手法を取り入れ、日中両言語の対応関係の全体像が描かれてきており、その対応関係の複雑さが見えてきた。なお、これらの研究は、中国語話者の誤用を研究のきっかけとしているが、以上のような対応関係は、それらの誤用に対する解決策とはどのように関連づけられているか、という教育上への応用の可能性には、大きな疑問が残されている。

3.2 日本語の漢語動詞と中国語の自他のずれ

3.2.1 中国語と日本語の自他対応について

次は、中国語と同形である漢語動詞の自他に関する日中対照研究を概観する。そのために、まずは日本語と中国語の自他対応の異同について述べておく。

日本語と中国語の他動詞文と自動詞文の対応について、中島（2007）では、次のように述べられている。(67)のように、日本語の他動詞文はヲ格名詞句が目的語の目印になっているため、他動詞文の目的語と自動詞文の主語とが同一であるといっても、「ヲ」格と「ガ」格の交替が起こる。一方、(68)のように、中国語においても、aの他動詞文の目的語がbの自動詞文では主語になり、他動詞文の主語が自動詞文では消えるという点で、日本語と同様の構文である。しかしながら、中国語は主語と目的語に「ガ」格や「ヲ」格などに相当する格表示形式がつかない。語順が主語や目的語を決定する。したがって、他動詞文の目的語と自動詞文の主語の一致という構文レベルでの自他対応に、日本語のような格の交替などの問題は起こらない。

(67) a. N1 ガ N2 ヲ V 他 太郎が機械を動かした。

b. N2 ガ V 自 機械が動いた。

(68) a. N1 V N2 太郎开动了机器

b. N2 V 机器开动了。

(中島 2007 : 17)

以上の例を見ると、日本語では対応のある自動詞と他動詞（「動かす—動く」）であるが、中国語では同じ形態である両用動詞“开动”となる。この点について、寺村（1982）では、日本語の動詞が両用動詞（開く）、相対他動詞（開ける）、相対自動詞（開く）、絶対他動詞

(押す)、絶対自動詞(死ぬ)と分類されており、相対自動詞と相対他動詞が非常に多く、両用動詞は少ないが、英語と中国語はその逆であると指摘されている。そして、寺村(1982)の指摘を受け、楊凱榮(2018)では、中国語には絶対他動詞、絶対自動詞と両用動詞はあるが、日本語のように相対自動詞と相対他動詞がなく、その代わりに、多くの結果式動詞が見られ、日本語の相対他動詞及び相対自動詞と対応すると指摘されている。また、楊凱榮(2018)によると、中国語にも日本語と同じように、絶対他動詞、絶対自動詞及び両用動詞があるが、問題は日本語の相対他動詞と相対自動詞との対応である。例えば、(73)のような場合がある。日本語の両用動詞は、中国語でも両用動詞となる。一方、日本語では相対他動詞であるが、中国語では絶対他動詞、あるいは両用動詞となる。日本語では相対自動詞であるが、中国語では両用動詞となる。

(69)	日本語		中国語
	両用動詞	→	両用動詞
	相対他動詞	→	絶対他動詞/両用動詞
	相対自動詞	→	両用動詞

(楊凱榮 2018 : 185-191 よりまとめ) ¹¹

例えば、(70) では、日本語の「開く」は両用動詞であり、中国語の“开”も両用動詞である。一方、(71) では、「助ける—助かる」のような対立は、中国語では2種類に分けられ、1つは絶対他動詞“救”と結果式動詞“救活”の対立であり、もう1つは結果式動詞“救活”が両用動詞になる場合である。結果式動詞は(72)の通りである。

(70)	太郎がドアを <u>開く</u> 。	太郎开了门。
	ドアが <u>開く</u> 。	门开了。

(楊凱榮 2018 : 186)

(71)	助ける	——	救	(絶対他動詞)
		——	助かる	-----
			救活	(結果式動詞)

(楊凱榮 2018 : 188)

¹¹ (69) は、日本語と中国語の自他の対応関係の全体像ではなく、主要な問題の所在と考えられる。

(72) 結果式動詞＝一語他動詞＋一語自動詞（／形容詞）

救活	救	活
助ける/助かる	助ける	生きる

(楊凱榮 2018 : 189)

さらに、楊凱榮 (2018) では、両用動詞における自動詞文は、例えば、“小孩救活了”（子供は助かった），“水烧开了”（水が沸いた）など、「意味上の受身」¹²を表すと言われていると述べられている。それは、“被”（受動マーカー）などが用いられていないものの、意味上の受身を表すということである。中国語ではこのような意味受動文は受動マーカーを用いた受動文と比べて、より多く用いられていると言われている（龔千言 1980、王还 1983）。また、楊凱榮 (2018) ではこの意味受動文に対し、日本語では受動文より相対自動詞文を用いた文が用いられることが多いのも首肯できようと言われている。例えば、

(73) a. 猫结果没找到。

b. ネコは結局見つからなかった。

(楊凱榮 2018 : 199)

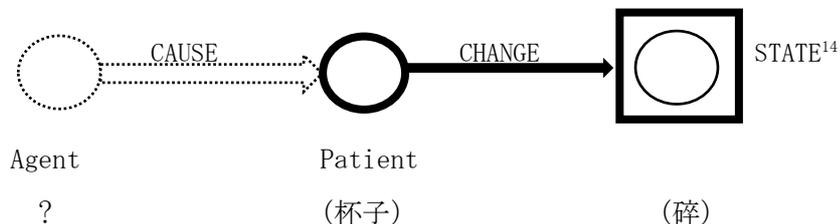
中国語の意味上の受身文は、受身であるかどうか、中国語学には異なる観点が存在するが、形式化された受身文（“被～”など）の使用動機とは異なるという点で基本的に一致している。刘月华ほか (2001) によると、受動者としての物事の状態を取り立てて描くということである。また、行為連鎖¹³の観点から、三宅 (2009) では、文中に受身マーカー“被～”が出現する場合 (74) と、出現しない場合（即ち意味上の受身）(77) について、(75) と (78) の行為連鎖のモデルで、(76) と (79) のように説明されている。

(74) 杯子被打碎了。(ガラスが割られた)

¹² 大河内 (1982) などでは「自然受動文」とも呼ばれている。

¹³ 認知言語学の分野でしばしば用いられる行為連鎖 (action chain) というモデルは、動作主から受動者に対して何らかの働きかけがあり、その影響を受けて何らかの結果が生じたという他動的事態を想定し、図でその他動的事態を一般化したものである (三宅 2009:46 より)

(75)

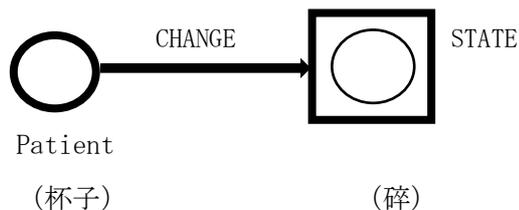


(76) 動作主は文中に出現していないものの、動作主を導く介詞“被”の生起は、話し手が当該の事態を動作主によって行為を受けた受身の事態だと概念化していることを示している。しかし、その動作主が誰であるかということは、不明であるか、あるいは言及する必要がないかで、不問に付されている。したがって、行為連鎖の流れのうち、動作主から受動者への他動的働きかけの部分は高い程度において背景化してしまっていると考えられる。図の点線部分はそのような背景化されたリンクを表している。

(三宅 2009 : 55, 下線は筆者)

(77) 杯子打碎了。(グラスが割れた)

(78)



(79) 意味上の受身文においては、発生した客観的事実としては、発生した客観的な事実としてはたとえその出来事を引き起こした動作主が存在しているとしても、話し手がその動作主の存在を考慮に入れず、あかたも動作主なしで、受動者自身に自発的な変化が発生したかのような概念化した表現であるということ

¹⁴ 図の見方については、以下の通りである。Agent=動作主、Patient=受動者、CAUSE=エネルギーの伝達(図は二重矢印)、CHANGE=受動者の状態の変化(図は一重矢印)、STATE=結果状態(図は四角囲み)というように示されている(三宅 2009 : 46-47 より)

ができる。

(三宅 2009 : 58, 下線は筆者)

以上のような中国語の「被」受身文(74)と「意味上の受身文」(77)は、同じ事象を表すにも関わらず、受身事態を述べるか、受動者自身の変化を述べるかというような区別があると言える。これは、寺村(1976)で指摘された日本語の他動詞の受身文と自動詞文との区別と類似していると思われる。つまり、「仕手の不明」と「仕手の不問」という区別である。ただし、中国語の“被”の使用動機は、主に好ましくない事柄を描くためであり、日本語の受身形(直接受身)の使用動機と一致するとは言えない¹⁵。また、「意味上の受身文」は、「自発的な変化」を表すために使うとしたら、なぜ受身の意味を表すのか、という点で不思議に思われるだろう。「意味上の受身文」は、受身の意味を表す理由として、崔(2017)では、(80)の2つの統語的な条件によるのだと述べられている。

(80) 「意味上の受身文」が受身を表す理由

- ①受動者が目的語の位置から主語の位置に来る
- ②述語が複雑成分である

(崔 2017 : 7, 和訳は筆者)

つまり、(80) ①のような条件は、「格交替」にあたり、受身文の生成の条件と同じである。(80) ②の「複雑成分」は、主として前の(71)で述べた「結果式動詞」を指す。中国語の受身文の成立条件の1つとして、述語動詞は付加成分(結果補語など)が必要であり、それは“被”構文も意味上の受身文も共通している(木村 1981 : 30 を参照)。

この節をまとめて言えば、日本語の対応のある他動詞と自動詞は、中国語では自他両用動詞となる場合が多い。ただし、中国語の自他両用動詞における自動詞文は、意味上では受身を表すことがあるということがわかった。それでは、本研究の対象となる漢語動詞の場合は、どうなるのか、先行研究では、日本語では自動詞であるが、中国語では両用動詞であるというような指摘が多く見られた。

¹⁵ 寺村(1976 : 221)によると、日本語の迷惑受身の性質が思い起こされるが、ここで問題にしている受身(「直接受動」)には、迷惑受身のような構文からの意味合いはない。一方、日本語の迷惑受身に対比すべき構文は中国語にはない。

3.2.2 漢語動詞の場合

日本語の漢語動詞の自他と同形の中国語の自他との対応関係について、日本語では自動詞であるが、中国語では自他両用であるという点が注目されてきた。主として、以下の石・王（1984）と中川（2005）が挙げられる。

石・王（1984）では、「発展」は、中国語では他動詞あるいは自他両用であるが、日本語では自動詞である。（81）のように、両言語とも自動詞として使われる場合がある。一方、（82）のように、このタイプの語は、日本語で他動詞として用いる場合、使役態を取らなければならない。中国語話者が「発展する」を他動詞として「し」を使う可能性があるとは指摘されている。

- (81) { 政策対頭，生産就發展。
 { 政策が正しければ、生産が發展する。

（石・王 1984 : 60）

- (82) { 我們必須發展工業
 { 我々は工業を發展 { ×し } なければならない。
 { ○させ }

（同上）

中川（2005）は、石・王（1984）の分類を受け、（83）の語のように、中国語では他動詞として用いることができるのに、日本語ではそれができないものは非常に多いと述べている。つまり、（84）のように、中国語ではそのまま他動詞として使えるが、日本語では他動詞にするには使役形（「させる」）にしなければならない。その理由は、池上（1981）で言う「なる」（型）言語と「する」（型）の区別によるものだと述べられている。「する」言語では、実際の文でも動作の行い手が主語として、動作主は他動詞によって表現される。それに対して、「なる」言語では、しばしば動作主が表現されないばかりか、話し手が意識からすら消えうせ、あたかも自然にそうなったかのように表現されることが多いということである。一方、中国語では自動詞用法をもつのに、日本語では自動詞用法を持たないというものはほとんどないと指摘されている。

- (83) 撤退、顛倒、瓦解、分裂、分化、成立、通過、發展、普及、團結、激怒、感動、満足、降伏、動搖、大敗 など

（中川 2005 : 133）

(84) a. 要 尽力 減少 糧食 的 損耗。

ねばならない 尽力する 減少する 糧食 の 損失

? 食糧の損失を減少するよう力を尽くさなければならない。(→減少させ)

(中川 2005 : 137)

b. 我们 要 孤立 敌人。

我々 ねばならない 孤立する 敵

? 我々は敵を孤立しなければならない。(→孤立させ)

(同上)

まとめて言えば、漢語動詞に関わる日中語の自他について、主として、日本語では自動詞であり、中国語では両用動詞であるという相違点が挙げられている。両者の対立は (85) と (86) のように示すことができる。日本語では、語形の対応 (他 : させる—自 : する)、格表示の交替 (を→が)、項の増減 (N1 の有無) によって表されている。一方、中国語では、語順 (N2 : 目的語→主語) と項の増減 (N1 の有無) によって表されている。ただ、注意すべきなのは、中国語の (86) b のような文は、自動詞文の機能を果たしている一方、意味上では受身が含まれていることである。

(85) 「日本語の漢語自動詞の自他対応」

a. N1 が N2 を 漢語させる。

b. N2 が 漢語する。

(86) 「(85) に対応する中国語の形式」

a. N1 漢語 N2

b. N2 漢語

3.3 対照研究の盲点

以上述べたような日中同形同義の漢語語彙に関する対照研究は、両言語の対応関係の全体像が描かれており、量的な研究に基づいた資料が作成されているため、参考の価値があることとは否めない。しかし、対照の手法、及び習得との関連性から考えると、以下の盲点がある。

<1> 網羅的に品詞の判断基準を比較すると、習得を阻害する要素が絞れない。

日中同形語の品詞性を比較するため、一般的には、まず日本語と中国語では「品詞」の判定基準を決める必要がある。しかし、日本語では、語形及び語形変化といった形態的特徴を品詞の判定基準にすることができるが、中国語ではそういった形態的特徴が欠けているため、他の語との結合能力や統語的機能、即ち広義の形態的特徴によって品詞を判定するしかできない。そのため、中国語では品詞の決め方が極めて複雑であるため、結合できる語や統語的機能が見つかるごとに品詞を増やした結果、多品詞性をもつ語が多くなってしまふ。例えば、許(2016)では、辞書の品詞表示及びコーパスによる検証に基づき、日中同形語における動詞と形容詞のズレについて、以下のように示されている。

(87) 『新明解』では名詞・動詞、《現漢》では形容詞となる日中同形語

日本語コーパスでは名詞・動詞、中国語コーパスでは形容詞となるもの

乾燥、恐怖、合格、衰弱、疲労など

緊張、執着、適用、憤慨、苦惱など

(下線部は中国語で動詞的用例も見られるものである。)

『新明解』では名詞・動詞、《現漢》では形容詞となる日中同形語

日本語コーパスでは名詞・動詞、中国語コーパスでは形容詞・動詞となるもの

安定、確定、活躍、感動、緩和、孤立、失望、充実、成功、成熟など

(許 2016 : 236)

このような示し方であれば、日本語と中国語の区別は、中国語の方が「形容詞」として使えるということがわかる。しかし、日本語の規則からみると、「名詞」として使えるため、「名詞+に+なる」の形が使えるというふうに捉えられる恐れがある。つまり、品詞判断基準を厳密にするとしても、結果的には「日本語では動詞であり、中国語では形容詞である」という規則を学習者に提示すると、さらに「日本語では動詞とは何か、中国語では形容詞とは何か」という疑問が生じ、それを解釈するにはさらに多くの規則を加えることになる。

換えて言えば、学習者にとって重要な情報は、確かに「日本語では動詞であり、中国語では形容詞である」という品詞のずれではあるが、中国語では一体形容詞なのか、動詞なのかを明らかに区別する必要がない。干渉となる要素が中国語の形容詞用法であるならば、形容詞用法がある場合の注意事項を提示すればいいと考える。そのため、中国語に形容詞用法があると意識させるため、程度副詞“很”(とても)と結合できるという一つの規則を用い、そういう場合は日本語では何を注意する必要があるかを明示的に教えると、負担が軽減するのではないかと考える。

また、庵(2015:175)で指摘されているように、「母語と異なる言語を習得する場合、対

象言語における当該語の「語形（音形）」と「意味」はいずれにしても個別に覚えるしかない。これに加え、当該語の「文法的な振る舞い」も正確に身につけなければ正しい文は作れない。」(87) のような品詞の示し方も、教科書における新出単語の品詞表示¹⁶も、学習者が個別に覚えることしかできず、結局どのように文に使えばいいかは、分からない。中国語話者にとって、漢語動詞（他の漢語語彙も）に関する必要な情報は、文法的な振る舞いなのではないかと思われる。できるかぎり、学習負担を最小限にする教育の対策が漢語動詞教育に課せられた課題だと考えられる。

(2) 孤立的に中国語の特徴及び日中語の相違点を扱くと、母語の中国語の働き方が正確に把握できない。

以上述べたように、従来の対照研究では、日中語の品詞を比較するには、語形や統語的機能といった形態的特徴が基準とされている。しかし、本論文で提起した問題は、形態的特徴のみでは十分ではないところがあると思われる。名詞項と述語の意味的關係（主体なのか対象なのか）、文全体の意味及び事象の捉え方から考えると、学習者による誤用の様相が異なってくる可能性がある。

例えば、(88)と(89)のように、「進歩する」と「開通する」は、日本語では自動詞であるが、中国語の“进步”は形容詞と自動詞であり、“开通”は自他動詞である。このような言語間のずれは、以下のような語形及び統語的特徴によって判断されていると思われる。そうすると、学習者は、日中語の品詞のずれによって「進歩する」を「*進歩になる」と誤用し、日中語の自他のずれによって「開通する」を「*開通される」と誤用するという結論になる。

(88) 「進歩する」、「開通する」の形態的特徴

語形：「～する」活用体系

統語的特徴： ○技術が進歩する。 ○鉄道が開通する。(自動詞文)
 ×技術を進歩する。 ×鉄道を開通する。(他動詞文)

(89) “进步”と“开通”の形態的特徴

語形：活用なし

統語的特徴： ○技术很进步。 ×铁路很开通。(形容詞文)
 ○技术进步了。 ○铁路开通了。(自動詞文)
 ×进步了技术。 ○开通了铁路。(他動詞文)

→学習者の捉え方：

¹⁶ 本論文の第四部で述べる。

日中語の品詞のずれ：*技術が進歩になった。

日中語の自他のずれ：*鉄道が開通された。

一方、以下の文では、文の意味から言えば、日本語でも中国語でも「変化」を表す。「変化」事象の構造から言えば、「変化」の成立には外因が関与すると捉えられる。そのため、学習者は、言語間の品詞や自他を考慮に入れず、あるいはそういった文法的規則を手段とするのに自信がない場合、意味的に捉える可能性がある。つまり、学習者は、以下の文を「変化」と捉えると、「*進歩になる」、「*開通になる」という形式を使い、「変化」の成立に外因の存在を感じると、「*進歩される」「*開通される」という形式を使う可能性が十分ある。さらに、名詞項と述語の意味的關係を考えると、中国語の発想では、「技術」と「進歩」が「変化主体」と「変化内容」であり、「鉄道」と「開通」が「動作対象」と「働きかけ」であるため、後者の方はより「～される」と使いやすいのである。

(90) 最近，机器人技术 进步 了。

最近 ロボット 技術 進歩する た

最近は、ロボット技術が進歩していますね。

→学習者の捉え方：

変化：*技術が進歩になった

外因：*技術が進歩された。

(91) 东京 至 广岛 的 铁路 开通 了。

東京 から 広島 の 鉄道 開通する た

鉄道が、東京から広島まで開通しました。

→学習者の捉え方：

変化：*鉄道が開通になった

外因：*鉄道が開通された。

つまり、中国語話者による漢語動詞の習得における母語の働き方を明らかにするため、中国語の特徴を、形式上の表示にとどまらず、意味上の特徴も、事象全体の捉え方も視野に入れて考察する必要があると考えられる。

(3) 誤用の原因が両言語の相違点であるという論点は、ミスリーディングになる。

対照研究の出発点は、ほとんど学習者の誤用である。例えば、石・王 (1984) と許 (2016) は以下のように述べられている。

(92) 「安定」という同形語の品詞は日本語では形容動詞でなく、サ変動詞である。したがって、連体修飾の場合「安定した生活」とすべきであるのにどうしてこのような誤りが出てきたのだろうか。言うまでもなく中国語の干渉である。

(石・王 1984 : 56)

(93) 誤用の原因は日本語での品詞性をそのまま中国語に持ち込むことにある。このように品詞性にズレがある日中同形語は数多く存在し、この点に対する考察は日本語教育及び中国語教育に役立つと思われる。

(許 2016:1)

しかし、このような問題提起には、大きな問題点がある。つまり、誤用の原因が両言語の相違点であるとは限らないし、両言語の間にズレがない場合でも、必ずしも正しく使えるとは限らない。

例えば、石・王 (1984) では、「他動詞あるいは自他動詞 (中国語) \leftrightarrow 自動詞 (日本語)」というタイプについて、以下のように示されている。(94) b のように、日本語では他動詞として用いる場合、使役態を取らなければならないと説明されている。一方、(94) a の例について詳しく説明されていない。おそらく「発展」は中国語では自他動詞であり、(94) a は自動詞用法であるという意味であろう。つまり、(94) a の場合、中国語は日本語と同じように自動詞であり、両言語の間にズレがないということであろう。そうすると、(94) a のような場合は、中国語話者が自然に「生産が発展する」という形を習得できるという理解になってしまう。しかし、実際には、(94) a のような場合でも、「変化」という意味を「生産が発展になる」、「変化」事象における外因を「生産が発展される」というように言語化する可能性があると考えられる。

(94) a. { 政策对头，生产就发展。
政策が正しければ、生産が発展する。

b. 我们必须发展工业。

我々は工業を発展 { ×し } なければならない。

○させ

((81)と(82)の再掲)

→学習者の捉え方：

政策対頭，生产就发展。(政策が正しければ、生産が発展する。)

- ┌ 「変化」：*政策が正しければ、生産が発展になる。
- └ 「外因」：*政策が正しければ、生産が発展される。

したがって、言語間の相違点が誤用をもたらすという単純な結論は、ミスリーディングになる恐れがあると考えられる。母語と目標言語の対応関係を正確に示した上で、正用と誤用の現れる環境を確実に推定する必要がある。原則としては、①誤用の原因は、言語間の相違点のみではない、②一見相違点がない場合でも、正用できるとは限らない、という2点を注意すべきであると考えられる。

4. 中国語話者による漢語動詞の習得研究

4.1 漢語動詞の習得難易度

日本語と中国語の同形語としての漢語語彙は、意味や用法が異なる場合に、負の転移が起こると考えられる。陳(2002)では、同形同義語の文法的なズレに焦点を当て、対照研究(石・王1984、中川1985、1992a、1992b、1995)による日中同形同義語の類型を6タイプに分け、自然さ判断テストを用いて行った調査をもとに、中国語話者の習得難易度が(95)のようになっていると述べられている。

(95) 漢語語彙の習得難易度

- ▲ 難 中：形容詞→日：自動詞、(腐敗、安定、努力、興奮)
- 中：他動詞→日：二格をとる自動詞(感謝)・中：副詞→日：動詞(徹底)
- 中：自他動詞→日：自動詞(動揺、成立)
- 中：動詞→日：ニ(へ)～スル・場所+ヲ～スル(留学、散歩)
- 易 中：名詞→日：動詞(関係、勝負)

(陳2002よりまとめ)

もし陳(2002)の結果が正しいとすれば、習得が難しいのは主に日本語の非対格自動詞であると言える。中国語では形容詞、自他動詞などと使われるため、中国語話者が母語の影響によって誤用する可能性があると考えられる。

4.2 漢語動詞の形容詞・名詞化

五味他(2006)では、中国語を母語とする日本語学習者は、漢語を容易に習得できる反面、母語の干渉による誤用が出やすい面があり、特に日中語の品詞のズレによって生じる誤用が目立つと指摘されている。そこで、二字漢語を対象に、漢語の動詞性の有無によって生じる誤用を、500本を超える中国語母語話者の作文コーパスから帰納的に分析している。その結果、日本語では「低下する」のように、サ変動詞として使われるものを、中国語話者が「低下になる」のように形容詞または名詞として使う誤用が多く観察され、こうした誤用は「変化」にかかわる語彙を中心に見られると指摘された。例えば、(96)と(97)の例が挙げられている。

(96) プラスの変化

- a. *景気が回復になる。
- b. *内面が成熟になる。
- c. *カラオケが流行になる。
- d. *娯楽産業がだんだん復興になる。
- e. *最後に成功になる。
- f. *治安が改善になる。
- g. *労働力不足の問題が解決になる。

(五味ほか 2006 : 5)

(97) マイナスの変化

- a. *数学的能力が低下になる。
- b. *人類が滅亡になる。
- c. *食料が不足になる。
- d. *娯楽産業がだんだん消失になる。
- e. *自分が墮落になる。
- f. *達雄が事業に失敗になる。

(五味ほか 2006 : 6)

誤用の原因を探るため、五味ほか(2006)は、中国語を母語とし、日本語の研究・教育に従事している5名にこの誤用の原因を尋ねた。その結果、以下の2点¹⁷の答えが得られた。

¹⁷ 五味ほか(2006)では、「～化」(形式化)などについても考察されているが、本稿では二字漢語に関する部分だけを引用した。

1点目は、日本語の二字漢語動名詞を「変化」の枠組みで捉えるとき、その背後には「變得」「成為」などの中国語が思いうかぶということである。「變得」は程度の変化や部分的な変化を表すもので、主として形容詞の変化に使われるものであり、「成為」はステイタスの変化や全面的な変化を表すもので、主として名詞の変化に使われるものである。つまり、中国語母語話者は「変化」を表す二字漢語をサ変動詞としてではなく、形容詞または名詞としてとらえる傾向がある。このことは、「～になる」という形を選択したことを別の側面から裏付けるものである。

2点目は、「する」という動詞は他動性を表すものであり、自然に生起する事柄には使いにくいという心理が働くということである。日本語の発想では行為の結果を表す時に、「服を洗うときれいになる」という自発的な捉え方が普通であるが、中国語の発想では「服を洗ってきれいにする」という行為を含んだ表現が好まれる。つまり、中国語の発想では、自然に生起する事柄と人為的な事柄を明確に分け、前者には「～になる」、後者には「～にする」を当てて考える傾向がある。そのため、自然に生起する事柄に「～する」を使うのは心理的に抵抗が強いということになる。

(五味ほか2006:8、下線は筆者)

また、五味ほか(2006)は、語構成の観点と意味の観点から、日本語の「～する」の動詞性を次のように説明している。

語構成の観点から、日本語の「変化」を表す二字漢語では、後項が変化の到達点を表すことが多いと指摘されている。例えば、「増える」意を表す二字漢語のうち、「倍增」「漸増」「激増」などのように後項に動詞的要素「増」がくるものであれば軒並み「する」がつくが、「増額」「増量」「増税」などのように後項に名詞的要素がくると、「給与が増額になる」「ラーメンの具が増量になる」「消費税が増税になる」のように、「変化の対象が主語にきた時には「する」がつけにくい。一方、前項に「増」がくる場合であっても、後項に動詞的要素がくる「増加」や形容詞的要素がくる「増大」は「する」をつけることが可能であると述べられている。つまり、日本語の「変化」を表す二字漢語では、後項が変化の到達点を表すことが多いということである。

意味の観点から、日本語母語話者が「～する」ではなく、「～になる」を選択するのは、二字漢語の部分に事態の推移や変動を感じない場合であると述べられている。例えば、「低下」「低迷」は事態の推移や変動が感じられるので「低下する」「低迷する」となるが、「低調」「不振」は事態の推移や変動が感じられず、固定的なので「低調になる」「不振になる」

となるといったような例が挙げられている。つまり、もともと「変化」の意味を備えている語に「～になる」をつけると、屋上屋を架すことになってしまうことである。もともと推移や変動の意味を持っている語を述語に据える場合は、「～する」をつけてその動詞性を引き出すだけでよいと指摘されている。

4.3 非対格自動詞の受身化

庵(2010a)では、中国語母語話者は日本語を習得する際、漢語があるため有利になる部分があるが、漢語の知識が負の転移となって、習得を阻害する場合もあるという問題をもとに、中国語母語話者における漢語サ変動詞のボイスの習得状況について、アンケート調査に基づいて考察されている。被験者は初級、中級、上級1、上級2の学習者(中国語話者)と日本語母語話者である。調査の内容は、(98)のような6つの項目がある。調査文は、(99)の形で示されている。{ }に入れるのに適切なもの全てに○をつけてもらうという形で行われた(複数回答可)。

- (98) a. 非対格自動詞(サ変)
b. 非能格自動詞(サ変)
c. 他動詞(サ変)
d. 非対格自動詞の他動詞形(サ変)
e. 受身(和語、サ変)
d. 使役(和語、サ変)

(99) 彼は自動車事故で女性を{死亡しました/死亡されました/死亡させました}。
(庵 2010a : 106)

庵(2010a)の調査の結果によると、以下のようなことが示唆されている。

- (100) a. 非対格自動詞には「される」をとりにくいタイプと「される」をとりにやすいタイプがある。
b. 非能格自動詞と他動詞ではほぼ一貫して「する」が使われる。
c. 非対格自動詞の他動詞形ではゆれが見られる。
d. 和語とサ変動詞の違いによらず、受身の習得率は高い。
e. 使役ではゆれが見られ、その習得率には、和語>サ変動詞、自動詞>他動詞という傾向性が見られる。

(庵 2010a : 116)

(100) a で取り扱われた非対格自動詞には、「される」をとりにくいタイプは、「一致、発車、退化、停滞、沈黙、失業、上昇、激増、増大、進歩、失望」があり、「される」をとりやすいタイプは、「分裂、減少、進行、拡大、発展、感動、開通」が挙げられている。例えば、(101) のよう場合である。

(101) 「される」をとりにくいタイプ

- a. 外で歩かないと、足が退化 {し/され/させ} ました。
- b. 地球の温度はこの 10 年で 1 度上昇 {し/され/させ} ました。

「される」をとりやすいタイプ

- c. この機械の導入で仕事の量が減少 {し/され/させ}。
- d. この分野は急速に発展 {し/され/させ} ました。

(庵 2010a : 108 より)

(100) b で取り扱われた非能格自動詞は、「前進、握手、解答、賛成、移民、外出、反抗、集合、武装」があり、他動詞は、「吸収、輸入、収集、意味、警戒、反省、出版、操作、支給、購入」がある。例えば、(102) のようである。

(102) 非能格自動詞

- a. 私は 6 時から 2 時間ほど外出 {し/され/させ} ました。
- b. 子供たちが正門の前に集合 {し/され/させ} ています。

他動詞

- a. この布は水をよく吸収 {し/され/させ} ます。
- b. 日本語は中東の産油国から石油を輸入 {し/され/させ} ています。

(庵 2010a : 109-110 より)

また、庵 (2010b) では、(103) のような非対格自動詞の受身化に焦点をあて、超級学習者に対して庵 (2010a) と同じ調査、およびフォローアップインタビューが行われた。その結果、事態の成立に「外的な力」が感じられるか否かが「される」の使用動機となっていることが示唆されている。例えば、フォローアップインタビューの回答によると、(103) a では、「経済的な格差」は何らかの「外的な力」によって拡大するものなので、受身を使う」という理由があった。(103) b では、「パーティーが「自然に」進んだ場合は、「し」、そこに

「外的な力」が感じられれば、「され」を使う」ということである。

(103) a. この10年間、日本では経済的格差が拡大 {し/され/させ} ました。

b. パーティーは順調に進行 {し/され/させ} ました。

(庵 2010b : 178)

さらに、庵 (2010b) では、中国語における動詞の自他の問題が考察されている。「される」をとりにくい10語 (失望、進歩、増大、分裂、進行、発展、減少、拡大、感動、開通) について、中国語コーパス¹⁸における分布 (自動詞、他動詞、名詞、形容詞、副詞) が調べられた。その結果、中国語で他動詞用法が優勢である語 (「拡大」、「進行」、「開通」) における「される」の使用は、中国語の転移によるものと見なされた。一方、「増大、分裂、発展」などでは自動詞用法が (圧倒的に) 優勢であることから、中国語の転移と見なすことはできないと述べられている。

4.4 習得研究の問題点

<1> 従来の対照研究の結果に基づいて習得研究を行うと、対照研究と同じように、誤用の原因が両言語の相違点であるという結論になり、ミスリーディングになる恐れがある。

陳 (2002) では、対照研究 (石・王 1984、中川 1985、1992a、1992b、1995) に基づき、日中同形同義語が日中語の種類のずれによって6タイプに分けられ、それらの類型における習得難易度が考察された。言語間のずれが誤用をもたらすということは否定できないが、前述の通り、言語間のずれがなくても、正しく用いることができるとは考えられない。それは、2.1節で述べたような対照分析時代と誤用分析時代に残された限界と見られる。つまり、正用も誤用も含めて学習者の使用状況を考察した上で、習得上の困難点や母語の働き方を解明すべきである。そうでなければ、学習者の視点からの考察ができず、学習者のための教育対策も提案できないと考えられる。

<2> 母語の中国語の影響であると結論づけられているが、中国語の特徴が正確に把握されていないことがある。

まず、五味ほか (2006) では、中国語話者が日本語の二字漢語動名詞を「変化」の枠組みで捉えるとき、その背後には「變得」「成為」などの中国語が思いうかぶとされている。そ

¹⁸ 北京大学漢語言語学研究中心がオンラインで公開しているコーパス。
(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)

とに中国語の特徴を再考察する必要があると考える。

また、五味ほか（2006）では、「する」という動詞は他動性を表すものであり、自然に生起する事柄には使いにくいという心理が働くために、中国語話者が変化を表すには「する」を使いにくいのだと述べられた。「服を洗ってきれいにする」という例が挙げられたが、その「する」が本動詞の「する」であり、中国語話者が漢語動詞の語尾の「する」と同等に捉えないのだろうと考えられる。それより、漢語知識を持つ中国語話者にとって、漢語の語幹の部分に対してより親近感を覚えるのではないか。例えば、「成熟」「滅亡」「消失」など、中国語には他動性がない語であり、その語尾の「する」を他動性として捉えるわけがないのである。したがって、中国語話者が「*成熟になる」を使い、「成熟する」を使わないといったような現象は、「する」＝他動性」という心理が働くという説明が適切ではないと考えられる。「する」を使わない原因を再考察する必要がある。

さらに、庵（2010a, 2010b）では、中国語話者における漢語動詞のボイスの使用を考察するため、「漢語＋する」「漢語＋される」「漢語＋させる」の3つの形式が設定されている。この3つの形式は、日本語の漢語動詞のボイスの対立として使われる形式であり、日本語には存在する形式なのである。しかし、中国語話者が日本語に存在する形式のみならず、日本語に存在しない形式も創作的に作る可能性が十分ありうる。例えば、

(106) a. *治安が改善になる。

b. *労働力不足の問題が解決になった。

((96) f, g の再掲)

庵（2010b）では、「外的な力」が感じられると「される」を使うと指摘されているが、五味ほか（2006）の誤用例において、(106) のような場合は「ひとりでにそのようになる」とは捉えられず、「外的な力がある」と考えられるが、なぜ「される」を使わず、「になる」を使うのか、という課題が残された。それは、前述した中国語の両用動詞による自動詞文には、自動詞的な意味もあれば、受身の意味もあるという要因が考えられるが、詳しく考察する余地がある。

以上のような先行研究の問題点に基づき、中国語話者による漢語動詞の使用の背景に、母語がどのように働いているのか、正確に捉えられているとは言えない部分があると考えられる。そのため、中国語の視点から、漢語動詞の誤用が起こる原因を再考察する必要がある。

<3>学習者の内面考察が足りない。それは、正しい形式を使っているとしても、正しく理解していない可能性があるためである。

以上述べた五味ほか（2006）と庵（2010b）では、それぞれ「漢語+になる」と「漢語+される」の誤用について考察されているが、日本語では「漢語+する」を使うタイプであると見られる。五味ほか（2006）では「変化」に関わる動詞、庵（2010b）では非対格自動詞と呼ばれているが、同じ種類の自動詞であり、中国語話者が誤用しやすいところだと考えられる。なお、中国語話者の使用において、誤用のみならず、正用形式「漢語+する」も存在すると予想できる。中国語話者が「する」をどのように捉えるかについて、五味ほか（2006）と庵（2010b）の説明が異なっている。即ち「他動性」と「自然に（進んだ）」という全く異なるフォローアップインタビューの答えになっている。もし「自然に～」＝「する」と捉えると、なぜ「する」を使わず、「になる」を使うのか、という課題が残された。つまり、正しい形式を産出するとしても、その理解が正しいかどうかは、疑問が残されている。学習者の内面的な特徴についてさらなる考察が必要であろう。

第3章 本研究の立場とアプローチ

1. 研究の課題

本研究では、漢語動詞における「ナル」的表現に焦点を当てて検討する。即ち、自動詞（非対格自動詞）と他動詞の受身（自動詞の代わりとしての用法、降格受動文に相当）である。また、自他両用動詞は、自動詞形も受身形も使える場合があるが、自動詞形がデフォルト的な用法であると見なすことができる。意味上では、「物事の変化が起こる」という事象を表すものである。

(1) 本研究で対象とする漢語動詞の表現

- ①自動詞（非対格自動詞）
 - a. トンネルが開通した。
 - b. インターネットが普及している。
- ②他動詞の受身形（自動詞の代わり）
 - c. 壁の色が統一されている。
 - d. 情報が公開された。
- ③自他両用動詞（「する」がデフォルト）
 - e. 適用範囲が拡大した。
 - f. 問題が解決した。

なぜ以上の「ナル」的表現に注目するのかと言えば、次の2点が考えられる。

①「ナル」的表現は、日本語では独特な事象の感じ方として、日本語らしい日本語を学習者に教えるのに重要なポイントである（寺村 1976）。中国語には自他両用動詞が多いという点で日本語の自他の対応と異なっているとされているが、中国語の自他両用動詞による自動詞文（「意味上の受身文」）は、「動作主不問」という点で日本語の「ナル表現」と類似した表現があるため、「日本語では自動詞表現が好まれるのに対して、中国語では他動詞表現や受身表現が好まれる」という単純な対立関係ではないと思われる。したがって、中国語における「ナル」的表現、即ち「変化の表現」はどのような構造をしているのか、さらに検討する必要がある。

②中国語と日本語は、自他の対応には形態的・統語的・意味的な相違点があるため、中国語話者にとって、日本語の自動詞、他動詞、受身の選択は習得しにくいとされている。和語動詞については、日本語で自動詞表現を使う場合に、中国語話者が他動詞や受身を選択する

傾向が観察されている（守屋 1994、小林 1996、杉村 2013 など）が、漢語動詞についての習得研究は、管見の限り、五味ほか（2006）と庵（2010a、2010b）しか見当たらなかった。なお、この2つの研究には、中国語の特徴の考察、および中国語話者の内面的考察が足りないため、中国語話者における母語の働き方、中国語話者にとっての習得上の困難点が把握できていないといった課題が残されている。

そこで、本研究では、漢語動詞における「ナル」的表現に注目して、中国語との対応関係を再考し、中国語話者における母語の働き方を解明することで、母語の特徴を十分に考慮した上で、有用な教育対策を提案することを目指す。具体的には、以下の3つの面から、研究の課題を設定する。

1.1 中国語の視点からの漢語動詞との対照分析

本研究での第一の課題は、「変化」に関わる中国語の表現は、どのような特徴があるのかを明らかにすることである。それは、中国語話者が日本語の「ナル」的表現をどのように使うのかは、中国語における「ナル」的表現、即ち「変化」の表現を通して考える可能性があると考えられるためである。その上で、日本語の漢語動詞を見ると、どのような特徴があるのかを明らかにすることで、中国語話者における習得上の問題点が把握することができると考えられる。さらに、具体的には次のような課題を設ける。

①中国語における「変化」とは何か。

②日本語では、動詞で「変化」を表すというのが基本的であるが、中国語では、「変化」を表すには、どのような種類の語を使うのか。形式にとどまらず、意味や事象の捉え方から見ると、どのような特徴があるのか。

③日本語の漢語語彙のうち、中国語の「変化」を表すものにはどのような語があるのか。

④③で特定した語は、日本語ではどのように使うのか、予測として中国語話者がどのように使うのか。

このように、中国語の視点から、「物事の変化が起こる」という事象を表すには、日本語で使われる語を全て抽出し、中国語話者の使用状況を全体的に把握し、その中における問題の所在を絞ることができる。そうすると、品詞や自他のずれのみに注目する従来からの先行研究の盲点を埋めることができると考えられる。

1.2 中国語話者による漢語動詞の使用における母語の働き方

本研究での第二の課題は、中国語話者が日本語の漢語動詞を使用する際に、母語が一体どのように働くのかを明らかにすることである。具体的には、次のような課題を設ける。

①母語の影響は、正の転移と負の転移に分けられるとされているため、その2側面を含め

て全体的に考察すると、どのような分布になるのか。

②中国語話者が日本語の漢語動詞を使用する状況を見ると、中国語における語の種類とはどのような相関性があるのか。

③中国語話者がどのような発想に沿って、漢語動詞を使用する際の言語処理を行うのか。その中に、母語の働きがどのように位置付けられているのか。

④学習環境や学習レベルによって、使用実態と使用意識がどのように変化するのか。

⑤日本語母語話者と中国母語話者における漢語動詞の使用実態の違いは何か。

以上の課題を明らかにすることで、中国語話者による漢語動詞の使用における母語の働き方を正確に把握することができると考えられる。

1.3 漢語動詞の教育における母語知識活用の実行可能性

本研究での第三の課題は、中国語話者が正しく日本語の漢語動詞を使うことができるように、学習の負担を減らし、効率的な学習ができることを考慮し、何を教えるべきかを明らかにすることである。具体的には、次のような課題を設ける。

①現行の教科書や指導法には、どのような問題点があるのか。

②学習者のために考えると、母語知識に基づいた規則が受け入れられやすいと考えられるが、母語知識を活かした指導案は、どのように作成すればいいのか。

③学習者の発達段階別の特徴を考慮にすると、いつ、何を導入するべきなのか。

2. 研究の方法

2.1 母語を活かした日本語教育の観点から

2.1節で述べたように、第二言語習得における母語の作用について広く、深く議論されてきている。「母語を重要視する」、「母語をダブーとする」、「再び母語を重要視する」という道を歩んできたと言えるだろう。なお、母語知識を活かした日本語教育の観点における「母語の重視」は、対照分析仮説時代の「母語の重視」と比べ、対照仮説と検証調査の方法論から、教育の方針までが異なってくる。母語を活かした日本語教育の観点は、学習者の母語に対して、目標言語とのずれのみに注目するのではなく、両言語の対応関係を正確に調べ、負の転移が起こる環境を把握することによって、正の転移を活かした効率的な文法教育を目指すということである（庵 2017）。

本論文では、第二言語の学習者の習得目的を実現するには、母語の知識を活かすことが重要であるという立場をとる。具体的には、以下の3点を主張する。

<1> 基本的な主張

母語の違いによって習得状況が異なり、教育上では別に扱うべきである。また、学習目的

の実現を常に考える必要がある。中間言語で説明できるということが学習目的の実現と等価ではない。

〈2〉 分析方法について

母語の視点から対照研究を行い、形式、意味、認知的な面から分析することによって、習得上の問題点を絞る。言語間の対応は、問題がないことを意味するわけではない。

また、母語の働き方を考慮する際に、正の転移と負の転移を分けるのみならず、母語がどれほど働くのか、それ以外のどのような要素と相互に作用するのか、学習環境や学習レベルによってどのように変容するのかを解明すべきであると考ええる。

〈3〉 教育対策について

文法項目によって母語知識の活かし方が異なると考えられる。基本としては、(2) のとおりである。まず、母語の知識を利用して正用を促進する一方、母語の知識を利用して誤用を抑制することも重要である。つまり、母語でこういう場合は、①目標言語ではAが使える、②目標言語ではAが使えないというふうを示す。その上で、限界がある場合は、目標言語の知識を明示的に教える。

(2) 「文法教育における母語知識の活かし方」

- a. 母語の知識を活かす
 - 正用を促進する
 - 誤用を抑制する
- b. 限界がある場合、目標言語の知識を明示的に教える

2.2 [対照分析—習得調査—教育試案] のアプローチ

以上のような研究課題と立場に基づき、本研究では、①教育のための対照分析、②対照分析の検証と補充のための習得調査、③母語知識に基づいた教育試案の作成、という3つのステップに分けて進めていくことにする。

張(2011)の提唱している「三位一体の習得研究」、即ち「対照研究—誤用観察—検証調査」の研究モデルは、言語教育のための習得研究、母語重視の習得研究では重要な示唆がなされている。このモデルの具体的な手法として、「対照研究」の段階では、言語間の対応するケースと対応しないケースを見つける作業を行う。「誤用観察」の段階では、対応しないケースに着目して学習者コーパス、学習者の作文・レジュメなどを用いて言語運用を観察し、誤用が起きているかどうかを確認する。対応しないケースに着目する理由は、(3)のようにまとめられる。つまり、対応するケースの場合、誤用が観察されても、母語転移とは考えられない。また、正用を観察したとしても、それが母語の正の転移なのか、目標言語の規則を身

につけたことの結果なのか、区別できないことである。一方、対応しないケースの正用の場合、目標言語規則を身につけたと考えられるということである。さらに、「検証調査」は、前の2段階に基づいた仮説を検証するための手法である。

(3) 対応するケース： 誤用→母語転移×

正用→母語転移？目標言語規則を身につけた？

対応しないケース： 正用→目標言語規則を身につけた○

(張 2011 : 42 よりまとめ)

なお、張 (2011) のモデルは、有用な教育対策を提案するための土台となると考えられるが、誤用と正用の観察と、言語間の対応・非対応との関係は、再検討する必要があると思われる。つまり、学習者の使用実態を観察すると、その中に正用と誤用があると考えられる。ただし、正用の原因は、母語の正の転移も目標言語規則の習得も可能であるが、正しく理解できないが、たまたま正しく使えるという可能性もある。誤用の場合は、一般的に理解も正しくないと考えられ、その原因には母語の負の転移も、それ以外の要因もあると考えられる。

(4) 正用：理解が正しい (母語の正の転移、目標言語規則の習得、その他)

理解が正しくない (母語の負の転移、その他)

誤用：理解が正しくない (母語の負の転移、その他)²⁰

つまり、学習者コーパス、学習者の作文などの自然産出のデータに基づいて、正用と誤用を観察する必要があるが、それぞれなぜ正用が起こるのか、なぜ誤用が起こるのか、言語間の対応・非対応にこだわらず、考察する必要がある。一方、正用と誤用の背景にある原因は、表面の産出のみでは捉えられない場合があるため、さらに特定項目と環境を設定し実際の検証調査を行うことも必要である。検証調査も、表面の産出タスクによる調査のみならず、フォローアップインタビュー (FI) などによる内面的な意識も考察する必要がある。

本研究では、特定の母語話者のための言語教育のために、①母語の働き方、②母語の知識に基づいた対策という2点を明確にすることが重要であると考えられる。①の母語の働き方を明らかにするために、対照分析と習得調査を行う。②の対策を提案するため、母語の知識を適切に利用して規則を記述することが必要である。具体的な手法は、次の通りである。

²⁰ 「その他」は、予測できない多様な要因であるが、学習者の独自のルール (大関 2010) と考えられる。

まず、学習目的の実現を考慮に入れて対照研究を行う必要がある。なお、形式のみならず、意味も事象の捉え方も取り入れて分析する必要がある。その分析の結果によって、学習者の母語の視点から、できる限り十分に正用と誤用の起こる環境を予測する。予測できない場合も明示する必要がある。

その次に、対照研究に基づいた予測を検証するため、習得調査を行う。習得調査は、言語表層の産出のみならず、使用の意識、即ちなぜその形式を使うのかも確認する必要がある。また、産出タスクを設定する際に、複数の手法をとって質的な把握と量的な検証に分けて行い、結果の妥当性を確保するために工夫する必要がある。

最後に、対照分析と習得調査の結果に基づき、学習者における習得上の問題点に対して、段階を追って導入内容を考え、母語の知識に基づいた理解しやすい、使いやすい規則を作成することで、効率的な学習効果が期待できる。

以上述べた本研究のアプローチは、図 3-1 に示した通りである。

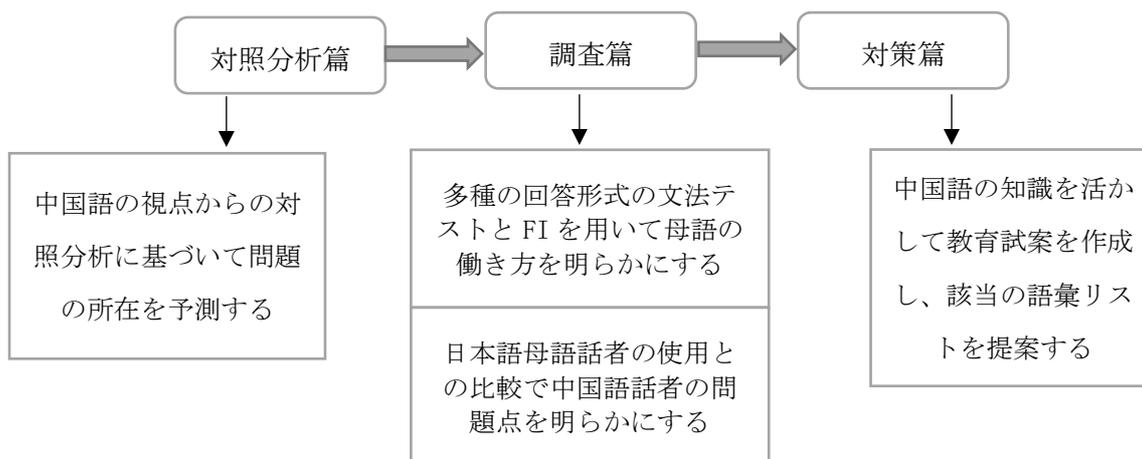


図 3-1 本研究のアプローチ

第二部 対照分析篇

中国語話者における漢語動詞の習得上の問題を明らかにし、教育へ提言するには、まず漢語動詞をめぐる中国語と日本語の対応関係を正確に把握することが重要である。前述の通り、従来の漢語動詞に関する日中対照研究では、学習者の視点から問題が特定されておらず、中国語の特徴や日中語の相違に関する見方が形態レベルに留まっているため、学習者における問題の所在が正確に捉えられず、教育にとって有用な対策が提案できるとは言えない。本論文の第二部「対照分析篇」では、先行研究の問題点に基づき、中国語話者の視点から問題点を特定することを目的にし、漢語動詞と対応する中国語の特徴を、品詞や自他をめぐる形態的特徴だけでなく、意味特徴及び事象の特徴も合わせて分析した上で、漢語動詞の習得上の問題点を明らかにする。具体的に言えば、どのような漢語動詞を使う際に、どのような問題が生じるかを予測することを目指す。

第4章 本研究の対照手法

本章では、まず先行研究の指摘を踏まえながら、意味と形式の関係を中心に考え、本研究の対照手法を提示する。

1. 対照分析の流れ

本研究の対照分析の流れは、以下の図のとおりである。まず、日本語の二字漢語から、中国語では「変化」を表す語、即ち中国語話者が「漢語+になる」、「漢語+される」の形で使われると考えられる語を抽出する。特定の手法としては、「変化」に関わる意味的な要素を考慮しながら、客観的な検証方法（統語的テストフレーム）を用いる。それから、特定された語を、日本語では「になる」、「される」が使えるか否かによって分類する。最後は、二つの形式が使えない場合を中心に、中国語話者の習得の問題点と指導のポイントを考察する。

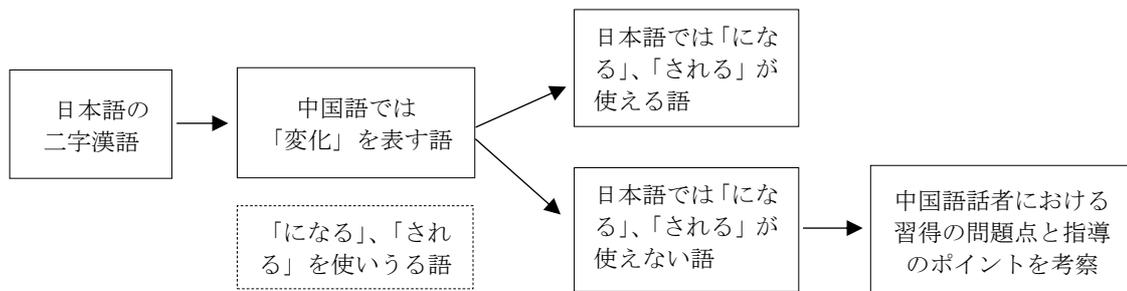


図 4-1 本研究の対照手法

2. 中国語の視点からの問題の特定

本研究の最終目標は、漢語動詞の適切な産出のために、中国語話者にとって、負担が少なく、効率的に学習できる対策を提案することである。教育上では、漢語動詞の品詞や自他の分類に関して、日本語の規則を全て取りあげて説明するという手法も考えられ、教育現場ではよく用いられるだろうと思われる。しかし、規則が多すぎると、覚えるにはかなり負担がかかり、矛盾が生じる恐れもある。したがって、日本語の視点から網羅的な教育をするより、学習者にとって受け入れやすい母語の中国語の知識を活かして、日本語の規則を説明する方が効果的ではないかと考えられる。

漢語の知識を持っている中国語話者にとって、漢語語彙には親近感があり、中国語の発想をもって漢語語彙を考えることがごく自然であろう。そのため、中国語の発想を明らかにし、上手に生かすことができれば、負担が軽減し、効率的に学習できる対策が得られると考えられる。本研究では、まず中国語の視点から、中国語話者による漢語動詞の使用において起こりうる問題を特定することにする。具体的に言えば、2つのステップで問題を特定する。

①日本語の二字漢語の中から、中国語の「変化」を表す語を全て抽出する。それらの語は、中国語の発想では「～になる」「～される」を使いうる語であろうと考えられる。

②それらの語は、日本語では「～になる」「～される」が使えるかどうかを分析する。使えない場合は、問題が生じやすいところだと考えられる。

3. 意味から形式へ

対照研究の手法として、両言語の意味と形式の関係についてどのように扱うのか、明らかにする必要がある。庵 (2019) では、「形式から意味へ」という形式主義的観点と、「意味から形式へ」という機能主義的観点の比較から、対照研究において意味を重要視するべきであると指摘されている。機能主義 (functionalism) の特徴は、「ある意味がどのように形に写像されるか」という観点から捉える一方、形式主義 (formalism) は「ある形がどのように意味に写像されるか」を論じるというような違いは、両者の根本的な違いである (Halliday1994)。対照研究は多くの場合、チョムスキーに代表される形式主義的アプローチで行われており、多くの成果も得られているが、形式化可能なものだけを比較するというドグマに陥りがちであると指摘されている。

本論文の第2章では、漢語動詞の日中対照に関する先行研究を概観し、対照分析がほとんど形式上の対照にとどまっており、学習者の中では意味や事象の捉え方が把握できないという盲点があると述べた。言語教育にとって有用な対照研究は、より意味に重点を置いたものであるべきであると指摘されている。その理由として、学習者が第二言語を通して行おう

とすることは基本的に、自らが第一言語で表せる意味内容を、第二言語で表すことだと考えられるからであると述べられている（庵 2018、2019a）。

本研究では、問題として提起した漢語動詞をめぐり、日本語と中国語を比較する際に、「意味から形式へ」という観点から考える必要があると考えられる。学習者は、漢語動詞の形式を選択する際に、意味を手がかりとする傾向がある。この点について第三部の「調査篇」で詳しく考察する。ここでは、以下の例をもって少し触れておきたい。日本語と中国語の間に、品詞がずれている語がある。例えば、「緊張、充実」などは、日本語では動詞であるが、中国語では形容詞である（石・王 1984 など）。そのため、中国語話者が「緊張になる、充実になる」といったような誤用をするのは、中国語の影響を受けて「緊張する、充実する」などの動詞をナ形容詞として使うからだと考えられる（五味ほか 2006）。しかし、(1) の「増加」は、日本語でも中国語でも動詞であり、品詞のずれがないにも関わらず、本研究の調査では、上級学習者において「増加になった」((1) c) という誤用を多く観察した。

- (1) a. 最近、インドのウイスキーの生産量が増加した。
b. 最近、印度 的 威士忌 产量 增加 了。
最近 インド の ウイスキー 生産量 増加する た
c. *最近、インドのウイスキーの生産量が増加になった。

このような現象を、形式の観点から考えると、中国語の「増加」は (2) a のように程度副詞と使えないため、形容詞ではないので、日本語のナ形容詞として「～になる」を使う可能性がない。また、中国語では「*増加になる」に相当する形式“*变得増加”が非文であるので、中国語話者が日本語でも「*増加になる」という形を使う可能性がないという結果になりがちである。

- (2) a. *产量 很 増加。
生産量 とても 増加する
b. *产量 变得 増加。
生産量 なる 増加する

つまり、形式の観点から対照研究を行うと、学習者の誤用が予測できない場合があるのである。それに対して、中国語の正しい形式は (1) b のように、“増加”という変化動詞の後に完了アスペクト助詞“了”をつけるという形であり、それは「増加した」「多くなった」という変化の意味を表す。したがって、中国語話者がそのような「変化」の意味を、日本語

では「～になる」という形式に具現化するためではないかと考えられる。つまり、この例からみると、意味を出発点にして両言語の形式を分析し、学習者の使用状況及びその要因を考察する必要性が示唆されている。

3.1 意味領域の設定：「変化」

意味から対照研究を行うには、まず意味領域の設定が必要である。庵（2019）では、日本語とヨーロッパ語の移動動詞の意味領域の違いを考察した宮島（1983）を例に、意味領域の設定について説明されている。宮島（1983）では、移動動詞に用いられる「表現手段」の言語差が論じられている。例えば、ドイツ語の“hereingeflogen”と日本語の「飛び込んでくる」を比べると、両者はほぼ同様の語構成を持っているものの、ドイツの“her-”と“ein-”はともに副詞的であるのに対し、日本語は全て動詞的要素から構成されているという違いがある。このように、意味領域の設定及び対照研究における応用は、(3)の通りである。

- (3) 宮島（1983）は、「移動」という現象自体は普遍的である。（中略）しかし、そのありかたは、言語によって、かなりちがう」（宮島 1994：93）という観点から書かれたものだが、これは、上述の「同じ意味が異なる言語間でどのように写像されるか」を考える上で、重要かつ具体的な示唆を与えてくれるものである。

（庵 2019：6）

本研究では、漢語動詞「～する」を「～になる」や「～される」と誤用する現象を問題として提起したため、そのような現象において、共通する意味が表されている。即ち、「変化」というであり、具体的には物事や人の状態変化のことを指す。「変化」は、事象の基本的類型の1つであり、どの言語にでも「変化」を表す形式が存在すると考えられるが、それぞれの表れ方が異なるはずである。このような考え方に基づき、本研究では、「変化」という基本的な意味領域において、中国語における「変化」の表現形式を明らかにした上で、日本語の漢語動詞から、中国語では「変化」が表せる語を研究対象語として抽出し、それぞれ中国語と日本語における特徴を分析することを通して、中国語話者における習得上の問題点を予測するという流れに沿って分析を進める。

3.2 意味と形式の関係の見方

井上（2020）では、対照研究における形式と意味の関係の見方について、以下のように指摘されている。「言語使用は直接観察することができるため、客観的な分析が可能である。しかし、2つの言語の言語使用を「公平に見る」ためには、客観的な分析とは別に、各言語

の表現の形式と意味の関係について深く考える必要があるのである。」

例えば、聞き手に何か提案する場合、中国語では勧誘文“…吧”が用いられるが、日本語では、疑問文「…ないか？」を用いることもあれば、勧誘文「…よう」を用いることもある。疑問文よりも勧誘文のほうが聞き手への働きかけは強い。王（2013）では、「提案場面において、日本語は疑問型の文を多用し、中国語は訴え型の文を多用する」という調査結果により、「日本語よりも中国語のほうが聞き手領域に踏み込んだ発話（聞き手に対する働きかけが強い発話）を用いる」と解釈している。

(4) 咱们 休息 一下 吧。(勧誘文)

私たち 休む 少し よう

(5) a. ちょっと休みませんか? (疑問文)

b. ちょっと休みましょう。(勧誘文)

(井上 2020 : 98)

しかし、井上（2020）では、この解釈は「日本語と中国語の疑問型・訴え型は同じ意味を表す」という見方を暗黙に前提にしているが、実際には、その前提は必ずしも成立しないと指摘されている。なぜなら、(6) と (7) のように、中国語では、“…吧”は、形式的には「…よう」に対応するが、意味的には「…よう」と「…ようか」の両方の意味範囲をカバーするためである。つまり、中国語の提案場面において“…吧”が多用されるのは、「日本語よりも中国語のほうが聞き手領域に踏み込んだ発話を用いる」からではなく、単純に“…吧”の意味範囲が広いからと考えるのが自然である。

(6) (話し手は帰るつもりでおり、聞き手もそのつもりだと思っている)。

a. さあ、帰ろう。

b. 咱们 回去 吧。

私たち 帰る よう

(7) (話し手は帰るつもりでいるが、聞き手の意向はわからない)

a. さあ、帰ろうか。

b. 咱们 回去 吧。

私たち 帰る よう

(井上 2020 : 99-100)

したがって、井上（2020:95）は、意味の対照研究の1つの難しさは、対応する表現の使

い方が異なる場合、①「意味は同じだが語用論的な理由により使い方が違う」のか、あるいは、②「意味が違うから使い方も違う」のかを見極める必要があることであると指摘している。以上の提案場面の例のように、表面的には「ものの考え方」や「コミュニケーションの習慣」の違いのように見えて、実際は「表現の意味が違うから使い方も違う」ということが少なくないと述べられている。

このような意味と形式の関係に関する観点に基づき、本研究との関連でいえば、“N～了”という形式は、「変化」を表すと言えるが、受身の意味が読み取れる場合もある。例えば、(8)の“作品完成了”という文では、①作品が完成した状態になったという変化の意味、②作品が誰かによって完成されたという受身の意味が読み取れる。特に②のように、中国語では有形の形式を伴う受身文にすると不自然な文になるが、「作品」は意味上の受動者であり、受身の意味が読み取れるのである。したがって、中国語話者は、“作品完成了”という文を日本語で言う場合、(9)のように、「作品が完成になった」(変化)、「作品が完成された」(受身)という形式を使う可能性がある。

(8) 作品 完成 了。

作品 完成する た

① 作品 完成 了。 (作品が完成した。)

作品 完成する た

② *作品 被 完成 了 (作品が(誰かによって)完成された。)

作品 される 完成する た

(9) →中国語話者の産出：

①*作品が完成になった。

②?作品が完成された。

つまり、中国語の特徴を分析する際に、①語順、②他の語との結合能力、③意味、を手掛かりとすることが重要である。本研究では、漢語動詞に関する日本語と中国語の異同を検討する際に、日本語には語自体の形態的な特徴(語形変化など)があるのに対して、そういった形態的な特徴がない中国語ではどのように表現されているのかというふうに分けていく。さらに、形態的には捉えられない場合があれば、意味的特徴及び事象の捉え方を考慮に入れて、中国語の特徴を考えることによって、日本語との区別、中国語話者における習得困難点などを検討する。

第5章 中国語における「変化」の表現

本章では、中国語では、どのように「変化」を表すのかを概観する。主として、「変化」を表す語の種類と構文形式、及び「変化」事象の捉え方について分析する。

1. 「変化」に着目する理由

本研究では、中国語話者が「漢語+する」を「漢語+になる」や「漢語+される」と誤用する現象に注目する。その表現意図は、「変化」である。例えば、(1)の通りである。

(1) 5G 手机 普及 了。

5G スマホ 普及する た

(5G のスマホが普及した。)

→ *5G のスマホが普及になった。

*5G のスマホが普及された。

この2種類の誤用が生じる場合、中国語では同じ形式“～了”を使う。しかし、「変化」と「受身」を表す有形の標識が付いていない。つまり、“～了”形は、「変化」と「受身」の意味を表すことができると言える。そのため、①どのような場合に「変化」の生起が感じられるか、②どのような場合に「変化」の生起に外力が関与すると感じられるか、という2点について、中国語ではどのように言語化するかを明らかにする必要がある。

①については、「変化前」と「変化後」の状態の違いを、どのように言語化するかを明らかにする必要がある。刘勋宁(2002)では、“了”が付いた文は、「すでに知っている元の状況があり、現在それと違った状況がある」という背景が存在し、このような「変化」の理解は、前後の状態の違いによるものであると述べられている。それでは、“～了”の形式は、どのような語が入ると「変化」を表すのかを明らかにする必要がある。

②については、外的な原因による「変化」は、どのように言語化するかを明らかにする必要がある。1つは、「N+V+了」において、意味上では、NとVが「対象と動作」である場合、形式上では、他動詞文の「V+N」が成立する場合が考えられる。例えば、(2)のように、“5G 手机”と“普及”は「対象と動作」の意味関係であり、(2)bの他動詞文も成立するため、5G スマホの普及は人の動作、即ち外的な原因によるものである。もう1つは、NとVが「対象と動作」ではないが、文脈全体から見れば、外的な原因が捉えられる。つまり、主述の意味関係によって主体変化なのか、客体変化なのかを考えるのみならず、文全体の意味も考える必要がある。例えば、(3)のように、「空気が乾燥する」原因は、「クーラーを使いすぎる」という事柄の影響であり、それも外的な原因と考えられる。

(2) a. 5G 手机 普及 了。

5G スマホ 普及する た

(5G のスマホが普及した。)

b. 他 普及 了 5G 手机。

彼 普及する た 5G スマホ

(彼は 5G のスマホを普及させた。)

(3) 老 开 空调, 空气 变得 干燥 了。

すぎる つける クーラー 空気 変わる 乾燥する た

(クーラーを使いすぎると、空気が乾燥する。)

2. 「変化」とは

2.1 本研究における「変化」

本研究で言う「変化」は、時間の推移に沿って物事や人の状態が変化することを指す。物事の状態変化は、形、色、数量、温度、強度、品質、抽象的な性質などの変化であり、人の状態変化は、生理的、心理的状态などの変化である。「変化」は、瞬間的に起こる場合もあれば、一定の時間を経て起こる場合もある。例えば、(4) のような場合は、本研究では「変化」と見なす。

(4) a. 杯子 破 了。

コップ 割れる た

(コップが割れた/コップが割れている)

b. 脸 红 了。

顔 赤い (なる) た

(顔が赤くなった/顔が赤くなっている)

c. 咖啡 凉 了。

コーヒー 冷める た

(コーヒーが冷めた/コーヒーが冷めている)

d. 产量 减少 了。

生産量 減少する た

(生産量が減少した/生産量が減少している)

e. 教育 普及 了。

教育 普及する た

(教育が普及した/教育が普及している)

d. 铁路 开通 了。

铁道 开通する た

(鉄道が開通した/鉄道が開通している)

f. 小王 病 了。

王先生 病気(になる) た

(王先生は病気になった)

g. 他 后悔 了。

彼 後悔する た

(彼は後悔した)

2.2 「状態の変化」と「状況の変化」

以上の(4)のように、中国語では、「変化主体+変化を表す述語+完了アスペクト助詞“了”」という形で「変化」を表すのが一般的である。変化主体は物も人もあり、変化を表す述語は、動詞も形容詞もある。助詞“了”は、アスペクトマーカの一つであり、一般的には2つの機能があるとされている。“了₁”は、動詞・形容詞の後におかれ(必ずしも文末ではない)、動作、変化、状態の実現を表し、“了₂”は、文末におかれ、変化や変化に気づくことを表す(荒川 2003)。ただ、ここで言う“了₁”で表す「変化」の実現と“了₂”の「変化」²¹とは、同じことを指しているとは言えない。

例えば、三宅(2010)によると、(5)では、助詞“了”には2つの機能があり、1つは「来る」という動作の実現済みが述べられ、もう1つは「王先生がまだ来ていなかった状態」から、「王先生がやってきた状態」という新しい状態へ変化したということが表されている。また、(6)のように、了₂の「状態の変化」のみが表される場合もあり、「近接未来の表現」と呼ばれている。“快要”は「もうすぐ、じきに」という意味を表す副詞であり、“了”は新たな状況が発生したこと、新たな状況に変化したことを表す。つまり、少し以前だったら王先生がもうすぐ来るという状況ではなかったのが、時間が近づいてきて、もうすぐ来るという状況モードに“了”「なった、既になっている」と述べている。

(5) 小王 来 了₁₊₂。(王先生が来た/王先生が来ている)

王先生 来る た

了₁: 動作の実現済み・完了

²¹ 井上(2019: 146)によると、“了₁”は「変化完了」を表す動詞接辞であり、“了₂”は「場面移行」を表す文末助詞である。

了₂ : 状態の変化

[王さんがまだ来ていなかった状態] → [王さんがやってきた状態]

(6) 小王 快要 来 了₂。(王さんがもうすぐ来る)

王さん もうすぐ 来る た

了₂ : 状態の変化

[もうすぐ来るという状況ではない] → [もうすぐ来るという状況]

(三宅 2010 : 194 より)

つまり、(5) と (6) を見ると、“了₂”の機能は「状態の変化」というより、「状況の変化」というべきであろう。ある出来事の意味的特徴より、言語行為の機能上のことを指すと思われる。そのため、“了₂”の機能は、「新状況」(刘勳宁 2002)、「場面移行」(井上 2019)、「話し手認知環境の更新」(杉村 2006) などとも呼ばれている。つまり、言語行為の機能として、聞き手に新状況の出現を伝達することである。例えば、(7) の場合も、“了₂”のみが表されており、実現済み(完了)が表されていない(荒川 2003)。

(7) a. 下雨 了₂!

雨 了₂

(雨だ)

b. 东东, 洗洗 手, 吃 饭 了₂。

人名 洗って 手 食べる ご飯 了₂

(トントン、手を洗って、ご飯だよ)

(荒川 2003 : 131 より)

したがって、本研究における「変化」は、“了₂”の「新状況の出現を伝達する」という機能ではなく、(8) b の“杯子破了”(コップが割れた)のように、事象そのものが「変化」であるということを指す。例えば、(8) a の「王さんが来た」という動作事象では、王さん自身の性質や状態が変化していないのに対して、(6) b の「コップが割れた」という変化事象では、コップ自身の形が変化しているというような区別がついている。ただ、発話機能として、(8) a と (8) b は、ともに「新状況の出現」の伝達が表されている。(9) の図にしてみると、確かにいずれも「変化点」が存在するにもかかわらず、「来る」はあくまでも動作のことであるため、本研究でいう物事や人の状態変化とは実質的に異なっている。

(8) a. 小王 来 了。(①動作の実現済み・完了 + ②新状況の出現)

王先生 来る た

(王先生が来た・来ている)

b. 杯子 破 了。(①変化の実現済み・完了 + ②新状況の出現)

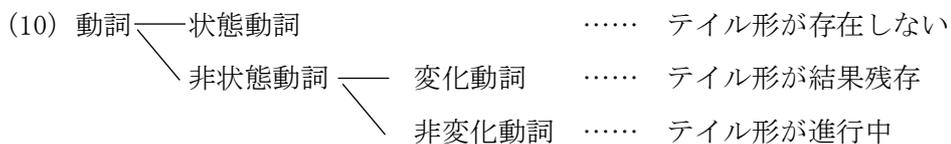
コップ 割れる た

(コップが割れた・割れている)

(9)



なお、日本語では、「来る」のような移動動詞（位置変化動詞）は「変化動詞」とみなされることがある。例えば、庵（2019b）では、動詞のタイプとテイル形の意味に関して、次のように分類されている²²。



(庵 2019b : 192)

(11) 変化動詞と非変化動詞の区別

a. 「期間を表す語+ \emptyset 」が言えず、「期間を表す+で」が言える。

→変化動詞

b. 「期間を表す語+ \emptyset 」が言えて、「期間を表す+で」が言えない。

→非変化動詞

(12) a. アイスクリームは { *10分 \emptyset / ○10分で } 溶けた。→変化動詞

b. 太郎は { ○1時間 \emptyset / ? 1時間で } 走った。→非変化動詞

²² (10) の分類は、奥田（1978）の分類を継承し、庵（2019b）が用語を改めたものである。奥田（1978）は、金田一（1950）の動詞四分類（状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第4種の動詞）を批判し、テイル形の基本的意味が「持続」であり、テイル形が動作の持続を表す動詞は、主体の動作を表す動詞（動作動詞）であり、テイル形が変化の結果の持続を表す動詞は、主体の変化を表す動詞（変化動詞）であると分類した。

このように考えると、「太郎は {*10分_○/○10分_○} 来た」というように、「来る」は(11) aの条件を満たし、変化動詞である。つまり、移動動詞（位置変化動詞）は日本語では、「変化」を表すと見なされる。例えば(9)の場合は、日本語では、両方とも変化動詞であるとされているが、中国語では“小王来了”（王さんが来た）が「変化」を表すとしたら、「状況の変化」（新状況の出現）と言えるが、“杯子破了”のような「状態の変化」を表すとは言えない。

3. 中国語の「変化」を表す語

3.1 「変化」を表す動詞

郭锐(1997)²³では、(13)のように中国語の動詞を「状態動詞」、「動作動詞」、「変化動詞」の3種類と分類している。(13)のVa、Vc4、Veは、それぞれの典型的なタイプである。他の7種類は、この3類の間の過渡的なものである。

(13) (i) 状態動詞 (state verbs)

Va (「是／～だ」、「等于／等しい」)

Vb (「认识／知る」、「知道／知る」)

Vc1 (「喜欢／好きだ」、「姓／～という」)

Vc2 (「有／有る」、「信任／信任する」)

(ii) 動作動詞 (action verbs)

Vc3 (「坐／坐る」、「病／病気になる」)

Vc4 (「工作／働く」、「敲／叩く」)

Vc5 (「吃／食べる」、「看／見る」)

(iii) 変化動詞 (action verbs)

Vd1 (「消失／消える」、「增加／増加する」)

Vd2 (「离开／離れる」、「实现／実現する」)

Ve (「断／切れる」、「到达／着く」)

Va~Veは、郭锐(1993)による中国語の動詞の過程構造の分類である。その過程は「起点、終点と継続部分の3つの要素を含み、3要素の有無と強弱が動詞の過程構造の違いを形成している。Vaはこの3要素がない「無限構造」であり、Vbは起点と継続部分がある「前

²³ 于康・張勤編(2000)の和訳版を参照した。

限構造」であり、Vc は3つの要素がある「双方構造」であり、Vd は継続部分と終点がある「後限構造」であり、V3 は終点しかない「点構造」である。さらに、完成相「動詞+“了”」（～た）、持続相「動詞+“着”」（～ている）／「動詞+期間」（期間～）²⁴、進行相は「“正在/在”+動詞」（～ている）、経験相「動詞+“过”」（～たことがある）の有無によって細分されている。

郭锐（1993）によると、(13) の3種の動詞のアスペクトの特徴は、以下の通りである。

「状態動詞」は、アスペクトの特徴が弱く、ほとんど以上の完成相と未完成相の形が使われない。完成相の「動詞+“了”」を使う場合があるが、完成を表すのではなく、その状態の開始だけを表すのである。例えば、“认识了”（知った）。

「動作動詞」は、アスペクトの範疇が広く、完成相も未完成相も使われている。ただ、持続相は、“坐”（坐る）などの静的動作と相性がよいのに対して、“吃”（食べる）などの動的動作と使うことが少ない。

「変化動詞」は、一般的には完成相が使われ、「変化」の完成を表す。ただ、“消失”（消える）、“离开”（離れる）などは、場合によって「変わりつつある」というような持続の過程があり、持続相や進行相を使うことがある。一方、“断”（切れる）、“到达”（着く）などは、持続の過程がなく、持続相や進行相を使わない。

なお、郭锐（1997）で挙げられている「変化動詞」には、前に述べた本研究で言う「状態の変化」を表さない語がある。例えば、(14) の“来”（来る）、“毕业”（卒業する）、“离开”（離れる）のような語は、(12) の“破”（割れる）、“塌”（倒れる）、“病”（病気になる）などのような語と比べると、別に扱うべきであると考えられる。

(14) a. 小王 来 了。

王さん 来る た

（王さんが来た）

b. 他 毕业 了。

彼 卒業する た

（彼は卒業した）

c. 他们 离开 了。

彼ら 離れる た

（彼らは（ここを）離れた／離れている）

²⁴ 例えば、“跑两个小时”（2時間走る）。

(15) a. 气球 破 了。

風船 割れる た

(風船が割れた／割れている)

b. 房子 塌 了。

家 倒れる た

(家が倒れた／倒れている)²⁵

c. 小王 病 了。

王さん 病気になる た

(王さんは病気になった／病気になっている)

(14) と (15) は、いずれも (13) の「変化動詞」に属すると言えるが、意味的には (14) は動作行為を表し、(15) は状態の変化を表すと区別されている。また、以下の用法においても、両者の区別が見られる。

<1> 「変化」は「ゼロ形態」で文中に使えない。

郭锐 (1997) によると、中国語は現実の状況を叙述することに関して、「了/～た」、「着/～ている」「正在/ちょうど～ている」などの時間的成分を加えなければならない。時間的成分を伴わない場合、①文が成立しない場合もあれば、②非現実の状況(命令願望、意志願望、計画、習慣、法則など)を表す場合もある。

(16) ①「変化」を表す動詞+φ：不成立

②「動作」を表す動詞+φ：命令願望、意志願望、計画、習慣、法則など

「変化」は、常に完了の姿で現れるということである。実現済みという姿でなければ、その存在が捉えられないのである(木村 1997)。それに対して、「動作」はゼロ形態を使うことができる。例えば、(17) の文は、動詞は「ゼロ形態」のまま使える。一方、(18) の文は、“了”が抜けたら不自然な文になる。副詞“要”(すぐ)を入れて事態がそうなるだろうという意味を表すことになる。したがって、(17) の「来る」「卒業する」「離れる」は動作を表す動詞であり、(18) の“破”“塌”“病”は「変化」を表す動詞である。

²⁵ 具体的に言えば、“塌”は「崩れて倒れる」というイメージである。

(17) a. 小王 来 。

王さん 来る

(王さんは来るよ)

b. 他 明年 毕业 。

彼 来年 卒業する

(彼は来年卒業する)

c. 他们 一会儿 离开 。

彼ら しばらくしたら 離れる

(彼らはしばらくしたら (ここを) 離れる)

(18) a. *气球 一会儿 破 → 气球 要 破 了。

風船 しばらくしたら 割れる

(風船がしばらくしたら割れる)

風船 すぐ 割れる た

(風船がすぐ割れる)

b. *房子 明天 塌。

家 明日 倒れる

(家が明日倒れる)

→ 房子 要 塌 了。

家 すぐ 倒れる た

(家がすぐ倒れる)

c. *小王 病

王さん 病気になる

(王さんが病気になる)

→ 小王 这下 真 要 病 了

王さん これで 本当に すぐ 病気になる た

(王さんがこれで本当に病気になる)

〈2〉「変化」の否定を表す場合、“不”が使えない

「日本語では、動作も変化も「V-(a)nai」で否定を表すことができるが、中国語では、“不”（～しない／～ではない）と“没”（～していない）が使い分けられる。井上・黄（2007）によると、“不”は状態の否定、あるいは習慣や未来の動作の否定を表すのに対して、“没”は、已然の動作や変化の否定を表す。つまり、“変化”は、否定の場合は“没”しか使えないということである。

(19) 不（～ではない／～しない）：状態、動作（習慣、未来）の否定

没（～していない）：動作（已然）、変化（已然）の否定

例えば、(20) a のように、「来る」は“不”も“没”も使え、“不”は未来の動作の否定、“没”は已然の動作の否定を表す。一方、(20) b のように、「割れる」は“不”が使えず、

“没”を用いて変化が起こっていないことを表す。「変化」が未来に起こらないことを表す際には、(21)のように“会”(だろう)をつける必要がある。ただ、(22)のように、「変化」が恒常的な事柄を指す場合、“不”を使うことができる(井上・黄 2007)。

- (20) a. 小王 不 来。 / 小王 没 来。
 王先生 ない 来る 王先生 ない 来る
 (王先生は来ない) (王先生はまだ来ていない)
- b. *气球 不 破。 / 气球 没 破。
 風船 ない 割れる 風船 ない 割れる
 (風船は割れない) (風船は割れていない)
- (21) 气球 不 会 破。
 風船 ない だろう 割れる
 (風船は割れない)
- (22) 这个 湖 不 结 冰。(恒常的な変化)
 この 湖 ない 張る 氷
 (この湖は氷が張らない)

ここでまとめると、中国語の「変化動詞」は、文法的な特徴でいえば、一般的には進行相(“在”)、持続相(“着” / “期間”)が使えない。また、一般的には完成相の“了”がついた形で現れる。なお、この意味での「変化動詞」は、さらに語彙的な意味をみると、「動き、動作、移動」に偏るものと、「状態の変化」に偏るものとに分けられる。この2種類を区別するには、「ゼロ形態」で文が成立するかどうか、否定を表す場合に“不”が使えるかどうかの2点で判断することができる。一般的には、「ゼロ形態」が使えず、否定を表す際に、“不”が使えないのは「状態の変化」を表す「変化動詞」であると考えられる。

(23) 「変化動詞」の特徴

- ①文法的な特徴： a. 持続相：“在”、“着”、“期間”などが使えない
 b. 完成相：“了”がついた形で現れる
- ②語彙的な意味： a. 動き、動作：来，去，到，毕业，结婚
 b. 状態変化： 断，坏，塌，倒，裂

→②の a と b の区別：

- ア. 「ゼロ形態」が使えない、
 イ. “不”が使えず、“没”しか使えない
- b 状態変化

- (24) a. 小王 来。 / 小王 明天 来。
 王さん 来る 王さん 明日 来る
 (王さんは来るよ) (王さんは明日来るよ)
- b. *气球 破。 / *气球 等会儿 破。
 風船 割れる 風船 しばらくしたら 割れる
 (風船が割れるよ) (風船がしばらくしたら割れるよ)

- (25) a. 小王 不 来。 / 小王 没 来。
 王さん ない 来る 王さん ない 来る
 (王さんは来ない) (王さんはまだ来ていない)
- b. *气球 不 破。 / 气球 没 破。
 風船 ない 割れる 風船 ない 割れる
 (風船は割れない) (風船は割れていない)

また、直感的に判断する方法として、意味的に考えると、“NP～了”の形を使い、しかも“NP 怎么样了？”(「NP はどうなったの」)の回答文になるものは、物事や人の状態の変化を表す語であると考えられる。例えば、(26)の通りである。

- (26) “NP 怎么样了？”「NP はどうなったの」の回答文になるか否か。
 -- 小王怎么样了？(王さんはどうなったの)
 -- a. *小王来了。(王さんは来た・来ている) → 「動作」
 b. 小王病了。(王さんは病気になった) → 「変化」

3.2 「変化」を表す形容詞

中国語では、形容詞と動詞は形態的区別がなく、形容詞が動詞の下位分類に属するとされている(沈家煊 2009)。形容詞と動詞の間に、共通した用法が多いと思われるが、形容詞用法がある語を特定するには、程度副詞“很”(とても)などと共起するかどうかという基準で判断することができる(张斌 2010)。つまり、“了”は、形容詞と動詞の共通した用法であるが、“很”は形容詞のみの用法であると考えられる。²⁶

²⁶ 中国語には“很”が使える動詞もある。例えば、“赞成”(賛成する)“同情”(同情する)などただし、“很”と共起すると同時に目的語をとり、即ち[“很”+V+O]という形が使える。本研

(27) [程度副詞“很”による動詞と形容詞の区別]

a. 空气 很 干燥。

空氣 とても 乾燥する

(空氣がとても乾燥している)

b. 手术 很 成功。

手術 とても 成功する

(手術がとても成功している)

d. *价格 很 下降。

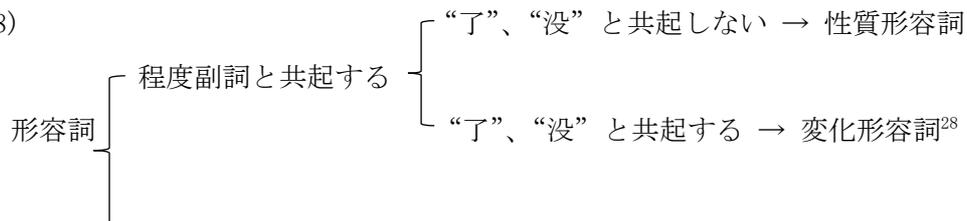
価格 とても 下降する

e. *铁路 很 开通。

鐵道 とても 開通する

中国語の形容詞は、一般的に「性質形容詞」と「状態形容詞」の2種類に分けられている(朱德熙 1982)。「性質形容詞」は、“好”(良い)、“远”(遠い)などのように、性質や状態を表し、程度副詞と共起するものである。「状態形容詞」は、“雪白”(雪のように白い)、“通红”(真っ赤)などのように、「性質形容詞」に程度を表す成分が付いて構成されているものであり、程度副詞と共起しない。「変化」を表す形容詞については、张国宪(1995、1998、2000)で詳しく論じられており、性質形容詞の一部は「変化」を表す機能があり、「変化形容詞」と呼ばれている²⁷。「変化形容詞」は、アスペクト助詞“了”などや、否定副詞“没”と共起できるという特徴がある。

(28)



究では、このタイプの語を形容詞と見なさない。

²⁷ 张国宪(1995)では、「静態形容詞」と「動態形容詞」と呼ばれている。张国宪(1998, 2000)では、「性質形容詞」と「変化形容詞」と呼ばれている。

²⁸ ここでの形容詞の分類は、日本語との対応で言えば、中国語の「変化形容詞」は、日本語では「変化動詞」であるものが多いと言える。たとえば、张国宪(1995)で挙げられた“脏”(汚れる)、“湿”(湿る)など、“涼”(冷える)、“緩和”(緩和する)など。また、一部は日本語では形容詞であり、例えば、“红”(赤い)、“高”(高い)、“多”(多い)など。他の性質形容詞と状態形容詞は、一般的には日本語では形容詞であると言える。

程度副詞と共起しない → 状態形容詞

ここでは、「変化形容詞」と対立する性質形容詞と状態形容詞を「非変化形容詞」と呼ぶことにする。非変化形容詞は、変化を表す際に、さらに変化を表す動詞“変（得）”（なる）²⁹、副詞“越来越”（ますます）、“渐渐”（だんだん）などを付け加える必要がある（张国宪 1998）。例えば、(29) は変化形容詞であり、(30) は非変化形容詞である。

(29) 「変化形容詞」

a. 时机 成熟 了。

時機 成熟する た

(時機が成熟した／成熟している)

b. 手术 成功 了。

手術 成功する た

(手術が成功した／成功している)

c. 生活 充实 了。

彼 後悔する た

(生活が充実した／充実している)

(30) 「非変化形容詞」

a. 空气 变得 干燥了。

空氣 なる 乾燥する

(空氣が乾燥した／乾燥している)

b. 她 越来越 漂亮 了。

彼女 ますます きれい た

(彼女はますますきれいになった)

“形容詞＋了”という形において、変化を表す機能を果たすのは形容詞であり、“了”は完成相のマーカであり、変化の実現済みを表す（张国宪 1995、木村 1997）。そして、“形容詞＋了”は、全体的に「変化の実現→状態の持続」という意味を表す（金立鑫 2002）。例

²⁹ “变”は「なる／変わる／変化する」に対応する。“得”は前の動詞（あるいは形容詞）と、後の様態補語を結びつけるマークであり、前の動詞（あるいは形容詞）の表す事象やその事象が起こった結果を描写する際に使う（刘月华等（2001：596）を参照）。例えば、“变得干燥”＝「変化して乾燥の状態になる」。

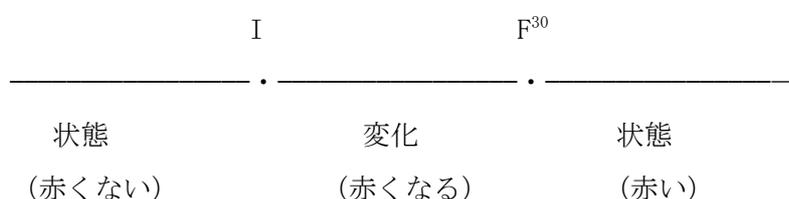
えば、(31)の「顔が赤くなった」を表す場合、[“紅”(赤い) + “了”(～た)]という形を使う。このような変化のイメージは(32)のように、「赤くなる」という変化が実現した後、「赤い」という状態に入るということを表す。

(31) 姑娘 的 脸 红 了。

女の子 の 顔 赤い(なる) た

((その) 女の子の顔が赤くなった)

(32)



また、“形容詞+了”は、主体に自ら状態の変化が生じるという性質がある場合に使えるという特徴があり、「自変性」と呼ばれている(张国宪 1995)。つまり、何の外力をかけなくても、時間の経過に沿って変化が生じるという場合である。「自変性」を持つ変化形容詞は(33)の2つの構文形式に入るのに対して、「自変性」を持たない形容詞はS2にしか入らない(张国宪 1995)。例えば、(34) aの“旧”(古い)は、外力をかけずに家具が自ら古くなるため、“旧+了”も使えるし、「変化」を表す動詞“变”(なる)をつけて“变+旧+了”の形も使える。一方、(34) bの“新”(新しい)は、「自変性」があるとは言えないため、「変化」を表す際に、“变”(なる)のような付加成分が求められる。

(33) S1 : NP+__+了

S2 : NP+变+__+了

(34) a. 家具 旧 了。 / 家具 变 旧 了。

家具 古い(なる) た

家具 なる 古い た

(家具が古くなった)

(家具は古くなった)

b. *家具 新 了。 / 家具 变 新 了。

家具 新しい(なる) た

家具 なる 新しい た

(家具が新しくなった)

(家具は新しくなった)

³⁰ I (inception) は起点を表し、F (finish) は終点を表す。

以上述べた変化形容詞は、“形容詞+了”という形が使えることから、意味も用法も、変化動詞と類似していると言える。それは、意味上では動的な変化を表し、用法上ではアスペクト助詞“了”と共起して「変化」の実現済みを表すためである（木村 1997）。したがって、中国語話者は、「成功」、「成熟」などの変化形容詞が、動詞なのか形容詞なのかを区別しないことがあると思われる。このような中国語の変化形容詞は、日本語の動詞に当たるものが多いが、中国語では形容詞と見なされるのは、程度副詞と共起するという点によると考えられる。

3.3 主体の変化と客体の変化

「NP～了」という形が「変化」を表す場合、NP が主体なのか、客体なのかという意味的な区別がある。例えば、(35)では、“小王”（王さん）は“病了”（病気になる）の主体であり、“关系”（関係）は“成熟”（成熟する）の主体である。一方、(36)では、“杯子”（コップ）と“作品”（作品）は変化の主体とも言えるが、意味上では“打破”（割る）、“完成”（完成させる）の客体でもある。なぜなら、(36)の文において、主語と述語の位置を交換すれば、能動文となるためである。つまり、(35)の場合は、自動詞的用法のみであるが、(36)の場合は、自他両用動詞に相当すると言える。

- (35) a. 小王 病 了。 → * S ³¹ 病 了 小王。
 王さん 病気 (になる) た S 病気 (になる) た 王さん
 (王さんは病気になった)
- b. 两国 关系 成熟 了。 → * S 成熟 了 两国 关系。
 两国 関係 成熟する た S 成熟する た 两国 関係
 (両国の関係が成熟した/している)
- (36) a. 杯子 打破 了。 → 他 打破 了 杯子。
 コップ 割れる た 彼 割る た コップ
 (コップが割れた) (彼がコップを割った)
- b. 作品 完成 了。 → 小王 完成 了 作品。

³¹ ここの「S」は任意の主語を表す。主体変化動詞は、主語と述語の位置交換ができず、他動詞文が作れないため、他動詞文の主語となる動作主や原因などが存在しない。ここでは、任意の主語「S」を作っても、他動詞文が成り立たないことを示す。以下も同様である。

作品	完成する	た	王さん	完成する	た	作品
	(作品が完成した)		(王さんが作品を完成させた)			

工藤真由美 (1995) では、①〈動作〉か〈変化〉かという意味特徴、②その動作、変化は参加者のだれに属するのか、つまりは〈主体〉なのか、〈客体〉なのかという意味特徴、の2つの観点から、日本語の動詞が〈主体動作・客体変化動詞〉、〈主体動作動詞〉、〈主体変化動詞〉に分類されている。この分類は、奥田靖雄 (1977) による動詞の語彙的な意味 (カテゴリーカルな意味) の一般化に基づいたものである。具体的には、以下の通りである。

(37) a <主体動作・客体変化動詞>

主体=はたらきかけ手の動作と客体=受け手の変化をとらえる動詞 (他動詞)
切る、折る、開ける、壊す、建てるなど

b <主体動作動詞>

- ①主体=はたらきかけ手の動作と客体=受け手の動作をとらえる動詞 (他動詞)
動かす、回す、鳴らす、飛ばす、流すなど
- ②主体=はたらきかけ手の動作のみをとらえ客体の変化をとらえない動詞 (他動詞)
叩く、蹴る、触る、押す、食べるなど
- ③主体=ひきおこし手の動作をとらえる動詞 (自動詞)
動く、回る、鳴る、飛ぶ、流れるなど

c <主体変化動詞>

主体=ひきおこし手の変化をとらえる動詞 (自動詞)
切れる、折れる、開く、壊れる、建つなど

このような分類に倣って、(35) と (36) の中国語の例を見ると、(35) の“病” (病気になる) と“成熟” (成熟する) は主体変化動詞 (あるいは形容詞) であり、(36) の打破” (割る)、“完成” (完成させる) は主体変化動詞でもあり、主体動作・客体変化動詞であると考えられる。つまり、主体変化動詞と主体動作・客体変化動詞は、日本語では有対自動詞・他動詞の2語となっているが、中国語では同一の動詞であり、自他の対応が主述の語順転換によって実現されるというわけである。

3.3.1 主体変化形容詞と客体変化形容詞

変化形容詞について、主体の変化なのか、客体の変化なのかを考えると、2種類に分けられる。つまり、中国語の形容詞は、目的語をとるか否かによって分類されるということであ

る。つまり、以上述べた「NP+形容詞+了」の文において、「形容詞+NP+了」というふう
に語順を変えると、「SVO」語順の中国語では、NP が主語から目的語の位置になるというこ
とである。本稿では、「形容詞+NP+了」という形式を取らない形容詞を主体変化形容詞と
呼び、「形容詞+NP+了」という形式を取る形容詞を客体変化形容詞と呼ぶこととする³²。

(38) 「主体変化形容詞」

- a. 头脑 混乱 了。 → * S 混乱 了 头脑
頭 混乱する た S 混乱する た 頭
 (頭が混乱した・混乱している)
- b. 时机 成熟 了。 → * S 成熟 了 时机
時機 成熟する た S 成熟する た 時機
 (時機が成熟した・成熟している) (*機運を成熟する)

(39) 「客体変化形容詞」

- a. 教材 内容 充实 了。 → 他 充实 了 教材 内容。
教材 内容 充実する た 彼 充実する た 教材 内容
 (教材の内容が充実した) (彼が教材の内容を充実させた)
- b. 幼儿教育 普及 了。 → 他 普及 了 幼儿教育。
幼児教育 普及する た 彼 普及する た 幼児教育
 (幼児教育が普及した) (彼が幼児教育を普及させた)

ただ、李泉 (1994) によると、中国語の「形容詞+目的語」という構造において、働きか
けの受け手、主体自身の一部 (再帰)、認識や感情の内容、存在や出現・消失の主体など、
様々な意味を表すものがある。その中で最も多いのは働きかけの受け手を表す場合であり、
李泉 (1994) の調査によると、目的語を取る 170 語の形容詞において 113 語があり、66%を
占めるということである。例えば、(40) のように、“繁荣” (繁栄する)、“统一” (統一する)
“明确” (明確だ) は、日本語では他動詞文にするとそれぞれ異なる形を使うのに対して、
中国語ではそのまま目的語をとることができる。“了” は形容詞と目的語の間にあり、動作
の完成済みを表す。

(40) 繁荣 了 市场 / 统一 了 思想 / 明确 了 任务

³² 辞書では、「形容詞+NP+了」の用法は、「動詞」とされる場合がある。

繁栄する た 市場 統一する た 思想 明確 た 任務
 (市場を繁栄させた) (思想を統一した) (任務を明確にした)

本研究で言う「客体変化形容詞」は、「形容詞+NP+了」において、NP が働きかけの受け手を表す場合を指す。この場合、NP の性質や状態が人の意図的な働きかけを受けた結果であるため、それとともに形容詞が主体動作・客体変化動詞の機能を果たすことになるのである。例えば、(41) と (42) の対立によって、NP が形容詞の客体と捉えられることがわかる。

- | | |
|---|---|
| <p>(41) a. 敌人 孤立 了。
 敵 孤立する た
 (敵が孤立した)</p> <p>b. 文体 統一 了。
 文体 統一する た
 (文体が統一された)</p> <p>c. 经济 (越来越) 繁荣 了。
 经济 (ますます) 繁荣する た
 (経済が繁荣した)</p> <p>d. 内容 (变得) 丰富 了。
 内容 (なる) 豊富だ た
 (内容が豊富になった)</p> | <p>(42) a. 我们 孤立 了 敌人。
 我々 孤立する た 敵
 (我々が敵を孤立させた)</p> <p>b. 他们 统一 了 文体。
 彼ら 統一する た 文体
 (彼らが文体を統一した)</p> <p>c. 假日文化 繁荣 了 经济。
 祝日文化 繁荣する た 経済
 (祝日文化が経済を繁栄させた)</p> <p>d. 他 丰富 了 内容。
 彼 豊富だ た 内容
 (彼が内容を豊富にした)</p> |
|---|---|

(41) と (42) のような場合、日本語では、語形の変化と格助詞の交替を伴うが、中国語では語順の変化のみを伴う。このような相違点は、両言語の自他のずれであると指摘されている (石・王 1983、中川正之 2005 など)。例えば、中川正之 (2005) では指摘された中国語話者の作文には (43) のような間違いが非常に多いのは、この種の形容詞は中国語ではそのまま目的語を取るということによると考えられる。

(43) ?我々は敵を孤立しなければならない。(→孤立させ)

我们 必须 孤立 敌人。

われわれ しなければならない 孤立する 敵

(中川正之 2005 : 136, 中国語訳は筆者)

3.3.2 主体変化動詞と客体変化動詞

「変化」を表す動詞は、主体と客体の変化によって「主体変化動詞」と「主体動作・客体変化動詞」に分けられる。それは、「NP+V+了」において、NPがVの主体である場合、「主体変化動詞」と見なす。NPがVの主体であると同時に、客体でもあるととらえられる場合、主体動作・客体変化動詞と見なす。例えば、(44)の“退化”（退化する），“上升”（上昇する）は、“翅膀”（羽），“生活费”（生活費）を動作の客体として目的語に取ることができないため、主体動詞である。一方、(45)の“完成”（完成する），“扩大”（拡大する）は、“任务”（任務），“范围”（範囲）を動作の客体として目的語に取ることができるため、主体動作・客体変化動詞である。ただ、(45) aのように、動作主体が主語になる場合もあれば、(45) bのように原因が主語になる場合もある。

(44) 「主体変化動詞」

- | | |
|--------------|-------------------|
| a. 翅膀 退化 了。 | *S 退化 了 翅膀 。 |
| 羽 退化する た | 環境要素 退化する た 羽 |
| (羽が退化している) | (*S が羽を退化している) |
| b. 生活费 上升 了。 | *S 上升 了 生活费 。 |
| 生活费 上昇する た | 物価 上がる 上昇する た 生活费 |
| (生活費が上昇している) | (*S が生活費を上昇している) |

(45) 「主体動作・客体変化動詞」

- | |
|--|
| a. 我们 完成 了 那个 作品。→那个 作品 完成 了。 |
| 私たち 完成する た その 作品 その 作品 完成する た |
| (私たちはその作品を完成させた) (その作品は完成した) |
| b. 新兴技术 的 出现 扩大 了 语言学 的 应用范围。→语言学 的 应用范围 扩大 了。 |
| 新興技術 の 出現 拡大する た 言語学 の 応用範囲 言語学 の 応用範囲 拡大する た |
| (新興技術の出現が言語学の応用範囲を拡大した) (言語学の応用範囲が拡大した) |

つまり、主体動作・客体変化動詞は、[NP1+V+NP2] と [NP2+V] の2つの形式が使い、かつ「NP1=動作主・原因」という条件を満たす場合を指す。例えば、(46)の“开通”（開通する），“实现”（実現する）がこれに当たる。なお、(47)のような場合、[NP1+V+NP2] と [NP2+V] の2つの形式が使えるが、それは、NP1は動作主・原因ではなく、場所や経験者である。NP2の“二人”、“事故”が客体ではなく、主体を表すためである。つまり、“出現”、“発生”は、主体動作・客体変化動詞とは言えない。(47)のような場合は、存在、出

現、消失を表す文が多い。

(46) [NP1 + V + NP2] → [NP2 + V]、NP1=動作主 (原因)

a. 工人 开通了 铁路。→ 铁路 开通了。
従業員 開通する た 鉄道 鉄道 開通する た
(従業員が鉄道を開通させた) (鉄道が開通した)

b. 我们 实现了 梦想。→ 梦想 实现了。
私たち 実現する た 夢 夢 実現する た
(私たちが夢を実現させた) (夢が実現した)

(47) [NP1 + V + NP2] / [NP2 + V]、NP1≠動作主 (原因)³³

a 前面 出现 了 两个人。 两个人 出现 了。
前 出現する た 二人 二人 出現する た
(前に二人が出現した) (二人が出現した)

b 他 发生 了 事故。 事故 发生 了。
彼 発生する た 事故 事故 発生する た
(彼に事故があった) (事故が起こった)

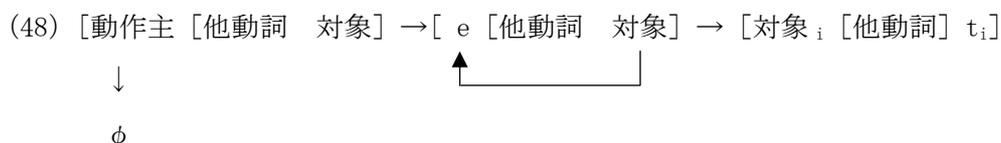
3.3.3 客体変化動詞と受身の関連性

ここでは、主体動作・客体変化動詞による「NP2+V+了」に注目する必要がある。このような文は、NP2の「変化」を表すとともに、受身の意味が読み取れるとされている。先行研究では、その構文的・意味的特徴、機能によって、「目的語前置文」、「無標記受動文」、「意味上の受身文」、「話題説明文」などと名付けられており、この種の文の多様性が見られる。

まず、構文的特徴によって、<目的語前置文>、<対象主語文>、<無標記受動文>などと名付けられている。(48)のように、[NP1+V+NP2]の他動詞文は、主語の位置にあるNP1(動作主)を削除し、目的語の位置にあるNP2(対象)を前の主語の位置にすることによって、[NP2+V]の自動詞文が生成される。(49)と(50)を比べてみれば、中国語では格交替が生じる場合、語順の変化(目的語の前置)が必須であるが、主格と対格の標記の変化もなければ、動詞の語形変化もなく、受身マーカーも付いていないのである。それに対して、日

³³ (47)は、通常他動詞文とは性質が異なる「存現文」(存在・所有・発生などを表す)であるため、本研究ではこのタイプを対象外とする。

本語では格交替に伴う語順変化がないが、主格と対格の各表示の変化や、動詞の語形変化が必須であり、受身マーカ―も義務的に付けられている。このような場合、中国語では、受身マーカ―が付いていないことから、〈無標記受動文〉とも呼ばれている。



(Chen&Huang1994 を参照)

- (49) a. A 公司 出版了 新书。
 b. 新书 出版了。

- (50) a. A 社が 新しい本を 出版した。
 b. 新しい本が 出版された。

また、意味的特徴によって、〈意味上の受身文〉と呼ばれることがある。つまり、このような文の意味には「受身」が読みとれるということである。なぜなら、①目的語が前置きになり、②「NP2+V」における NP2 と V の意味的な関係が「対象と動作」であり、NP2 は動作の受け手という意味役割を担う、という 2 点の原因が考えられる。本研究では、①述語は「NP1+V+NP2」も「NP2+V」も使える自他両用動詞であり、②自動詞文「NP2+V」は副詞“自己/自然而然地”(ひとりでに/勝手に)³⁴と共起しにくいという 2 つの条件を満たすと「意味上の受身文」と見なす。例えば、(51) の“新书出版了”と“作品完成了”は、いずれも「意味上の受身文」と見なすことができる。ただし、日本語では、受身で訳される(新しい本が出版された)場合もあれば、自動詞で訳される(作品が完成した)場合もある。なお、自他両用動詞が自動詞的に用いられる場合、コロケーションによって、“自己/自然而然地”(ひとりでに/勝手に)と共起し、「受身」の意味が感じられない場合がある。例えば、“体重增加了”(体重が増加した)、“人口减少了”(人口が減少した)など。一方、意味上では受身が読み取れるにもかかわらず、受身マーカ―“被”などが付いた受身文とは異なっていると指摘されている。なぜなら、“被”を用いると、非常に不自然な文になるからである。

³⁴ “自己/自然而然地”(ひとりでに/勝手に)によるテストは、事物の状態変化が自発的な変化なのか、外力による変化なのかを判断するためである。“自己/自然而然地”(ひとりでに/勝手に)と共起する場合は自発的な変化を表し、共起しにくい場合は外力による変化を表すと考えられる。

“被”は、受動者や話し手にとって不本意な事柄であり、被害を受けたり、何かを失ったりする場合に使うのが一般的である（刘月华ほか 2001）。

(51) a. 新书 出版 了。

新しい本 出版する た

(新しい本が出版された)

b. 作品 完成 了。

作品 完成する た

(作品が完成した)

(52) a. *新书 被 出版 了。

新しい本 される 出版する た

(新しい本が出版された)

b. *作品 被 完成 了。

作品 される 完成する た

(作品が完成された)

さらに、受身文の機能と明らかに異なり、(51) のような文は、物事の様態、用途などを説明することが主な機能であることから、「話題-説明文」とも呼ばれている（刘月华ほか 2001）。中国語に存在する大量の「話題-説明」文において、話題の中には意味上受動者であるものが少なくなく、文脈から受動者が話題の位置に立つことが要求されている場合は受動者を文頭に置けばよいだけであって、受身を表す“被”“叫”“让”は必ずしも必要ないという（刘月华ほか 2001、三宅 2009）。また、范晓（1994）で、「N 受+V」（受=受け手）文と呼ばれており、主な機能は、「N」で表す物事が動作の影響を受けて変化が起こった後の状態を描写することであると述べられている。

つまり、主体動作・客体変化動詞による「NP2+V+了」の文は、①NP2の状態変化が起こった、②NP2がある動作主から働きかけを受けた、という2種の意味が読み取れるのである。

(53) 作品完成了。→作品が完成した。(変化)

→作品が完成された。(受身)

3.4 中国語の「変化」を表す語のまとめ

この節では、中国語の「変化」を表す語の類型、およびそれぞれの表現形式を述べてきた。まとめると、図 5-1 の通りである。中国語の「変化」を表す語は、形容詞と動詞がある。形

容詞には「～了」の形を使う「変化形容詞」と「変～」の形を使う「非変化形容詞」があり、「変化形容詞」は「主体変化形容詞」と「客体変化形容詞」に分けられる。また、動詞は「主体変化動詞」と「客体変化動詞」に分けられる。

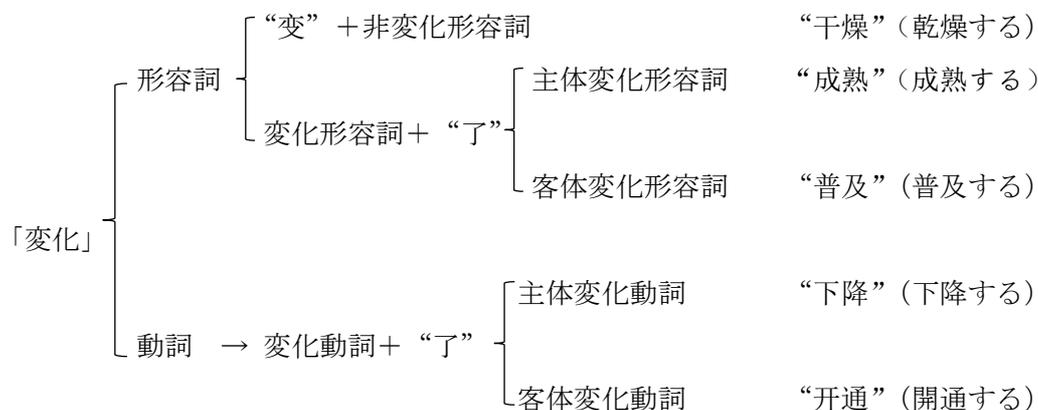


図 5-1 中国語の「変化」を表す語の種類³⁵

また、「変化」を表す語の特徴として、「NP（変）～了」の形を使い、しかも「NP 怎么样了」の回答文になることが挙げられる。その上で、文法的・意味的特徴によって、図 5-1 における 5 つのタイプに分類されている。分類の基準は、表 5-1 の通りである。

表 5-1 中国語の「変化」を表す語の分類

タイプ		文法的特徴				意味的特徴	例
		很～	变～了	NP～了	NP1～NP2		
A	非变化形容詞	+	+	-	-	[状態]	低下、乾燥
B	主体变化形容詞	+	+	+	-	[状態][変化]	成熟、混乱
C	客体变化形容詞	+	+	+	+	[状態][変化][使役]	普及、充実
D	主体变化動詞	-	-	+	-	[変化]	上昇、激増

³⁵ この 5 種類の語は、日中同形語の品詞のずれに関する先行研究では、多品詞性をもつタイプと見なされる場合がある。以上では、「“” →形容詞」、「“～了” →自動詞」、「“NP1+V+NP2” →他動詞」という基準で分類しているため、図 1 の分類は、多品詞性の特徴を示すと、「非变化形容詞＝形容詞」、「主体变化形容詞＝形容詞・自動詞」、「客体变化形容詞＝形容詞・自動詞・他動詞」、「主体变化動詞＝自動詞」、「客体变化動詞＝自動詞・他動詞」というような対応関係となっている。

E	客体変化動詞	-	-	+	+	[変化][使役]	開通、減少
---	--------	---	---	---	---	----------	-------

A の非変化形容詞は、程度副詞“很”と共に、主に状態を表す。変化を表す際に、“変～了”の形を使う。“NP～了”の形が使えない。また、“NP1～NP2”の形式も使えない。

- (54) a. 皮肤 很 干燥。 (肌がとても乾燥する)³⁶
 肌 とても 乾燥する
- b. 皮肤 变 干燥 了。 (*肌が乾燥になった)
 肌 なる 乾燥する た
- c. ?皮肤 干燥 了。 (肌が乾燥した)
 肌 乾燥する た
- d. *S 干燥 了 皮肤。 (*肌を乾燥した)
 乾燥する た 肌

B の主体変化形容詞は、状態も変化も表すことができる。変化を表す際に、“NP～了”の形が使えるという点で、A の非変化形容詞と区別されている。

- (55) a. 时机 很 成熟。 (時機がとても成熟する)
 時機 とても 成熟する
- b. 时机 变得 成熟 了。 (*時機が成熟になった)
 時機 なる 成熟する た
- c. 时机 成熟 了。 (時機が成熟した)
 時機 成熟する た
- d. *S 成熟 了 时机。 (*S が時機を成熟した)
 S 成熟する た 時機

C の客体変化形容詞は、B の主体変化形容詞と用法がほぼ同じであり、“NP1～NP2”の形式

³⁶ (54)～(58)の和訳は、中国語ではこの用法が成り立つかどうかを示すため、逐語訳にした。例えば、(55)では「時機が成熟する」より、「時機が熟する」のほうが自然であるが、単語ごとに区切って解釈するために、そのまま「成熟する」を使った。

が使えるという点が異なっている。そのため、状態、変化、使役の3つの意味的特徴を持つのである。

- (56) a. 内容 很 充実。 (内容がとても充実する)
内容 とても 充実する
- b. 内容 变得 充实了。 (*内容が充実になった)
教育 なる 普及する
- c. 内容 充实 了。 (内容が充実した)
機運 非常に 成熟する
- d. 他 充实 了 内容。 (彼が内容を充実させた)
他 機運 非常に 成熟する

Dの主体変化動詞は、形容詞の用法がないため、“很”と“变”とは共起せず、変化のみを表す。変化を表す際に、“NP～了”の形を使う。ただ、“NP1～NP2”の形式も使えない。

- (57) a. *收视率 很 下降。 (*視聴率がとても下降する)
視聴率 とても 下降する
- b. *收视率 变得 下降了。 (*視聴率が下降になった)
視聴率 なる 下降する
- c. 收视率 下降 了。 (視聴率が下降した)
視聴率 下降する た
- d. *下降 了 收视率。 (*視聴率を下降した)
下降する た 視聴率

Eの客体変化動詞は、Dの主体変化動詞と比べ、“NP1～NP2”の形式が使えるという点で区別されている。そのため、変化と使役の意味的特徴を持つのである。

- (58) a. *铁路 很 开通。 (*鉄道がとても開通する)
鉄道 とても 開通する
- b. *铁路 变得 开通 了。 (*鉄道が開通になった)
鉄道 なる 開通する た
- c. 铁路 开通 了。 (鉄道が開通した)

鉄道 開通する た

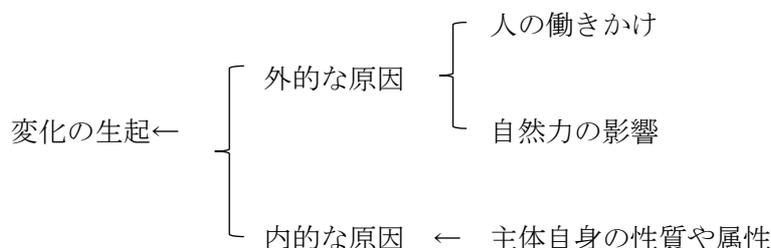
d. 工人 开通了 铁路。 (*鉄道を開通した)

従業員 開通する た 鉄道

4. 「変化」の表現と事象の捉え方

「変化」という事象は、「ある原因によって、物や人の状態が変化する」というふうに捉えられる。変化が起こる原因として、外的な原因と内的な原因があると考えられる。外的な原因は、人の働きかけや自然力の影響などが挙げられる。内的な原因は、変化主体そのものの内部における性質や属性などが挙げられる。その構造は、(59) の通りである。

(59) 「変件事象の構造」



この節では、中国語の「変化」を表す表現は、以上のような「変件事象の構造」とは、どのような関係があるのかを考える。

〈1〉非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞の場合

「NP+V+了」における NP と V が「変化主体と変化内容」の意味的關係であるため、「NP+V+了」文は「単一変件事象」を表すのである。つまり、この文には変化の原因が含まれていないということである。変化の原因は、外的なのか、内的なのか、一般的には文脈によって表される。例えば、(60) のいずれも「空気が乾燥する」という事象を表す。(60) a は、「空気は冬になると乾燥する」という内的な原因が考えられるが、(60) b は、「エアコンを長時間使うことによって空気が乾燥する」という外的な原因が考えられる。また、(61) のいずれも、「下降する」という事象であるが、(61) a は、「人間は年をとると記憶力が衰える」という内的な原因であるが、(61) b は、「手術を受けたから記憶力が衰えた」という外的な原因が考えられる。一般的には、“自己 / 自然地” (ひとりでに / 自然に) を用いて検証することができる。“自己 / 自然地” (ひとりでに / 自然に) と共起するのは内的な原因による変化であり、共起しないのは外的な原因による変化である。

- (60) a. 冬天一到，空气就变得干燥了。(空气就自己 / 自然地变得干燥了)
 冬 となる 空気 なる 乾燥する た (空気 ひとりでに / 自然に なる 乾燥する た)
 (冬になると、空気が乾燥する)
- b. 老 开 空调， 空气就变得干燥了>(*空气就自己 / 自然地变得干燥了)
 よく つける エアコン 空気 なる 乾燥する た (空気 ひとりでに / 自然に なる 乾燥する た)
 (エアコンを使いすぎると、空気が乾燥する)
- (61) a. 上 了 年纪，记忆力 下降 了。(记忆力自己 / 自然地 下降 了)
 とる た 年 記憶力 低下する た (記憶力 ひとりでに / 自然に 低下する た)
 (年をとると、記憶力が低下する)
- b. 手术 之 后，记忆力 下降 了>(*记忆力自己 / 自然地 下降 了)
 手術 の 後 記憶力 低下する た (記憶力 ひとりでに / 自然に 低下する た)
 (手術を受けた後、記憶力が低下している)

〈2〉 客体変化形容詞・動詞の場合

「NP+V+了」における NP と V は「変化主体と変化内容」の意味関係であると同時に、「対象と働きかけ」でもある。つまり、文の主語と述語の意味関係によって、外的な原因による対象の変化と捉えられる。つまり、完全な行為連鎖は、(62) のように、動作主が対象に働きかけを与え、対象の状態変化が起こったということである。ただ、「NP+V+了」の文では、動作主が背景化されているため、対象の状態変化が際立つようになるのである。例えば、(63) と (64) では、a の文から b の文への変形は、対象の変化を際立たせるために動作主を背景化するという過程が考えられる。

(62) 動作主 > 対象 > 結果状態
 働きかけ 変化

- (63) a. 工人 开通 了 隧道。
 従業員 开通する た トンネル
 (従業員がトンネルを開通させた)
- b. 隧道 开通 了。
 トンネル 开通する た
 (トンネルが開通した)
- (64) a. 他 普及 了 冰雪运动。
 彼 普及する た ウィンタースポーツ
 (彼がウィンタースポーツを普及させた)

b. 冰雪运动 普及 了。

ウィンタースポーツ 普及する た

(ウィンタースポーツが普及した)

なお、客体変化形容詞・動詞は、常に(62)の行為連鎖が成り立つというわけではなく、出来事の生起に外的な原因の関与する程度が異なる場合もあれば、外的な原因が想定しにくい場合もある。具体的には(65)のように、外的な原因の関与の程度だと考えられる。つまり、①から⑤まで、変化の成立への外的な原因の関与が弱まっていくと考えられる。

(65) [外的な原因の関与の程度]

①動作主→直接→生産物の出来上がり

a. 工人 开通 了 隧道。 → 隧道 开通 了。

職人 开通する た トンネル トンネル 开通する た

(従業員がトンネルを開通させた) (トンネルが開通した)

b. 哥哥 成立 了 公司。 → 公司 成立 了。

兄 成立する た 会社 会社 成立する た

(兄が会社を成立させた) (会社が成立した)

②動作主→直接→対象の状態の変化

a. 公司 改善 了 工作环境。 → 工作环境 改善 了。

会社 改善する た 仕事 環境 仕事 環境 改善する た

(会社が仕事の環境を改善した) (仕事の環境が改善した)

b. 我国 扩大 了 投资范围。 → 投资范围 扩大 了。

我が国 拡大する た 投資 範囲 投資 範囲 拡大する た

(我が国は投資の範囲を拡大した) (投資の範囲が拡大した)

③動作主→間接→対象の状態の変化

每天运动、读书、听音乐、充实 自己 的生活。 → 生活 充实 了。

毎日 運動する 読書する 聞く 音楽 充実する 自分 の 生活 生活 充実する た

(毎日運動したり、読書したり、音楽を聴いたりして、生活を充実させる)

→ (生活が充実している)

④ほかの出来事→間接→対象の状態の変化

改革开放 不断 深化、活跃 了 经济、繁荣 了 市场。 → 市场 繁荣 了。

改革開放 しつつある 深化する 活性化する た 経済 繁栄する た 市場 市場 繁栄する た

(改革開放が進化しつつあり、経済の発達を活性化させ、市場を繁栄させた)

→ (市場が繁栄している)

⑤外的な原因が想定しにくい

人口 増加 了。

人口 増加する た

(人口が増加した)

つまり、中国語では「NP+V+了」という文を用いて変化を表す際に、外的な原因による変化なのか、内的な原因による変化なのかは、Vのタイプとは直接に関係しているというわけではない。非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞（いわゆる他動詞用法がない語）は、「自然に生じる変化」を表し、客体変化形容詞・動詞（いわゆる他動詞用法がある語）は、「動作主の働きかけによる変化」を表すという単純な対応関係ではないのである。

(66) に示すように、非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞の場合は、「単一変化事象」を表すにもかかわらず、文脈から、その変化の原因が外的なのか、内的なのかを判断することができる。一方、客体変化形容詞・動詞の場合、「NP+V+了」において「NP」は、変化主体のみならず、動作対象の意味役割も果たし、背景化された動作主の存在が想定できるため、動作主の働きかけによる変化という外的な原因と捉えられる。ただ、NPとVの具体的な意味や文脈などによって、外的な原因が関与する程度が異なる場合もあれば、外的な原因が想定しにくい場合もある。

(66) 「NP+V+了」文と「変化」事象の捉え方

a. V=非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞

「単一変化事象」：主体>状態変化

「変化の原因」：文脈→ 内的な原因・外的な原因

b. V=客体変化形容詞・動詞

①「複合変化事象」：動作主>対象>状態変化

「変化の原因」：NPとVの意味関係 → 外的な原因

②「単一変化事象」：主体>状態変化

「変化の原因」：NPとVの意味関係 → 内的な原因・原因不明

第6章 中国語の「変化」を表す表現に基づく漢語動詞の日中対照分析

本章では、第5章で述べた中国語の「変化」の特徴に基づき、本研究の対象語を特定し、中国語と日本語における特徴をそれぞれ分析することを通して、中国語話者にとっての習得困難点を絞り込むことを目指す。

1. 研究対象語の選別

1.1 選別の手順

本研究は、中国語話者を対象とする漢語動詞の教育に提言することを目指すものであるため、旧日本語能力試験出題基準（2007）の1級～4級の語彙を基礎資料とする。その中から研究対象語を抽出するため、以下の手順に沿って作業を進める。

手順1：日中同形同義の二字漢字語を抽出する。

手順2：中国語の「変化」を表す語を抽出する。

手順3：中国語における意味・用法によって分類する。

1.2 同形同義語の認定

本研究では、日本語と中国語の同形同義の語を研究対象とする。その理由は、2点がある。1点目は、意味のズレによる誤用を対象外とするためである。つまり、学習者が意味を間違えたり、未知や未習のために間違えたりする場合を除外するのである。2点目は、中国語の用法による影響を見るためである。中国語話者にとって、日中同形同義語が習得しやすいと報告された研究が多くみられる（陳 2002、加藤 2005 など）が、それはあくまでも一つの語のレベルの習得であって、文の中で使われる場合の理解や運用ではないため、意味ばかりでなく、品詞の違いについても考える必要がある（熊・玉岡 2014）。本研究では、品詞の違いだけではなく、品詞や動詞の自他などの用法が同じである場合も誤用が生じる可能性があると考えられる。そのため、日中語の意味が同じであることを前提にした上で、用法が異なる場合と用法が一致する場合を考慮に入れ、中国語話者による習得状況を考察することにする。

日中語における漢字語彙の意味的対応関係について、先行研究では多くの議論がなされてきたが、主に以下のような観点が挙げられる。文化庁（1978）による（1）のような「S語、O語、D語、N語」の4分類が最も広く援用されてきた。また、それに基づき、O語とN語

における日中語のズレ方によってさらに細分化した研究もある(三浦 1984、陳 2009 など)。

(1) 文化庁 (1978) における日中同形語の意味的対応関係

S 語 (Same) : 意味が同じか、またはきわめて近い語

D 語 (Different) : 意味が著しく異なる語

O 語 (Overlap) : 一部重なっているが、ズレがある語

N 語 (Nothing) : 中国語に存在しない語

一方、陳 (2019) では、中国語話者は特定の文脈にある二字漢字語に遭遇した際に、その漢字語の表す「意味」を知っているはずであるため、「意味」を表す中国語を思い浮かべると想定した上で、意味ごとに漢字語の日中対応関係を検討する必要性を示唆している。さらに、母語の知識を利用するという観点から、(1) の N 語のように、日本語の漢字語が中国語に存在するかどうかではなく、学習者が思い浮かべる中国語の語形が日本語に存在するかどうかによって分類すべきであると指摘し、以下のように再分類している。

(2) 陳 (2019) における日中同形語の意味的対応関係

SJ0 (Same in Japanese Orthography) : 漢字語と意味的に対応する中国語が漢字語と同形である。

OJ0 (Overlap in Japanese Orthography) : 漢字語と意味的に対応する中国語が漢字語と同形ではないが、日本語に存在する

NJ0 (Nothing in Japanese Orthography) : 漢字語と意味的に対応する中国語が日本語には存在しない。

例えば、「位置」と「創作」は、日本語の方が意味範囲が広いため、「日中共通の意味」である場合は【SJ0】類に属する。「日本語の独自義」の「位置」(八王子の中心部に位置する)に対応する中国語<位於>は日本語に存在しないため、【NJ0】類に属する。「日本語の独自義」の「創作」(人気のある創作料理店)に対応する中国語<創意>は日本語に存在しないため、【OJ0】類に属する。

(3) 【SJ0】 位置=<位置> 手の位置に頭を移動する

【NJ0】 位置=<位於> 八王子の中心部に位置する

【SJ0】 創作=<創作> 劉天華が 1918 年に創作した曲

【OJ0】 創作＝＜創意＞ 人気のある創作料理店

(陳 2019 : 25)

本研究では、同形については、大河内 (1997:142) の「いずれがいずれを借用したかを問わず双方同じ漢字で表記されるものを同形語と呼ぶ」という「同形語」の定義に従い、繁体字、簡体字、旧体字などの違いに関わらず、視覚的に形が中国語と同じであると思われる語を同形とする。また、同義語を認定する際に、語の意味ごとに比較し、共通した意味項目を持つ部分を対象とする。即ち、陳 (2019) で言う【SJ0】のタイプを対象とする。語の意味を判断する際に、日本語の辞書『大辞林 (第四版)』、中国語の辞書《現代汉语词典 (第七版)》を参考にした。表 6-1 の例で言えば、日本語におけるコロケーションが中国語に直訳できる場合、両言語の意味が同じであると見なす。例えば、「一致」は、日中語の意味にはずれがないため、対象とする。「解決」、「緊張」、「乾燥」のような場合、共通した意味だけを考察の対象とする。「緊張」のような多義の場合は、意味ごとに分けておく。

表 6-1 本研究における同形同義語の認定の仕方³⁷

例	日本語の意味	中国語の意味
一致	意見が一致する	看法一致
解決	問題を解決する	解决问题
	-	残余匪徒全给解决了 (解決：(敵を) やっつける)
緊張	初めての講演で緊張する	第一次登台免不了有些紧张
	両国間の緊張が高まる	局势紧张
	筋肉が緊張する	肌肉紧张
	-	粮食紧张 (紧张：不足する)
乾燥	空気が乾燥する	沙漠地带气候很干燥
	無味乾燥 (味わいやおもしろみのない)	-

このような方法によって作業を行った結果、語レベルで言えば、計 2292 語の同形同義語

³⁷ 本研究の対象とする語の一覧は、付録の資料を参照されたい。意味を表示する際に使う日本語の例文は、NINJAL-LWP for BCCWJ、NINJAL-LWP for BCCWJ を用いて検索した結果、高頻度のコロケーションから選んだ。中国語の例文は、北京大学汉语语言学中心现代汉语语料库 (CCL)、北京语言大学现代汉语语料库 (BCC) を検索した結果、高頻度のコロケーションから選んだ。

が抽出された。ただ、「緊張」のように、1語には3つの意味が対応している場合があるが、語数をカウントする際に、1回しかとっていない。

1.3 中国語の用法による抽出と分類

中国語の「変化」を表す語を抽出する際に、基本的な基準は「変化」の意味である。即ち(4)aの条件を満たすものである。また、(4)bの否定表現、(4)cの未来表現の形式を補助手段として判断する。いずれも、「動作」を表す語を排除し、「変化」を特定するための手段である。

- (4) a. “NP～了”（あるいは“NP 变得～了”）を使い、“NP～了”は“NP 怎么样了”（NPがどうなったの）の回答文になる。
 b. 否定の場合は、“NP 没～”（あるいは“NP 没变～”）を使う。
 c. 「ゼロ形態」では文が成立しにくい。

このような手順に沿って、計229語が抽出された³⁸。さらに、中国語の用法によって分類する。分類の基準は、表6-2の通りである。このように分類するのは、主として中国語話者が「漢語+になる」や「漢語+される」の形を使う際に、中国語の影響を受ける主要素に注目するためである。予測としては、①形容詞（特に非変化形容詞）は「になる」を使いやすい。②客体変化を表す形容詞・動詞は、「される」を使いやすい。

表 6-2 中国語の「変化」を表す語の分類（表 5-1 の再掲）

タイプ		文法的特徴			意味的特徴	例
		很～	NP～了	NP1～NP2		
A	非変化形容詞	+	-	-	[状態]	低下、乾燥
B	主体変化形容詞	+	+	-	[状態][変化]	成熟、混乱
C	客体変化形容詞	+	+	+	[状態][変化][使役]	普及、充実
D	主体変化動詞	-	+	-	[変化]	上昇、激増
E	客体変化動詞	-	+	+	[変化][使役]	開通、減少

³⁸ 抽出作業は、2名の中国語母語話者の協力で行った。協力者Aは、日本国内の大学で日本語学を専攻とする博士後期課程の在籍生、協力者Bは、日本国内の大学で中国語学を専攻とする博士後期課程の在籍生である。筆者を含めて3人の中で2人以上の意見が一致したものを対象として選んだ。

2. 日本語における特徴の分析

本節では、以上抽出した中国語の「変化」を表す語は、日本語においてどのような特徴があるのかを分析する。主として、「漢語+になる」と「漢語+される」が使えるかどうかを検討する。

2.1 品詞と自他

品詞と自他の分類は、以下の手順で行う。

①以上抽出した研究対象語について、「茶まめ」で形態素解析を行い、品詞によって「形状詞」、「サ変形状可能」、「サ変可能」と分ける。

②「サ変可能」を自動詞、自他両用、他動詞と分ける。自他の判定基準は、張（2014）を参照した。2.2.2 節で述べたように、漢語動詞の自他について様々な判定基準があるが、その中で、客観的に、網羅的に自他の使用状況を把握しているのは、張（2014）である。その自他判定は、(5) のようにヲ格の目的語を取るか否かを主な手段としている。例えば、(6) の「拡大」は (5) の a と b が使えるため、自他両用動詞と見なされている。

- (5) a. N_1 が N_2 を V_t (他動詞)
b. N_2 が V_i (自動詞)

(張 2014 : 24)

- (6) a. 環境破壊が水害や干ばつ被害を拡大し、貧困から抜け出せないのだ。
b. 低価格の発泡酒市場の規模が拡大した。

(張 2014 : 72)

また、張（2014）では、自他の使用状況について、読売新聞コーパスの2000年に発行された分を用いて自動詞用法と他動詞用法の出現数（延べ語数）を集計して分析している。その付録のCD-ROMに収録された基本データは、表6-3のように示されている。ただ、自動詞用法と他動詞用法の片一方に偏っている場合も、自他両用と認められている。本研究では、客観的に漢語動詞の自他を把握した上で、注目する形式（「になる、する、される」）の使用状況を分析するため、まず張（2014）を参照して研究対象語の自他を判定することにする。

表 6-3 張（2014）の付録データにおける自他の示し方

能力試験 レベル	漢語動詞	語構成	自他	他動詞用 法出現数	自動詞用 法出現数
1 級	減少	Vti>A	自	-	-
	解除	Vti>Vt	他	-	-
2 級	延長	Vti>A	自他	156	3
	拡大	Vti>A	自他	690	422
	完成	A>Vti	自他	15	392

③その他、「サ変形状可能」の語は、形状詞用法に偏る「貧乏、妥当、失礼、膨大、軽快」は「ナ形容詞」に分類し、サ変動詞には偏る「安心、独立、安定、満足、不足、謙遜」は「サ変動詞」に分類する。また、張（2014）では自他両用動詞とされているものには、明らかに自動詞に偏る語、他動詞に偏る語があるため、その語の自動詞用法と他動詞用法の割合によって調整した。その結果、他動詞用法が 10%未満である語、「乾燥、増加、増大、拡散、発生」を自動詞に分類し、自動詞用法が 10%未満である語、「中止、延長、延期、変更、破壊、変革、喪失、分解、開始、統一、緩和、固定」を他動詞に分類した。

以上の手順に沿って、229 語の研究対象語を、日本語の品詞と自他によって分類し、さらに中国語における用法によって分類を加えて整理した結果、両者の対応関係が表 6-4 の通りとなった。

表 6-4 中国語の「変化」を表す語の日本語における品詞と自他

中国語の類型	日本語の品詞と自他				合計
	ナ形容詞	サ変可能			
		自動詞	自他両用	他動詞	
非変化形容詞	簡単、透明(58)	一致、低下(10)	-	悲観、楽観(4)	72
主体変化形容詞	-	成熟、混乱(25)	失敗(1)	-	26
主体変化動詞	-	下降、激増(40)	終了、発病(4)	延期(1)	45
客体変化形容詞	明確、豊富(4)	孤立、繁栄(9)	確定、充実(4)	統一、公開(6)	23

客体変化形容詞	-	開通、成立(12)	解決、改善(20)	形成、強化(31)	63
合計	62	96	29	42	229

※ 括弧内は語数を示す。

表 6-4 において、以下のような特徴が見られる。

①中国語の「変化」を表す語は、日本語の漢語動詞（「サ変可能」）に相当するものが多い。その次はナ形容詞（「形状詞」）である。漢語動詞とナ形容詞を兼ねる（「サ変形状可能」）ものもある。

②日本語の漢語動詞において、自動詞が最も多く、その次は自他両用動詞である。他動詞は相対的に少ない。

③両言語の品詞のずれを見ると、中国語の「変化形容詞」は日本語の動詞に対応するものが多いのに対して、中国語の「非変化形容詞」は日本語のナ形容詞に対応するものが多い。つまり、品詞のずれは、中国語の「変化形容詞」の場合が多いということである。

④両言語の動詞の自他のずれを見ると、中国語「主体変化動詞」（自動詞）は、日本語ではほとんど自動詞であり、自他両用や他動詞が少ない。一方、中国語では「客体変化動詞」（他動詞）である語は、日本語では自他両用動詞が多く、その次は他動詞であり、自動詞が相対的に少ない。

表 6-4 の分類に基づき、すべての研究対象語を以下に掲げる。

〈1〉中国語の「非変化形容詞」の場合（72 語）

a. 日本語では「ナ形容詞」である語（58 語）

有名, 簡単, 特別, 偉大, 確実, 可能, 貴重, 巨大, 謙虚, 重大, 重要, 純粹, 新鮮, 率直, 単純, 透明, 特殊, 独特, 微妙, 有効, 優秀, 有利, 容易, 幼稚, 一樣, 円滑, 円満, 活発, 簡易, 頑固, 簡素, 強硬, 強烈, 厳密, 巧妙, 自在, 迅速, 盛大, 切実, 大胆, 多様, 忠実, 著名, 頻繁, 明白, 明瞭, 明朗, 猛烈, 勇敢, 優美, 有力, 良好, 露骨, 妥当, 貧乏, 膨大, 軽快, 失礼

b. 日本語では「サ変動詞-自動詞」である語（10）

一致, 低下, 矛盾, 繁盛, 憤慨, 密集, 平均, 窮乏, 不足, 乾燥

c. 日本語では「サ変動詞-他動詞」である語（4）

悲観, 楽観, 謙遜, 抽象

〈2〉中国語の「主体変化形容詞」の場合（26 語）

a. 日本語では「サ変動詞-自動詞」である語（25）

合格, 混雑, 混乱, 成功, 対立, 発達, 流行, 成熟, 氾濫, 腐敗, 膨張, 飽和, 没落, 進歩, 緊張,
失望, 後悔, 絶望, 興奮, 自立, 沈黙, 疲労, 活躍, 安心, 独立

b. 日本語では「サ変動詞-自他両用」である語 (1)

失敗

〈3〉中国語の「主体変化動詞」の場合 (45 語)

a. 日本語では「サ変動詞-自動詞」である語 (40)

下降, 激増, 合流, 失業, 失恋, 死亡, 蒸発, 成長, 接近, 前進, 断水, 停電, 変化, 後退, 出血,
出現, 上昇, 勝利, 進化, 静止, 退化, 窒息, 沈殿, 沈没, 墜落, 停滞, 当選, 到達, 敗北, 破産,
発育, 発芽, 破裂, 沸騰, 変遷, 滅亡, 結晶, 傾斜, 発生, 骨折

b. 日本語では「サ変動詞-自他両用動詞」である語 (4)

終了, 発病, 破損, 負傷

c. 日本語では「サ変動詞-他動詞」である語 (1)

延期

〈4〉中国語の「客体変化形容詞」の場合 (23 語)

a. 日本語では「ナ形容詞」である語 (4 語)

温暖, 健全, 明確, 豊富

b. 日本語では「サ変動詞-自動詞」である語 (9 語)

感動, 荒廢, 孤立, 重複, 調和, 動揺, 繁榮, 安定, 普及

c. 日本語では「サ変動詞-自他両用」である語 (4 語)

確定, 集中, 充実, 分散,

d. 日本語では「サ変動詞-他動詞」である語 (6 語)

公開, 誇張, 統一, 緩和, 固定, 閉鎖

〈5〉中国語の「客体変化動詞」の場合 (63 語)

a. 日本語では「サ変動詞-自動詞」である語 (11 語)

開通, 成立, 通過, 発展, 悪化, 分裂, 変動, 命中, 増加, 増大, 拡散

b. 日本語では「サ変動詞-自他両用」である語 (20 語)

拡張, 合併, 減少, 復活, 解決, 回復, 拡大, 完成, 混合, 実現, 停止, 解散, 縮小, 結合, 復興,
中断, 確立, 分離, 改善, 中和

c. 日本語では「サ変動詞-他動詞」である語 (31 語)

圧縮, 解放, 開放, 拡充, 強化, 消耗, 冷凍, 解除, 改良, 革新, 形成, 合成, 再現, 削減, 振興,

増強, 打開, 達成, 廃棄, 爆破, 暴露, 混同, 中止, 変更, 延長, 破壊, 変革, 分解, 開始, 喪失, 満足

2.2 「になる」「する」「される」の使用状況

以上示した日本語の品詞と自他の基本的特徴に基づいて、本研究で注目する三つの形式、「漢語+になる」、「漢語+する」、「漢語+される」の使用状況について分析する。

2.2.1 「漢語+になる」の使用状況

「漢語+になる」という形式が使えるのは、主に以下の2種類がある。つまり、①ナ形容詞は、デフォルト的に「～になる」形が使えるが、②漢語動詞は、「～になる」形を使うには有標的条件がついている。

(7) 「漢語+になる」の使用

- ①「ナ形容詞+になる」(デフォルト)
- ②「漢語動詞の語幹+になる」(有標的使用)

まず、「なる」は典型的な変化自動詞であり、「XがYなる」という表現は、Xの属性が、Yでない状態からYという状態に自然に(無意識裏に)変化したということを表す(庵ほか2000)。「になる」の形をデフォルト的に使うのは、名詞と形容詞である。例えば、(8)の通りである。

- (8) a. 息子は4月から小学生になった。(名詞)
- b. 洋子さんはきれいになった。(ナ形容詞)

(庵ほか2000:72)

一方、漢語動詞の語幹は、名詞的特徴がある(小林英樹2004)が、常に「名詞+に+なる」という規則を適用するというわけではない。表2に示した漢語動詞について、現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下BCCWJ)を用い、(9)の検索条件、及び(10)のレジスターを設定して検索した結果、「になる」の用例数が10例以上あるものは、表6-5と表6-6に示した「変更、中止」などの24語である。

(9) 短単位検索(「変更」を例に)

キー「語彙素＝変更」

後方共起 1「語彙素＝に」AND「品詞-中分類-助詞-格助詞」

後方共起 2「語彙素＝成る」

(10) 調査対象とするレジスター

書籍類：新聞、書籍、白書、法律、国会会議録、広報紙（語数³⁹：75119967）

ブログ類：知恵袋、ブログ（語数：20451020）

検索の結果を見ると、「漢語動詞の語幹＋になる」の形を使う場合、漢語の部分単純形式であるか、複合形式であるかによって2種類に分けられる。単純形式とは、漢語の語幹に連体修飾語や接辞などが付いていないものである。例えば、「変更になる」、「中止になる」が挙げられる。複合形式とは、漢語の語幹に連体修飾語や接辞などが付いたというものである。例えば、「不合格になる」、「根本的な解決になる」が挙げられる。

まず、表 6-5 に示したのは、単純形式が「になる」付いている方が多い場合である。動詞の自他を見ると、主に他動詞や他動詞用法が優勢である自他両用動詞である。また、硬い表現の書籍類とやや軟らかい表現のブログ類と、どちらに出現しやすいのか、すなわち出現するレジスターの違いを見るため、各語ごとに100万語あたりの出現頻度を計算した。ブログ類のみに多く使われる場合、一般的な使い方ではないと考えられる。その結果、単純形式で使う方が多いもの（100万語換算の結果が1以上のもの）は、「変更、中止」の2語しかない。また、「廃止、延期」の2語は、ブログ類には多く使われていると見られる。他の語は、使用頻度から見ると、一般的な使用とは言えない。

表 6-5 単純形式で「になる」を使う方が多い場合

No.	漢語動詞	自他	単純形式		複合形式		合計
			書籍類	ブログ類	書籍類	ブログ類	
1	変更	他	218(2.9)	82(4.0)	7(0.1)	7(0.3)	314
2	中止	他	89(1.2)	84(4.1)	8(0.1)	33(1.6)	214
3	廃止	他	39(0.5)	32(1.6)	10(0.1)	10(0.5)	91
4	延期	他	10(0.1)	25(1.2)	2(0.0)	6(0.3)	43
5	解除	他	13(0.2)	7(0.3)	10(0.1)	6(0.3)	36

³⁹ 「記号など除外・全て」の語数を取った。ブログ類も同様である。

6	延長	他	5(0.1)	10(0.5)	4(0.1)	7(0.3)	26
7	停電	自	12(0.2)	7(0.3)	1(0.0)	2(0.1)	22
8	閉鎖	他	7(0.1)	6(0.3)	2(0.0)	6(0.3)	21
9	解散	自他	8(0.1)	2(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	10

※ 数字は、「用例数 (100 万語換算の結果)」を示す。

佐藤 (2005) によると、ナルを有標的に使用する場合、主体の背景化という意味機能の効果が現れるということである。例えば、テーブルから床に落下したグラスを見て、(11) a のように述べた場合は、特別な効果があるわけではなく、現実のありようを単純に述べるのみである。一方、(11) b のようにあえてナル表現を使用した場合 (つまり、ナルの有標的使用)、話者の主体としての関与を否定している点で主体の背景化という効果を発揮していると述べられている。

(11) a. グラスが粉々になった。

b. 私が粉々にしたのではなく、あくまで粉々になったのだ。

(佐藤 2005 : 26)

したがって、表 6-5 に示した単純形式で「～になる」を使う語に他動詞が多いのは、佐藤 (2005) でいう動作主体の背景化の効果を表すためであると考えられる。例えば、(12) のような文において、「～になる」の使用は、主体の責任が感じられないように客観的な情報やお知らせを相手に伝えるという機能を果たしているのではないかと考えられる。

(12) 「単純形式+になる」

a. 日程、内容が変更になる場合がありますので、ご了承ください。

(広報紙 OP21_00002)

b. 雨天の場合は、フリーマーケットは中止になることがあります。

(広報紙 OP77_00001)

c. かすみ網も同じく野生の鳥を無差別捕獲する非常に危険な道具であるということで、長い間野鳥の保護団体が活動してきて、廃止になったわけです。

(国会議事録 OM61_00001)

d. アメリカ入国の手続きが困難で、ニューヨークの個展が延期になりました。

(書籍 LBo7_00039)

次に、表 6-6 に示したのは、複合形式で「になる」を使う方が多い場合である。表 6-5 と比べてみると、自動詞や自他両用動詞が多い。しかも、「運動不足」、「不合格」などのように、主に名詞化された固定的な言葉が使われている。

表 6-6 複合形式で「になる」を使う方が多い場合

No.	漢語動詞	自他	単純形式		複合形式		合計
			書籍類	ブログ類	書籍類	ブログ類	
1	不足	自	2(0.0)	0(0.0)	90(1.2)	46(2.2)	138
2	停止	自他	7(0.1)	9(0.4)	25(0.3)	29(1.4)	70
3	解決	自他	4(0.1)	6(0.3)	22(0.3)	11(0.5)	43
4	合格	自	2(0.0)	1(0.0)	21(0.3)	7(0.3)	31
5	公開	他	4(0.1)	8(0.4)	8(0.1)	8(0.4)	28
6	終了	自他	3(0.0)	9(0.4)	1(0.0)	12(0.6)	25
7	増加	自	0(0.0)	0(0.0)	18(0.2)	2(0.1)	20
8	開始	他	1(0.0)	2(0.1)	6(0.1)	9(0.4)	18
9	混乱	自	1(0.0)	0(0.0)	14(0.2)	2(0.1)	17
10	成長	自	0(0.0)	1(0.0)	11(0.1)	4(0.2)	16
11	喪失	他	0(0.0)	0(0.0)	9(0.1)	4(0.2)	13
12	流行	自	5(0.1)	1(0.0)	2(0.0)	2(0.1)	10
13	変化	自	0(0.0)	0(0.0)	7(0.1)	2(0.1)	9
14	減少	自他	0(0.0)	0(0.0)	11(0.1)	0(0.0)	11
15	安定	自	0(0.0)	0(0.0)	4(0.1)	3(0.1)	7

※ 数字は、「用例数（100万語換算の結果）」を示す。

(13) 「複合形式+になる」

- a. 冬の間は運動不足になりがちです。 (広報紙 OP12_00003)
- b. その運転手は運転に適しないと判断され、免許停止になるので注意が必要です。 (書籍 LBr3_00037)
- c. 英語力に問題を指摘されて、結果は不合格になりました。 (書籍 PB42_00160)

- d. 一般の市民が個人情報のうち何が公開されて何が非公開になるのか正確に理解できない面もあります。

(書籍 LBn3_00171)

- e. 前年より五百六十一件多く、2割以上の増加になった。

(新聞コア PN1b_00002)

以上の分析によると、「漢語動詞の語幹+になる」の形式は、有標的使用であることがわかった。「運動不足」、「2割以上の増加」のような複合形式は、名詞化された形による使用であり、漢語動詞の一般的な使い方とは言えない。また、表 6-5 の単純形式は、使用頻度が高い語において、「変更、中止、廃止、延期」の4語は「になる」の形が受け入れられやすいと言えよう。つまり、この4語は、「になる」の形が使えると、学習者に伝える価値があると考えられる。

2.2.2 「漢語+する」の使用状況

「漢語+する」形は、漢語動詞の原形として使われる。(11)のように、自動詞の場合は、「～が+漢語+する」の形式を使い、他動詞の場合は、「～を+漢語+する」の形式を使う。自他両用動詞は、「～が+漢語+する」と「～を+漢語+する」の両方とも使える。

- (14) a. 明治5年、新橋～横浜間に日本初の鉄道が開通しました。

(ブログ 0Y14_24677)

- b. 特に学校外へ情報を公開する場合には管理職と事前打ち合わせが必要でしょう。

(書籍 PB30_00102)

- c. この問題を解決する方法は、いくつかあります。

(書籍 PB45_00085)

- d. おそらくすべての問題が解決すると思います。

(ブログ 0Y14_26341)

本研究で注目するのは、自動詞用法としての「～が+漢語+する」形の使用である。ただ、問題となるのは、自他両用動詞の場合である。例えば、(12)の「解決する」のように、自動詞化する場合、「～が+漢語+する」形も「～が+漢語+される」形も可能である。

- (15) a. 問題を解決する。 → b. 問題が解決する。

- c. 問題が解決される。

しかも、自他両用動詞において、「～が+漢語+する」形と「～が+漢語+される」形の割合によってゆれがある。本研究の対象語について、BCCWJ を用いて自他両用動詞における「～が+漢語+する」形と「～が+漢語+される」形の使用状況を調べた。調査の方法は、「解決する」を例に、以下の通りに説明する。

手順1：語彙素としての「～が解決する」の用例数を検索する。検索条件は以下の通りである。

◆「～が解決する」（語彙素）の検索条件：

- ・短単位検索
- ・前方共起1：「語彙素=が」AND「品詞-中分類-助詞-格助詞」
- ・前方共起2：「語彙素=解決」
- ・キー： 「語彙素=為る」

手順2：手順1の検索結果に基づき、「キー」の「為る」のバリエーションを、「さ」とそれ以外の「し、する、すれ、せ」と二分する。

◆「キー」の「為る」を二分する

- ・①「さ」の用例数
- ・②それ以外（「し、する、すれ、せ」）の用例数

手順3：手順2の結果に基づき、「さ」の中から、「させる」と「させられる」の用例を外す。

◆「さ」から「させる」と「させられる」を外す。

- ・③「される」の用例数

手順4：以上の②が「～が解決する」の用例数であり、③が「～が解決される」の用例数である。両者の割合を計算する。

このような方法によって調査した結果、本研究の対象語における自他両用動詞の「～が+漢語+する」形と「～が+漢語+される」形の用例数と割合は、表6-7の通りになった。

表 6-7 自他両用動詞の「～する」と「～される」の割合

No.	漢語動詞	「～する」	「～される」	No.	漢語動詞	「～する」	「～される」
1	失敗	181(100.0)	0(0.0)	16	解散	75(82.4)	16(17.6)
2	終了	805(100.0)	0(0.0)	17	拡大	535(82.7)	112(17.3)
3	減少	1145(100.0)	0(0.0)	18	停止	186(82.4)	40(17.6)
4	発病	28(100.0)	0(0.0)	19	実現	709(81.0)	166(19.0)
5	負傷	82(100.0)	0(0.0)	20	解決	296(80.7)	71(19.3)
6	破損	81(98.8)	1(1.2)	21	分散	51(79.7)	13(20.3)
7	合併	160(98.8)	2(1.2)	22	復興	11(78.6)	3(21.4)
8	集中	530(98.3)	9(1.7)	23	混合	26(68.4)	12(31.6)
9	充実	304(98.1)	6(1.9)	24	拡張	38(62.3)	23(37.7)
10	復活	225(97.0)	7(3.0)	25	分離	61(60.4)	40(39.6)
11	完成	779(94.5)	45(5.5)	26	確立	310(52.5)	281(47.5)
12	回復	325(93.9)	21(6.1)	27	中断	38(52.1)	35(47.9)
13	結合	193(93.2)	14(6.8)	28	改善	128(40.3)	190(59.7)
14	確定	495(93.3)	37(7.0)	29	中和	3(27.3)	8(72.7)
15	縮小	126(84.0)	24(16.0)	-			

※ 数字は、「用例数（割合）」を示す。

表 6-7 の結果を見ると、自他両用動詞の「漢語＋する」と「漢語＋される」形の割合に差があることが明らかになった。ただ、「中和」は「漢語＋される」の使用が多く、「確立、中断、改善」は「漢語＋する」と「漢語＋される」の使用がほぼ同じである。それ以外の語は、「漢語＋する」形の方が多く使われるという傾向が見られる。

つまり、本研究の対象語では、自動詞の場合は「～が＋漢語＋する」形を使う。また、自他両用動詞の場合は、「～が＋漢語＋する」形も「～が＋漢語＋される」形も使うというわけではなく、主に「～が＋漢語＋する」形を使うのである。池上（1981）で指摘されている

ように、英語は他動詞表現が好まれる「する型」言語であり、日本語は自動詞表現が好まれる「なる型」言語であり、同じ出来事を表すのに、自動詞表現も他動詞表現も使える場合、日本語では自動詞表現を使うのが自然である。そのため、事象の構造を見ると、動作主の働きかけによって対象の変化が起こるという事柄であっても、対象の変化のみに関心があり、自動詞表現で表すのが自然である⁴⁰。例えば、(16)の例文において、「パソコンの普及」、「作業の増加」、「工事の完成」、「橋の開通」といったような事柄は、いずれも、その物事が自ら自然にそのようになったというわけがないが、自動詞表現「～が+漢語する」形を用いて表すのが一般的である。

(16) a. 最近、職場では急速にパソコンが普及し、ディスプレイ等を長時間続ける VDT 作業が増加しました。

(出版・書籍 PB33_00596)

b. 山形市黒沢温泉近くの福田橋 (通称・ゆずりあい橋) の掛け替え工事が完成し、開通しました。

(広報紙 OP10_00002)

2.2.3 「漢語+される」の使用状況

「漢語+される」形が使えるのは、主に他動詞であるが、自他両用動詞も「される」を使う場合がある。いずれも、影響の与え手を消すのに動機付けられた降格受動文 (益岡隆志 1987) の場合を指し、自動詞文に類似するとされている。例えば、(17)の「解明された」は「明らかになった」と類似した意味を表す。

(17) a. 今回の調査結果、原因が解明された。

b. 今回の調査結果、原因が明らかになった。

(益岡 1987:192)

本研究の対象語を見ると、他動詞は無標的に「漢語+される」形が使える。自他両用動詞は、前節で述べた「漢語+する」形の使用と同じように、「漢語+される」形の使用にはゆれが見られる。「失敗、終了、減少」などのように、「される」形を使わない語もあれば、「実現、解決、改善」などのように、場合によっては「される」形を使う語もある。例えば、(18)

⁴⁰ このような現象は、動作主の脱焦点化 (Shibatani1985)、脱使役化 (影山 1996) とも呼ばれることがある。

の「強化」、「統一」は他動詞であり、「自動詞：される—他動詞：する（他動詞が原型）」（庵 2008）というような自他対応の形をなしているため、「強化される」「統一される」の形を持って「自動詞の代わり」として使われると考えられる。

(18) [他動詞]

- a. ディーゼル乗用車やトラック、バス等についてもそれぞれ規制が強化されてきている。

（白書 0W3X_00090）

- b. シンプルなアイテムを選んでいるのに目を引くのは、全身の色が統一されているから。

（出版・雑誌 PM21_00789）

また、(19) の「解決」は自他両用動詞であり、表 6-7 の結果によると、「～する」を使う場合が多いが、「～される」を使う場合もある。自動詞文と他動詞の受身文の関係について、庵ほか（2001）によると、(20) のような共通点と相違点がある。両者は動作主の含意があるかどうかという点が異なるのである。例えば、(21) a と b の通りである。また、(22) c のように、他動詞の受身文には動作主を挿入することが可能であるが、自動詞文はそうしたことが不可能である。ただし、動作主が不特定の人を指す場合に限られ（庵 2012）、例えば、(21) d のようである。日本語の論理では、特定の動作主を含意することを表す場合、一般的に他動詞の能動文（(21) e）を使って責任者を明示化するのが自然であろう。

(19) [自他両用動詞]

- a. 金属加工術により、薄く加工した際の強度の問題が解決された。
b. 続けて行くとマイナスな気持ちがなくなり、心の問題が解決します。

(20) 「自動詞文と類似表現の他動詞の受身文との関係」

- a. 共通点：影響の受け手（通常は「物」）を中心に出来事を描く。
b. 相違点：受身文→明示されていなくても、動作主の存在が含意され、その出来事を引き起こした者がいるというニュアンスがある。

自動詞文→以上のニュアンスがない。

(21) a. 窓ガラスが割れた。（自動詞文）

- b. 窓ガラスが割られた。（他動詞の受身文）

- c. 窓ガラスが何者かによって割られた。(不特定の動作主を明示化)
- d. ??窓ガラスが太郎によって割られた。
- e. 太郎が窓ガラスを割った。(他動詞の能動文)

(a～c は庵ほか (2000 : 102-103) より)

つまり、他動詞の場合は、「漢語＋される」形を自動詞の代わりに使うのが一般的である。一方、自他両用動詞は、自動詞形「漢語＋する」を使うのが一般的であるが、動作主が含意される場合に「漢語＋される」を使うことがあり、有標的な使用と言えよう。

その他、「悲観する、樂觀する、謙遜する」の3語が他動詞であり、ヲ格他動詞文が使えるが、直接受身が作れないタイプであり、「～が＋漢語＋される」形が使えないのである。

第7章 対照分析に基づく問題所在の予測及び指導対策の予想

1. 中国語話者における問題の所在の予測

以上、日本語の二字漢語から、中国語の「変化」を表す語を抽出し、分類した上で、さらに日本語における使用状況を分析した。主として、予測された中国語話者による誤用形式「漢語+になる」と「漢語+される」が使えるかどうかについて検討してきた。それでは、どのような場合に、中国語話者が「漢語+になる」と「漢語+される」を使うと、問題となるのか、その原因が何か、この節で考えておく。

1.1 問題の所在

中国語の視点から、以上分析してきた二字漢語は、「変化」を表す際に使うと、「漢語+になる」の形式を使う可能性がある。また、「変化」が起こる原因に、外部からの働きかけや影響が想定されると、「漢語+される」の形式を使う可能性がある。具体的には、(1)のよう示すことができる。また、中国語における用法が異なるため、それぞれ「になる」と「される」を使用する傾向も異なると考えられる。具体的には、(2)の例のようであり、太字の部分は最も使いやすと考えられ、太字ではない部分は使う可能性があると考えられる。

(1) ① 「NP+漢語+了」 = 「NPがある状態になった」 → [NPが漢語になる]

↓

② 「外的な原因によるNPの変化」 → [NPが漢語される]

(2) [非変化形容詞]

a. クーラーを使いすぎると、空気が乾燥 {になる・される}

老 开 空调, 空气 就 变得 干燥 了。

すぎる 使う クーラー 空気 と なる 乾燥する た

(クーラーを使いすぎると、空気が乾燥する)

[主体変化形容詞]

b. ツイッター上で、誤った情報が 氾濫 {になった・された}。

在 推特 上, 错误 的 信息 泛滥 了。

で ツイッター 上 誤った の 情報 氾濫する た

(ツイッターで、誤った情報が氾濫している)

[主体変化動詞]

c. 政策の失敗で、10年以上の景気が停滞 {になった・された}。

由于 政策 失败, 10 多年的 经济兴盛 停滞 了。

のため 政策 失败 10年以上の 経済 景気 停滞する た

(政策の失敗で、10年以上の景気が停滞した)

[客体変化形容詞]

d. ホームページは全面にリニューアルし、内容も充実 {になる・される}。

网页 全面 更新, 内容 也 充实 了。

ホームページ 全面 更新 内容 も 充実する た

(ホームページは全面にリニューアルし、内容も充実している)

[客体変化形容詞]

e. 自動車業界で名を馳せる3つの会社が合併 {になった・された}。

3家 著名 的 汽车 公司 合并 了。

三つ 有名 の 自動車 会社 合并 た

(自動車業界で名を馳せる3つの会社が合併した)

つまり、(2) a のように、中国語の非変化形容詞“干燥”(乾燥する)は、「乾燥になる」を使いやすい。また、「クーラーを使いすぎる」という外的な原因を考えると、「乾燥される」を使う可能性がある。

(2) b のように、主体変化形容詞“泛滥”(氾濫する)は、「氾濫になる」を使いやすい。また、「人が情報を振りまく」という外的な原因を考えると、「氾濫される」を使う可能性がある。

(2) c のように、主体変化動詞“停滞”(停滞する)は、“停滞了”という文において、変化の意味を表す。そのため、「停滞になる」を使う可能性がある。また、「政策の失敗」を「変化を引き起こす外的な原因」と捉えると、「停滞される」を使う可能性もある。

(2) d のように、客体変化形容詞“充実”(充実する)は、まずは「充実になる」を使いやすい。また、「内容」が「客体」としても捉えられるため、「充実される」も使いやすい。

(2) e のように、客体変化動詞“合并”(合併する)は、まず、「会社」が「客体」と捉えられるため、「合併される」を使う可能性がある。また、文全体において、“合并了”は「変化」の意味を表すため、「合併になる」を使う可能性もある。

このような使用状況の予測に基づき、日本語における「になる」と「される」の使用可否

の観点を加えて考えると、中国語話者による問題の所在は、表 6-8 の網掛けの部分となる。つまり、中国語話者は、すべてのタイプの語に「になる」を使う可能性がある。一方、「される」を使うと予測されるのは、主として客体変化形容詞・動詞の場合である。また、日本語の使用状況について、まず、「になる」が使えるのは、ナ形容詞の他に、サ変動詞の「変更、中止、延期」の 3 語も含めている。それから、「される」が使えるのは、サ変動詞の他動詞のみを認めているが、自動詞と自他両用動詞は、無標的に「する」を使うのが自然であるため、「される」が使えないものとしておく。そうすると、中国語話者による漢語動詞の使用の問題は、以下の表 7-1 のように示すことができる。

表 7-1 中国語話者による問題の所在

中国語のタイプ	日本語の使用状況				合計
	「になる」の使用可否		「される」の使用可否		
非変化形容詞	○ 58 (ナ形 58)	× 14 (サ 15)	○1 (サ 1)	×71 (ナ形 58, サ 13)	72
主体変化形容詞	○ 0	× 26 (サ 26)	○0	×26 (サ 26)	26
主体変化動詞	○ 1 (サ他 1)	× 44 (サ自 40, サ自他 4)	○1 (サ他 1)	×44 (サ自 40, サ自他 4)	45
客体変化形容詞	○ 4 (ナ形 4)	× 19 (サ 19)	○6 (サ他 6)	×17 (ナ形 4, サ自 9, サ自他 4,)	23
客体変化動詞	○ 3 (サ 2)	× 60 (サ 62)	○31 (サ他 32)	×31 (サ自 12, サ自他 20)	63
合計	66	163	39	190	229

以下は、「になる」と「される」の誤用問題の所在を具体的に説明する。

<1> 「になる」の誤用問題の所在

中国語のタイプに関わらず、「になる」を使う可能性がある。本研究で抽出された二字漢語において、「になる」が使えるのは 66 語あり、使えないのは 163 語ある。その中には、中国語では形容詞である語は、そのまま日本語のナ形容詞として「になる」を使えばいいタイプと、使えないタイプがある。一方、中国語では動詞である語は、「変更、中止、廃止、延

期」の4語を除いて、すべて「になる」が使えない。整理すると、(3)と(4)の通りである。

(3) 中国語では形容詞である語

- 「になる」が使える：ナ形容詞(62語)
- 「になる」が使えない：サ変動詞(59語)

(4) 中国語では動詞である語

- 「になる」が使える：サ変動詞(4語)
- 「になる」が使えない：サ変動詞(108語)

このように、中国語では形容詞である場合、「になる」が使えない59語が習得しにくいと考えられる。一方、中国語では動詞である場合でも、以上の予測によって「になる」を使う可能性があるが、中国語の動詞（程度副詞“很”（とても）と共起しない語）は「になる」が使えないということを認識することが重要である。つまり、漢語動詞の語幹は名詞的特徴があるが、常に「名詞+になる」という規則が適用できるというわけではない。その上で、例外の4語だけを覚えればよいと考えられる。

〈2〉「される」の誤用問題の所在

中国語の客体変化形容詞と客体変化動詞は、「される」を使う可能性が高い。この2タイプに対応する二字漢語において、「される」が使えるのは37語あり、使えないのは49語ある。この49語は、「される」の誤用が生じやすいと考えられる。

一方、中国語の非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞は、文脈によって外的な原因が感じられると、「される」を使う可能性がある。この3タイプに対応する二字漢語において、「される」が使えるのは「抽象する、延期する」の2語しかない。つまり、中国語では「客体変化」という特徴を持っていない語は、基本的には「される」が使えないと考えられる。整理すると、(5)と(6)の通りである。

(5) 中国語では客体変化形容詞・動詞

- 「される」が使える：サ変動詞(37語)
- 「される」が使えない：サ変動詞(45語)
- ナ形容詞(4語)

- (6) 中国語では非変化形容詞・
 主体変化形容詞・動詞
- 「される」が使える：サ変動詞(2語)
 - 「される」が使えない：サ変動詞(84語)
 ナ形容詞(58語)

このように、中国語では客体変化形容詞・動詞である場合、「される」が使えない49語が習得しにくいと考えられる。一方、中国語では非変化形容詞・主体変化形容詞・動詞は、外的な原因が感じられる文脈があれば、「される」を使う可能性があるが、それほど一般的に使うとは考えられない。したがって、中国語では「客体変化」の特徴がない語（「NP1～NP2」の形が使えない語）は、まず「される」が使えないと認識することが重要である。その上で、例外として「延期する、抽象する」の2語しかないと覚えればよいと考えられる。

1.2 問題の分析

井上(2012)は、日本語と中国語の事象叙述について、以下のような相違があると指摘している。その1つの現象として、日本語は述語形式に時間の要素が内包されているのに対して、中国語は述語形式に時間の要素が内包されておらず、事象と時間との関係を表すわけではないと述べられている。

(7) 日本語：事象叙述の所与の枠組みに依拠して事象を叙述する。

中国語：事象叙述の所与の枠組みなしに事象を構成的に叙述する。

(井上 2012 : 2)

まず、「変化」の時間的な特徴を考えると、陳昭心(2009)によると、日本語の「壊れる」「落ちる」「破れる」のような変化動詞のテイル形は変化の結果状態を表し、例えば、「桜の花が落ちた」という成立過程と「桜の花が落ちている」という変化の結果状態とは異なる。一方、中国語の「壊」「落」「破」のような事態は、変化の実現済みや変化の成立に注目するのが一般的である。

(8) a. 桜の花が落ちた。

桜花 落了。

桜 落ちる た

b. 桜の花が落ちている。

桜花 落了。

桜 落ちる た

(陳 2009 : 227)

また、主体の変化と客体の変化の区別を考えると、日本語では他動詞と自動詞とが、ある部分を共有しつつ形態的な対立をなしているのに対し、中国語（英語と同様）では同じ動詞の形が他動詞としても自動詞としても使われることが多い（寺村 1976）。そのため、客体の変化を表す際に、日本語では他動詞と形態的に類似する自動詞や他動詞の受身形（降格受動文）を使うのに対して、中国語では同じ形の動詞と目的語の語順変化のみで実現するのである。つまり、他動詞を自動詞化する際に、中国語では自他の形態的な対立がなく、受身マーカ―が必須ではないという点で、日本語とは異なる。中国語の受身マーカ―は、話し手にとって好ましくない事柄に使うのが一般的である（刘月华等 2001 など）

(9) a. 他 摔 了 瓦。(彼が瓦を割った)

彼 割る た 瓦

b. 瓦 摔 了。(瓦が割れた)

瓦 割れる た

c. 瓦 叫 他 摔 了。(瓦は彼に割られた)

瓦 受身マーカ― 彼 割る た

(寺村 1976 : 221 より)

前節の分析によると、中国語話者が「漢語+になる」や「漢語+される」という形を使うと予測した。その多くの場合は、中国語では、漢語に相当する語の後にアスペクト助詞“了”を付ける形を使うのに対して、日本語では漢語動詞自体（「漢語+する」）に時間的要素（タ・テイル）などが内包されている形式を使うのである。例えば、

(10) a. 企業収益が減少した・している。

企业 收益 减少 了。

企业 收益 減少する た

b. インターネットに対する規制が強化された・強化されている。

网络 管理 强化 了。

インターネット 管理 強化する た

(10) のように、日本語ではタとテイルによって、変化の成立と変化の結果状態とに使い

分けられているが、中国語ではいずれも「NP+V+了」の形であり、「変化の成立」に注目しているのである。

また、漢語動詞の場合、和語動詞のような形態的な自他対応がないが、「自動詞：する—他動詞：させる（自動詞が原型）」、「自動詞：される—他動詞：する（他動詞が原型）」、「自動詞：する—他動詞：する（自他同形）」となっている（庵 2008）。一方、中国語ではそういった対立が存在しない。つまり、主体の変化なのか、客体の変化なのか、日本語では形態に現れるということである。例えば、(10) a は「～が減少する」の形なので、主体の変化だとわかる。(10) b は「～が強化される」という形なので、客体の変化だとわかる。一方、中国語は、そういったような形態的な対立がなく、主体変化動詞であれ、客体変化動詞であれ、自動詞表現としては「NP+V+了」という形によって表されている。そうすると、主体なのか、客体なのかは、「NP」と「V」の意味関係によって判断するしかないことになる。特にVがもともと中国語では他動詞である場合、NP が主体でありながら、客体でもあるという理解になる場合がある。

以上をふまえて、日本語と中国語の「変化」表現の構造は、(11) のように示すことができる。つまり、日本語の変化を表す表現は、動詞を中心にしてボイスとアスペクト・テンスが融合されている述部形式となっている。それに対して、中国語にはそういった枠組みがなく、動詞（あるいは形容詞）に時間的、意味的成分を付け加えて構成されている形を用いて表現するため、[変化の成立—変化の結果状態]、[主体の変化—客体の変化] といった特徴は、言語の表層には現れず、意味的に解釈する必要がある。

(11) 【日本語と中国語の変化表現の構造】

日本語： [[漢語動詞（～する）] +ボイス+アスペクト・テンス]

中国語： 形容詞・動詞+アスペクト

（「変化」の付加成分+形容詞（+アスペクト））

(12) 日本語の「変化」表現：融合的、形態的

中国語の「変化」表現：構成的、意味的

以上のような相違があるため、中国語話者は、「変化の成立」、「客体の変化」といった意味を捉えると、日本語の融合的な表現形式が未習得であれば、そういった意味をいちいち形式として具現化する可能性がある。そのために、「漢語+になる」＝「変化の成立」、「漢語+される」＝「客体の変化」といったような理解になるおそれがある。これは、中国語話者

が漢語動詞を習得する困難点である。

2. 発達段階別の特徴の予測

「漢語+になる」や「漢語+される」の誤用は、上級段階にも数多く残っているとされている。初級、中級段階にも生じうると予測できるが、日本語における漢語の用法（品詞や自他など）や、事態の捉え方に関する日中間の差異といったような知識が不安定であるため、かたまりとして「漢語+後接形式」を使う可能性がある。「漢語+になる」や「漢語+される」の誤用は、上級以降になっても残されているのは、日本語の知識、母語の知識、認知的な要素が共に作用して現れるためであろうと考えている。そして、日本語のレベルがさらに進んでいったら、化石化する可能性もあれば、日本語における実際の使用との異なりに気づき、日本語の発想に沿って正しく使えるようになるというプロセスが推測されている。図7-1の通りである。

具体的に言えば、発達段階別の特徴は以下の通りに予測される。

①上級では、品詞と自他のずれによる誤用のみならず、ずれのない場合の誤用も多い。

②日本語環境に触れる機会が多くなり、上級以降に学習レベルが進むにつれて、品詞と自他のずれがない場合の誤用が減少する一方、品詞と自他のずれによる誤用が消滅しにくい。

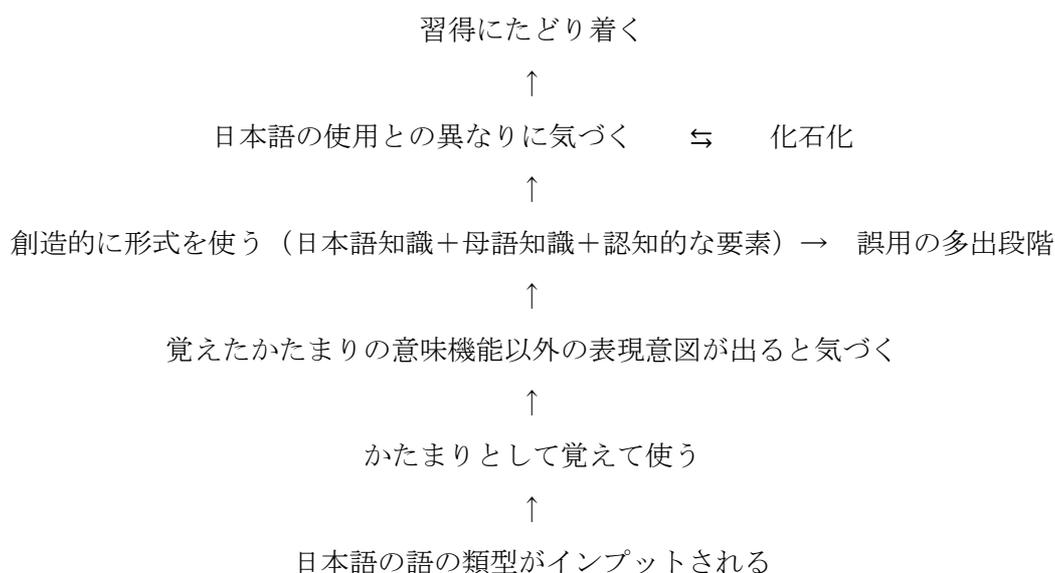


図 7-1 発達プロセスのイメージ

3. 母語の知識を活かした指導対策の予想

日本語では、「サ変動詞」は一般的に「になる」を使わない、「自動詞」は「される」を使わないというような規則は、日本語母語話者にとっては、潜在的な母語知識として覚えられていると言えるが、非日本語母語話者にとってそのような規則が有用であるとは言えない。なぜなら、日本語母語話者には、その語がサ変動詞であるかどうかや、自動詞であるかどうかはわからないためである。したがって、できるかぎり母語の知識を利用して規則を作った方が有用ではないかと考えられる。

以上分析してきた中国語の「変化」を表す語と日本語の対応関係を簡略化すると、表 7-2 になる。そうすると、「になる」の誤用は、日本語で「サ変動詞」である場合に起こる、「される」の誤用は、主に中国語で「客体変化形容詞・動詞」である場合に起こるということがわかった。このような対応関係に基づき、この節では、母語の知識を活かして「～になる」と「～される」の誤用を減らすための対策の可能性を考えておく。

表 7-2 両言語の対応関係（簡略版）

	中国語	日本語	
	非変化形容詞	ナ形容詞	} → *「になる」
	主体変化形容詞・動詞	サ変動詞	
*「される」←	客体変化形容詞・動詞		

<1> 「～になる」の誤用を減らすための対策

まず、「になる」を使うと、誤用になるのは、日本語では「サ変動詞」の場合である。中国語に対応すると、主に主体変化形容詞・動詞と客体変化形容詞・動詞であり、一部のみが非変化形容詞となる。第 5 章で述べたように、非変化形容詞は、“了”と“没”が使えないのに対して、そのほかの変化形容詞・動詞（主体・客体を含む）は、“了”と“没”が使える。つまり、(13) の通りに、「非変化形容詞」と「変化形容詞・動詞」という 2 つの部分に分けられる。

(13) [非変化形容詞] : 「透明」 → *透明了, *没透明

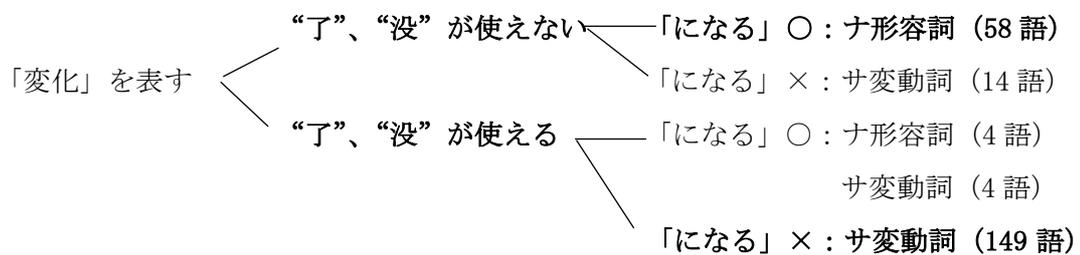
[主体変化形容詞] : 「成熟する」 → 成熟了, 没成熟

[主体変化動詞] : 「上昇する」 → 上升了, 没上升

[客体変化形容詞] : 「普及する」 → 普及了, 没普及
 [客体変化動詞] : 「開通する」 → 开通了, 没开通

(13) のような中国語の特徴は、日本語では「になる」が使えるかどうかを見ると、「変化形容詞・動詞」、即ち了”と“没”が使える語は、基本的に日本語のサ変動詞に対応するため、「になる」が使えない。一方、「非変化形容詞」、即ち了”と“没”が使える語は、基本的にナ形容詞に対応するため、「になる」が使える。図に示すと、(14) の通りである。

(14) 「中国語から見た「になる」の使用可否」



(14) に基づき、「になる」を使う規則は、(15) のように示すことができる。つまり、①中国語で、“了”と“没”が使えない場合は、「になる」が使える、②中国語で、“很”が使って、“了”と“没”が使える場合も、「になる」が使えない。このような規則を作ったら、カバー率が90.4%となる。一方、例外の場合があるが、リストアップし、明示的に教えればよいと考えられる。つまり、「一致」などの14語は、日本語では漢語サ変動詞であり、「になる」が使えない。また、「明確」などの4語は、ナ形容詞であり、「になる」が使える。「変更」などの4語は、「～が変更になる」という形式で使うのは、責任が感じられることを避け、客観的に情報やお知らせを伝える場合である。

(15) 「母語の知識に基づく規則」

① [“了”と“没”：×] → 「になる」が使える (58語)

※ 例外は、以下の14語である。

一致, 低下, 矛盾, 繁盛, 憤慨, 密集, 平均, 窮乏, 不足, 乾燥,
 悲観, 楽観, 抽象, 謙遜

② [“了”と“没”：○] → 「になる」が使えない (149語)

※ 例外は、以下の8語である。

明確, 豊富, 健全, 温暖

変更、中止、廃止、延期

〈2〉「～される」の誤用を減らすための対策

次に、「される」の誤用が生じやすいのは、中国語の客体変化形容詞と客体変化動詞の場合である。一方、「客体変化」という特徴がない語、即ち非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞の場合も、「される」の誤用が生じる可能性があるが、それほど多くないだろうと予測した。この2種類の区別は、(16)のように示すことができる。つまり、[NP1+V+NP2]という他動詞文が使えるかどうか、2つの部分に分けられる。

(16) [客体変化形容詞と客体変化動詞] :

[NP2+V+了] と [NP1+V+NP2] が使える

「普及する」: 教育普及了, 普及了教育

「開通する」: 铁路开通了, 开通了铁路

[非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞] :

[NP2+V+了] が使えるが、[NP1+V+NP2] が使えない

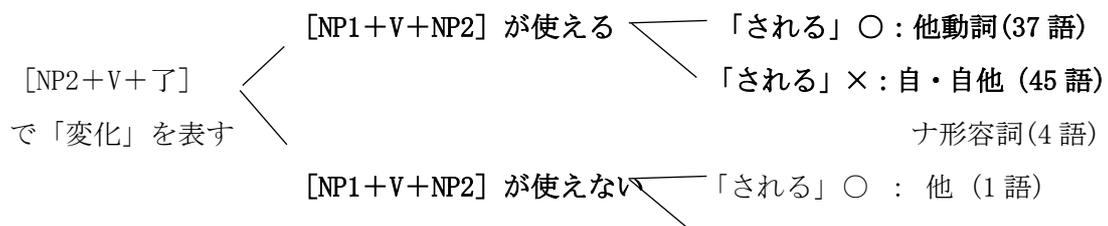
「矛盾する」: 两者矛盾了, *矛盾了两者

「混乱する」: 头脑混乱了, *混乱了头脑

「上昇する」: 物价上升了, *上升了物价

(16) のような中国語の特徴は、日本語では「される」が使えるかどうかを見ると、まず、[NP1+V+NP2] が使える語は、中国語の発想では「される」を使いやすいが、日本語ではデフォルト的に「～される」が使えるのは他動詞の38語である。それ以外は、日本語ではほとんど自動詞と自他両用動詞であり、即ちデフォルト的に「～する」を使うのである。また、ナ形容詞も4語がある。一方、[NP1+V+NP2] が使えない語は、日本語でも「される」が使えない。例外は「延期」の1語のみである。

(17) 「中国語の客体変化形容詞・動詞と「される」の使用可否」



(17) に基づき、「になる」を使う規則は、(18) のように示すことができる。つまり、① [NP2+V+了] と [NP1+V+NP2] が使える場合、「される」を使わなくてはいけないのは、37 語があり、それ以外は、[NP2+V+了] を使って「変化」を表したい場合、外的な原因による変化と捉えるとしても、「漢語+する」形で変化を表すため、全て「する」を使うと教えれば問題ないと考えられる。② [NP+V+了] が使えるが、[NP1+V+NP2] が使えない語は、「～される」が使えないと教えればいい。このような規則を作ったら、カバー率が 96.8% である。

(18) 「母語の知識に基づく規則」

① [「NP2+V+了」: ○ / 「NP1+V+NP2」: ○]

→「される」を使わなくてはいけないのは、次の 37 語があり、それ以外は「する」を使う (45 語)

◆語のリストを提示する。

圧縮, 解放, 開放, 拡充, 強化, 消耗, 冷凍, 解除, 改良, 革新, 形成, 合成, 再現, 削減, 振興, 増強, 打開, 達成, 廃棄, 爆破, 暴露, 混同, 中止, 変更, 延長, 破壊, 変革, 分解, 開始, 喪失, 満足, 公開, 誇張, 統一, 緩和, 固定, 閉鎖

※例外は、以下の 4 語である。

明確, 温暖, 健全, 豊富

② [「NP2+V+了」: ○ / 「NP1+V+NP2」: ×] → 「される」が使えない (70 語)

※例外は、以下の 1 語である。

延期

以上述べてきたように、中国語の知識を利用して漢語動詞の使用規則を教えると、かなりカバー率が高いことがわかった。母語の知識を活かして漢語動詞の誤用を減らすのに有効であると示唆された。なお、残された課題が 1 つある。それは、中国語話者が「漢語+する」形をどのように捉えるかは、中国語の視点からは推測できないことである。この課題は、実際の調査によって解明する必要があるため、本論文の第三部の『調査編』で検討する。

4. まとめ

本章では、対照分析の結果に基づき、中国語話者における漢語動詞の習得上の問題所在を

予測した。第6章では、まず、中国語の「変化」を表す語は、「非変化」か「変化」、「主体」か「客体」という区別によって意味・用法が異なるため、それらの語に対応する日本語の漢語語彙を使う場合も、異なる傾向があると予測した。次に、日本語における使用状況を加えて考え、問題の所在が絞られた。また、発達段階からみると、上級及び上級以降にも誤用が残される可能性があるとして予測した。さらに、第7章では、母語の中国語の知識を活かした教育試案の可能性を検討した。第6章の対照分析の結果から、日本語と中国語の間における語の類型（品詞と自他）のずれが存在することがわかり、誤用が起りやすいところであると予測した。しかし、先行研究のように言語間のずれと誤用の関係のみについて考察することにとどまると、①ずれがない場合でも誤用が起りうるため、誤用の起こる状況が全体的に把握できず、②教育上では両言語の対応関係に基づいた語彙リストを全て提示すると、学習負担がかかり、必ずしも効果的とは言えない。そのため、一歩進んで中国語話者の母語の文法知識を活かして教育試案の可能性を検討した結果、品詞や自他の分類ではなく、中国語話者が内省できる中国語のテストフレームを用いて、日本語の漢語動詞の使用規則を説明すると、高いカバー率が示唆され、教育上での実行可能性と効果が期待できる。

なお、以上のような仮説は、中国語話者による漢語動詞の使用実態と一致するかどうか、実際の調査を通して検証する必要がある。また、中国語の視点から、「になる」と「される」の使用状況は予測できるが、「する」をどのように捉えるかは予測できない。次の第三部の『調査篇』では、これらの課題を解決することを目指す。

第三部 調査篇

対照分析の結果から、日本語の漢語動詞と中国語の対応関係が明らかになった。中国語の視点から予測すると、中国語話者は、ずれのある場合にのみ誤用をするのではなく、ずれのない場合でも誤用をする可能性がある。しかも、中国語における用法の違いによって、それらに相当する漢語動詞の使用傾向も異なるはずである。また、誤用の多出段階は、上級及びそれ以降であると予測した。なお、これらの予測は、中国語話者の実際の使用状況と一致するかどうか、調査によって検証する必要がある。また、対照分析の結果によって予測ができない場合もあるため、それも調査による探索が必要であり、特に中国語話者の内面的考察が必要であろう。さらに、対照分析では母語知識を活かして誤用を減らすための対策を提出する可能性も示唆されたが、母語知識を活かす効果を証明するため、中国語話者の実際の理解と使用における母語の働き方、母語と他の諸要因との関係性を明らかにする必要がある。最後に、日本語母語話者の使用実態とはどのような違いがあるかを見ることで、中国語話者における問題点をより明確にする必要もある。第三部の「調査篇」では、対照分析による予測を検証するために行った調査とその結果について述べる。

第8章 調査の概要

本章では、調査の目的、調査の方法についての概要を述べる。

1. 調査の目的

本研究の調査の目的は、中国語話者の漢語動詞の使用における母語の働き方を明らかにし、問題の所在を正確に捉えることである。具体的には、以下の4つの課題を設定し、調査を実施する。

課題1：中国語話者による漢語動詞使用において、母語の働きがあるかどうか、どのような働き方があるのか。

第5章では、中国語の「変化」を表す語は、5つの種類に分けられ、それぞれの用法が異なっていることが明らかになった。そういった用法の違いは、中国語話者が、漢語動詞を使用する際に「～になる」「～する」「～される」という形式の選択に影響を与える可能性があ

ると予測したが、それが中国語話者の使用実態と一致するかどうかは、調査を用いて検証する必要がある。

一方、漢語動詞を使用する際に、中国語の用法（語の種類）を判断基準としているのか、それ以外にはどのような基準があるのか、中国語の用法は、被験者の言語処理の過程においてどのように位置付けられているのか、といった課題に基づき、中国語話者の内面的な特徴も考慮に入れて考察する。また、第7章で述べたように、中国語の視点から「～になる」「～される」の使用が予測できるが、どのような場合に「～する」を使うかは予測しにくいいため、「～する」の使用実態に基づき、中国語話者の使用意識を考察する。

課題2：正用と誤用がどのように分布しているのか、それぞれの要因が何か。

有用な教育対策を提案するには、学習者の使用実態における正用と誤用を正確に把握する必要がある。そのために、まず、産出した形式を観察し、正用と誤用がどのように分布しているかを明らかにする。それにとどまらず、それぞれ正しい形式を使う場合の使用意識、誤用する場合の使用意識に関する考察を通して、正用と誤用の要因を解明していく。特に正しい形式が産出できるとして、その理解が日本語とずれる場合があるかどうかを、考慮に入れて考察する。

課題3：学習環境とレベルによって、使用実態がどのように変化するのか。母語の影響が消えていくのが、残ってしまうか。

第7章では、中国語話者による漢語動詞の「になる」や「される」の誤用は、学習レベルが高い段階に大量に出現しはじめると予測したため、上級レベル及び超級レベルを調査の対象とし、漢語動詞の使用と理解を考察することにする。また、上級レベルを、JFLとJSLに分けて、学習環境の影響も考慮に入れて考察する。つまり、日本語の環境に触れる機会が増え、日本語のレベルが上がるにつれて、正しい使用と理解が進んでいくのかを分析することで、消えにくい誤用があるのかを明らかにする。もしあれば、それが中国語話者にとって最も習得しにくいポイントだと考えられる。

課題4：日本語母語話者の使用実態と比較すると、中国語話者における問題が何か。

第6章では、日本語における漢語動詞には、「になる」の使用、「する」と「される」の使用の割合にゆれがあることがわかった。それでは、本研究で取り扱う漢語動詞は、日本語母語話者における使用実態がどうなるのかも、同じ調査を行うことにする。その結果を中国語話者と比較する、どのような相違点があるのか。それが中国語話者における問題の所在と考えられる。

以上のような課題を解明することによって、中国語話者による漢語動詞の習得における母語の働き方、問題の所在を絞り込むことができる。その結果に基づき、教育対策を求めることも望まれる。

2. 調査の方法

以上の調査目的を達成するため、表 8-1 のような調査方法を取ることにする。

表 8-1 調査の構成

	調査対象	調査方法
質的調査	中国語話者（上級）	文法テスト+FI
量的調査	中国語話者（JFL-上級）	自然さ判断テスト+FI
	中国語話者（JSL-上級）	
	中国語話者（超級）	
	日本語母語話者	

〈1〉母語の働き方を把握するための質的調査

まず、質的調査は、前節で述べた課題 1 と課題 2 に基づき、対照分析の結果をふまえ、中国語話者における使用実態、使用意識、正用と誤用の分布を観察することで、母語の働き方を質的に把握するためである。中国語環境の上級学習者（JFL）を対象に、文法テストとフォローアップインタビューを合わせた手法をとり、少人数の質的な調査を行う。文法テストは、三者択一テストと複数選択テストの 2 種類を行い、例として以下の通りに示す。

【三者択一テストと複数選択テスト】

三者択一テストは、「になる」「する」「される」の 3 つの形式において、一番適切だと思うものを 1 つのみ選択させるテストである。実際に産出する際に、どの形式が選択されるかを見るためである。複数選択テストは、「になる」「する」「される」の 3 つの形式において、適切だと思うものを全て選択させるテストである。実際に産出する形式は A であるが、B や C も使えると思うのかを見るためである。また、複数選択テストにおける選択のパターン、例えば、「になる+する」、「する+される」といったような組み合わせの様相も分析する。

(1) 「三者択一テストの例」

以下の問題では、一番適切だと思う形式にチェックをつけてください。

(※「される」は受身を表し、自発や尊敬を考えないでください。)

1. 紫外線を浴びると、肌が乾燥 (①になる✓ ②する ③される)。

(2) 「複数選択テストの例」

以下の問題では、適切だと思うもの全てにチェックをつけてください。

(※「される」は受身を表し、自発や尊敬を考えないでください。)

1. 紫外線を浴びると、肌が乾燥 (①になる✓ ②する✓ ③される)。

【FI】

FI とは、「具体的な行動に際してその行動の参加者にどのような意識があったかを明らかにしようとする手続きである」(ネウストプニー1994:12)。社会言語学などの分野でよく使われるが、言語学、言語習得の研究にも取り入れられている。その意義は、調査データを収集する際に、参加者の行動は録音や録画で記録できるが、行動表面に出ない参加者の意識が記録できないため、FI という方法を用いて記録を補足することができるということである (cf. ネウストプニー1994)。また、FI は記録の時点での意識を調べる方法であるため、調査の後にすぐ FI を行うことが重要である。

したがって、以上のテストの後、被験者に対して FI を行い、「になる」「する」「される」を選択する理由、判断する基準を聞く。被験者の答えを記述し、全体の傾向を分析する。

<2>問題の所在と要因を解明するための量的調査

量的調査は、以上の質的調査で観察した母語の働き方、問題の所在をより明確にするためである。まず、質的調査の結果に基づき、誤用が生じやすいところに焦点を当て、正用が生じやすいと思われる場合も考慮に入れ、自然さ判断テストと FI を合わせた手法をとって、調査対象語の数、被験者の数を増やして量的な調査を行う。自然さ判断テストは、(3) の通りである。FI は質的調査と同じように、「になる」「する」「される」を判断する基準を聞く。

(3) 「自然さ判断テストの例」

以下の問題では、「になる」「する」「される」の3つの形式が自然かどうかを判断してください。(※「される」は受身を表し、自発や尊敬を考えないでください。)

1. 紫外線を浴びると、肌が ()。

①乾燥になる (自然✓ どちらかという自然 どちらかという自然 不自然)

②乾燥する (自然 どちらかという自然✓ どちらかという自然 不自然)

④乾燥される（自然 どちらかという自然 どちらかという自然 不自然✓）

また、学習環境とレベルの要因も考慮に入れ、JFL と JSL の上級学習者、および超級学習者を対象に、それぞれの使用実態を調査することで、その変化と要因を解明する。特にその中で、母語の働き方がどのように変化するかを明らかにすることで、消えにくい問題点が絞られる。

さらに、日本語母語話者を対象に、同じ自然さ判断テストを用いて調査を行い、超級学習者の使用実態と比較することで、超級学習者における問題点を特定する。そうすると、中国語話者における最も習得しにくいことが判明すると考えられる。

上に述べた調査方法は、学習者の言語処理を可視化できると考えられる。単一選択問題であれば、実際に産出する形式がどれなのかはわかるが、ほかの可能な形式を使うかどうかはわからない。複数選択問題であれば、複数の形式を使う可能性があることはわかるが、その間の自然さの差がわからない。自然さ判断テストであれば、その自然さの差が見えるのである。さらに、どのような基準に基づいて、形式の選択及びそれらの自然さの判断をするのか、FI を用いて被験者に聞く必要がある。例えば、(4) のような言語処理のプロセスが考えられ、本研究の調査方法がそのプロセスと一致すると考えられる。

(4) 「中国語話者による言語処理の過程の予測」

中国語の表現意図：进入昭和时期之后、西装迅速地普及了。

↓

日本語の産出：昭和期に入ると、洋服は急速に普及 {①になった ②した ③された}。

↓

I：一番適切なのは、「になる」だと思って、実際に産出する。

II：ただ、「になる」の他に、「する」と「される」も使えると思う。

III：三者の自然さは、「になる」>「される」>「する」の順になると思う。

FI：なぜそう思うのかと言えば、「まず「変化」を表すため、「になる」を使う。また人の力によって普及すると捉えるため、「される」も使えると思う。さらに、「普及する」という形式も見たことがあるので、「普及する」も使えると思う。」

第9章 調査の結果と分析

1. 母語の働き方を把握するための質的調査

1.1 調査の概要

まず、調査の目的、調査対象語と調査文の選定、被験者、調査の手順について説明する。

1.1.1 調査の目的

前述の通り、質的調査は、前節で述べた課題1と課題2に基づき、対照分析の結果をふまえ、中国語話者における使用実態、使用意識、正用と誤用の分布を観察することで、母語の働き方を質的に把握するためである。具体的には、以下のような4つの課題を設け、それぞれの仮説を立てる。

<1>中国語の影響があるかどうか、中国語の種類によって使用傾向が異なるかどうか。

仮説として、中国語の影響があり、中国語の種類によって使用傾向が異なると予測する。

- a. 「非変化形容詞」は、「になる」が最も使いやすいただろう。中国語では「変化」を表す際に、“变”（なる）や“越来越”（ますます）といったような「変化」を表す有形の成分が必須なためである。「される」を使う可能性が少ないが、外的な原因を感じると使う可能性がある。
- b. 「主体変化形容詞」は、aの「非変化形容詞」とほぼ同じように、「になる」が使いやすいただろう。ただ、中国語では「変化」を表す有形の成分が必須ではないため、「非変化形容詞」より「になる」の使用が少ないだろう。「される」を使う可能性が少ない。
- c. 「主体変化動詞」の場合、両言語の間に用法のずれがないにもかかわらず、「する」が正しく使えるとは限らない。「変化」を表す形式として「になる」を使う可能性がある。「される」を使う可能性が少ない。
- d. 「客体変化形容詞」は、「になる」も「される」も使うやすいただろう。
- e. 「客体変化動詞」は、「される」が一番使いやすいただろう。「変化」を表す形式として「になる」を使う可能性がある。

<2>調査の方法によって、結果には差があるかどうか、複数選択の場合、どのようなパタ

ーンがあるのか。

全体の使用傾向は、三者択一テストと複数選択テストが同じなはずである。つまり、複数選択テストは、2つ以上の形式を選ぶと予測されるが、全体の選択率から見ると、各形式に対する許容度が三者択一テストと変わらないだろうと思われる。また、複数選択における選択パターンは、a「非変化形容詞」、b「主体変化形容詞」、c「主体変化動詞」の場合、「になる+する」を選ぶ可能性が高い。d「客体変化形容詞」とe「客体変化動詞」の場合、「になる+される」を選ぶ可能性が高い。「する」を加えて三者とも選ぶのもあると予測できる。

<3>中国語話者がどのような基準をもって「になる」「する」「される」の三つの形式を選択するのか。

「になる」「する」「される」の三つの形式を選択する基準として、中国語と日本語の用法を明らかに意識して選択するという可能性が低い。意味の解釈が主な手がかりであろうと考えられる。特に「する」は、どのような手がかりをして選択するのか、予測しにくい。そのため、「する」はどのような手がかりをして選択するのかを見るため、FIで被験者の使用意識を示し、アンケート調査のみでは捉えられない内面的特徴を明らかにする。

<4>日本語における使用に基づいて分析すると、正用と誤用はどのような分布になるのか。

a「非変化形容詞」、b「主体変化形容詞」、c「主体変化動詞」の場合、「になる+する」を選ぶ可能性が高く、日本語では「する」を使うと正用となるため、主に「になる」の誤用が生じやすいと予測できる。

d「客体変化形容詞」とe「客体変化動詞」の場合、「になる+される」を選ぶ可能性が高いため、まずは「になる」の誤用が生じやすい。また、日本語では「する」のみが使える場合に、「される」の誤用が生じやすいと予測できる。

1.1.2 調査対象語と調査文

以上の仮説に基づき、第5章で特定した229語の研究対象語から、40語を抽出してそれぞれ中国語の類型と日本語における使用形式によって分類した結果、表9-1の通りである。これらの語を質的調査の対象とする。予測として、これらの語は中国語の視点から、「になる」や「される」を使う可能性がある。そして、中国語における用法の違いによって、それぞれ使用傾向が異なる。さらに、日本語における使用によって、正用と誤用の分布が異なってくると考えられる。後の節で、それぞれ分析していく。

表 9-1 質的調査の対象語

中国語のタイプ	日本語における使用	調査対象語
a. 非変化形容詞	「する」	乾燥、不足、低下、一致、矛盾
b. 主体変化形容詞		混乱、進歩、成功、成熟、氾濫、 流行、緊張、後悔、興奮、沈黙
c. 主体変化動詞		下降、骨折、失業、成長、終了
d. 客体変化形容詞	「する」	荒廃、孤立、重複、充実、普及
	「される」	公開、統一、緩和、閉鎖、固定
e. 客体変化動詞	「する」	開通、分裂
	「される（「になる）」	中止、変更、延長
	「する」＋「される」	改善、拡大、解決、回復、実現

次に、アンケートの調査文は、NINJAL-LWP for BCCWJ を用い、表 9-1 に示した研究対象語の「する」形（例：乾燥する）をキーにして、検索した結果から選んだ。文を選ぶ際に、「変化」の意味が想定されるもの、タ形やスル形で終わるものを対象とする。テイル形は状態と捉えられやすいと予想するため、対象外とする。このように抽出した文では、漢語動詞の語幹の後「になる、する、される」の三択を設定して問題文を作り、計 40 問がある（全ての調査文は、付録を参照されたい）。

(1) [調査文の例]

- a. 6 年前と比べると体力、肝機能が低下（①になった ②した ③された）。
- b. 比率が前年よりやや下降（①になりました ②しました ③されました）。

以上のように設定した調査対象語と調査文を用いて、文法テストを作った。被験者を 2 グループに分け、それぞれ三者択一テストと複数選択テストを行った。次に、被験者の概要について説明する。

1.1.3 被験者

三者択一テストは、JFL 環境の上級学習者を対象とする被験者の概要は、表 9-2 の通りである。中国の大学で日本語を専攻とする大学 3、4 年生（9 名）であり、皆日本語能力試験（以下 JLPT）の N1 合格者である。ここでは、N1 合格を上級と見なすこととする。平均日本語学習歴が 2 年 8 ヶ月であり、日本に留学する経験がない。説明の便宜上、C1～C9 と呼ぶこととする。

複数選択テストも、JFL 環境の上級学習者を対象とする。中国の大学で日本語を専攻とする大学 4 年生、大学院 1 年生（7 名）で、皆 JLPT の N1 合格者であるため、上級と見なす。平均日本語学習歴が 3 年 8 ヶ月であり、日本に留学する経験がない。C10～C16 と呼ぶこととする。

表 9-2 質的調査の被験者

	三者択一テスト	複数選択テスト
属性	中国国内の大学の日本語専攻生 (学部 3 年生 2 人、4 年生 7 人)	中国国内の大学の日本語専攻生 (学部 4 年生 3 人、大学院生 4 人)
人数	9 人	7 人
平均学習歴	2 年 8 ヶ月 (0.42)	3 年 8 ヶ月 (0.49)
レベル	上級 (N1 合格)	
日本留学経験	なし	

※平均学習歴は、その標準偏差を後の () に付けた。

1.1.4 調査の手順

三者択一テストは 2019 年 8 月に、複数選択テストは 2019 年 12 月に実施した。アンケート調査は、30 分以内に答えてもらった。FI は、アンケート調査後の 2 日以内、チャットツールを用いて中国語で行い、1 人に平均 1 時間を要した。FI では、「になる」「する」「される」を選んだ理由を中心に聞いた。

1.2 調査の結果と分析

本節では、質的調査の結果を分析する。分析は、3 つの部分に分けて行う。

1.2.1 節では、全体的な使用傾向、使用実態の内訳、選択パターンの様相から、使用実態と母語の相関性について分析する。

1.2.2 節では、FI の結果に基づき、中国語話者における内面的な特徴を分析する。

1.2.3 節では、日本語における使用に基づき、正用と誤用の分布を分析する。

1.2.1 使用実態と母語の相関性

1.2.1.1 全体的な使用傾向

まず、中国語の影響がどのように振る舞うのかを見るため、中国語のタイプによって、各タイプの語における「になる」「する」「される」の選択数を集計し、各のタイプにおける三つの形式それぞれの割合を計算した。三者択一テストの結果は表 9-3 の通りであり、複数選択テストの結果は表 9-4 の通りである。図 9-1、図 9-2 は、グラフ化したものである。

表 9-3 三者択一テストの結果 (N=9)

中国語のタイプ	各形式の選択数 (割合)			総回答数	問題数
	になる	する	される		
非変化形容詞	26(57.8)	18(40.0)	1(2.2)	45	5
主体変化形容詞	39(43.3)	47(52.2)	4(4.5)	90	10
主体変化動詞	14(31.1)	25(55.6)	6(13.3)	45	5
客体変化形容詞	28(31.1)	12(13.3)	50(55.6)	90	10
客体変化動詞	22(24.4)	21(23.3)	47(52.2)	90	10

※総回答数は、「[人数 9] × [問題数]」の結果である。

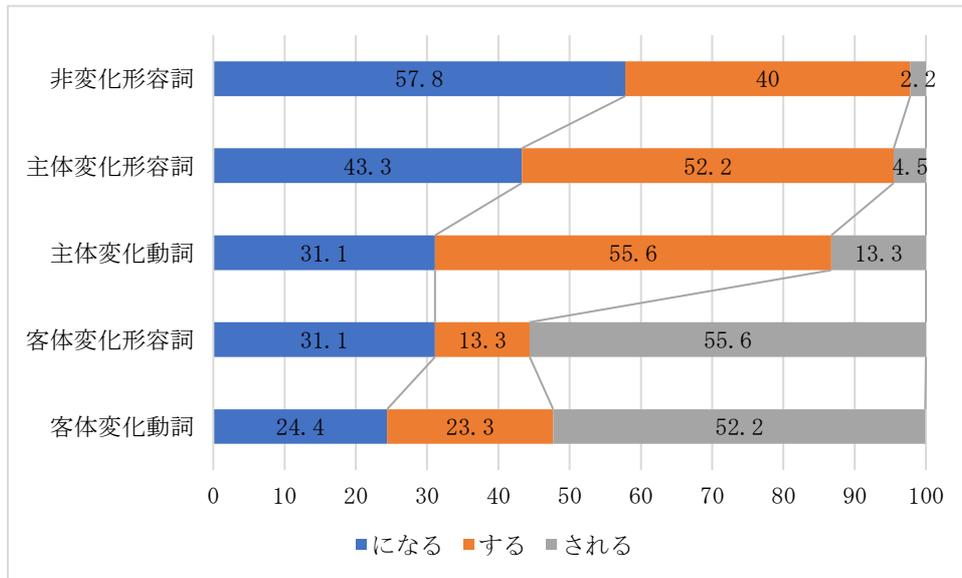


図 9-1 三者択一テストの選択数の割合

表 9-4 複数選択テストの選択数と割合 (N=7)

中国語のタイプ	各形式の選択数 (割合)			総回答数	問題数
	になる	する	される		
非変化形容詞	28 (57.8)	14 (35.5)	3 (6.7)	45	5
主体変化形容詞	41 (42.3)	48 (49.5)	8 (8.2)	97	10
主体変化動詞	20 (40.8)	24 (49.0)	5 (10.2)	49	5
客体変化形容詞	41 (39.8)	19 (18.5)	43 (41.7)	103	10
客体変化動詞	25 (24.0)	19 (18.3)	60 (57.7)	104	10

※複数選択のために、総回答数は「人数7」×「問題数」の結果を超えている。

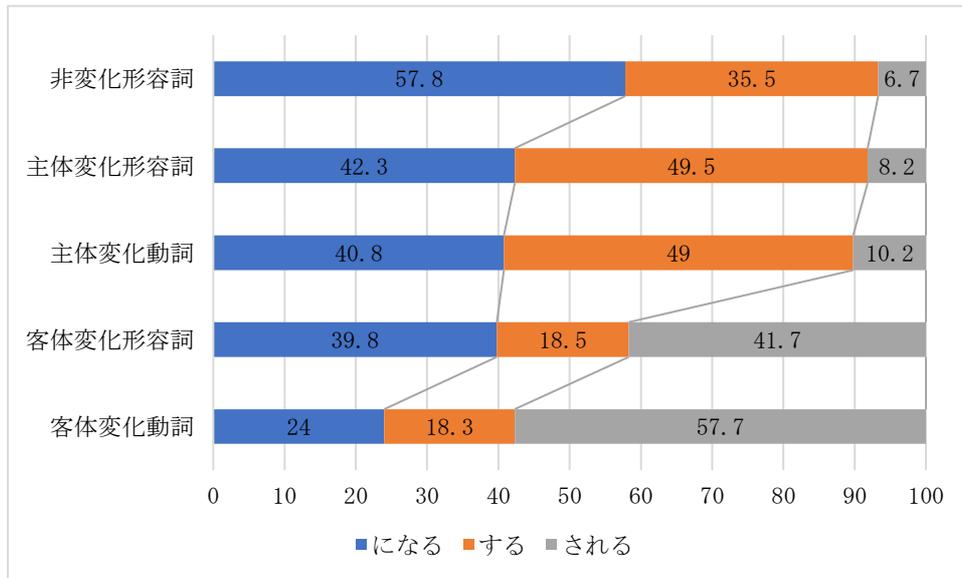


図 9-2 複数選択テストの選択数の割合

次に、三者択一と複数選択とは、全体的選択傾向が異なるかどうかを見るため、両者の結果について、 χ^2 検定をかけて検証した。その結果、「になる」($\chi^2(4) = 1.409, ns$)、「する」($\chi^2(4) = 1.631, ns$)、「される」($\chi^2(4) = 5.933, ns$)、それぞれの選択数の割合は、三者択一テストと複数選択テストの間に、有意な差が見られなかった。つまり、「になる」「する」「される」に対する容認度は、回答の形式(1つを選ぶか、複数を選ぶか)によって変わらないということがわかった。

以上の結果から、被験者が中国語の用法に沿って、漢語動詞の形式を選択する傾向があることが明らかになった。具体的には、以下の通りである。

①「になる」は、形容詞の場合のみならず、動詞の場合でも選択されている。主体変化動詞と客体変化動詞において、「になる」の選択率は、の三者択一テストでは31.4%と24.4%であり、複数選択テストの複数選択テストでは40.8%と24.0%である。ただ、「になる」の選択率が最も高いのは、非変化形容詞の場合である。即ち、「変化」を表す際に、“变得～”(～になる)などの有形の成分が求められる語(乾燥、低下など)である。

②「する」は、非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞において多く選択されている。特に主体変化形容詞と主体変化動詞の2種類であり、即ち“变得～”などの成分が必須ではなく、“～了”の形のみで言える語(成熟、進歩、下降、失業など)である。

③「される」は、客体変化形容詞と客体変化動詞において多く選択されている。それ以外

の3種類は、「される」の選択が見られるが、選択率が比較的低いのである。

1.2.1.2 使用実態の内訳

次は、各タイプの内訳をみることによって、語の間に差があるかどうかを分析する。

表 9-5 中国語の非変化形容詞における使用状況

調査文	三者択一 (N=9)			複数選択 (N=7)		
	になる	する	される	になる	する	される
1. 紫外線を浴びると、肌が乾燥 (①になります ②します ③されます)。	9	0	0	6	1	0
29. 6年前と比べると体力、肝機能が低下 (①になりました ②しました ③されました)。	7	2	0	5	4	2
8. 労働力需要に対して、労働力供給が不足 (①になりました ②しました ③されました)。	4	5	0	5	3	0
16 これは明らかに事実と矛盾 (①になりました ②しました ③されました)。	4	4	1	6	4	1
6. 二人の意見が初めて一致 (①になりました ②しました ③されました)。	2	7	0	4	4	0
合計	26 (57.8)	18 (40.0)	1 (2.2)	26 (57.8)	16 (35.5)	3 (6.7)

※ 数字は選択数を示す。合計は選択数 (割合) を示す。調査文の番号は、アンケートにおける番号である。

表 9-5 の結果を見ると、非変化形容詞の場合は、全体的には「になる」の選択率が高いが、「乾燥」「低下」と比べ、「矛盾」「一致」は、「になる」のみならず、「する」も選択しやすい傾向がある。また、「低下」「矛盾」は、「される」の選択も観察された。

表 9-6 中国語の主体変化形容詞における使用状況

調査文	三者択一 (N=9)			複数選択 (N=7)		
	になる	する	される	になる	する	される
5. 今回の問題で両国関係が成熟 (①になりました ②しました ③されました)。	8	1	0	6	2	1
32. 初めての出場ですますます緊張 (①になった ②した ③された)。	6	3	0	2	7	0
14. 都市では、西洋風の生活様式が流行 (①になりました ②しました ③されました)。	5	4	0	6	5	1
12. 貴美子の一言で、電話の向こうが沈黙 (①になりました ②しました ③されました)。	5	4	0	5	3	0

3. 現状が複雑すぎて、頭が混乱(①になりました ②しました ③されました)	5	4	0	3	6	0
11. 経済の急速な発展にともなって、情報、通信技術も進歩 (①になりました ②しました ③されました)。	4	4	1	2	5	1
4. 現代社会では、マスコミ、雑誌、書物などさまざまな情報が氾濫 (①になりました ②しました ③されました)。	3	5	1	5	3	2
13. 六時間に及ぶ大手術は、成功 (①になりました ②しました ③されました)。	2	6	1	2	6	2
36. わたしはそう言ってしまってから、少し後悔(①になりました②しました③されました)。	1	8	0	6	4	1
27. 新しい事業の持つビジネスチャンスに興奮 (①になりました ②しました ③されました)。	0	8	1	4	7	0
合計	39 (43.3)	47 (52.2)	4 (4.5)	41 (42.3)	48 (49.5)	8 (8.2)

※ 数字は選択数を示す。合計は選択数 (割合) を示す。調査文の番号は、アンケートにおける番号である。

表 9-6 の結果を見ると、主体変化形容詞の場合、全体的には「になる」と「する」の選択率がほぼ同程度である。三者択一テストでは、「成熟」は「になる」の選択が多いのに対して、「後悔」と「興奮」は「する」の選択が多いという両極化の傾向があるが、複数選択テストでは、これらの語は「になる」と「する」の選択の偏りが見られなくなる。そのために、このタイプでは、「になる」と「する」の容認度がほぼ同じであると言える。また、「進歩」「氾濫」「成功」などは、「される」の選択も観察された。

表 9-7 中国語の主体変化動詞における使用状況

調査文	三者択一 (N=9)			複数選択 (N=7)		
	になる	する	される	になる	する	される
19. 比率が前年よりやや下降 (①になりました ②しました ③されました)。	4	5	0	4	4	1
39. 右腕の骨が折れているらしいです。たぶん、倒れた時に骨折 (①になった ②した ③された) んじゃないか。	3	4	2	5	3	0
33. 35歳の時に不況によって失業 (①になりました ②しました ③されました)。	2	3	4	3	4	4
7. 今回の研修で、自分が成長 (①になりました ②しました ③されました)。	3	6	0	5	6	0

30. わずか一時間で、今日の撮影が終了(①になった ②した ③された)。	2	7	0	3	7	0
計	14 (31.1)	25 (55.6)	6 (13.3)	20 (40.8)	24 (49.0)	5 (10.2)

※ 数字は選択数を示す。合計は選択数(割合)を示す。調査文の番号は、アンケートにおける番号である。

表 9-7 の結果を見ると、主体変化動詞の場合、全体的には「になる」と「する」の選択が多いが、三者択一テストでは、「する」の方がやや優勢であり、複数選択テストでは「になる」と「する」の選択がほぼ同程度である。また、表 9-6 の主体変化形容詞と比べたら、選択傾向が類似していると思われる。さらに、「失業」、「骨折」、「下降」は、「される」の選択も観察された。特に「失業」と「骨折」は、好ましくない事柄のために、「迷惑受身」の被害の意味と関連づけて「される」を選択している可能性があると考えられる。

表 9-8 中国語の客体変化形容詞における使用状況

調査文	三者択一 (N=9)			複数選択 (N=7)		
	になる	する	される	になる	する	される
2. 風邪薬で症状が緩和(①になりました ②しました ③されました)。	4	4	1	6	1	5
28. 申し込み期間が重複(①になった ②した ③された)場合、抽選とします。	6	2	1	5	3	1
15. 明治元年の戦火にあって、町は一時荒廃(①になった ②した ③された)。	4	2	3	5	3	4
17. 自分に自信が持て、講義内容も充実(①になった ②した ③された)。	3	2	4	6	4	2
22. 抵抗らしい抵抗もできぬうちに、城が孤立	3	1	5	3	1	4

(①になりました ②しました ③されました)。						
10. 昭和期に入ると、洋服は急速に普及(①になった ②した ③された)。	3	1	5	5	2	4
25. 広いウィンドウでも表でも文字幅が固定(①になります ②します③されます)。	3	0	6	2	1	5
34. テロ事件で、空港が閉鎖(①になりました ②しました ③されました)。	1	0	8	3	2	6
24. 秦の時代に、文字が統一(①になりました ②しました ③されました)。	1	0	8	4	1	5
26. インターネットでいろんな情報が公開(①になりました ②しました ③されました)。	0	0	9	2	1	7
計	28 (31.1)	12 (13.3)	50 (55.6)	41 (39.8)	19 (18.5)	43 (41.7)

※ 数字は選択数を示す。合計は選択数(割合)を示す。調査文の番号は、アンケートにおける番号である。

表 9-8 の結果を見ると、客体変化形容詞の場合は、全体的には「になる」と「される」の選択が多いが、三者択一テストでは、「される」の方がやや優勢であり、複数選択テストでは「になる」と「される。」の選択がほぼ同程度である。また、三者択一テストでは、「緩和」「重複」は「される」の選択が少なく、「閉鎖」「統一」「公開」は「される」の選択が多いという両極化の傾向が見られる。それは、「緩和」「重複」の2つの文は動作主の存在が想定されにくいのに対して、「閉鎖」「統一」「公開」は明らかに動作主の働きかけが想定されるためであると考えられる。一方、複数選択テストでは、そのような傾向が明らかではなく、「になる」と「される」がほぼ同じである。つまり、外的な変化を表す場合、中国語話者は、動作主(あるいは原因事象)を含めて表現することも、動作主を含めずに表現することもできるということがわかった。

表 9-9 中国語の客体変化動詞における使用状況

調査文	三者択一			複数選択		
	になる	する	される	になる	する	される
40. 白内障手術のおかげで、視力は回復(①になった ②した ③された)。	4	5	0	2	2	6
9. この問題をめぐり、組織された政治勢力が分裂(①になりました ②しました ③されました)。	2	3	4	4	4	4
18. 10月1日から受信料免除の対象が拡大(①になりました ②しました ③されました)。	4	1	4	2	1	7
38. 2年前の会社の夏休みに、夢が実現(①になった ②した ③された)。	0	5	4	1	3	4
35. その費用をかけることで、使用可能期間が延長	4	1	4	4	1	7

(①になりました ②しました ③されました)。						
23. これで、全ての悩みが解決(①になりました ②しました ③されました)。	0	3	6	0	0	7
37. 我が国の企業における情報環境が改善(①になりました ②しました ③されました)。	2	1	6	2	1	7
20. 明治5年に、新橋～横浜間に日本初の鉄道が開通(①になりました②しました③されました)。	3	0	6	1	3	7
31. 資源ごみの収集日の変更(①になりました ②しました ③されました)。	1	2	6	3	2	4
21. 戦況の悪化で工事が中止(①になりました ②しました ③されました)。	2	0	7	6	2	7
合計	22 (24.4)	21 (23.3)	47 (52.2)	25 (24.0)	19 (18.3)	60 (57.7)

表 9-9 の結果を見ると、客体変化動詞の場合は、全体的には「される」の選択が多く、「になる」と「する」がほぼ同じ程度で選択されている。「実現」「解決」は、三者択一テストと複数選択テストは同じように「になる」がほとんど選択されていない。

ここでまとめると、全体的な傾向から、仮説と一致した傾向が見られる。

①非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞は、「になる」と「する」を使いやすい。

②客体変化形容詞、客体変化動詞は、「になる」と「される」を使いやすい。

つまり、中国語の影響が認められている。ただ、各タイプの内訳を詳しく見ると、語の意味的特徴や、文全体から捉えられた事態の特徴によって、選択の傾向が異なってくることがあるとわかった。

1.2.1.3 選択パターンの様相

複数選択テストでは、「になる」「する」「される」の組み合わせは、様々なパターンが観察された。具体的には、表 9-10 に示したように、1つの形式のみ、2つの形式の組み合わせ、3つの形式の組み合わせに分けられている。それぞれのパターンの選択数と割合を、表 9-10 に示した。図 9-3 は、グラフ化したものである。

表 9-10 複数選択テストにおける選択パターン (N=7)

中国語のタイプ	になる	する	される	になる +する	になる+ される	する+ される	になる+す る+される	合計	問題数

非変化形容詞	16 (45.7)	8 (22.8)	1 (2.9)	8 (22.9)	2 (5.7)	-	-	35 (100.0)	5
主体変化形容詞	17 (24.3)	24 (34.3)	2 (2.9)	21 (30.0)	4 (5.7)	2 (2.9)	-	70 (100.0)	10
主体変化動詞	8 (22.9)	12 (34.3)	1 (2.9)	10 (28.6)	2 (5.7)	2 (5.7)	-	35 (100.0)	5
客体変化形容詞	9 (12.9)	7 (10.0)	20 (28.6)	10 (14.3)	22 (31.4)	2 (2.9)	-	70 (100.0)	10
客体変化動詞	3 (4.3)	4 (5.7)	33 (47.1)	3 (4.3)	15 (21.4)	7 (10.0)	5 (7.1)	70 (100.0)	10

※各パターンの項目における数字は「選択数（割合）」を示す。

※合計数は、「人数×問題数」の結果になる。表9-4は、複数選択テストの総選択数を集計したものであるため、合計数は「人数×問題数」の結果を超えているのである。

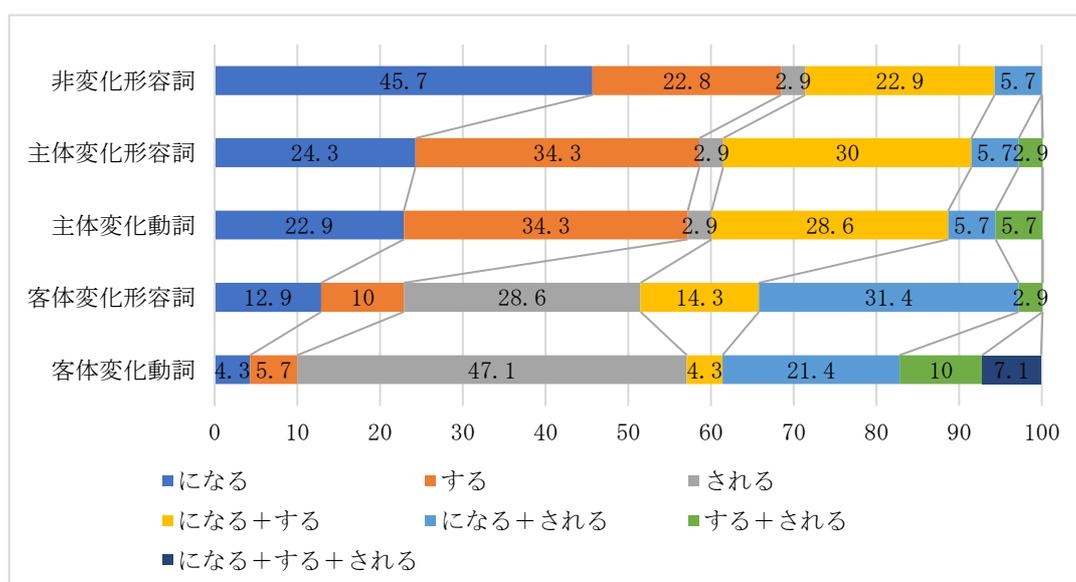


図 9-3 複数選択テストにおける選択パターンの様相

以上の結果を見ると、選択パターンは、中国語の用法別によってその特徴が異なることが明らかになった。具体的には、以下の通りである。

非変化形容詞は、「になる」のみの選択が圧倒的に多い。それは、中国語における変化を表す成分が必須であるという特徴と関連すると考えられる。その次、「になる+する」の選択も多い。また、「する」のみの選択もある。

主体変化形容詞と主体変化動詞は、選択パターンが類似している。「する」のみの選択が最も多く、「になる+する」、「になる」のみの選択も少なくない。

客体変化形容詞は、「になる＋される」が最も多く、「される」のみの選択も少なくない。客体変化動詞は、「される」のみの選択が圧倒的に多く、その次は「になる＋される」も少なくない。また、「になる＋する＋される」の3つの形式の組み合わせも観察された。つまり、同じ客体変化の特徴を持つにもかかわらず、形容詞用法の有無によって、「される」のみと「になる＋する」の選択が異なっている。

1.2.2 判断基準と使用意識

中国語話者は、「になる」「する」「される」に対してどのように理解しているのか、実際にどのような基準を持って三つの形式を選択するのかが、明らかではない。本節では、FIの結果を示し、被験者の使用意識を考察する。被験者が「になる」「する」「される」を選択する基準を、表 9-11 に示す。

表 9-11 質的調査の FI の結果 (N=16)

になる		する		される	
変化	16	人の動作	10	受身	16
ナ形容詞	4	単純状態	5	被害	7
決定の内容	3	結果	4	-	
-		変化	1		

<1> 「になる」の使用意識について

まず、「になる」の使用について、五味ほか(2006)では、中国語話者が日本語の漢語動詞の動詞性を認められないことが主な原因だと述べられている。つまり、「になる」を使う原因は、その漢語動詞が中国語の形容詞に相当するためである。例えば、「低下、成熟」など。しかし、本研究の調査結果によると、中国語に形容詞の用法がなく、動詞として使われる語でも、「になる」の使用が多く観察されているため、五味ほか(2006)の解釈が十分とは言えない。FIでは、被験者になぜ「になる」を使用するかを聞いた結果、「変化」を表すという表現意図が、「になる」が主な使用動機であるということがわかった。例えば、以下の(2)～(6)の文では、いずれも「になる」の使用が多く観察されている。FIの答えを見ると、(7)のような場合は、中国語の形容詞の影響が見られる。一方、それ以外の(8)(9)(10)は、形容詞用法がないにもかかわらず、「変化」を表すという判断基準が共通している。また、(11)のように、客観的な決定を表す「～ことになる」という文型の省略として使う答えも観察された。

<形容詞>

(2) *紫外線を浴びると、肌が乾燥になる。

<動詞>

(3) *比率が前年よりやや下降になりました。

(4) *10月1日から受信免除の対象が拡大になった。

(5) *新橋～横浜間に日本初の鉄道が開通になりました。

(6) *我が国の企業における情報環境が改善になった。

[FI の答え]

(7) 「乾燥」は、中国語では形容詞なので、ナ形容詞だと思って、「になる」を選んだ。

(C15 の答え、和訳は筆者、以下同様)

(8) 「比率の下降」は、変化の過程があり、そのようになったという意味である。(C1)

(9) 中国語では“范围扩大了”であり、「変化」の感じがする。(C8)

(10) 「対象が拡大することになる」の省略で、客観的な決定を表す文型だ (C5)

(11) 「開通」は、人が決めることではなく、今鉄道はどのようになったかという意味だ。

「改善」も同じで、今このような状態になったという意味だ。(C3)

<2> 「する」の使用意識について

次に、「する」の使用に関する FI の結果を見る。中国語話者が「変化」を表す際に「する」を使わない理由として、「する＝他動詞」(五味 2006)、「する＝自然な変化」(庵 2010) と理解するからだとされている。しかし、本稿の FI の答えによると、「する」の使用には「変化なし」という意識が働いていることがわかった。例えば、(16) と (17) の答えを見ると、(12) の「後悔」と (13) 「成長」は、人の感情や動作として捉えられ、(14) と (15) の「混乱」と「分裂」の場合、単純状態や変化後の結果と捉えられる。つまり、人が主語となる場合や、現時点の状態や変化後の状態のみを述べる時に、「する」を使う傾向があるということがわかった。

(12) 私はそう言ってしまってから、少し後悔しました。

(13) 今回の研修で、自分が成長した。

(14) 現状が複雑すぎて、頭が混乱しました。

(15) この問題をめぐり、組織された政治勢力が分裂しました。

[FI の答え]

(16) 「後悔」は、人の感情を表す。「成長」は私の動作なので、「後悔」、「感動」、「安心」などと似ている。(C12)

(17) 「混乱」は「変化」が感じられない。今は「混乱」の状態である。「分裂」は最後の結果を述べて、「変化」ではない。(C7)

一方、「漢語+する」形を、「変化」を表す自動詞として捉えるという答えが少なく、C11の1人しかいない。「乾燥する」、「低下する」などは、日本語では自動詞で、それ自体が変化を表すと答えた。つまり、漢語自動詞を「変化」と対応づけることが中国語話者にとって習得の難点であると言える。

<3> 「される」の使用意識について

先行研究では、「される」の使用は、中国語の他動詞用法の影響によるとされている。本研究の調査結果によると、確かに中国語では客体変化を表す形容詞と動詞（他動詞用法のある語）は、「される」の使用が多い。一方、非変化形容詞と主体変化形容詞・動詞（他動詞用法のない語）も、「される」の使用が観察された。FI の答えによると、両者の「される」の使用動機が同じである。つまり、働きかけや影響を受ける場合に受身を使うと答えた人が多いのである。それは、庵（2010）の言う「外的な力」の存在を感じる場合に受身を使うという発想と同様であると考えられる。つまり、中国語話者は、人の働きかけや物事の影響などの「外的な力」と捉える場合に、受身の「される」形を使いやすいということである。

例えば、(18)～(20)は他動詞用法のある語であり、いずれも「される」の使用が観察された。(21)～(23)のFIの答えを見ると、動作主の働きかけを受けたと捉えたために、「される」を使うのである。一方、(24)～(27)は他動詞用法のない語であるが、「される」の使用が観察された。FIの答えを見ると、(28)と(29)のように、「低下された」「進歩された」は影響を受けたと捉えたためである。また、(30)のように、「骨折された」、「失業された」は被害の意味を感じたためである。つまり、語自体は客体変化を表さない場合は、事態全体の成立に外力を感じるために「される」を使うと考えられる。さらに、被害の意味を感じると、「される」を使いやすい傾向が見られた。それは、中国語の受身マーカー“被”は、好ましくない事柄に使うことが多い(刘月华ほか 2010)ため、その影響を受ける可能性があると考えられる。あるいは、日本語の「迷惑受身」の過剰一般化の可能性もある。

<客体変化形容詞>と<客体変化動詞>の場合

(18) *昭和期に入ると、洋服は急速に普及されました。

- (19) *自分に自信が持て、講義内容も充実されました。
- (20) *明治5年に、新橋～横浜間に日本初の鉄道が開通されました。

[FI の答え]

- (21) 「普及」は、人為的な感じがする。中国語の“得以普及”(～によって実現された)と言えるので、「普及される」が自然だと思う。(C11)
- (22) 「講義内容」は主語ではなく、目的語(動作主ではなく、働きかけの受け手であるという意味だろう)なので、受身形を使った。(C1)
- (23) 「鉄道」は人によって「開通」されたと思う。(C7)

<非変化形容詞>と<主体変化形容詞・動詞>の場合

- (24) *6年前と比べると、体力、肝機能が低下されました。
- (25) *経済の急速な発展にともなって、情報、通信技術も進歩された。
- (26) *右腕の骨が折れているらしいです。たぶん、倒れた時に骨折された。
- (27) *35歳の時に不況によって失業された。

[FI の答え]

- (28) 「低下された」を使うのは、何かの影響を受けたからだと思う。(C13)
- (29) 何かによって「進歩」が実現された。(C5)
- (30) 「骨折される」、「失業される」は被害受身だと思う。(C8)

ここで 1.2.2 節をまとめる。アンケート調査の結果によると、中国語の用法別に「になる」「する」「される」の使用傾向が異なるが、一方、FI の答えによると、中国語話者はこれらの形式を選択する際に、中国語における語のタイプや用法を意識するというより、意味的な推測、事象の構造の解釈が主な判断基準であることがわかった。まとめて言えば、中国語話者による「になる」、「する」、「される」の使用意識が (31) の通りである。

- (31) 「FI の答えから見た中国語話者の使用意識」

「になる」: 物事の状態の「変化」
「する」: 「単純状態」や「人の動作」
「される」: 働きかけや影響を受ける

特に注意すべきなのは、「する」を「変化なし」と捉えるという発想が一般的に見られて

おり、単純の状態や、変化後の結果としての状態などを表すと捉えられている。これは、先行研究で指摘された「他動性」(五味ほか2006)や「自然な変化」(庵2010)とは、大きく異なっている。日本語では、「低下する」「分裂する」といったような変化動詞は、「変化」の意味が動詞の中に含まれているという特徴がある。中国語話者にとって、漢語の部分のみを理解に取り入れやすいため、「する」が無意味の語尾だと捉えると考えられる。つまり、漢語の変化動詞がそれ自体の「～する」形で「変化」を表すという機能は、中国語話者にとって習得上の困難点であり、指導のポイントでもあると言える。

1.2.3 誤用と正用の分布

前節までの分析では、中国語の用法によって、「になる」「する」「される」の使用傾向が異なることが明らかになった。この節では、中国語話者の使用における正用と誤用の状況がどのように分布するのか、最も問題の生じやすいのは何かを見るため、日本語における使用状況に基づいて分析する。

まず、日本語における使用状況によって、調査対象語を再整理する。本論文の第5章で分析したように、自動詞と自他両用動詞は、一般的には「する」を使うのがデフォルトであるが、動作主の内容を含意する場合に自他両用動詞は「される」を有標に使うことがある。他動詞は、自動詞の代わりとして「される」形を使うのがデフォルトであるが、「中止、変更」などは「になる」を有標に使う場合がある。このように、調査対象語を再整理すると、表9-12の通りになる。

また、前節までの分析からわかったように、中国語話者の使用傾向は大きく2種類に分けられる。つまり、表9-12において、「乾燥」などのように、中国語では「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞」の場合、中国語話者が「になる」と「する」を使う傾向がある。一方、それ以外の語は、中国語では「客体変化形容詞、客体変化動詞」であるため、中国語話者が「になる」と「される」を使う傾向がある。

表 9-12 日本語における使用及び該当する調査対象語

日本語の デフォルト的な形式	調査対象語	中国語話者の 使用傾向
「する」	乾燥 軽快 低下 一致 矛盾 混乱 進歩 成功 成熟 氾濫 流行 緊張 後悔 興奮 沈黙 下降 骨折 失業 成長 終了	「になる」、「する」
	荒廃 孤立 充実 重複 普及 開通 分裂	「になる」、「される」
	改善 拡大 解決 回復 実現 (有標の場合:「される」)	

「される」	公開 統一 緩和 閉鎖 固定	
	中止 変更 延長 (有標の場合:「になる」)	

表 9-12 の分類に基づいて、質的調査の結果を分析した結果、「になる」「する」「される」の回答数と割合が、表 9-13 と表 9-14 の通りになった。

表 9-13 三者択一テストにおける正用と誤用の分布・N=9

日本語の デフォルト的な形式	中国語話者の使用			回答数 (問題数)
	する	される	になる	
「する」	90(50.0)	11(6.1)	79(43.9)	180(20)
	11(17.5)	28(44.4)	24(38.1)	63(7)
	15(33.3)	20(44.5)	10(22.2)	45(5)
「される」	4(8.9)	32(71.1)	9(20.0)	45(5)
	3(11.1)	17(63.0)	7(25.9)	27(3)

表 9-14 複数選択テストにおける正用と誤用の分布・N=7

日本語の デフォルト的な形式	中国語話者の使用			回答数 (問題数)
	する	される	になる	
「する」	87(46.1)	16(8.4)	88(45.5)	191(20)
	20(26.7)	26(34.6)	29(38.7)	75(7)
	7(15.6)	31(68.8)	7(15.6)	45(5)
「される」	6(11.8)	28(54.9)	17(33.3)	51(5)
	5(13.9)	18(50.0)	13(36.1)	27(3)

表 9-13 と表 9-14 の結果によると、日本語の視点から見た中国語話者の使用状況を見ると、以下のようなことがわかった。

①日本語では、デフォルト的に「される」を使う場合、中国語話者の理解と一致する部分があり、即ち「客体の変化」と捉えると、「される」を使いやすいという傾向がある。例えば、(32) では「統一される」「中止される」を使うのは、FI の答えによると、客体が働きかけや影響を受けたと捉えたためである。

(32) a. 秦の時代に、文字が統一されました。

b. 戦況の悪化で工事が中止されました。

→ 「FI の答え」

a. 「秦の時代の政府が文字を統一するので、文字が統一された。」 (C12)

b. 「影響を受けたので、受身だと思って、「中止された」を選んだ。」 (C10)

一方、日本語でデフォルト的に「される」を使う場合は、「中止になる」のように、「になる」を使う場合がある。前述の通り、この「になる」は「動作主の背景化」という機能を果たすのである。なお、FI の答えによると、中国語話者は、その機能を意識せず、状態変化と捉えたら、「中止になる」を使うのである。(33)aのような「*統一になった」の使用動機と同じである。つまり、日本語の「中止になる」が有標の場合にしか使わないということが習得されていないのである。

(33) a. *秦の時代に、文字が統一になりました。

b. 戦況の悪化で工事が中止になりました。

→ 「FI の答え」

a. 「「文字の統一」が受身だと思う。でも、変化の意味もあるので、「統一になる」も使いたい。」 (C2)

b. 「「中止になる」は、何だか状態の変化のニュアンスがあると思う。」 (C1)

②日本語では、デフォルト的に「する」を使う場合、中国語における用法によって考えると、中国語話者が「される」を使いやすいタイプと、「される」を使いにくいタイプとに分けられる。まず、「される」を使いにくいタイプ、即ち「乾燥」などの場合、中国語では「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞」の場合、「する」の使用率が高い一方、「になる」の使用率も高い。

(34) クーラーを使いすぎると、空気が {乾燥する / *乾燥になる}。

また、「される」を使いやすいタイプ、即ち「荒廃」「改善」などのように、中国語では「客体変化形容詞、客体変化動詞」の場合、「される」と「になる」を使う傾向がある。

(35) 農村部では、労働人口が減って農地が {*荒廃になった / *荒廃された}。

したがって、日本語でデフォルト的に「する」を使う場合、中国語話者にとって誤用しやすいと考えられる。「する」の正しい産出を促進するには、①「される」の誤用、②「になる」の誤用、という2つの課題を解決する必要がある。教育上では、日本語ではデフォルト的に「する」を使う場合、即ち自動詞および自他両用動詞が、指導のポイントであると考えられる。

1.3 質的調査のまとめ

中国語話者の使用実態と使用意識を観察することで、母語の働き方を質的に把握した。具体的には、上級学習者を対象に、文法テストとFIの手法を用いて調査を行った。文法テストは、三者択一テストと複数選択テストの2種類を行った。1.1.1節で提起した4つの課題に基づき、調査の結果を以下のようにまとめる。

<1>中国語の影響があるかどうか、中国語の類型によって使用傾向が異なるかどうか。

1.2.1節と1.2.2節の分析によると、中国語話者の使用傾向には、中国語の類型との相関性が見られるため、中国語の影響があることがわかった。

まず、「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞」の場合、「になる」と「する」を使用する傾向がある。形容詞用法の有無に関わらず、「になる」を選択する。ただ、非変化形容詞の「乾燥、低下」など、“变得”（なる）などの付加成分が必須である語は、最も「になる」を使いやすい。一方、「される」の使用も観察したが、選択率が低い。

また、「客体変化形容詞、客体変化動詞」の場合、「になる」と「される」を使用する傾向がある。形容詞用法の有無に関わらず、「になる」を選択する。形容詞の場合は、やや「になる」の選択率が高い。

<2>調査の方法によって、結果には差があるかどうか、複数選択の場合、どのようなパターンがあるのか。

全体的な使用傾向を見ると、三者択一と複数選択の間に有意な差が見られなかった。

また、選択パターンの様相も、中国語の用法との相関性が見られた。中国語の用法別に見た主な選択パターンは、以下の通りである。

- ①非変化形容詞（「乾燥、低下」など）： 「になる」のみ > 「になる+する」
- ②主体変化形容詞（「混乱、氾濫」など）： 「になる+する」 > 「になる」のみ
- ③主体変化動詞（「下降、失業」など）： 「になる+する」 > 「になる」のみ
- ④客体変化形容詞（「普及、充実」など）： 「になる」のみ > 「になる+される」
- ⑤客体変化動詞（「開通、改善」など）： 「になる+される」 > 「になる」のみ

〈3〉中国語話者がどのような基準をもって「になる」「する」「される」の三つの形式を選択するのか。

事態の捉え方が主な判断基準であることがわかった。つまり、語の種類より、文全体の表す意味的な特徴によって形式を選択する傾向が見られた。

- ①「になる」は、物事や人の状態の変化を感じる場合に選択する。
- ②「する」は、「人の動作・感情」や「単純状態」と捉える場合に選択する。「変化なし」と理解する傾向がある。
- ③「される」は、働きかけや影響を受けて変化が生じると感じる場合に選択する。

〈4〉日本語における使用に基づいて分析すると、正用と誤用はどのような分布になるのか。

日本語ではデフォルト的に「～が漢語+する」形を使う語、即ち自動詞と自他両用の場合、最も誤用が生じやすいと考えられる。これらの語は、中国語話者にとっての習得上の困難点であると考えられる。そこには、2種類の問題点があると解明された。

①中国語の「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞」の場合、例えば、「乾燥する、混乱する、下降する」などは、「になる」と誤用しやすい。

②中国語の「客体変化形容詞、客体変化動詞」の場合、例えば、「普及する、開通する」などは、「になる」や「される」と誤用しやすい。

一方、日本語ではデフォルト的に「～が漢語+される」形を使う語、即ち他動詞の場合、中国語話者が「される」を使いやすいため、比較的習得しやすいと考えられる。ただし、「になる」の誤用が起こりうるため、それも注意する必要がある。

中国語話者を対象とする漢語動詞の教育上では、「する」の正しい産出を促し、「される」と「になる」の誤用を減らすという2点が指導のポイントであると示唆された。

2. 問題の所在と要因を解明するための量的調査

2.1 調査の概要

まず、調査の目的、調査対象語と調査文の選定、被験者、調査の手順について説明する。

2.1.1 調査の目的

前節の質的調査の結果から、日本語ではデフォルト的に「漢語+する」形を使う語、即ち自動詞と自他両用の場合、最も誤用が生じやすいことが示唆された。その結果が妥当である

かどうかを検証し、量的なデータを取ることで検証することによって、問題の所在をより明確にすることは、この節で述べる量的調査の目的である。また、学習環境と学習レベルによる使用実態と使用意識の変化、日本語母語話者の使用実態との違いを明らかにすることで、中国語話者における問題の所在と要因を解明していく。具体的には、以下の3つの課題を設定し、調査を実施する。

①自動詞が誤用しやすい、他動詞とナ形容詞が正用しやすいという結果が妥当なのか。また、デフォルト的に「する」を使う自他両用動詞は、中国語話者が「する」と「される」のどちらを優先して使うのか。

②学習環境と学習レベルによって、使用実態と使用意識がどのように変化するのか。

③日本語母語話者の使用実態とは、どのような違いがあるのか。

2.1.2 調査対象語と調査文

調査の内容は、次の3つの部分に分ける。表9-16の通りである。

<1>誤用しやすい「漢語+する」タイプ（自動詞）

日本語では「する」を使うタイプに焦点を当てて調査する。それは、質的調査の結果では、中国語話者にとって最も誤用が生じやすいとわかったためである。語の数を増やして自然さ判断テストを用いて調査を行うことにする。また、質的調査のFIの結果によると、人の動作や感情を表す場合に、「する」を使う傾向があるため、それらの語を外し、物が変化主体である場合に注目することとする。さらに、中国語におけるタイプによってそれぞれ8語を選び、計40語をこのタイプの調査語とする。

また、自他両用動詞の「解決、改善、拡大」の3語を選び、「する」と「される」の選択傾向がどうなるかを明らかにする。日本語における「する」のデフォルト的な使用を覚えるかどうかについて調査する。

<2>正用しやすい「漢語+される」タイプ（他動詞）

また、日本語では「される」を使うタイプは、中国語話者が正用しやすいという傾向があるが、他動詞の「統一、緩和、公開」の3語を選び、その正用しやすい傾向を検証する。

<3>正用しやすい「になる」タイプ（ナ形容詞）

日本語では、「になる」をデフォルト的に使う語、即ちナ形容詞は、中国語では「非変化形容詞」に相当するものが多い。中国語話者がこれらの語を適切に使えるかどうかを見るため、「容易、透明、優秀、強烈」の4語を調査対象語に入れた。

表 9-16 量的調査の対象語

自動詞（「漢語＋する」）	
中国語のタイプ	調査対象語
非変化形容詞	低下、繁盛、乾燥、一致、密集、平均、窮乏、矛盾
主体変化形容詞	飽和、混乱、氾濫、緊張、進歩、発達、成熟、流行
主体変化動詞	蒸発、停滞、滅亡、上昇、進化、破裂、出現、成長
客体変化形容詞	重複、荒廃、動揺、充実、集中、孤立、繁栄、普及
客体変化動詞	増加、分裂、成立、発展、開通、合併、悪化、減少
自他両用動詞（「漢語＋する（される）」）	
客体変化動詞	解決、改善、拡大
他動詞（「漢語＋される」）	
中国語のタイプ	調査対象語
客体変化形容詞	統一、緩和、公開
ナ形容詞（「漢語＋になる」）	
中国語のタイプ	調査対象語
非変化形容詞	容易、透明、優秀、強烈

このように調査対象語を設定するのは、正用と誤用が起こる環境を明らかにし、どのように指導対策を提案すればいいかに対して、証拠を示すためである。つまり、第7章で母語知識を活かした指導対策の予想について述べたように、以下の規則の効果が期待できる。

①ナ形容詞が正用しやすいとすれば、中国語では非変化形容詞である場合、ナ形容詞として「になる」を使えばいい。非変化形容詞以外は、全て「になる」が使えない。例外の「低下する」といった少数の語を明示的に教えればいい。

②他動詞が正用しやすいとすれば、中国語では客体変化動詞・形容詞である場合、他動詞として「される」を使えばいい。ただ、それらの語をリストアップして明示的に教える必要がある。また、それらの語以外は、日本語では自動詞であれ、自他両用動詞であれ、「する」を使えばいい。例外の「変更、中止」などの少数の語を明示的に教えればいい。

また、調査文は、質的調査で用いた NINJAL-LWP for BCCWJ よりも、規模が大きいコーパスの検索ツール NINJAL-LWP for TWC を用い、表 9-16 に示した研究対象語の「する」形（例：乾燥する）をキーにして、検索した結果から選んだ。文を選ぶ際に、「変化」の意味が想定されるものを対象とした。このように抽出した文について、漢語動詞の語幹の後「になる、する、される」の3つの形式を設定し、それぞれの形式に対してその自然さを、「自然、どちらかという自然、どちらかという不自然、不自然」の四段階で判断してもらう形のテ

ストを作成した。計 50 問である。

(36) 「調査文の例」

2. 最近インドのウイスキー生産量が ()。

a. 増加になった

(①自然、②どちらかという自然 ③どちらかという不自然 ④不自然)

b. 増加した

(①自然、②どちらかという自然 ③どちらかという不自然 ④不自然)

c. 増加された

(①自然、②どちらかという自然 ③どちらかという不自然 ④不自然)

2.1.3 被験者

量的調査では、上級と超級学習者を対象とする。上級学習者は、JFL と JSL に分けて調査を行う。このように 3 つのグループに分けて、被験者の概要を表 9-17 に示す。

表 9-17 量的調査の被験者の概要 (中国語母語話者)

	上級 (JFL)	上級 (JSL)	超級
属性	中国国内の大学 日本語専攻 学部 4 年、修士 1, 2 年	日本国内の大学 日本語専攻及びその他 学部 4 年、修士 1 年	日本国内の大学 日本語学、日本語教育、日本文学 博士後期課程在学者、修了者
人数	30 人	30 人	28 人
N1 合格時期	2018～2019 年	2018～2019 年	—
平均学習歴	4 年 6 ヶ月 (0.84)	4 年 10 ヶ月 (1.72)	10 年 5 ヶ月 (2.64)
平均日本滞在歴	なし	3 年 8 ヶ月 (1.46)	6 年 4 ヶ月 (2.86)

※ 平均学習歴と平均日本滞在歴は、() に標準偏差を示す。

上級レベルと見なす基準は、2018 年～2019 年の間に JLPT の N1 に合格したことである。また、JFL は日本滞在歴がなく、JSL の平均日本滞在歴は 3 年 8 ヶ月である。超級レベルと見なす基準は、平均学習歴が 10 年以上、日本滞在歴が 5 年以上であり、さらに日本語学、日本語教育、日本文学に携わる博士後期課程の在学者や修了者に限定する。

2.1.4 調査の手順

2020年8月～2021年1月の間に、自然さ判断テストとFIを用いて調査を実施した。まず、オンラインの形で、テスト用紙を配り、「辞書とネットを調べないで、20分以内に答えてください」という指示をしてから、回答を始めてもらう。テストが終わった後、すぐFIを行い、「になる、する、される」の自然さを判断する基準を中心に調べる。

2.2 調査の結果と分析

この節では、調査の結果を報告し、「誤用と正用が起こる環境の検証」、「学習環境とレベルによる変化」、「日本語母語話者の使用実態との比較」という3つの部分に分けて分析する。

2.2.1 誤用と正用が起こる環境の検証

2.2.1.1 誤用しやすい自動詞

まず、誤用しやすい自動詞（「漢語＋する」）の結果を分析する。このタイプの全体的な使用傾向、および各タイプにおいてどのような内訳があるか、それぞれ分析する。

<全体的な使用傾向>

中国語のタイプによって使用傾向が異なるかどうかを見るため、自然さ判断テストの結果を中国語のタイプに分けて集計した。「になる、する、される」の3つの形式に対する自然さの判断を4段階に分けて4点～1点を与え、平均得点を計算する方法を取った。表9-18は上級の平均得点であり、表9-19は超級の平均得点である。図9-4～9-6はグラフしたものである。平均得点は、4～1の間にある。以下の分析では、「する」の平均得点が3以上であれば、被験者による「する」の習熟度が高いと認める。

表 9-18 「する」タイプの全体的な使用傾向（自然さ判断テスト・上級）

中国語のタイプ	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			問題数
	になる	する	される	になる	する	される	
非変化形容詞	3.28	2.68	1.48	3.16	2.90	1.54	8

	(0.55)	(0.70)	(0.54)	(0.63)	(0.56)	(0.44)	
主体変化形容詞	3.12 (0.69)	2.92 (0.67)	1.48 (0.46)	3.01 (0.74)	3.20 (0.61)	1.37 (0.43)	8
主体変化動詞	2.58 (0.78)	3.24 (0.73)	1.85 (0.57)	2.24 (0.83)	3.68 (0.35)	1.60 (0.58)	8
客体変化形容詞	2.67 (0.70)	2.60 (0.79)	2.51 (0.65)	2.60 (0.76)	2.91 (0.74)	2.49 (0.67)	8
客体変化動詞	2.38 (0.58)	2.93 (0.73)	2.58 (0.67)	2.01 (0.63)	3.18 (0.53)	2.51 (0.65)	8

※数値は、平均得点（標準偏差）を示す。平均得点は4～1の間にある。

表 9-19 「する」タイプの全体的な使用傾向（自然さ判断テスト・超級）

中国語のタイプ	超級 (N=28)			問題数
	になる	する	される	
非変化形容詞	2.90 (1.20)	3.27 (1.10)	1.36 (0.77)	8
主体変化形容詞	2.81 (1.18)	3.46 (0.91)	1.48 (0.87)	8
主体変化動詞	1.85 (1.09)	3.82 (0.60)	1.49 (0.89)	8
客体変化形容詞	2.64 (1.23)	3.12 (1.13)	2.25 (1.30)	8
客体変化動詞	1.93 (1.08)	3.54 (0.88)	2.37 (1.31)	8

※数値は、平均得点（標準偏差）を示す。平均得点は4～1の間にある。

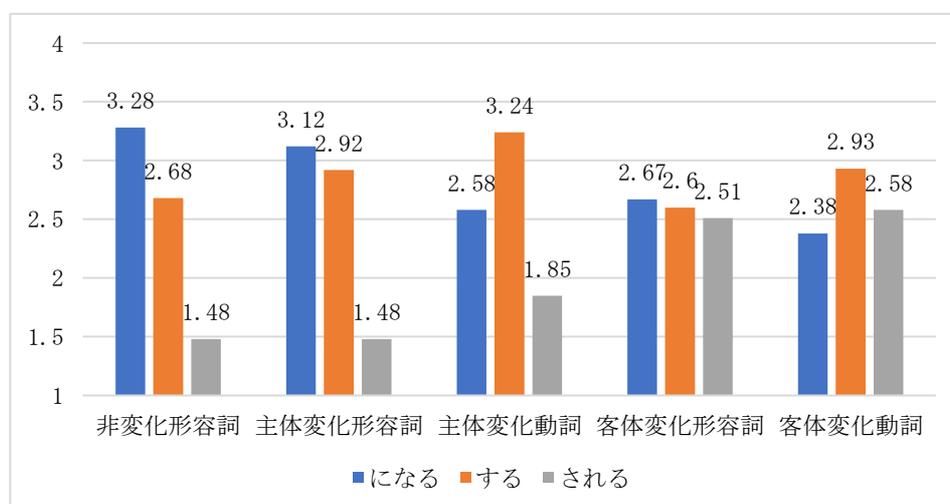


図 9-4 上級（JFL）の使用傾向

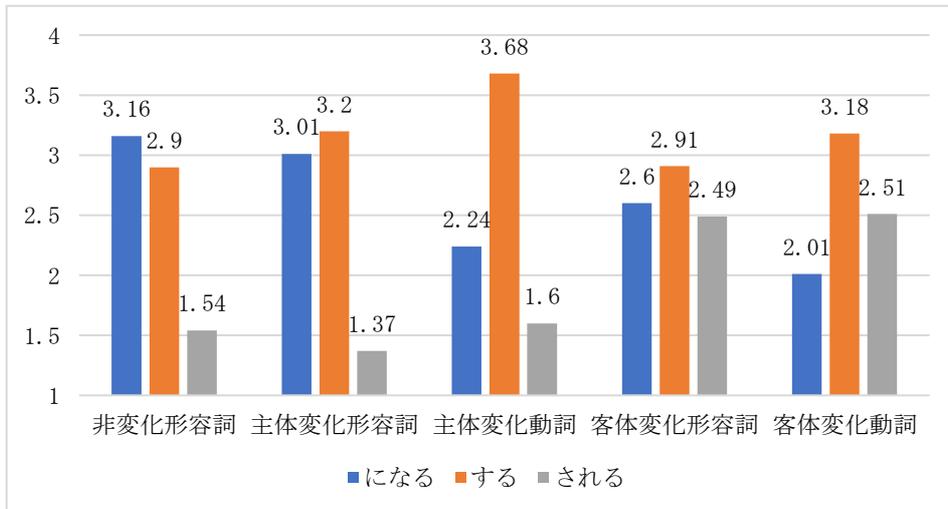


図 9-5 上級（JSL）の使用傾向

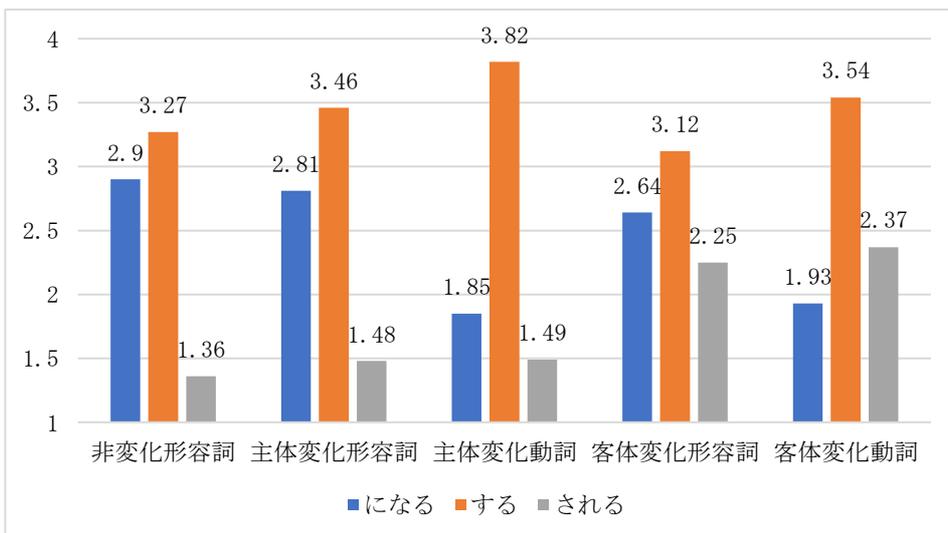


図 9-6 超級の使用傾向

以上の結果に基づき、「漢語+する」の使用状況、及び中国語の影響を分析する。

まず、このタイプは、日本語では全て「する」を使うのが自然である。被験者の3グループは、「する」の平均得点に差が見られる。

①超級学習者は、中国語のタイプの違いにもかかわらず、「する」の平均得点が全て3以上であるため、習熟度が高いと言える。

②上級学習者は、JFL と JSL の間に差が見られる。JFL 環境の上級学習者は、主体変化動詞の平均得点のみが3以上である一方、JSL 環境の上級学習者は、主体変化動詞のほかに、主体変化形容詞、客体変化動詞の平均得点も3以上である。

また、中国語の影響があると認められる。中国語のタイプによって「になる」「する」「される」の平均得点が異なるためである。3グループとも類似した傾向を示しており、このような傾向は、三者択一テストと複数選択テストと一致していると考えられる。

①「になる」は、形容詞の場合、平均得点が高い。非変化形容詞>主体変化形容詞>客体変化形容詞という順になる。一方、動詞の場合でも、「になる」を使用する可能性が示されている。動詞の場合の「になる」の平均得点は、上級学習者は2以上であり、超級学習者は2以下となる。

②「される」は、客体変化形容詞と客体変化動詞の場合に平均得点が高く、3グループとも2.5ぐらいである。それに対して、他の3種類は「される」の平均得点が低く、1.5ぐらいである。

つまり、日本語では「する」を使うタイプの語は、上級・超級学習者が「する」の使用を認めている傾向がある。特に超級に至ったら、平均得点が高いため、定着していると言える。上級学習者は、特にJFL環境の学習者の場合、まだ「する」の使用にゆれがある。一方で、「になる」と「される」の誤用も生じていると認められる。上級学習者は、形容詞も動詞も「になる」を使うのに対して、超級学習者は、形容詞の場合にしか「になる」を使わないという傾向がある、また、客体変化形容詞・動詞の「される」の誤用は、3グループに同程度存在することがわかった。

<各タイプの内訳>

次は、各タイプの語の間に差があるかどうかを見るため、それぞれの内訳を詳しく分析していく。前節と同じように、正解の「する」の平均得点が3以上である箇所を注目している。なお、「する」だけの得点が高くても、誤用の「になる」の得点も高い場合があるため、習得しているとは言えない。

表 9-20 中国語の非変化形容詞の場合

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される

3. 身体を動かさないと、心肺機能が（A 低下になる B 低下する C 低下される）。	3.5	2.7	1.4	2.9	3.2	1.6	2.5	3.6	1.3
14. また来てくれる人が増えるから、店が（A 繁盛になった B 繁盛した C 繁盛された）。	3.5	2.3	1.1	3.3	2.6	1.5	3.2	3.0	1.3
15. クーラーを使いすぎると、空気が（A 乾燥になる B 乾燥する C 乾燥される）。	3.6	2.1	1.7	3.1	2.7	2.0	3.0	3.3	1.4
17. 久しぶりに、お互いの意見が（A 一致になった B 一致した C 一致された）。	2.9	3.1	1.6	3.2	3.5	1.3	2.7	3.9	1.4
30. 現在、「三角地帯」には住宅が（A 密集になっている B 密集している C 密集されている）。	3.0	3.4	1.3	2.8	3.3	1.5	2.2	3.8	1.4
36. 注ぎ始めは薄く、後になるほど濃くなるので、お茶の濃さが（A 平均になる B 平均する C 平均される）ように注ぎまわします。	2.9	2.5	2.0	3.4	2.0	1.8	3.1	2.1	1.6
42. その後経済上の困難のため地方財政が（A 窮乏になり B 窮乏し C 窮乏され）、教育費の増額が要求され、十二年この法律を改正して国庫負担を増額した。	3.3	2.5	1.6	3.4	2.7	1.3	3.0	3.2	1.3
43. そうすると、A 説と B 説が（A 矛盾になった B 矛盾した C 矛盾された）。	3.5	2.8	1.3	3.2	3.3	1.3	3.4	3.2	1.1
全体	3.28	2.68	1.48	3.16	2.90	1.54	2.9	3.27	1.36

※数値は、平均得点を示す。平均得点は 4～1 の間にある。

表 9-20 の結果を見ると、非変化形容詞において、超級は、「する」の平均得点が高く、「平均」の 1 語以外にすべて 3 以上である。一方、上級には、「する」の使用がゆれる場合がある。JFL と比べ、JSL の「低下、矛盾」の 2 語の平均得点が 3 以上になる。それは、普段出現頻度が高いためであろうと考えられる。また、このタイプでは、3 グループとも「になる」の得点が 3 以上であるものが多い。「される」は、平均得点がほぼ 2 以下であり、全体的に低い。ただ、「乾燥」、「平均」の 2 語は、「される」の平均得点が相対的に高い。それは、文脈には動作主の具体的な動作があるためであろうと考えられる。

表 9-21 中国語の主体変化形容詞の場合

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
1. 雇用の場が失われ、少子高齢化と相まって国内市場が（A 飽和になった B 飽和した C 飽和された）。	3.4	2.7	1.7	3.6	2.9	1.4	3.6	2.6	1.2
31. 背骨がずれると、骨を支える筋肉が（A 緊張になります B 緊張します C 緊張されます）。	3.6	2.4	1.3	3.5	2.4	1.4	3.6	3.1	1.2
5. いろんな事を考えていたら、頭が（A 混乱になった B 混乱した C 混乱された）。	3.4	2.7	1.4	3.3	3.4	1.4	3.2	3.6	1.5

9. 人々の不安が高まる中、ツイッター上で誤った情報が(A 氾濫になった B 氾濫した C 氾濫された)。	3.1	2.9	1.7	3.0	3.2	1.3	2.7	3.5	1.5
20. 昔に比べて格段と美容外科の技術も (A 進歩になりました B 進歩しました C 進歩されました)。	3.0	3.2	1.4	2.5	3.6	1.1	2.2	3.8	1.6
32. 現代は 1000 年前よりも遥かに科学が (A 発達になっている B 発達している C 発達されている)。	2.4	3.3	1.7	2.4	3.5	1.5	2.0	3.9	1.6
33. わが国の社会は高度経済成長を経て、社会・文化的に (A 成熟になりました B 成熟しました C 成熟されました)。	3.2	3.2	1.5	2.9	3.4	1.3	2.5	3.6	1.6
34. 冬の時期になればインフルエンザが (A 流行になる B 流行する C 流行される)。	3.0	3.2	1.5	2.9	3.3	1.6	2.8	3.6	1.6
全体	3.12	2.92	1.48	3.01	3.20	1.37	2.81	3.46	1.48

※数値は、平均得点を示す。平均得点は4～1の間にある。

表 9-21 の結果を見ると、主体変化形容詞において、超級は「する」の平均得点が高く、「飽和」の1語以外、すべて3以上である。JSL 上級は、「飽和、緊張」の2語以外、「する」の平均得点がすべて3以上である。JFL 上級には「する」のゆれが見られ、「進歩、発達、成熟、流行」の4語が、「飽和、緊張、混乱、氾濫」の4語より、「する」の平均得点が高く、3以上になる。その理由として、前の4語は、その変化の過程により時間推移が感じられるため、動きとして「する」を使う可能性がある。「進歩」などの4語は、中国語では進行中を表す副詞“正在～”(ちょうど～している)や、時間の推移や展開を表す補語“起来～”(～してくる)と共起できるためである。一方、「飽和」などの4語は、“正在～”や“起来～”などと共起しにくいのである。

また、前の非変化形容詞と同じように、このタイプでは、3グループとも「になる」の得点が3以上であるものが多い。なお、「される」は、基本的に平均得点が低いと見られる。

表 9-22 中国語の主体変化動詞の場合

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
4. 気温が上がるので、ますます水が (A 蒸発になります B 蒸発します C 蒸発されます)。	2.6	2.5	<u>2.5</u>	1.8	3.1	<u>2.5</u>	1.6	3.7	<u>2.0</u>
6. その後も政策の失敗で、10年以上も景気が (A 停滞になりました B 停滞しました C 停滞されました)。	2.7	3.5	1.9	2.7	3.5	1.5	2.4	3.6	1.6
10. マヤの予言では人類が (A 滅亡になる B 滅亡する C 滅亡される)。	3.0	2.9	1.7	2.5	3.7	1.4	2.1	3.8	1.5

29. 6月の完全失業率は2ヶ月ぶりに(A上昇になりました B上昇しました C上昇されました)。	2.7	3.7	1.6	2.3	3.8	1.5	2.0	3.9	1.4
44. ひとつの保険であっても活用の仕方により姿は変わります。保険も時代とともに(A進化になります B進化します C進化されます)。	2.2	3.4	<u>2.0</u>	2.1	3.7	1.8	1.5	3.9	1.6
46. 寒さで水道管が(A破裂になりました B破裂しました C破裂されました)。	2.4	3.3	<u>2.1</u>	2.2	4.0	1.5	1.7	3.9	1.2
47. この注射を受けると、発熱などの症状が(A出現になりました B出現しました C出現されました)。	2.1	3.3	1.6	1.5	3.8	1.3	1.3	3.8	1.4
50. この体験によって、私は少し(A成長になった B成長した C成長された)。	3.0	3.3	1.3	2.9	3.9	1.4	2.3	3.9	1.3
全体	2.58	3.24	1.86	2.24	3.68	1.60	1.85	3.82	1.49

※数値は、平均得点を示す。平均得点は4~1の間にある。

表 9-22 の結果を見ると、中国語の主体変化動詞の場合、日本語とは品詞も自他も一致しているため、全体的に「する」の平均得点が高く、3 グループともほとんど3 以上である。JFL 上級だけ、「蒸発」「滅亡」の2 語の得点が3 以下である。

また、「になる」の平均得点が相対的に高いと見られる。特に JFL 上級は、すべての語の「になる」の得点が2 以上である。3 以上となるのは、「滅亡」と「成長」の2 語である。FI の答えによると、「滅亡になる」は「結果」のニュアンスが強いためであり、「成長」は、「勉強になる」のようなフレーズと似ているためであるということである。超級に至ったら、「になる」の得点が下がる傾向がある。

さらに、「される」は、全体的に平均得点が低い。ただし、「進化」のように明らかな人為的な原因を感じる場合、及び「蒸発」「破裂」のように明らかな自然力の影響を感じる場合、「される」を使う可能性がある。

表 9-23 中国語の客体変化形容詞の場合

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
8. このページ、不動産屋と内容が(A重複になった B重複した C重複された)。	2.2	3.2	1.9	2.3	3.6	1.6	2.7	3.5	1.7
11. 農村部では、労働人口が減って農地が(A荒廃になった B荒廃した C荒廃された)。	2.9	2.6	<u>3.1</u>	2.9	2.6	<u>3.3</u>	<u>3.0</u>	3.3	2.6
21. 彼が来るという知らせを受けて、気持ちが(A動揺になっています B動揺しています C動揺さ	2.5	2.9	2.2	1.7	3.2	2.4	1.8	3.5	1.9

れています)。									
23. ホームページは全面にリニューアルし、内容も (A 充実になった B 充実した C 充実された)。	2.9	2.5	2.3	<u>3.0</u>	2.9	2.6	<u>3.4</u>	2.8	2.4
24. 気にしないようにしているのに、そう思えば思うほど、そこに意識が (A 集中になって B 集中して C 集中されて) しまう。	2.5	2.5	2.4	2.5	3.0	1.9	2.2	3.5	1.7
37. 新潟県中越地震の時には、61 の集落が (A 孤立になりました B 孤立しました C 孤立されました)。	2.7	1.9	<u>3.4</u>	2.6	1.9	<u>3.3</u>	2.9	2.3	<u>3.2</u>
39. 地方の人々が多くやって来て、国内が (A 繁栄になった B 繁栄した C 繁栄された)。	<u>3.7</u>	2.5	1.4	<u>3.1</u>	3.3	1.6	<u>3.1</u>	3.1	1.5
49. 日本では早くから義務教育が (A 普及になった B 普及した C 普及された)。	1.8	2.7	<u>3.3</u>	2.5	2.7	<u>3.2</u>	2.3	3.0	<u>3.0</u>
全体	2.67	2.60	2.51	2.60	2.91	2.49	2.64	3.54	2.37

※数値は、平均得点を示す。平均得点は4～1の間にある。

表 9-23 の結果を見ると、客体変化形容詞の場合、全体的には3つの形式とも平均得点が2以上であり、比較的高いと言える。「する」の平均得点は、超級の場合、3以上となるものが多い。JFL 上級の場合、「する」の平均得点はほとんど3以下である。

また、「になる」の得点は、全体的に高いと見られる。超級でも「になる」の得点が高いものが多い。

さらに、「される」は、使いやすいものもあれば、使いにくいものもある。「孤立」「荒廃」「普及」は、「される」の平均得点がほぼ3以上である。「普及」は明らかな人為的な原因が捉えられるためであり、「孤立」「荒廃」は、好ましくない事柄を表し、前述の通り、中国語の受身表現“被”構文などが不本意・不愉快な事柄に使うのが多いため、その影響があるだろうと考えられる。

表 9-24 中国語の客体変化動詞の場合

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
2. 最近、インドのウイスキーの生産量が (A 増加になった B 増加した C 増加された)。	2.5	3.4	1.7	1.9	3.5	1.8	1.9	3.8	1.9
12. 彼は権力の頂点で倒れ、その王国は四つに (A 分裂になった B 分裂した C 分裂された)。	2.3	2.5	<u>3.2</u>	1.7	3.1	<u>3.1</u>	1.8	3.5	2.8
13. 内モンゴルは、1947年に自治政府として (A 成	1.5	3.1	2.9	1.3	3.2	2.4	1.5	3.5	2.4

立になった B 成立した C 成立された)。									
18. 後期ロマン派音楽は、主にドイツで (A 発展になった B 発展した C 発展された)。	1.5	3.1	2.8	1.4	3.1	<u>3.1</u>	1.3	3.3	2.8
19. 明治5年に新橋～横浜間に鉄道が (A 開通になった B 開通した C 開通された)。	2.0	2.6	<u>3.4</u>	1.9	2.5	<u>3.3</u>	2.0	2.9	<u>3.2</u>
28. 2004年10月、自動車業界で名を馳せる3つの会社が(A合併になった B合併した C合併された)。	2.6	2.7	<u>3.0</u>	2.4	2.8	<u>3.0</u>	2.5	3.5	2.8
38. 治療しないと、症状が(A悪化になります B悪化します C悪化されます)か。	<u>3.5</u>	2.8	1.5	2.7	3.5	1.6	2.2	3.9	1.5
48. 冬場は寒くてジュースの消費量が (A 減少になった B 減少した C 減少された)。	<u>3.1</u>	3.2	2.2	2.7	3.8	1.8	2.3	4.0	1.7
全体	2.38	2.93	2.58	2.01	3.18	2.51	1.93	3.54	2.37

※数値は、平均得点を示す。平均得点は4～1の間にある。

表 9-24 の結果を見ると、客体変化動詞の場合、「する」の平均得点が全体的に高いと見られる。超級は、ほぼすべての語では「する」の平均得点が3以上となる。

また、「になる」の平均得点にはゆれが見られる。例えば、「成立」「発展」の2語は、「になる」の得点が低い。一方、「悪化」「減少」の2語は、「になる」の得点が高い。中国語の角度から考えると、(37)のように、「成立」「発展」は、意味的には働きかけ性が強く、一般的に他動詞文と共起しやすく、動作主の関与なしで事態の成立が想定できないため、「される」を使いやすい。それに対して、「悪化」「減少」は、意味上では状態変化に偏っており、一般的に“使”構文と共起しやすく、動作主の関与度が低いと捉えられるため、「になる」を使いやすいと考えられる。これは、中国語の主体動作・客体変化動詞において、「働きかけ-結果」の間にスケールがあるためであろうと考えられる。

(37)



<自他両用動詞 (する (される) の場合>

最後に、一般的に「する」を使うのが自然である自他両用動詞について分析する。その結果は、以下の表 9-25 の通りである。

表 9-25 自他両用動詞 (する (される)) の使用状況 (自然さ判断テスト)

調査文	JFL 上級 (N=30)	JSL 上級 (N=30)	超級 (N=28)
-----	---------------	---------------	-----------

	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
25 転職によって全ての悩みが (A 解決になった B 解決した C 解決された)。	1.8	2.7	<u>3.2</u>	2.2	2.3	<u>3.8</u>	2.1	2.6	<u>3.5</u>
26 薬を使用して一週間程度で症状が (A 改善になった B 改善した C 改善された)。	2.6	2.5	<u>3.2</u>	1.9	2.8	<u>3.4</u>	2.3	2.9	<u>3.5</u>
40. 平成 22 年から、雇用保険の適用範囲が (A 拡大になった B 拡大した C 拡大された)。	2.9	2.6	<u>3.0</u>	2.4	2.4	<u>3.3</u>	2.3	2.7	<u>3.8</u>
全体	2.44 (1.28)	2.62 (1.35)	<u>3.10</u> (1.28)	2.18 (1.20)	2.51 (1.22)	<u>3.50</u> (0.98)	2.23 (1.18)	2.73 (1.20)	<u>3.58</u> (0.90)

※数値は、平均得点を示す。平均得点は 4～1 の間にある。

表 9-25 の結果を見ると、「解決、改善、拡大」は、「される」を優先する傾向がある。「する」も使うことがあると見られるが、「される」の得点が「する」を上回っている。日本語では「する」の使用がデフォルトのはずであるので、これが中国語話者にとって、注意すべきところだと考えられる。つまり、「解決」タイプは、「する」を優先して使うことが難しい傾向がある。これに基づき、教育上では、「解決」タイプは、前節で述べた「普及、減少」など、デフォルト的に「する」を使うタイプと、同様に扱うべきではないかと考える。日本語母語話者は、このタイプをどのように使うか、「解決される」より「解決する」を多く使うと予想するが、実際にどのように使うのか、後の 2.2.3 節で述べる。

2.2.1.2 正用しやすい他動詞とナ形容詞

デフォルト的に「される」を使う他動詞（統一、公開、緩和）、「になる」を使うナ形容詞（容易、透明、優秀、強烈）調査の結果は、表 9-26 と表 9-27 の通りである。

<他動詞（される）の場合>

表 9-26 他動詞（される）の使用状況（自然さ判断テスト）

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
7 室内は床と壁のデザインが (A 統一になった B 統一した C 統一された)。	2.3	3.0	3.0	2.4	2.1	3.3	2.4	2.6	3.5
16 今年度の財務情報が (A 公開になった B 公開した C 公開された)。	1.8	2.3	3.4	2.2	1.9	3.9	2.6	2.1	3.6
22. 1~2 杯のコーヒーを飲むと、頭痛が (A 緩和になる B 緩和する C 緩和される)。	1.5	2.2	3.0	2.4	2.3	3.4	2.1	3.0	3.3
全体	2.16 (1.25)	2.53 (1.34)	3.12 (1.27)	2.36 (1.17)	2.12 (1.19)	3.52 (0.92)	2.35 (1.13)	2.61 (1.22)	3.44 (1.04)

※数値は、平均得点を示す。平均得点は 4~1 の間にある。

以上の結果を見ると、中国語話者の使用において、表 9-26 の「統一」タイプと、表 9-25 の「解決」タイプは、同じく「される」を優先するという傾向がある。それは、いずれも中国語では、「客体変化」と捉えられるため、「される」を使いやすいためであると考えられる。したがって、中国語話者は、デフォルト的に「される」を使うタイプ（「統一」など）を適切に使えらると思える。つまり、「統一」のような「される」タイプを明示し、「される」を使わなければならないと教えた上で、それ以外は「する」を使うと指導すれば、「する」の正しい産出が促進できると考えられる。「自他両用、自動詞、他動詞」という自他の分類のみを教えるより、効果的であろう。詳しい内容は第四部の『対策篇』で記述する。

<ナ形容詞（になる）>

最後に、日本語ではデフォルト的に「になる」を使うタイプ（ナ形容詞）の使用状況を分析する。調査の結果は、表 9-27 の通りである。3つのグループとも、「になる」の平均得点が高く、最大値 4 に近いと見られる。つまり、「になる」を適切に使う傾向が示されている。「する」の平均得点がやや高い場合があるが、他の問題文の影響や、対応する和語動詞があるという判断（例えば、「優れる」 = 「*優秀する」）などの要因が考えられる。

表 9-27 ナ形容詞（になる）の使用状況（自然さ判断テスト）

調査文	JFL 上級 (N=30)			JSL 上級 (N=30)			超級 (N=28)		
	になる	する	される	になる	する	される	になる	する	される
27. これにより情報の閲覧と検索が (A 容易になる B 容易する C 容易され	3.9	1.4	1.6	3.8	1.4	1.2	4.0	1.2	1.1

る)。									
35. 3分ほど蒸すと、餃子の皮が (A 透明になる B 透明する C 透明される)。	3.9	1.9	1.2	4.0	1.5	1.4	4.0	1.2	1.0
41. 環境が良くなれば、学生がどんどん (A 優秀になる B 優秀する C 優秀される)。	4.0	1.5	1.0	3.9	1.7	1.2	4.0	1.2	1.0
45. 梅雨が明けて、さらに暑さが (A 強烈になる B 強烈する C 強烈される)。	3.9	2.0	1.1	3.8	2.0	1.3	3.8	1.4	1.0
全体	3.93 (0.25)	1.77 (0.74)	1.28 (0.44)	3.85 (0.33)	1.63 (0.63)	1.27 (0.45)	3.92 (0.36)	1.25 (0.62)	1.04 (0.19)

※数値は、平均得点を示す。平均得点は、最大値が4、最小値が1である。

第5章で述べたように、中国語の非変化形容詞は、日本語のナ形容詞に対応するものが多く、「乾燥、一致」などの少数の語のみが、日本語ではサ変動詞となるのである。表9-28の結果によると、中国語で非変化形容詞である場合、「になる」を使ってもいいということが示唆された。その上で、例外の「乾燥、一致」などの語を明示的に教えればよいのではないかと考えられる。

2.2.2 学習環境と学習レベルによる変化

この節では、学習環境と学習レベルの要因を考慮に入れ、使用実態と使用意識の変化について分析する。以上述べてきた結果によると、自動詞(する)が誤用しやすいことが明らかになったため、自動詞を対象にして、学習環境とレベルによる使用実態と使用意識の変化を分析していく。

2.2.2.1 使用実態の変化

まず、正用の「する」、誤用の「になる」と「される」に分けて、上級 (JFL)、上級 (JSL)、超級の平均得点の比較を、図 9-7～9-9 に示す。

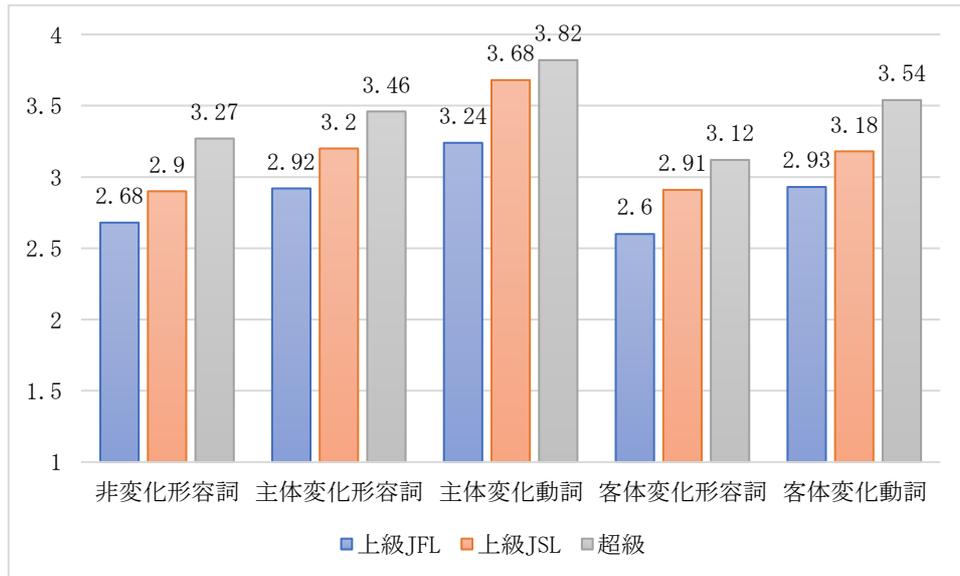


図 9-7 正用の「する」における 3 組の平均得点

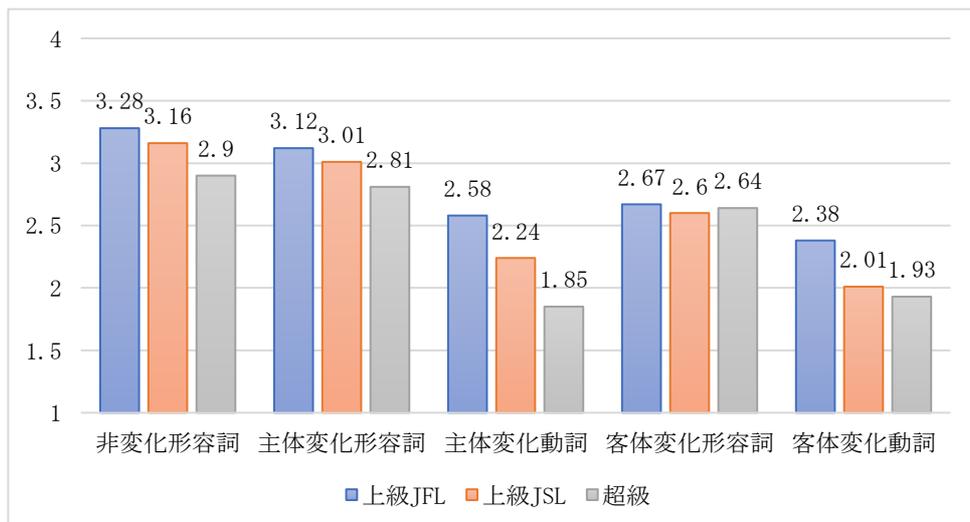


図 9-8 誤用の「になる」における 3 組の平均得点

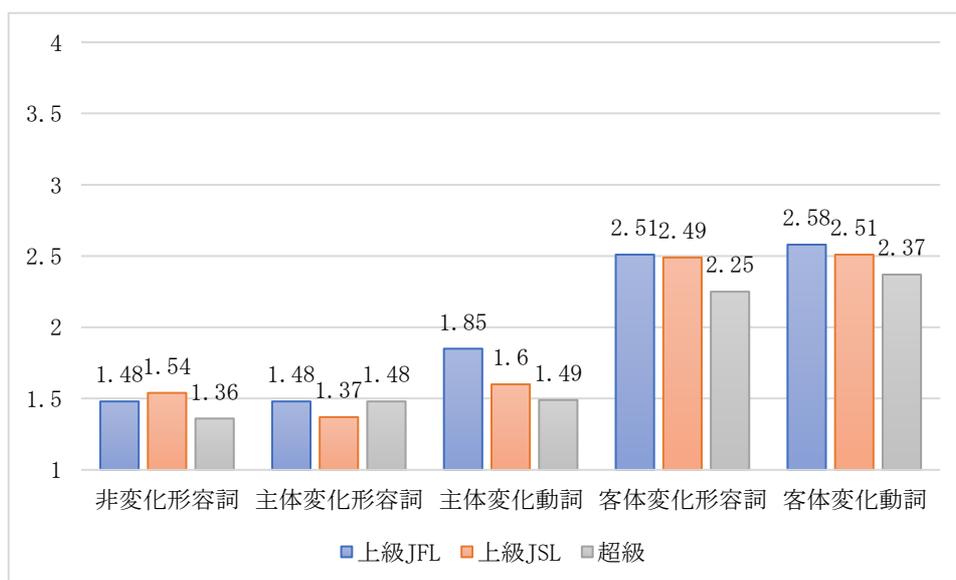


図 9-9 誤用の「される」における 3 組の平均得点

図 9-7、図 9-8、図 9-9 を見ると、正用の「する」に対する容認度は、中国語のタイプによって異なる場合があるが、全体的には誤用の「になる」と「される」と比べてかなり高いと見られる。また、学習環境とレベルによって各形式の平均得点異なる傾向がある。学習環境の影響を見るために JFL 上級と JSL 上級を比べ、学習レベルの影響を見るために、JSL 上級と超級を比べた結果、表 9-28 の通りとなった。

表 9-28 学習環境とレベルによる正用・誤用の変容

		学習環境 (JFL 上級と JSL 上級)	学習レベル (JSL 上級と超級)
正用	「する」	JFL 上級 < JSL 上級 (主体変化動詞の場合)	JSL 上級 < 超級 (非変化形容詞、客体変化動詞)
誤用	「になる」	JFL 上級 > JSL 上級 (客体変化動詞の場合)	有意差なし
	「される」	有意差なし	有意差なし

まず、学習環境による影響を見るため、上級の 2 組 (JFL と JSL) の各形式の平均得点について、*t* 検定を行った。その結果、正用の「する」において、「主体変化動詞」には有意差が見られ ($t(41)=2.8503$, $p<.01$)、JSL の平均得点が高いとわかったが、他のタイプには有意差が見られなかった。また、誤用の「になる」において、「客体変化動詞」には有意差

が見られ ($t(57)=2.2386$, $p<.05$)、JSL の平均得点が高いとわかったが、他のタイプには有意差が見られなかった。誤用の「される」において、有意差が見られなかった。つまり、中国語の形容詞不可の語では、JFL 環境と比べ、JSL 環境の学習者は、「になる」の誤用が少なくなり、「する」の正用が多くなる傾向が見られた。

また、学習レベルによる影響を見るため、JSL という条件が同じであるが、学習レベルが異なる「JSL 上級」と「超級」の平均得点を比べた。 t 検定を行った結果、正用の「する」において、「非変化形容詞」($t(51)=2.9029$, $p<.01$)と「客体変化動詞」($t(55)=2.7446$, $p<.01$)には有意差が見られ、いずれも超級の平均得点が高いことが示された。他のタイプには有意差が見られなかった。誤用の「になる」と「される」には、有意差が見られなかった。つまり、日本語環境と接触する機会が多くなり、日本語レベルが上達するにつれて、正しい形式の「する」が定着しつつある傾向がある。一方、誤用形式「になる」と「される」が削除されていく傾向も見られるが、消滅しにくいと考えられる。

2.2.2.1 判断基準と使用意識の変化

自然さ判断テストの後、FI を取り入れ、「になる」「する」「される」に対して、被験者がどのような基準をもって自然かどうかを判断するのかを調べた。その結果を表 9-29 に示す。1.2.2 節で述べた質的調査よりも、被験者の答えが多様であり、事象の捉え方、日本語の品詞や自他、表現機能などを判断基準としている。一方、主要な発想としては、共通した特徴が見られる。以下で具体的に記述していく。説明の便宜上、JFL 上級の被験者を「C-JFL1～C-JFL30」と呼び、JSL 上級の被験者を「C-JSL1～C-JSL30」と呼ぶことにする。

表 9-29 自然さ判断テストの FI の結果のまとめ

	FI の答え	JFL 上級 (30 人)	JSL 上級 (30 人)
する	主動的な動作	11	13
	事実の叙述	11	2
	変化 (自然)	5	8
	サ変動詞の語尾	4	5
	自動詞	3	5
	直感	0	3
になる	変化	24	21
	ナ形容詞	3	5
	名詞	2	3

	「する」と区別できない	3	3
	決定内容、規則	2	0
	あまり使わない	0	2
される	受身	17	18
	被害	9	6
	動作主の存在	5	3
	客観的な叙述	3	0
	主語が受け手である	3	0
	他動詞	2	2
	原因の存在	0	2
	直感	0	2

※複数の答えを出した被験者がいるため、合計値が人数を超えている場合がある。

主要な使用意識は、三者択一テストとⅡで明らかにしたように、「する」は動作を表し、「になる」は「変化」を表し、「される」は受身、特に被害を表す場合に、自然だと答えた人が多い。ただ、JFLの上級学習者とJSLの上級学習者の答えを比べると、「する」に関する捉え方に一つ注目すべきところがある。つまり、「事実を叙述する」際に「する」が自然だと答えた人は、JFLには30人中に11人いるのに対し、JSLには2人しかいない。また、「変化」を表す際に「する」が自然だと答えた人は、JFLには5人、JSLには8人いる。それぞれの答えは以下の通りである。

(38) 「する」 = 「事実の叙述」

- a. 「する」は、説明文や科学的文章によく使われていて、事実をそのまま述べる場合に使うと思います。(C-JFL6)
- b. 「変化」を表す場合、基本的に「になる」を使いますが、「する」はそのような状況が感じられず、ただの叙述だけだと思います。(C-JFL23)

(39) 「する」 = 「変化」

- a. 「普及」という状態になる、「破裂」という状態になるという意味を表す問題が多いです。そのような場合は、「なる」を使いがちですが、日本語の文章を読むことが多くなったら、実際には「する」を使うべきだとわかりました。(C-JSL13)
- b. 「なる」は「変化」を表すと思いますが、「する」も「変化」を表すことができる

かな。ただ、「なる」との区別がよく分からないです。(C-JSL17)

以上の答えを見ると、「事実の叙述」を「する」と関連づけるのは、「する」には「変化」の意味がないと理解しているためではないかと考えられる。これは三者択一テストとⅡでわかった[「する」＝「変化なし」]という発想と同じであると言えよう。一方、日本語のインプットが多くなるにつれて、「する」に「変化」を表す機能があるという特徴に気づいたため、「になる」を「する」と訂正できるようになる可能性が示唆された。これは、前節で示した自然さ判断テストの結果において、JFL 上級より、JSL 上級の方が「する」に対する容認度が高いということの原因の一つだと考えられる。

2.2.3 日本語母語話者の使用状況との比較

日本語母語話者と比べたら、中国語話者の使用にはどのような問題があるのかを見るため、日本語母語話者 18 名を対象に、自然さ判断テストを行った。実施時間は、2021 年 1 月～2 月である。日本語母語話者の被験者の概要は、以下の通りである。

表 9-30 日本語母語話者の被験者の概要

属性	日本国内の大学（院）の在学生や修了生 日本語教育、経済学、法学
年齢	20 代～30 代
人数	18 人

表 9-31 日本語母語話者と中国語母語話者（超級）の比較

日本語 のタイプ	日本語母語話者 (N=18)			中国語母語話者 (超級、N=28)			問題数
	になる	する	される	になる	する	される	
自動詞 する	1.26 (0.71)	3.86 (0.09)	1.43 (0.88)	2.43 (1.24)	3.44 (0.34)	2.21 (1.31)	40
自他両用 する(される)	1.24 (0.69)	3.96 (0.16)	3.67 (0.88)	2.24 (1.18)	2.73 (0.79)	3.58 (0.90)	3
他動詞 される	1.76 (1.09)	2.20 (1.30)	3.81 (1.29)	2.35 (1.13)	2.61 (1.22)	3.44 (1.04)	3
ナ形容詞 になる	4.0 (0.0)	1.0 (0.0)	1.0 (0.0)	3.92 (0.36)	1.25 (0.62)	1.04 (0.19)	4

表 9-31 の結果を見ると、中国語話者において次のような問題点が挙げられる。

①「する」タイプ（低下、普及など）では、中国語話者が日本語母語話者と同じように、「する」を産出することができると思われる。ただし、 t 検定をかけた結果、有意な差があり（ $t(33)=5.7794$, $p<.01$ ）、日本語母語話者の方が、「する」の使用が多い。また、「になる」（ $t(36)=9.4886$, $p<.01$ ）と「される」（ $t(42)=3.0261$, $p<.01$ ）は、日本語母語話者より多く使う傾向があり、誤用しやすいところである。

②「する（される）」タイプ（改善、解決など）では、「する」の使用に関して、日本語母語話者とは差が大きいと見られる。 t 検定をかけた結果、有意な差があった（ $t(30)=6.754$, $p<.01$ ）。このタイプの「する」の使用は、工夫する必要があるところだと考えられる。

③「される」タイプ（統一、緩和など）では、日本語母語話者と同じく「される」が使えるが、「になる」の誤用が生じやすいと見られる。

④「になる」タイプ（透明、強烈など）は、基本的に正しく使えると見られる。

以上のような結果に基づき、日本語母語話者と中国語話者（超級）の比較を通して、自動詞及び自他両用動詞の「する」の習得がもっとも難しいということがわかった。その背景は、「になる」と「される」の2つの形式が干渉し、FIの結果を合わせてみると、「変化」事象の捉え方、母語の影響が働くといった要因が考えられる。

3. 第9章のまとめ

第8章では、調査の目的、方法、及び実施する手順についての概要を述べた。それに基づき、第9章では、調査の結果を報告した。

第1節では、母語の働き方を把握するため、少人数の上級学習者を対象に、文法テスト（三者択一テストと複数選択テスト）とFIの手法を用い、中国語話者の「になる」、「する」、「される」に対する使用状況と使用意識について質的な調査を行った。その結果、全体的な使用傾向として、中国語の用法の影響が認められている。中国語では「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞」である場合は「になる」と「する」を使う傾向があり、「客体変化形容詞、客体変化動詞」である場合は「になる」と「される」を使う傾向があることが明らかになった。さらに、日本語の用法ごとに分析した結果、日本語の自動詞、即ち「～が+漢語+する」の形で「変化」を表すという場合が、一番誤用しやすく、中国語話者の習得上の困難であり、教育上の指導のポイントでもあると考えられる。その原因は、FIの結果から、「する」を「変化なし」、即ち「単純状態」や「動作」などと捉えているためであると

示唆された。

第2節では、問題の所在と要因を明確にするため、質的調査の結果に基づき、最も誤用しやすい自動詞（「低下する、普及する」など）に焦点を当て、量的な調査を行った。

まず、自然さ判断テストとFIの結果により、質的調査と一致した傾向が見られ、中国語では「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞」である場合は、「になる」と「する」を使い、「客体変化形容詞、客体変化動詞」である場合は「になる」と「される」を使う傾向がある。また、日本語では「される」を使う他動詞、「になる」を使うナ形容詞の使用状況も分析した。その結果、中国語話者が他動詞を「される」と、ナ形容詞を「になる」と正しく使うことがわかった。

次に、学習環境と学習レベルによる変化を分析した結果、日本語環境との接触が多くなり、日本語レベルが上達するにつれて、変化していく傾向が見られた。つまり、正しい形式「する」が定着しつつあり、誤用形式「になる」と「される」が削除されていくという発達過程である。なお、「になる」と「される」の誤用が超級に至っても消滅しにくいという結果から、中国語話者における問題の所在だと言える。また、FIの答えから、JFL上級の学習者が「する」を「変化なし」と捉えがちであるという傾向があるが、日本語環境との接触が多くなるにつれて、「する」を「変化」と対応づけられるようになる傾向がある。

さらに、日本語母語話者の使用実態との比較で、日本語母語話者が「する」を多く使う場合、中国語話者（超級）における「する」の使用が少なく、一方、「になる」と「される」の使用が多い。この結果も、「する」の産出を促し、「になる」と「される」を抑制することが、中国語話者を対象とする漢語動詞の教育における重要なポイントであると示唆された。

以上まとめてきた本研究の調査結果は、先行研究と比べ、以下の4点の違いがある。

①先行研究では、日中語の間に、品詞のずれや自他のずれがある場合、誤用が生じるとされている。しかし、本研究では、ずれのない場合も誤用が生じるということが明らかになった。具体的にいえば、「になる」は中国語の形容詞に相当する漢語動詞にだけ使うということではなく、形容詞用法がない場合も、「になる」が多く使われている。「される」は、主に中国語の客体変化形容詞・動詞、即ち他動詞用法がある語に相当する漢語動詞に使うが、他動詞用法がない非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞でも、「される」の使用が観察された。例えば、(40)～(43)のような例がある。

(40) 「品詞のずれがある」

- a.* 紫外線を浴びると、肌が乾燥になります。
- b.* 両国の関係が成熟になった。

(41) 「品詞のずれがない」

a.* 比率が前年よりやや下降になりました。

b.* この問題をめぐり、組織された政治勢力が分裂になりました。

(42) 「自他のずれがある」

a.* 昭和期に入ると、洋服は急速に普及された。

b.* 最近、イギリスのウイスキーの生産量が増加された。

(43) 「自他のずれがない」

a.* 寒さで水道管が破裂されました。

b.* その後も制作の失敗で、10年以上もの景気が停滞されました。

②「する」について、先行研究では、中国語話者が「他動性」や「自然な変化」と捉えらるるとされている。しかし、本研究では、FIを行った結果、「する」の産出を阻害する主な要因は、「する」を無意味の語尾として捉え、単純状態を叙述する際に使うことに、即ち「変化なし」と認識するということである。したがって、「変化」を感じると「になる」と言語化するというわけである。別の面から言えば、「する」が産出できても、必ずしも正しく理解しているとは限らない。これは、中国語話者にとって漢語動詞の「する」形を習得しにくい核心的な原因であると考えられる。例えば、(44)では「する」を使うが、「変化」ではないと理解することがある。

(44) a. 現状が複雑すぎて、頭が混乱しました。

→ (混乱している状態になった)

▲ (とても混乱している状態だ)

b. 人々の不安が高まる中、ツイッター上で、誤った情報が氾濫しました。

→ (氾濫している状態になった)

▲ (とても氾濫している状態だ)

③先行研究では、両言語の品詞と自他のずれによる誤用が注目されている。しかし、それはあくまでも習得状況の一角にすぎない。習得状況の全体像が把握できなければ、正用が起こる状況、ずれによる誤用以外の誤用が起こる状況が視野に入らないという結果になってしまう。本研究では、中国語の視点から、問題が生じうる場合を特定してから、問題の所在を絞るという方法を取ったため、習得状況の全体像における正用と誤用の様相と分布が見られるようになった。例えば、先行研究では、中国語の形容詞に相当する漢語動詞を「になる」と誤用しやすい、中国語の他動詞に相当する漢語動詞を「される」と誤用しやすいとさ

れている。なお、本研究の調査では、非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞は「になる」と「する」を使いやすいという結果となり、「になる」が誤用となり、「する」が正用となるが、「する」の捉え方を間違えることがある。また、客体変化形容詞・動詞は、「になる」や「される」と誤用しやすい結果となっている。

(45) 「先行研究における習得状況」

形容詞：*「になる」

他動詞：*「される」

(46) 「本研究における習得状況」

非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞： *「になる」 + # 「する」

客体変化形容詞・動詞： *「になる」 + * 「される」

④先行研究では、主に上級学習者を調査の対象としている。上級学習者は、学習環境（JFLとJSL）によって習得状況が異なるのか、上級以降はどのように発達していくのか、明らかになっていない。本研究では、JFLの上級とJSLの上級、また、JSLの上級と超級の調査結果を比較し、環境とレベルによる変容を明らかにした。発達のプロセスにおいて、正しい形式「する」と誤用形式「になる」「される」が共存し、誤用形式が削除されていく傾向があるが、中国語の形容詞と他動詞の用法からの影響が消滅しにくいことが明らかになった。

第10章 総合的考察

1. 母語の働き方の様相

1.1 母語の用法と使用状況の相関性

第9章では、第二部の対照分析の結果に基づき、中国語話者の使用状況と使用意識の実態を調査した。つまり、中国語の「変化」を表す語を全て視野に入れ、中国語の用法によって、「非変化形容詞、主体変化形容詞、主体変化動詞、客体変化形容詞、客体変化動詞」と分類してから、これらのタイプによって使用傾向が異なるかどうか、調査結果の分析を通して明らかにした。結論を言えば、中国語話者の使用は、中国語の用法に沿って分布していると見られる。諸用法ごとに使用傾向を見ると、(1)に示すように、それぞれ異なっている特徴も見られた。

(1) 「中国語の用法と漢語動詞の使用状況の相関性」

a. 非変化形容詞 变得干燥 乾燥になる > 乾燥する

b. 主体変化形容詞	混乱 <u>了</u>	混乱になる	≒	混乱する
c. 主体変化動詞	下降 <u>了</u>	下降になる	≒	下降する
d. 客体変化形容詞	普及 <u>了</u>	普及になる	=	普及される
e. 客体変化動詞	増加 <u>了</u>	増加になる	<	増加される

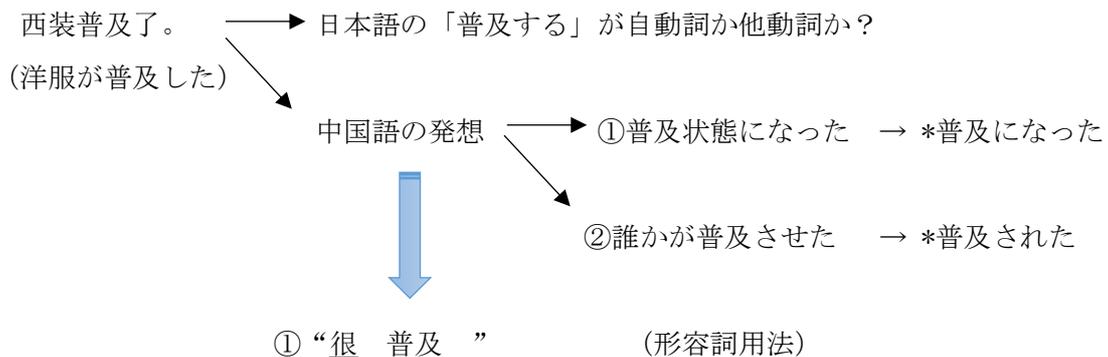
全体的な傾向からみると、次の2点の特徴が挙げられる。

①客体変化形容詞・動詞は「される」を多く使うのに対して、非変化形容詞、主体変化形容詞・動詞は「される」をあまり使わないという相補的分布が見られる。「される」の使用は、主に中国語の他動詞用法の影響によるものであると認められる。

②形容詞用法の有無にかかわらず、「になる」を使う傾向が見られたが、相対的には形容詞の場合に、「になる」を多く使う。特に「乾燥、低下」などの非変化形容詞、“变得”（なる）など、「変化」に相当する成分が必須である語は、最も「になる」を使いやすいと見られた。つまり、「になる」の使用は、中国語の形容詞用法からの影響が大きいという傾向が見られた。

1.2 潜在的な母語知識の働き

以上述べたように、中国語の影響が認められるが、FIの結果を見ると、明示的に中国語の用法を基準として判断するという答えがなかった。それは、潜在的な母語知識が働いているのではないかと考えられる。つまり、ある語を使う際に、形式の選択に迷う場合、日本語における用法を判断できないと、中国語ではどのようなタイプに属するのか、といった言語学的な説明をせず、中国語における表現様式を通して、その意味から使用できる形式を推測するという言語処理の手段を用いているのだと推測される。そのイメージを示すと、図10-1となる。ただし、中国語の発想は、その語の用法に基づいて生成されると考えて間違いないだろう。例えば、図10-1において、中国語の2種類の発想は、“普及”の形容詞用法と他動詞用法に基づいたものであると考えられる。



- とても 普及する
 (かなり普及している)
- ② “张三 普及 了 西装” (他動詞用法)
- 人名 普及する た 洋服
 (張三が洋服を普及させた)

図 10-1 潜在的な母語知識の働き方

一方、中国語の有形の形式による影響を受けて、「*普及になった」「*普及された」などを産出するとは考えられない。なぜなら、図 10-1 のように、この 2 つの形式を産出する際に、中国語では「なる」と「される」に対応する“変”（なる），“被”（される）などの形式が使われず、いずれも「NP+動詞・形容詞+了（た）」の形式を使うためである。

(2) 西装 普及 了。 → { *洋服が普及になった。
 洋服 普及する た { *洋服が普及された。
 (洋服が普及した)

- (3) a. 西装 变得 普及 了。
 洋服 なる 普及する た
 (洋服が普及した)
- b. 西装 被 普及 了。
 洋服 普及する た
 (*洋服が普及された)

(3) のように、“変”（なる），“被”（される）などの形式を入れても、中国語では非文ではないが、それより (2) のようなそういった形式がなくても、よく使われているのではないかと考えられる。しかも、FI の結果によると、「になる」や「される」を使う理由として、中国語では“変”（なる），“被”（される）が言えるために使ったといったような答えがほとんど見られなかった。それより、事象の特徴に対する解釈、即ち「状態変化」、「働きかけや影響を受けた」などのような捉え方が判断の基準となるということも、母語の有形の形式が判断基準となるのではなく、母語の潜在的な知識に基づいた判断が働いているはずである。

1.3 諸要因における母語の働きの位置付け

FIの結果によると、事態の捉え方が形式の選択の主な基準となることがわかった。即ち、動作を「する」、変化を「になる」、働きかけや影響を受けるのを「される」、また状態も「する」というように、中国語話者の中で対応づけられている傾向がある。このような事態の捉え方に基づき、中国語の知識と既習の日本語の規則が相互に作用した結果、ある形式が産出されると考える。以上の分析と考察を通じて、主な誤用形式が「になる」と「される」であることがわかったが、この節では、この2つの形式を中心に、それぞれの産出過程を示し、母語の働きがその中にどのように位置付けられるかを解明していく。

まず、「される」の誤用において、外因的变化と捉えることが共通した特徴である。外因とは、動作主の働きかけ、自然力の影響、他の出来事の影響などが挙げられる。それらの要素を感じると、「される」を使いやすいと考えられる。ただし、「される」形が産出できる前提として、日本語の「される」に関する規則を知っていることが必要であろう。ここでは、直接受身の作り方に当たるため、該当する漢語動詞が日本語では他動詞であると認識するというわけである。しかし、日本語では、その漢語動詞が本当に他動詞かどうかはわからない場合、中国語の知識を頼りにしたり、意味的に解釈したりする手がかりを用い、仮の他動詞を作ってさらに受身化することが考えられる。このような過程は、英語の第二言語習得では、他動詞化 (causativization) と呼ばれており、英語学習者による非対格自動詞の受身化の過程が解釈されている (Oshita (2000) を参照)。それは、以下の図 10-2 で示されているとおりである。

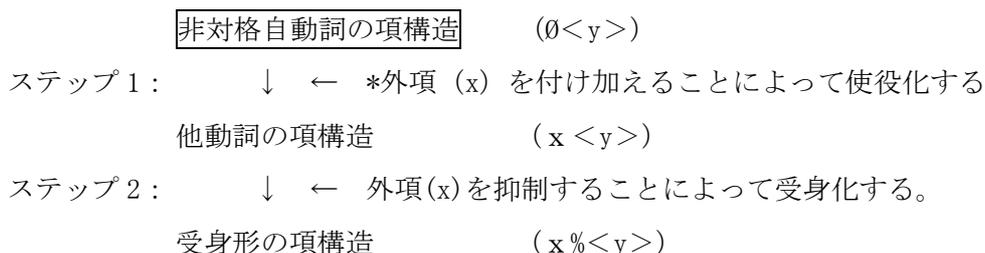


図 10-2 非対格自動詞受身化の過程の解析 (Oshita (2000) を参照)

本研究の調査結果によると、「される」の産出が図 10-2 と似ていると考えられる。ただし、外項の (x) の捉え方が様々であり、以上述べたような動作主の働きかけ、自然力の影響、他の出来事の影響などの要素が、全て外項として付け加えられる可能性がある。例えば、(4) は、中国語“开通”(開通する)は他動詞として使えるため、「トンネル」を「働きか

けの受け手」と捉え、「従業員」のような動作主を概念化すると、「開通する」を「仮の他動詞」として生成し、さらに動作主を抑制して受身化する過程である。

(4) 「動作主の働きかけ」

a. トンネルが開通した。

b. 隧道 开通了。

トンネル 開通する た

c. 工人 开通了 隧道。 (従業員がトンネルを開通させた。)

従業員 開通する た トンネル

↓

ステップ1: *職人がトンネルを開通した。 (仮の他動詞)

ステップ2: *トンネルが開通された。 (受身化)

一方、“蒸発”（蒸発する）、“進歩”（進歩する）は、中国語ではそのまま他動詞として使えないため、動作主を直接概念化することができないだろう。なお、文全体から自然力の影響、他の出来事の影響などを感じると、図 10-2 のステップ1と同じように、それらの影響を「外項」として付け加え、「仮の他動詞」を作り、さらに受身形を作るというような過程も考えられる。例えば、(5) のように、「気温の上昇」という自然力の影響を「外項」とする場合や、(6) のように、「経済の発展」という他の出来事の影響を「外項」とする場合は、いずれも受身化の原因になりうると考えられる。

(5) 「自然力の影響」

a. 気温が上がるので、ますます水が蒸発した。

b. 由于 气温 上升，水 逐渐 蒸发了。

から 気温 上昇する 水 ますます 蒸発する た

↓

ステップ1: *気温の上昇が水を蒸発する。 (仮の他動詞)

ステップ2: *水が蒸発される。 (受身化)

(6) 「他の出来事の影響」

a. 経済の急速な発展にともなって、情報、通信技術も進歩した。

b. 随着 经济 迅速发展，信息、通讯技术 也 进步了。

に伴って 経済 急速 発展する 情報 通信技術 も 進歩する た

↓

ステップ1：*経済の急速な発展が技術を進歩する。(仮の他動詞)

ステップ2：*技術が進歩される。(受身化)

次に、「になる」の誤用について考える。「になる」の誤用において、「変化」があると捉えることが共通した特徴である。形容詞可の場合は、母語の影響によって日本語の「ナ形容詞+になる」として使う可能性があるが、一方、形容詞ではない場合に「になる」を使うと母語の影響とは言えない。なお、形容詞ではない場合でも、“～了”の形で「状態変化」を表すことができる。そのために、日本語の「ナ形容詞・名詞+になる」という規則を拡大解釈すると「になる」を使う過程が考えられる。

まず、中国語では主体変化動詞である場合を考える。例えば、(7)のように、失業率の上昇という状態変化が捉えられるため、「*上昇になった」を使う可能性がある。

(7) a. 6月の失業率は2ヶ月ぶりに上昇した。

b. 6月份的 失業率 时隔 两个月 又 上升 了。

6月 の 失業率 ぶりに 2ヶ月 また 上昇する た

失業率 (変化主体) → 上昇 (状態変化)

↓

*上昇になった

また、注意すべきなのは、客体変化動詞の場合である。このタイプでは、自動詞文は、他動詞文の目的語を前置にして生成されるという過程であり(秋山1996)、第5章で述べたように、このような目的語前置文は、「変化」とも「受身」とも捉えられるが、動作主が背景化されるとともに、動作対象が前景化されるため、文全体の意味では状態変化が際立つというのが一般的である。例えば、(4)の例を再掲して見ると、(8)のように、動作主の「従業員」を概念化することができるが、目的語前置文では、(9)のように、客体の「トンネル」の状態変化が際立っているため、「*開通になった」という形を使う可能性がある。

(8) トンネルが開通した。

工人 开通 了 隧道。 → 隧道 开通 了。

従業員 开通する た トンネル トンネル 开通する た

他動詞文

目的語前置文 (自動詞文)

(9) 従業員 → トンネル → 開通

動作主 → 動作対象 → 状態変化

↓

*開通になった

以上述べてきたように、中国語話者による「される」と「になる」の産出は、事象の捉え方に基づき、母語の影響と日本語の規則の拡大解釈が相互に作用する結果である。具体的には、以下の通りに示すことができる。(10)のように、「される」を使うのは、外因的な変化という事象の捉え方に基づき、母語の他動詞用法、及び日本語の直接受身の作り方という規則の拡大解釈が相互に作用した結果である。(11)のように、「になる」を使うのは、状態の変化という事象の捉え方に基づき、母語の形容詞用法、及び日本語の「ナ形容詞・名詞+になる」という規則の拡大解釈が相互に作用した結果であると考えられる。

(10) 「される」: 事象の捉え方 + 母語の影響 + 日本語の規則の拡大解釈
↓ ↓ ↓
外因的变化 他動詞用法 直接受身の作り方

(11) 「になる」: 事態の捉え方 + 母語の影響 + 日本語の規則の拡大解釈
↓ ↓ ↓
状態の変化 形容詞用法 「ナ形容詞・名詞+になる」

2. 母語の働きの変化

2.1 学習環境と学習レベルの影響

正用形式「する」は、JFL 上級より JSL 上級の方が容認度が上がり、JSL 上級より超級の方が容認度が上がる傾向がある。一方、誤用形式「になる」と「される」は、学習環境とレベルによって変化する傾向が明らかではない。JFL 上級と JSL 上級を比較した結果、「客体変化動詞」(分裂、増加など)のタイプにおける「になる」は、JFL の容認度が高いという 1 つの相違点しか見つけなかった。

このような結果によると、中国語の形容詞用法の影響による「になる」の誤用は、日本語環境との接触が多くなっても、超級に至っても残っていることがわかった。また、「される」の誤用は、主に客体変化動詞・形容詞の場合に起こるという結果から、中国語の影響が消滅しにくいことが明らかになった。

2.2 超級学習者における問題点

上級学習者と比べると、超級学習者が「する」の正用が多くなり、「になる」と「される」の誤用が少なくなる傾向があるが、日本語母語話者と比べた結果から、「する」の使用が少なく、「になる」と「される」の使用が多いという相違点が見られた。

それは、超級学習者の中では、どの形式を選択すればいいか、明確な規則がないという問題が反映されている。超級学習者に対するFIによると、「直感で選びました」、「普段よく使う形式だと思います」といったような答えが多い。「このような場合は、このような原因で「する」を使い、「になる」や「される」が使えない」とった明確な答えが見られなかった。ただし、日本語母語話者においても、ある形式の自然さに対する判断にゆれがある。例えば、(12)の「開通」は、自動詞だと認められている(張 2014、庵 2010a、2010b)。なお、本研究の調査では、3つの形式とも自然だと答えたのは、18人の中に4人がいた。そして、(12)における3つの形式の平均得点を見ると、「になる」と「される」が割と高いと見られる。

(12) 明治5年、新橋～横浜間に日本初の鉄道が開通(①になりました ②しました ③されました)。

表 10-1 日本語母語話者と超級学習者による(12)の平均得点

	になる	する	される
日本語母語話者 (N=18)	2.1(1.2)	4.0(0.0)	3.2(1.1)
超級学習者 (N=28)	2.0(0.9)	2.9(1.2)	3.2(1.2)

ただ、1つ大きな相違点があり、即ち「する」に対して、日本語母語話者が一律して「する」が自然であると選んだ。一方、超級学習者は、「する」の判断にはゆれが見られ、「する」より「される」の方が自然だと選んだ。

つまり、日本語におけるデフォルト的な使用にあたって、日本語母語話者と学習者との違いが、教育上への示唆になると考えられる。

3. 問題の所在と原因の絞り込み

第三部の「調査篇」に基づき、中国語話者による漢語動詞の使用における問題と原因を、以下のように提示する。(13)に基づき、漢語動詞の指導を工夫すべきである。

(13) 【問題の所在】

- ・日本語の自動詞と自他両用動詞（「する」がデフォルト）
例：開通する、分裂する、増加するなど、
- ・「する」が産出しにくい。「になる」や「される」と誤用しやすい。

【原因】

- ・事象の捉え方：[動作主・原因 > 対象 > 変化]
 - a. 「対象の変化」のみ捉える → 「になる」
 - b. 「動作主・原因」を感じる → 「される」
- ・母語の影響
 - a. 形容詞用法
 - b. 他動詞用法
- ・日本語の規則
 - a. 変化動詞に関する知識の欠如
 - b. 「ナ形容詞・名詞」の拡大解釈
「受身の作り方」の拡大解釈

4. 学習者における問題の見方について

第三部の『調査編』の結果と考察に基づき、中国語話者における漢語動詞の習得上の問題点を扱う際に、以下の点に注意すべきであると考えられる。

〈1〉問題の特定について

日本語と中国語のずれのみに注目することは十分ではない。その対策として、中国語の視点から問題が生じうる状況を特定することが必要である。中国語話者の使用状況の全体像を把握した上で、日本語において適切かどうかを検討すべきである。

〈2〉調査と考察について

①調査のデザインをする際に、複数の手法をとって、予測を検証する必要がある。調査手法が変わると、結果が異なる可能性があるためである。

②調査の結果を分析し、考察する際に、正用と誤用を分けて考察するのみならず、形式上の正用に関して、さらに内面的考察をすることが必要である。なぜなら、正しい形式が使えても、正しく理解できているとは限らず、その中に正用を阻害する要因が含まれる可能性がある。例えば、本研究では、中国語話者が「～する」形を正しく使えるが、それは「変化なし」と捉えるためであり、日本語の「する」に含まれた「変化」の意味が捉えられておらず、さらに「する」の正しい産出を阻害する要因となるのである。つまり、アンケート調査の後に、FIを行う必要性が示唆されている。

③母語の働き方を考える際に、母語の用法と学習者の使用状況との相関性を記述するの

みでは十分ではない。母語の何の要素が働いているのか、有形の形式なのか、無形のある種の用法なのかを考える必要がある。また、母語の働きが唯一の原因ではなく、他の要素と相互に作用して習得が進むはずである。そのため、母語の働きの位置付けを明らかにした上で、誤用の原因などを考えるのが妥当であると考えられる。

④発達の視点から、学習環境や学習レベルの影響によって、母語の働き方がどのように変容するのかを見る必要がある。消滅しにくい母語の影響を絞り出し、注目すべき点として提示する必要がある。

〈3〉改善対策との関連について

①誤用が生じやすいところを絞り込むのみならず、肝心の要因も適切に説明することが重要である。現行の教科書などには、日本語の品詞や自他が新出単語のリストに掲げられているにもかかわらず、これらの情報を知っていても、正しく使えるわけではない。それは、これらが日本語における語の基本的情報に過ぎず、学習者の視点からの規則とは言えないためである。本研究では、学習者の母語の視点から、母語の知識を利用して説明するのが効率的であり、限界がある場合は、明示的に説明すればいいと考える。

②問題点を絞った上で、要因を説明するのみでは不十分である。特に語彙に関わる場合は、問題となりうる語彙リストを提示する必要があると考えられる。

以上のような示唆に基づき、次は第四部の『対策編』に入り、中国語話者にとって有用な漢語動詞の指導案を作成することを試みる。

第四部 対策篇

中国語話者を対象とする漢語動詞の教育は、現行の教科書及び指導方法を見ると、語彙と文法の乖離、システム的な規則の欠陥、指導視点の不明確さなど、様々な問題点が見つかった。これらの問題は、以上で述べた中国語話者における漢語動詞の習得上の困難点と関係していると見られる。第四部の『対策篇』では、教科書の設定と指導の方法における問題点を指摘した上で、改善対策を提案することを目指す。その対策を考える際に、母語（中国語）の視点から、中国語話者による理解や使用の困難点に対して、どのように漢語動詞の誤用を抑制し、正用を促進すればいいか、導入する内容と時期に関する試案を作成する。

第11章 現行の漢語動詞の教育における問題点

第三部の『調査編』では、JFL 環境の上級学習者は、「漢語+する」形と「変化」の意味の

関連付けが把握できず、「漢語+する」が「変化なし」を表すという発想が存在するということがわかった。JSL 環境の学習者と比べ、日本語の自然なインプットが足りないことに加え、教科書と教師の指導から適切な規則が得られなければ、自ら習得することは極めて難しい。または、「漢語+になる」や「漢語+される」といったような形式が誤用であると気づかないままにし、化石化する恐れがある。

そのため、本研究では、JFL 環境における漢語動詞の教育に焦点を当て、教科書と指導方法の問題点を探ることとする。それらの問題点は、中国語話者による理解や使用の困難点と関係するかどうかを検討する。

1. 教科書における問題点の考察

1.1 調査した教科書

本研究で調査した教科書は、中国国内で、大学の日本語専攻生を対象に、「精読」という総合的コースの教科書として、広範に使われている『総合日語』、『日語総合教程』、『新編日語』の3種類である（以下は表 11-1 の略称を使う）。表 11-1 に示したように、1 年次に使う第 1、2 冊を初級にし、2 年次に使う第 3、4 冊を中級とし、3 年と 4 年次に使う第 5～8 冊を上級とする。ただし、上級の教科書は、『総合』と『新編』がないため、『日合』の 1 種のみ調査した。

表 11-1 本研究で調査した教科書の一覧

初級		略称	編集者	発行年	出版社
1	総合日語（修訂版）第一冊	総合 1	彭広陸、守屋三千代	2009	北京大学出版社
	総合日語（修訂版）第二冊	総合 2	彭広陸、守屋三千代	2010	北京大学出版社
2	日語総合教程 第一冊	日合 1	陳小芬	2014	上海外語教育出版社
	日語総合教程 第二冊	日合 2	許慈恵、高潔、林彬	2014	上海外語教育出版社
3	新編日語（再版）第 1 冊	新編 1	周平、陳小芬	2015	上海外語教育出版社
	新編日語（再版）第 2 冊	新編 2	周平、陳小芬	2015	上海外語教育出版社
中級		略称	編集者	発行年	出版社
4	総合日語（修訂版）第三冊	総合 3	彭広陸、守屋三千代	2010	北京大学出版社
	総合日語（修訂版）第四冊	総合 4	彭広陸、守屋三千代	2011	北京大学出版社

5	日語総合教程 第三冊	日合 3	周星、徐志強、趙鴻	2015	上海外語教育出版社
	日語総合教程 第四冊	日合 4	吳大綱	2015	上海外語教育出版社
6	新編日語（再版）第3冊	新編 3	周平、陳小芬	2015	上海外語教育出版社
	新編日語（再版）第4冊	新編 4	周平、陳小芬	2015	上海外語教育出版社
上級		略称	編集者	発行年	出版社
7	日語総合教程 第五冊	日合 5	陸静華	2011	上海外語教育出版社
	日語総合教程 第六冊	日合 6	陳小芬	2011	上海外語教育出版社
	日語総合教程 第七冊	日合 7	季林根	2007	上海外語教育出版社
	日語総合教程 第八冊	日合 8	皮細庚	2017	上海外語教育出版社

1.2 教科書の記述

以上の教科書において、本研究で対象とした漢語動詞について、どのように記述されているのか。また、関連する項目として、「～になる」、「～される」（受身）についてどのように記述されているのか、本節ではその記述の特徴を概観する。

1.2.1 漢語動詞について

教科書によって、選定されたテキストの内容が異なるため、漢語動詞の出現時期が異なる場合がある。以下、各教科書における出現時期、品詞と自他の表示と説明、用例の特徴について述べる。

<1>教科書に収載された研究対象語及び出現する段階

本研究の対象とした漢語動詞は、初級の後期（1年次の後半）、及び中級（2年次）に、導入されるものが多いと観察された。それ以外に、初級の前期（1年次の前半）にも、少数の語が観察された。なお、上級の教科書には、ほとんど本研究の対象語が見つからない。それは、本研究の対象語は、JLPTの1～4級の範囲から選別されたものであるが、一方、上級になったら、新出単語は主に JLPT の級外の語となるためであると考えられる。具体的には、表 11-2 の通りである。

表 11-2 各教科書に収載された漢語動詞及び出現時期

初級	1	2
新編	安定、開始、活躍、感動、緊張、発展、満足 (7語)	改善、感動、減少、謙遜、後退、混雑、失業、 実現、失敗、集中、停止、発生、悲観、変化 (14)

			語)	
総合	拡大、成長、普及、流行 (4 語)		回復、感動、緊張、興奮、固定、孤立、実現、失敗、充実、進歩、中止、発生、発展、繁栄、普及、変化 (16 語)	
日合	解決、完成、感動、骨折、進歩、調和、変更、満足 (8 語)		活躍、実現、充実、成功、成長、低下、不足 (7 語)	
中級	3		4	
新編	形成、公開、合成、興奮、混乱、再現、退化、消失、充実、成長、普及、上昇、中断、沸騰、平均 (15 語)		解決、回復、拡大、確定、後悔、荒廃、固定、増加、低下、独立、破壊、復活、復興、矛盾 (14 語)	
総合	悪化、安定、確立、感染、乾燥、活躍、減少、混乱、失恋、上昇、成功、成立、増加、達成、沈黙、低下、独立、破壊、破産、発達、満足、矛盾 (22 語)		圧縮、形成、死亡、延長、喪失、廃止、疲労、沸騰、閉鎖 (9 語)	
日合	緩和、緊張、後悔、失恋、進歩、発達、発展、疲労、普及 (9 語)		悪化、解放、確立、結合、再現、死亡、対立、腐敗、調和、膨張、矛盾、滅亡 (12 語)	
上級	5	6	7	8
日合	動揺 (1 語)	分裂 (1 語)	-	-

＜2＞品詞と自他の表示と説明

漢語動詞の品詞と自他について、各教科書において表 11-3 のように表示されている。『新編』と『日合』では「サ変動詞」の名称が使われ、『総合』では「サ変動詞」と「カ変動詞」がⅢ類動詞と称されている。また、自他の情報も入っているが、教科書によって、自他の表示が異なる場合がある。例えば、「普及」は、『総合』では「自他」であるが、『新編』と『日合』では「自」である。「増加」は、『新編』では「自他」であるが、『総合』では「自」である。さらに、いずれも「名詞」という品詞情報が入っているという点は、3種の教科書で共通している。

なお、今回調査した教科書においては、中国語の品詞や自他の異同に関する説明が観察されていない。新出単語リストに中国語訳が付いているが、「文法解説」などのような部分には中国語との区別が説明されていない。

表 11-3 各教科書の新出単語表に掲げる品詞と自他の情報

例	新編	総合	日合
低下	(名・自サ)	(名・自Ⅲ)	(名・自サ)
混乱	(名・自サ)	(名・自Ⅲ)	(名・自サ)
上昇	(名・自サ)	(名・自Ⅲ)	(名・自サ)

普及	(名・自サ)	(名・自他Ⅲ)	(名・自サ)
充実	(名・自サ)	(名・自Ⅲ)	(名・自サ)
減少	(名・自他サ)	(名・自他Ⅲ)	-
増加	(名・自他サ)	(名・自Ⅲ)	

<3>用例の特徴

以上の漢語動詞は、テキストの用例を見ると、その動詞的用法も名詞的用法も観察された。いわゆる「動名詞」(小林 2004)の特徴が見られた。動詞的用法として、「Nが」や「Nを」をとる形や、「～てくる」や「～ている」をとる形が使われている。名詞的用法として、漢語の語幹が「～のN」、「～を」、「～が」、「～に」などの形で使われている。例えば、以下の通りである。

①動詞的用法

(1) 年々コンテンツも充実してきたし、デザインも良くなってきたし、液晶画面も見やすくなりましたよ。複数の辞書を同時に検索できるなど、機能も向上していますよ。(新編 3, 6 課)

(2) 私自身は、日本語本来の性質からみて外来語が増加するのは当然のことだと考える。(総合 3, 9 課)

(3) 1990 年から 1995 年にかけて輸出額は大幅に落ちているが、その後 10 年間で飛躍的に伸びている。しかし、輸出額は再び急激に減少している。(総合 3, 10 課)

②名詞的用法

(4) その結果、思考力や判断力、創造力、学ぶ意欲の低下のほか、いじめ、校内暴力、登校拒否などの状況を招き、それらが教育改革の重要な課題になっています。(新編 4, 10 課, p. 137)

(5) 外来語の増加が社会的な問題になっている。この問題に関しては、増加を否定的に捉える意見が多いようだ。(総合 3, 9 課)

(6) 通信技術の進歩に伴って、マスコミは目覚ましい発展を遂げて来た。その中でもテレビは新聞に取って代わり、今やマスコミの王様である。そのテレビの普及と技術の発達は、私たちの日常生活に大きな影響を与えている。(日合 3, 2 課)

なお、「サ変動詞」の用法について、主としてその活用形が重点として導入されているが、

名詞的特徴については特に説明されていない。そうすると、「名詞」と表示されていたら、名詞の規則を全て適用するという理解になる可能性がある。実際には、「漢語動詞の語幹＋になる」という形式が常に使えるというわけではないため、それが「漢語＋になる」の誤用と関わると考えられる。

1.2.2 変化の表現について

「～になる」という形式に関する3種の教科書における記述は、表11-4のようにまとめた。3種の教科書とも、「変化」を表す文型として、初級の前半に導入されている。前接する語は、名詞、イ形容詞、ナ形容詞とまとめられている。つまり、[名詞＋格助詞に＋なる]、[ナ形容詞の連用形（に）＋なる]の用法として、「～になる」の形を使うのである。

「～になる」の意味は、『総合』と『日合』では「変化の結果」と説明されているのに対して、『新編』では「状態の変化」と説明されている。さらに詳しい説明がないため、両者の区別がはっきりしていない。ただ、いずれも本研究でいう「変化」（物事や人の状態変化）を表す表現として導入されていると考えられる。

表 11-4 各教科書による「～になる」の導入時期と説明

教科書	導入時期	項目	説明	例文
総合1	10課	■「Nになる/A1くなる /A2になる」	●変化の結果を表す	・そろそろ12時になりますね。 ・肌がきれいになりますよ ・北京はもう寒くなりました。
新編1	8課	■「体言＋になります」 ■「形容詞、形容動詞の 連用形＋なる」	●1つの状態から他の 状態になる。 ●状態の変化を表す	・もう6時になりました。 ・李さんも先生になりました。 ・部屋がきれいになりました。 ・毎日食べます。ですから、嫌いに

				なりました。
日合 1	8 課	■「形容動詞の連用形+ なる」	●変化の結果	・日曜日ですから、公園も賑やかに なりました。
	9 課	■「名詞+になる」	●変化の結果	・その後、夏になります。 ・わたしは先月 22 歳になりました。

また、各教科書において、「～になる」以外の変化表現がどのように扱われているのかも観察した。主に、①「変化動詞」についての説明があるかどうか、②他に「変化」を表す文型があるかどうか、という 2 点をめぐって検討した。

①「変化動詞」についての説明

「変化動詞」は、テイル形の意味と動詞のタイプとの関わりを説明する際に、言及されている。ただ、教科書によって、動詞のタイプの扱いに相違がある。『新編』と『日合』は、金田一（1950）の四分類（状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第四種動詞）に従って、「瞬間動詞+テイル」（終わる、始まる、死ぬなど）は動作による結果の状態（『新編 1-8 課』）や、結果の持続（『日合 1-8 課』）を表す。一方、『総合』（1-11 課）は、状態動詞、動作動詞、変化動詞（奥田 1978）に分けられ、テイル形の意味が説明されている。「動作動詞+テイル」は動作の持続を表し、「変化動詞+テイル」は、変化の結果の持続を表すと解説されている。

(7) 「変化動詞」（総合 1-11 課, p. 212）

説明：「V ています」は、変化の結果の持続を表すことができる。その場合、V が変化動詞である。

例文：a. もう夕食の時間は始まっていますよ。

b. もう外は暗くなっています。

c. 高橋さんはもう来ています。

②他の「変化」を表す表現

『総合』（4-18 課）（中級-後半）には、「変化に関わる表現形式」という項目がある。その説明は以下の通りである。(8) のような文型、および (9) のような「副詞+変化動詞」の

形式がまとめられている。

(8) 事態の変化、時間の推移を表す際に、以下のような形式を使う。

- a. これまでVしてきた・これからVていく
- b. Vている
- c. Vつつある・V傾向にある・V一方だ

(9) おおよその変化傾向を表す際に、以下のような形式を使う。

- a. 徐々に／急速に {上昇／増加、低下／減少} する
- b. 大きく／著しく／やや／わずかに {上昇／増加、低下／減少} する

このように、「～になる」、および「変化」を表す他の表現形式について、教科書では形式化されたものの導入が重視されている。つまり、「固まった枠」を教えたら、語を代入すればいいというような基本的な理念が反映されている。ところが、このような代入過程において、失敗する恐れがある。例えば、「名詞+になる」という枠に、漢語動詞の語幹を名詞として代入すれば、不自然になる可能性がある。

一方、「変化」を表す表現形式が重視されているが、中核としての変化動詞についての説明が十分とは言えない。日本語では、述語が文の中心に位置付けられており、述語の中では、動詞がその中核を担う役割を果たす（張 2014 : 3）ため、動詞自体の特徴や機能を中心に説明すべきではないかと考えられる。要するに、変化の表現を導入したり、まとめたりする際に、「変化動詞」を中心に、それ自体が変化を表す機能を持つことを明確にした上で、さらにどのような形式と共起し、どのような意味を表すのかを説明すべきであると考えられる。例えば、「変化動詞」自体は、物事（や人）の状態変化を表す動詞であり、テイル形を使う際に、変化の一側面として、変化後の結果の残存を表すというような説明が合理的ではないか。

1.2.3 受身について

「漢語+される」形は、受身を導入する際に、漢語動詞の活用形として説明されている。日本語の受身は、どのようなタイプがあるかについて諸説があるが、主に (10) のような2種類の区別の仕方がある（庵 2018 より）。1つは構造的な区別であり、直接受身と間接受身と分けられている。もう1つは機能的な区別であり、使用動機によって「昇格受動文」と「降格受動文」と分けられている（益岡 1987）。

(10) 構造的な区別：①他動詞から作られる「直接受身」

- a. Yは(Xに(よって))V～(ら)れる型
- b. Yは(Xに(よって))ZをV～(ら)れる型

※ bには「持ち主受身」と呼ばれるタイプが含まれる

②他動詞からも自動詞からも作られる「間接受身」

(11) 機能的な区別：①影響の受け手を主語にすることに動機付けられる「昇格受動文」

②影響の与え手を消すことに動機付けられる「降格受動文」

表 11-5 構造的な区別と機能的な区別による受身の分類の対応関係

構造的な区別		機能的な区別	
直接受身	YはV～(ら)れる型	降格受動文	影響の与え手を消す
	Yは(Xに(よって))V～(ら)れる型 Yは(Xに(よって))ZをV～(ら)れる型	昇格受動文	影響の受け手を主語にする
間接受身	Yは(Xに)V～(ら)れる型 Yは(Xに)ZをV～(ら)れる型		

本研究で取りあげた「漢語+される」は、機能的な区別による分類では、「降格受動文」に属し、構造的な区別による分類では、直接受身の一種であると言える。庵(2018)によると、直接受身は、(12)のような2種類の場合に使うのが自然であるとされている。①は、影響の受け手が影響の与え手より重要な場合であり、一般的には「私」である。②は、影響の受け手だけに關心がある場合である。本研究で対象とするのは、②の場合に相当し、いわゆる影響の受け手を消すために使う「降格受動文」である。それは、「自動詞の代わり」として使われると考えられる。

(12) 直接受身の使われる場合：

①影響の受け手が「私」のとき

- a. 私は誰かに押された。
- b. (私は) 電車の中で足を踏まれた。

②影響の受け手だけに關心があるとき

- a. 新しいゲームが発売された。
- b. コンサートの日程が変更された。

今回調査した教材では、受身は初級の後半に、構造的な区別による分類が導入されている。導入の時期と内容は、表 11-6 の通りである。(12) の②に相当するのは、下線部のように、

物を主語とする直接受身の一種であり、動作主が示されない場合として導入されている。

表 11-6 各教科書における「受身」の導入時期と導入の内容

教科書	導入時期	項目	例
総合	2-24 課	I 直接①人主語 ②物主語 ③持ち主 ④目的語つき II 間接	子供が母親に叱られる。 この本は多くの人に読まれている。(動作主に) <u>緑茶は中国でもよく飲まれている。(動作主なし)</u> 秦は始皇帝によって統一されました。(動作主によって) わたしは弟にパソコンを壊されました。 わたしは先生に仕事を頼まれた。 前の日に、隣の部屋の人に騒がれて、よく眠れなかった。 私たちは1年生に運動場を占領された。
新編	2-8 課	I 直接①人主語 ②物主語 ③目的語つき II 間接	日本語科の王先生は学生たちに尊敬されています。 <u>近ごろ、このことばがよく使われているようです。</u> 漫画週刊誌は若いサラリーマンによく読まれています。 わたしはあの人に頭を殴られました。 目の前に人に立たれて見えなくなりました
日合	2-8 課	I 直接①に格あり ②に格なし II 間接	子供は両親に愛されています。 二郎は太郎に頭を殴られました。 私がお年寄りに道を聞かれました。 <u>毎日12時に、教会の鐘が鳴らされます。</u> 私は雨に降られました。

一方、機能的な区別は扱われていない。このように導入されると、前節の変化表現と同じように、構造上の特徴が重要視され、「固まった枠」を教えることが一般的である。しかし、機能上の特徴があまり扱われていないため、いつ受身を使えばいいのかは、学習者にとっての困難点の一つになる。学習者は、受身を「影響の受け手を主語とする」表現と一般化する可能性がある。つまり、影響が直接であれ、間接であれ、主語が人であれ、物事であれ、受け手として捉えると受身を使うという過剰一般化になりうるということである。どのような場合に、受身を使うのが自然であるのかはわからないことになる。例えば、(12)の②のタイプは、受身形が使われるが、動作主が分からない場合や不問の場合であるため、機能上では自動詞と同じなのである。

また、段階を追った導入の観点から、庵（2018）では、(13) のように指摘されている。つまり、本研究で取り上げた (12) の②のタイプの受身は、中級で導入すればいいということである。

(13) 初級：受身の作り方（形態論）、「私」を主語にした直接受身

初中級：「私」を主語とした持ち主の受身

（→ここまでの、話し言葉における受身がカバーできる）

中級：() ②のタイプの受身（影響の受け手だけに關心がある）

（→書き言葉でよく使われるため、読解の素材などと組み合わせて扱う）

上級：間接受身、受身・使役と自他の対応の関係

なお、表 11-6 を見ると、受身の各タイプを一括して導入するのが現行の教科書の特徴であることがわかった。それ以降の中級、上級の教科書でも、さらなる受身の使用場面などの機能上の内容、受身・使役と自他の対応の関係は観察されなかった。

このように、受身の「固まった枠」しか導入されていないため、どのような語をその枠に使えばいいか、と判断する時に失敗する恐れがある。したがって、受身の使用動機と合わせて、各タイプに使える語を適宜まとめて導入する必要がある。また、段階を追った導入の観点も重要である。本研究の対象とした「漢語＋される」形は、(12) ②のタイプに当たるため、適用できる語のリストを提示しながら、中級に導入する方が良いと考えられる。さらに、上級では、「漢語＋される」（受身）と「漢語＋する」（自動詞形）の関連性を、語のリストを提示しながら導入する方が良いと考えられる。

1.3 教科書の問題点のまとめ

以上教科書における漢語動詞の使用に関する内容を分析し、次の問題点があると考えられる。

<1>漢語動詞の性質についての説明が不十分である。

まず、漢語動詞は、個別の新出単語として出現する際に、品詞や自他の情報が表示されている。しかし、品詞や自他についての具体的な説明がないため、学習者が自ら既習の品詞や自他の知識を用いて漢語動詞に当てはめて使うしかない。そうすると、マッピングを間違える恐れがあると考えられる。

また、中国語と同形同義の漢語動詞が出現する際に、品詞や自他が中国語と明らかに異な

る場合がある。例えば、「緊張」、「充実」、「普及」などは、中国語では形容詞であるが、日本語では動詞である。しかし、この種類の語についての説明が教科書に載せられていない。教師が単語の説明をする際に、触れることがあるかもしれないが、中国語話者にとって誤用しやすいため、一つの項目を設けて教科書に載せるべきであると考えられる。

〈2〉語彙の説明と文法の説明が分離されている。

まず、「変化」を表す表現形式、「名詞+になる」、「V ている」、「V つつある」などの項目があるが、「変化動詞」そのものの説明が足りない。漢語動詞の場合は、「漢語+する」の形として「変化動詞」の機能を果たすことができるため、新出単語のリストには[名・自サ]のような品詞表示があるにもかかわらず、常に漢語の語幹を名詞として「～になる」を使うことができるというわけではない。つまり、「変化動詞」についての説明が足りないし、「変化」の表現形式との関連性も不明であるため、「*低下になる」、「*減少になる」といったような誤用の原因になりうると考えられる。

また、「漢語+される」形の使用をめぐる、教科書における受身の記述を調べた結果、「降格受動文」に当たる用法、すなわち、影響の受け手にのみ関心がある時に使うという受身のタイプしか扱われていないことがわかった。しかも、どのような漢語動詞に「～される」形が使えるか、といったような規則の説明がない。新出単語のリストには[名・自他サ]のような自他の表示があるが、常に他動詞として「される」形が使えるというわけではない。そのため、「*開通される」「*発展される」といったような誤用の原因になりうると考えられる。

〈3〉導入の時期は検討する余地がある。

本研究の対象とする漢語動詞は、初級の後半～中級に出現するものが多い。「変化」の表現形式（「～になる」は初級の前半、受身の用法は初級の後半に導入するのが一般的である。もし漢語動詞による「変化」の表し方を1つの項目として導入するとしたら、漢語の表現、「降格受動文」に当たる受身の用法が書き言葉でよく使われるため、中級に導入するのが良いのではないかと考えられる。さらに、自他と受身や使役の関係など、発展的な規則は、上級に導入すればいいと考えられる。

〈4〉中国語との区別に関する説明の欠陥

〈1〉でも述べたように、漢語動詞の品詞や自他が中国語とずれた場合は、説明なしという問題がある。そのほかに、「変化」を表す際に、中国語と日本語とはどのような区別があるのか、中国語話者にとって何を注意しなければならないのか、といったような説明もないのである。現行の教科書は、日本語の用法と意味をそのまま説明するという特徴が見られ、中

国語の視点からはほとんど言及されていない。それは、中国語話者向けの教科書として、十分とは言えない。本研究では、中国語の知識を適切に利用して、日本語の規則を説明することが有用であると考えている。

以上述べたような教科書の記述の問題点があるため、学習者の中では、日本語の変化表現に関するシステムの認識が成り立たない。また、自ら規則のまとめや関連する語彙の分類などをすることが難しく、断片的に知識を組み立てるしかできなくなる。さらに、中国語との区別がはっきり認識できず、干渉を避けることが難しく、日本語の知識には自信がない場合、中国語の知識を借用して日本語を表現すると誤用が生じると考えられる。要するに、中国語話者による漢語動詞の誤用問題は、教科書の記述における問題点と関わっていることが明らかになり、改善する必要があると考えられる。

2. 中国国内の大学の日本語専攻における漢語動詞の指導の現状

教科書に不十分なところがある場合、教師が適切な指導をすれば、学習者にとって役に立つだろうと考えられる。中国語話者が、漢語動詞の指導に対して、どのような意識を持っているのかを見るために、李楓（2016）では、中国国内の大学の日本語学科で日本語を学習する学生 92 名（2 年生～4 年生）に対するアンケート調査が行われた。調査の実施時期は、2014 年 11 月である。その結果は、図 11-1 の通りである。

まず、漢語動詞の意味、自他の使い分け、分類と用法、名詞と動詞両用という指導内容が意識されている。また、指導に対する感想として、指導が不十分であるため、正確な理解や運用ができず、自分で学ぶ必要があるということである。さらに、指導に対する希望として、意味用法、構造、自他の使い分けなど、多くの側面について具体的に指導してほしいと思っていることがわかった。特に、自他や意味用法に関する内容について、すでに指導を受けているものの、あらためて指導を受けることへの希望が現れていることが注目されている。また、中国語との区別、社会的特性や実際の運用を学びたいといったようなニーズが確認されている。

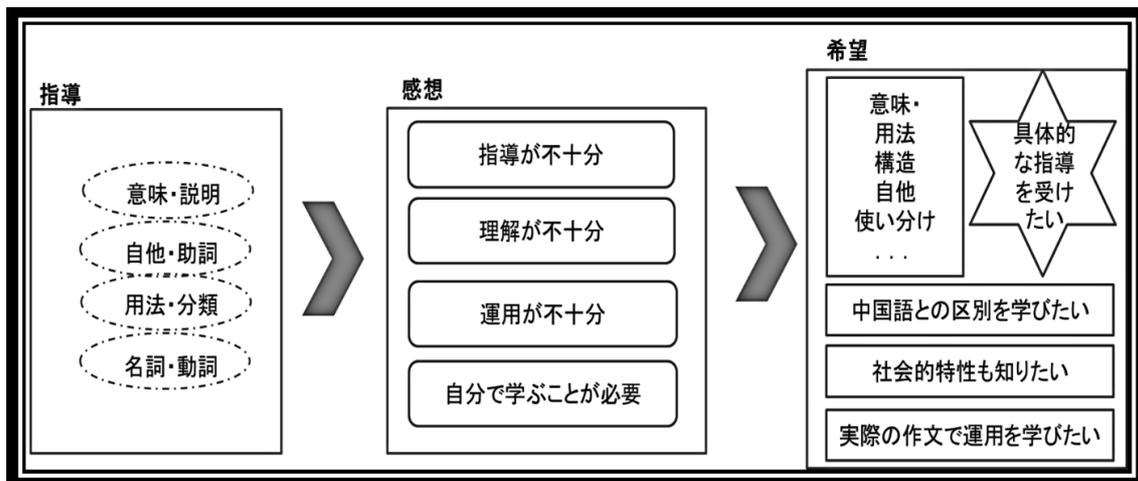


図 11-1 漢語動詞の指導に対する中国語話者の意識（李楓 2016 : 276）

図 11-1 の結果によって、中国国内の大学の日本語専攻における漢語動詞の教育実態が窺える。つまり、基本用法が教えられていても、理解できない、運用できないという現状である。また、中上級の学習者は、漢語動詞と中国語との区別があり、その影響を受けていると意識し、具体的な対策を求めているということがわかった。

また、中国国内の大学における日本語の語彙指導の対策に関して、様々な観点が見られる。語彙指導そのものに対して、語彙の分類、中日対訳、日本語による語彙の解釈、語彙の比較などの方法が提案されている（楊峻 2011）。また、場面の設定と語彙指導の結合、母語による場面の説明（胡欣・王禹 2006）のような提案も見られる。さらに、朱桂荣（2011）では、語彙指導のデザインをする際に、言語習得のパターンを重要視した上で、言語学の研究成果を導入し、内容に基づいた語彙教育、ペアワークに基づいた語彙教育を行うべきであると主張している。例えば、「犠牲」という日中同形語の指導について、以下のようなデザインが提案されている。

(14) 場面 1 : 既習の知識を通して、新しい問題を導き出す。

- ・「地震の犠牲者・交通事故の犠牲者」
- ・→不说“地震中的遇难者”，而说“地震中很多人遇难了”？

場面 2 : 刺激を通して、学習者の関心をそそり、新知識の導入を強化する。

- ・「*地震の中で多くの方が犠牲しました。」
- ・→「戦争の犠牲になった人が多い」「交通事故で多くの犠牲が出た」

場面 3 : 学習者の求知心を強め、新知識のインプットを拡大する。

- ・→「もう 1 つの意味がある」

为了家庭而舍弃工作：家庭のために仕事を犠牲にする。

場面 4：中日対照を通して語の内包及び語彙の学習方法について深く考えさせる。

- ・→「中国語の“犠牲”と日本語の“犠牲”は、動詞と名詞の区別のほかに違うところがあるのか」
- ・→中国語ではよく“光荣犠牲，壮烈犠牲”をいう。
日本語ではどう言うのか。
- ・→「彼は解放戦争で栄光の死を遂げた」
- ・語に関する文化、考え方の相違にもっと注意してください。

(朱桂荣 2011 よりまとめ)

以上述べたように、様々な角度から、語彙指導の対策が提案されており、体系的な語彙指導のデザインが目指されているが、学習者にとって、漢語動詞の指導には、依然として内容及び応用が不十分だという意識があるということがわかった。まとめて言えば、①指導すべき肝心なところが明確ではない、②適切な分類とまとめが行われていない、という2点の問題がある。それは、What の問題が明らかにできないまま、How の問題を扱ってしまうことによるものであると考えられる。日本語教育における「What と How の問題」について、庵 (2013) には、以下のような指摘がある。

- (15) 例えば、現行の初級シラバスのある形式の教え方としてよくできた教案があったとする。それは How の問題だけで考えれば優れたものであると言えよう。しかし、もし、その形式が初級で教える必要がないものということになったらどうか。その教案の評価は大きく変わってしまうであろう。つまり、How の問題（「どう教えるか」）について真剣に考えるためには、What の問題（「何を教えるか」）を避けて通ることはできないということである。

(庵 2013 : 12)

つまり、指導の方法より、学習者の習得上の困難点を明確にした上で、指導の内容を絞ることが重要であると考えられる。そのために、本論文の第二部『対照分析篇』、第三部『調査篇』で明らかにした中国語話者による漢語動詞の習得上の困難点に基づいて、(14) のように1つの語についてどのように教えるのではなく、どのような類の語を、その何の特徴についてどう教えるべきであるかに注目したい。次の第12章では、本研究で提起した中国語話者による漢語動詞の誤用問題をめぐり、学習者の母語の知識を活かした漢語動詞の指導試案を作成することを目指す。

第 12 章 中国語話者を対象とする漢語動詞の教育試案

1. 基本的な方針

まず、本研究で提案した漢語動詞の教育試案は、以下の 5 点を基本的な方針とする。

＜1＞教育内容に焦点を当てる

何を教えるべきかを、まず明らかにする必要がある。そうしなければ、いかなる教授法を使っても、学習の目的が達成できないのではないかと考える。

＜2＞産出のための規則を作る

庵 (2017) によると、文法と語彙には、理解レベルと産出レベルという 2 つの種類がある。理解レベルというのは、意味がわかればいいというもので、産出レベルというのは、意味がわかった上で正しく使える必要があるものである。

＜3＞母語の知識を活かす

中国語話者を対象に、日中同形同義の漢語動詞の用法を説明するには、母語の中国語の知識が利用できる可能性が示唆された。母語の知識に基づいた規則は受け入れやすいし、効率的に学習することができると考えられる。

＜4＞語彙と文法のつながりを考慮する

教科書の分析によって、シンタクスの知識の導入を重要視する一方、語彙の説明、及び語彙と文法のつながりの欠陥が明らかに存在することが明らかになった。どのように語を適切に文中に使えるかを考えるため、語彙と文法のつながりを把握する必要がある。

＜5＞段階を追って指導する

指導内容の必要性、及び学習者の日本語レベルを考慮に入れ、段階を追って進めるべきであると考え。具体的には、以下の 3 つの段階に分けて指導を行う方が良いと考える。基本的には、漢語動詞は内容がやや硬い書き言葉に使われるため、中級で導入すればいい。中級の前半に、変化動詞の機能、漢語動詞の特徴、中国語との区別に関する基本的な内容を説明し、中級の後半に語のリストを合わせて体系的にまとめ、母語の中国語の知識に基づいた規則を説明する。さらに、上級では、表現の精密化や言語理論的な内容を説明する。

- I 導入：中級-前 (2 年前期) → 基本内容の説明
- II 帰納：中級-後 (2 年後期) → 体系的なまとめ
- III 発展：上級 (3 年) → 表現の精密化と言語理論的な内容

2. 漢語動詞の指導試案

2.1 導入：基本内容の説明

基本的な内容は、中級の前半に導入する。主に、①日本語の変化を表す表現、②漢語動詞で「変化」を表す場合、③中国語との区別、という 3 点を導入する必要がある。

【日本語の変化を表す表現】

- ◆「変化」とは、物事（や人）の状態の変化のことである。
- ◆「変化」を表す際に、典型的な動詞は「なる」がある。また、動詞の中にはその意味の中に状態の変化を含むものがあり、「変化動詞」と言う。
 - ・なる [名詞に／イ形容詞く／ナ形容詞に 十なる]
 - ・変化動詞（例：割れる、壊れる、減少する、低下するなど）
- ◆「変化」が起こったことを表す場合、動詞のタ形を使う。「変化」が起こった後の状態を表す場合、動詞のテイル形を使う。
 - ・「変化」の実現済み： 「なる／変化動詞＋タ」
 - ・「変化」後の状態： 「なる／変化動詞＋テイル」
- ◆「変化」を表す動詞は、一般的には自動詞である。自動詞形がない他動詞の場合、その代わりに受身形を使う。
 - ・自動詞： コップが割れた。／生産量が減少した。
 - ・他動詞の受身形： 日程が変更された。
- ◆関連する形式⁴¹
 - ・「動詞＋よくなる」
 - a. ○○という薬を飲んだら、この病気はすぐに治った。
→変化動詞：変化が一時的である。
(○○という薬を飲んだ時、この病気がよくなったという一度の出来事である)
 - b. この病気は○○という薬で治るようになった。
→変化動詞＋よくなる：変化が継続的・恒常的である。
(○○という薬はこの病気に対する特効薬である)
 - ・「動詞＋ことになる」
 - 例：会議は6階の会議室で行うことになりました。
 - 変化を表す文型ではない。出来事が決定したことを表す。この場合は、話し手が主体的に決定したのではなく、外的要因によって「決まる」ということを表す。
 - ・「勉強になる」(慣用句)
 - 「勉強」以外の語は使わない。例：「成長になる」×。

【漢語動詞の場合】

- ◆漢語動詞の語幹は名詞であるが、「漢語＋になる」という形式はあまり使わない。

⁴¹ 「動詞＋よくなる」と「動詞＋ことになる」は、庵ほか（2000：77-78）を参照した。

×生産量が減少になる。 ○生産量が減少した・減少している。

×内容が充実になる。 ○内容が充実した・充実している。

◆漢語動詞は、「自動詞、他動詞、自他動詞」と分けられている。「他サ」は受身形「漢語＋される」を使わなければならないが、「自サ、自他サ」は基本的には「漢語＋する」を使う。

【中国語との区別】

◆中国語では「形容詞」であるが、日本語では「漢語動詞」である場合がある。中国語では“很～”で言える語の中は、日本語では、ナ形容詞もあれば、漢語動詞もある。漢語動詞の場合は、「漢語＋になる」形は使わないように注意する必要がある。

・例えば、「乾燥、低下、充実、緊張、成熟」などは、中国語では“变得～了”と言いたい場合は、「乾燥する」、「低下する」を使うように注意する必要がある。

◆中国語では「他動詞」であるが、日本語では「自動詞、自他動詞」である場合がある。中国語では、“V+N”で言える語は、日本語では、他動詞もあれば、自動詞や自他動詞もある。自動詞や自他動詞の場合は、「漢語＋する」形を使うことに注意する必要がある。

・例えば、「開通、分裂、減少、普及、増加」などは、中国語では“N～了”と言いたい場合は、「開通する」、「分裂する」、「減少する」を使うように注意する必要がある。

2.2 帰納：母語知識に基づいた指導案と語彙リスト

中国語話者において、サ変動詞の「漢語＋する」を「漢語＋になる」と「漢語＋される」と誤用するという問題が一般的に存在することがわかった。指導対策において、「になる」と「される」の誤用を減らし、「する」の正用を促すことを目指すべきである。対照分析篇では、このような問題が中国語の「変化」を表す語を中心に起こるため、中国語の「変化」を表す語を抽出し、五つのタイプに分けた。そして、日本語とは以下のような対応関係となることがわかった。表 12-1 を見ると、「になる」の誤用は、日本語で「サ変動詞」である場合に起こる。「される」の誤用は、主に中国語で「客体変化形容詞・動詞」である場合に起こる。

表 12-1 両言語の対応関係（簡略版）

中国語	日本語
非変化形容詞	ナ形容詞
	サ変動詞

「される」←

→「になる」

主体変化形容詞・動詞	
客体変化形容詞・動詞	

したがって、漢語動詞の教育対策を提案するため、以下の2つのステップに沿って記述した方が良いと考える。

〈1〉漢語動詞は、「になる」を使わないことを明らかにする

〈2〉漢語動詞は、「する」と「される」の使い分けを説明する。

また、前節の教材分析では、表 12-1 に含まれた語は、中級の後半までに導入されているとわかったため、これらの語のまとめ及び、規則の説明は、中級の後半に行うのが適切だと考えられる。具体的な指導試案は、以下の通りである。

【漢語動詞に関するまとめ】

◆問題提起

・〈小テスト〉

以下のような場合、どのような形式を使えばいいか、迷うことがあるでしょう。(1) のような意味を表す際に、漢語の後にどの形式を使えば正しいでしょうか。

- (1) a. 空气变得干燥了。 → 空气が乾燥 {になる、する、される}
 b. 试验成功了。 → 実験が成功 {になる、する、される}
 c. 教育普及了。 → 教育が普及 {になる、する、される}
 d. 物价上升了。 → 物価が上昇 {になる、する、される}
 e. 作品完成了。 → 作品が完成 {になる、する、される}

いずれも「変化」を表す例文であるが、日本語では「する」を使うのが自然である。これらの語は同形同義であるが、「*乾燥になる」や「*教育が普及される」を使うと誤用になるため、注意する必要がある。それでは、どのような漢語動詞に、特に注意する必要があるのか、どのような規則をもって覚えればいいのか、ここでまとめよう。

・〈復習〉

日本語では、どのように変化を表すのか？

①変化動詞

②イ形容詞く、ナ形容詞に、名詞に＋なる

漢語の場合は、どのような形式を使うのか？

- ①動詞：～する／～される
- ②ナ形容詞：～になる

・＜問題に気づかせる＞

日本語では「ナ形容詞」なのか、「サ変動詞」なのか、自動詞なのか、他動詞なのかは、はっきりと区別できない場合がある。そのため、「になる」「する」「される」はいつ使えばいいのか、わからない。

◆「漢語+になる」はいつ使えばいいのか？

まず、中国語の特徴から考える。「漢語」が中国語の形容詞であるかどうかを判断する。“很～”（とても）で言える語が形容詞である。また、中国語の形容詞は、さらに(2)の2種類があり、①“～了”（～た）と“没～”（～ていない）が使えないタイプと、②“～了”と“没～”が使えるタイプがある。「になる」が使えるかどうかを考える際に、(2)のような規則を使ってみよう。

(2)「漢語+になる」に関する規則

- ① “～了”と“没～”が言えない → 「になる」を使う。
- ② “～了”と“没～”が言える → 「になる」を使わない。

(3) 例を見よう。

- ① 豊富：○ “很丰富” / ? “丰富了” / * “没丰富” → 「豊富になる」○
透明：○ “很透明” / ? “透明了” / * “没透明” → 「透明になる」○
- ② 成熟：○ “很成熟” / ○ “成熟了” / ○ “没成熟” → 「成熟になる」×
普及：○ “很普及” / ○ “普及了” / ○ “没普及” → 「普及になる」×

※＜例外の場合＞

(2) ①のタイプは、日本語ではナ形容詞であるものが多い。その場合は、「ナ形容詞+になる」を使えばいい。例えば、「重要」、「透明」などである。また、その一部は、日本語ではサ変動詞である。一方、日本語ではサ変動詞であるものがあり、(4)の14語がある。この場合は「漢語+になる」の形が使えず、「漢語+する」形を使う。

- (4) 一致、不足、低下、矛盾、繁盛、憤慨、密集、平均、窮乏、乾燥、

悲観、楽観、抽象、謙遜

(2) ②のタイプは、日本語ではサ変動詞である。この場合も、「漢語+になる」の形が使えない。漢語が中国語で動詞である場合は、日本語でも動詞である。漢語動詞は、基本的には「漢語動詞の語幹+になる」が使えない。一方、以下の4語は、「になる」形を使う場合がある。

(5) 変更、中止、廃止、延期

◆「される」はいつ使えばいいのか？

まず、中国語の特徴を考える。(6) aしか使えないタイプもあれば、(6) aとbが使えるタイプもある。例えば、(7)と(8)のような例である。

(6) a. [NP2+V]

b. [NP1+V+NP2]

(7) a. 技术进步了。 → *进步了技术。

b. 物价上升了。 → *上升了物价。

(8) a. 教育普及了。 → 普及了教育。

b. 铁路开通了。 → 开通了铁路。

(6) に基づいて、「される」の規則を考えよう。(6) aしか使えないタイプは、日本語では基本的には「される」が使えない。(6) aとbが使えるタイプは、日本語では「される」を使わなければならないのは、以下の「中止、形成」などの34語がある。それ以外の場合には、「漢語+する」を使う。

(9) 「漢語+される」に関する規則

① [NP2+V] が使えるが、[NP1+V+NP2] が使えない。 → 「される」を使わない

② [NP2+V] も使えるし、[NP1+V+NP2] も使える。

中止, 形成, 開始, 変更, 破壊, 解放, 統一, 公開, 達成,
 強化, 延長, 改良, 開放, 解除, 緩和, 閉鎖, 冷凍, 削減, → 「される」を使う
 合成, 再現, 革新, 振興, 廃棄, 圧縮, 消耗, 暴露, 混同,
 増強, 誇張, 拡充, 打開, 爆破, 喪失, 満足, 変革, 固定, 閉鎖



それ以外の場合

→ 「する」を使う

(10) 例を見よう

- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------------|---|
| ① 進歩: | <u>技术进步了</u> / * <u>进步了技术</u> | → 技術が進歩された | × |
| 上昇: | <u>物价上升了</u> / * <u>上升了物价</u> | → 物価が上昇された | × |
| ② 延長: | <u>有效期延长了</u> / <u>延长了有效期</u> | → 有効期間が延長された | ○ |
| 統一: | <u>规格统一了</u> / <u>统一了规格</u> | → 規格が統一された | ○ |
| | ↑↓ | | |
| 普及: | <u>教育普及了</u> / <u>普及了教育</u> | → 教育が普及した | ○ |
| 開通: | <u>铁路开通了</u> / <u>开通了铁路</u> | → 鉄道が開通した | ○ |

※<例外の場合>

「延期」の1語は、(9)の①の条件を満たすが、「される」が使える。

◆他の重要なポイント

①受身の意味があるのに、なぜ「される」を使わないのかについての説明が重要である

(9) ②のそれ以外の場合、「する」を使う際に、以下の中国語の特徴に沿って考えよう。
 (11)のように、「教育が普及する」「鉄道が開通する」のような場合、「人の働きかけによってそのようになった」という意味を表すので、「される」を使わないと落ち着かないと感じるかもしれない。一方、(12)の中国語訳を見ると、中国語でも受身マーカー“被”を使わない。(14)のように、使うと逆に不自然になる。日本語も同じように、「誰かによって」と言及する必要がない場合、(13)のように「される」を使わない。

- | | |
|------------------|---------------|
| (11) a. 教育が普及した。 | (12) a. 教育普及了 |
| b. 鉄道が開通した。 | b. 铁路开通了 |

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| (13) a. *教育が普及 <u>され</u> た。 | (14) a. ??教育 <u>被</u> 普及了 |
|-----------------------------|---------------------------|

b. *鉄道が開通^{され}た。

b. ??铁路^被开通了

②タ形とテイル形の使用に注意する必要がある。

「ある出来事が起こったこと」を表す際に、タ形を使う。「その出来事が起こった後の、全
の状態」を表す際に、テイル形を使う。両方とも、中国語では、“～了”と表現するが、日
本語では「漢語+する／される」の後接形式を使い分ける必要がある。

- | | | | |
|------|----------------|---------|---------------|
| (14) | a. 鉄道が開通した。 | (铁路开通了) | →「その出来事が起こった」 |
| | b. 鉄道が開通している。 | (铁路开通了) | →「今の鉄道の状態」 |
| (15) | a. 規格が統一された。 | (规格统一了) | →「その出来事が起こった」 |
| | b. 規格が統一されている。 | (规格统一了) | →「今の規格の状態」 |

2.3 発展：表現の精密化と理論的な内容

上級では、漢語動詞の使用を精密化し、また言語理論的な内容を導入してもいいと考えら
れる。主に、①自他両用動詞における「する」と「される」の使い分け、②自他と受身、使
役の関係、③「なる」型言語と「する」型言語、④漢語動詞における「名詞化された
漢語語幹+になる」の使用、という4つの部分を設けて説明すればいい。

◆自他両用動詞における「する」と「される」の使い分け

漢語動詞には、自他両用の場合がある。中級で教えたのは、自他両用動詞は、「する」を
使った方がよいということである。なお、場合によって、「される」を使う場合がある。そ
れでは、自他両用動詞の「する」と「される」は、どのように使えばいいのか。

- (16) a. 平成22年から、雇用保険の適用範囲が拡大 {した／された}。
b. 転職によって全ての悩みが解決 {した／された}。
c. 目薬を使用して、1週間程度で症状が改善 {した／された}。
- (17) ・自動詞：動作主の存在を全く含意しない。動作主の挿入不可。
・他動詞の受身文：動作主の存在は含意される。動作主の挿入が可能な場合あり。

(庵ほか2000：105)

※<注意点>

①「何者か→保険の適用範囲→拡大」という出来事を表す点が共通している。「拡大した」
は「何者か」を含まずにその出来事を表す。「拡大された」は、「何者か」の存在を意味に含
んで出来事を表す。

②「される」の使用は、中国語の“被”とは異なっている。“被”は好ましくない事柄を表す一方、ここの「される」はそのようなニュアンスがない。

また、自他両用動詞において、「する」と「される」の割合が異なる場合がある。「する」より「される」の使用が多い場合もあれば、「される」より「する」の使用が多い場合もある。

◆自他と受身、使役の関係

和語動詞には、自他の対をなすものがある。例えば、「壊れる—壊す」、「割れる—割る」などである。漢語動詞も自他対応がある。ただ、自動詞の場合は、他動詞の代わりとしてその使役形（「させる」）を使う。他動詞の場合は、自動詞の代わりとしてその受身形（「される」）を使う。また、自他同形の場合は、両方とも「する」を使う。

- (18) 自動詞原型： 「自動詞：する — 他動詞：させる」
他動詞原型： 「自動詞：される — 他動詞：する」
自他同形： 「自動詞：する — 他動詞：する」

- (19) 自動詞文： Y が 漢語する / 漢語される / 漢語する
他動詞文： X が Y を 漢語させる / 漢語する / 漢語する

- (20) 自動詞文： Y の変化が起こる。 (Y=もの)
他動詞文： X が Y の変化を引き起こす。 (X=人/原因、Y=もの)

◆「なる」型言語と「する」型言語

<X→Y→変化>という出来事を表す際に、自動詞文も他動詞文も使える場合、自動詞文を使うのが好まれる言語は「なる」型言語、他動詞文を使うのが好まれる言語は「する」型言語」と呼ばれている（寺村 1976、池上 1981）。日本語は「なる」型言語であり、英語は「する」型言語である。例えば、(21) では、日本語は a の自動詞文を使うのが自然である。日本語では、他動詞文を使う動機が、責任を明示することであるため、出来事を描写する場合には他動詞文を使わない。また、他動詞文を受身にした文も使わないのである。

- (21) a. ドアが閉まります。ご注意ください。(自動詞文)
b. ドアを閉めます。ご注意ください。(他動詞文)

(庵 2018 : 38)

- c. ? ドアが閉められます。ご注意ください。(受身文)

そのため、(21) のような文では、「拡大、改善、解決」は「する」形も「される」形も使えるが、一般的には「する」形を使うのは、以上で述べたような「「なる」型言語」の特徴の一つである。これは、中国語と共通しているところがあると考えられる。特別な意味（被害、不本意など）がない場合、受身の“被”を使わないのである。したがって、中国語では“被”を使う必要がない場合、日本語でも「される」を使わないと考えても良い。

3. 日本語教師へのアドバイス

〈1〉規則を説明する際に、品詞、自他などの用語をできるだけ避けた方が良い。

学習者にとって、具体的な語に出会うときに、その品詞や自他が何かは判断できないことがあるためである。例えば、「成熟」は、中国語の品詞は何ですか」と聞いたら、答えられない人が多いだろう。そのため、一般的によく使える具体的な形式をもって規則を説明すべきである。例えば、「中国語では“很”が使える場合」（形容詞を指す）というふうに説明すると、中国語話者がそれを使って自分で検証することができる。

〈2〉説明しすぎないことに注意する必要がある。

「例外」が出る場合があるが、それらの語が規則から逸れるものであるため、説明に工夫が必要だと考えられる。ただし、それらを主役にしないように、適宜説明した方が良い。そうでなければ、主要な規則がわからなくなってしまう恐れがある。

日本語では「する」を使うのが自然な場合が多く、しかも、中国語話者にとって「する」の産出が難しいにもかかわらず、強調しすぎると、「する」の過剰一般化になる恐れがある。「される」を使うタイプ（他動詞）も提示し、機能上では「する」と同じであると説明する必要がある。つまり、動作主の存在が感じられるのに、それを不問にして、物事の変化のみを表すという機能である。

〈3〉付録Ⅲと付録Ⅳは、そのまま学習者に提示しない方が良い。

付録にすべての対象語を掲げているが、それを学習者に提示するとまた負担がかかるため、注意する必要がある。前節の(2)と(9)の規則を使うために、付録資料を使って練習問題を作ると効果が期待できる。

第五部 展望篇

本論文は、母語の知識を活かした日本語教育の観点から、中国語話者に誤用が多い漢語動詞（「漢語＋する」形）をめぐる、正用と誤用が起こる状況を正確に把握した上で、中国語

話者にとって有用な教育対策を提案するため、以上の第二部～第四部では、日中対照分析、習得調査、指導試案について総合的な分析・考察を行った。従来の研究では、日中両言語の品詞と自他のずれが誤用の原因とされているが、それは漢語動詞の学習全体の一部でしかない。本論文では、誤用が生じる場合の表現意図—「変化」を中心に、中国語の視点から新たに日本語の漢語動詞との対照分析を行い、問題となりうる漢語動詞を絞り出した。その上で、複数の手法をとって調査を実施することで、母語の働き方及び習得上の困難点を解明した。最後に、中国語の知識を活かして効率的な指導試案及び語彙リストを作成した。この第五部では、本論文の内容をまとめた上で、本研究の意義を明らかにし、今後の展望を述べる。

第13章 結論

1. 本論文のまとめ

本論文の主な内容は、「対照分析、調査、対策」の3つの部分に分けられる。以下、それぞれの結論をまとめる。

(一) 対照分析篇の結論

本研究の核心となる課題は、中国語話者がどのような漢語動詞を使う際に、どのような問題が生じるのか、なぜ生じるのかを解明することである。注目する現象は、中国語話者における(1)のような誤用である。

- (1) a. *社会と文化が成熟になった。
(社会文化成熟了)
- b. *失業率が上昇になった。
(失业率上升了)
- c. *教育が普及になった／*普及された。
(教育普及了)
- d. *生産量が増加になった／*増加された。
(生产量增加了)

従来の漢語動詞に関する日中対照研究では、学習者の視点から問題が特定されておらず、中国語の特徴や日中語の相違に関する見方が形態レベルに留まっているため、学習者における問題の所在が正確に捉えられないし、教育にとって有用な対策が提案できるとは言えない。そのため、本研究では、中国語話者の視点から漢語動詞を見直し、両言語の品詞や自

他のずれに限らず、意味的な特徴及び事象の捉え方も取り入れて分析した。その上で、中国語話者における習得上の困難点を明らかにし、母語知識に基づいた漢語動詞の教育の実行可能性も示唆された。

本研究では、図 13-1 に示した対照手法をとった。従来の対照研究では、日本語の漢語語彙をベースに、日本語と中国語の品詞や自他の対応関係の全体像を示すことが目指されたが、習得上の問題の一部しか見られず、そのような網羅的な対応関係は教育上では効率的に応用できない。本研究では、「になる」と「される」という誤用形式が多く観察された場合、その表現意図が「変化」であると絞った上で、日本語の二字漢語語彙の中から、中国語では「変化」を表す語を抽出した。つまり、これらの語が中国語話者が「漢語+になる」、「漢語+される」の形で使いうる語だと考えられる。さらに、日本語では「になる」、「される」が使えるか否かによって分類する。最後は、二つの形式が使えない場合を中心に、中国語話者の習得の問題点と指導のポイントを究明するという流れに沿って対照分析を行った。

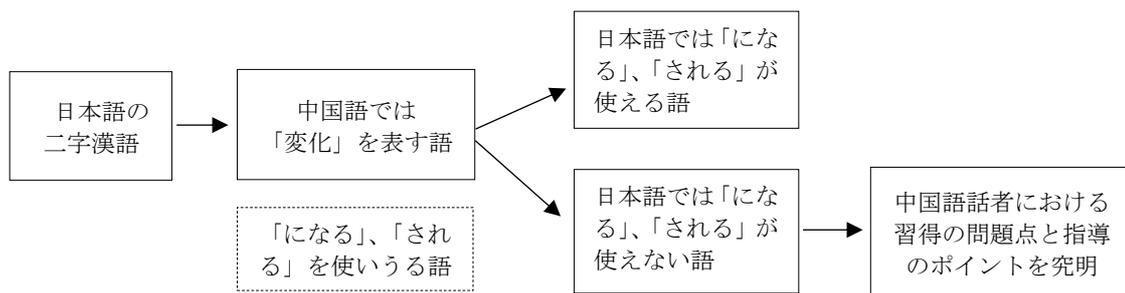
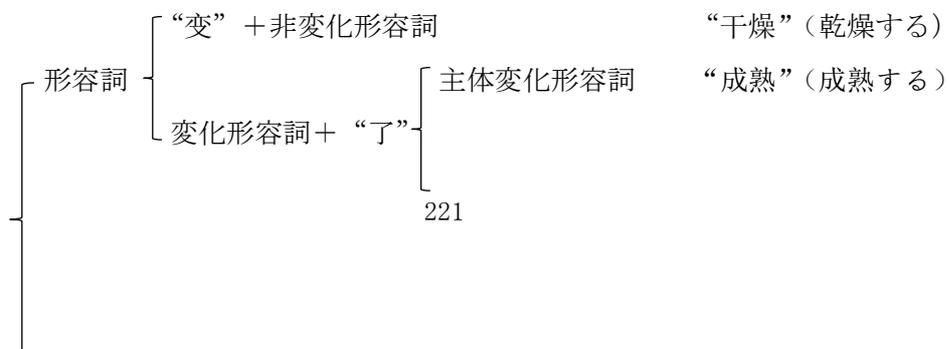


図 13-1 本研究の対照手法 (図 4-1 の再掲)

まず、本研究での「変化」を、物事（あるいは人）の状態の変化と規定した。中国語では同じ“～了”という形式を用いて表される「状況の変化」とは区別をつけた。それから、中国語の「変化」を表す動詞と形容詞の特徴を分析し、工藤 (1995) における「主体変化動詞」、「主体動作・客体変化動詞」という分類の仕方に倣い、中国語の「変化」を表す語を 5 つの種類に分けた。図 13-2 の通りである。



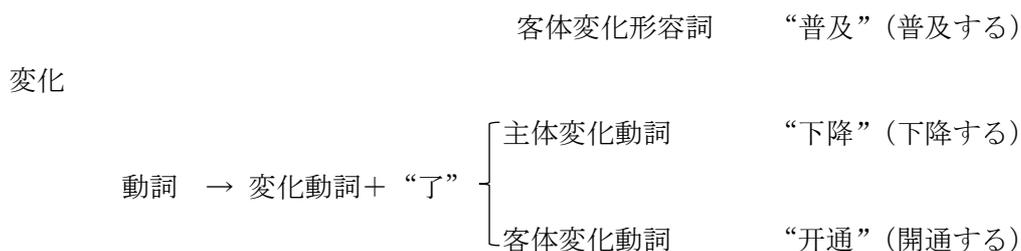


図 13-2 中国語の「変化」を表す語の種類 (図 5-1 の再掲)

次に、中国語の「変化」を表す語に基づき、日本語の二字漢語語彙 (JLPT 1 級～4 級) の中から、該当する語を抽出した。両者の対応関係は、表 13-1 の通りになる。つまり、中国語の非変化形容詞は、日本語ではナ形容詞とサ変動詞 (自動詞、自他両用) である。中国語の主体変化形容詞・動詞は、日本語ではサ変動詞 (自動詞、自他両用) である。中国語の客体変化形容詞・動詞は、日本語ではサ変動詞であるが、他動詞もあれば、自動詞、自他両用動詞もある。

表 13-1 中国語の「変化」を表す語と日本語の二字漢語の対応関係

中国語	日本語
非変化形容詞	ナ形容詞
主体変化形容詞・動詞	サ変動詞 (自動詞、自他両用)
客体変化形容詞・動詞	サ変動詞 (他動詞)

また、日本語における「になる」「する」「される」の使用状況を、BCCWJ を用いて調べた結果、以下の通りになった。つまり、デフォルト (基本的な場合、無標の場合) の使用としては、ナ形容詞は「になる」を使い、自動詞と自他両用動詞は「する」を使い、他動詞は「される」を使う。ただ、有標的使用の場合もある。少数のサ変動詞は、「責任者の背景化」という動機付けによって、「になる」を使う場合がある。例えば、「変更、中止、延期」などの語が挙げられる。また、自他両用動詞は、一般的には「する」を使うが、動作主の存在を含蓄する場合に「される」を使う場合がある。

- (2) になる： ナ形容詞 （有標の場合：少数のサ変動詞）
 する： 自動詞、自他両用
 される： 他動詞 （有標の場合：自他両用）

さらに、以上のような対照分析の結果に基づき、中国語話者にとって誤用しやすいのは、表 13-1 におけるサ変動詞（自動詞、自他両用）の部分であると絞られる。つまり、日本語では、デフォルト的に「する」を使う場合、中国語では用法が分けられているため、中国語話者が母語の論理に沿って考えて使うと予測した。具体的には、(3) の通りである。

(3)	日本語	中国語	誤用の予測
	サ変動詞	非変化形容詞	→ 「になる」
	(自、自他)	主体変化形容詞・動詞	→ 「になる」
	「する」	客体変化形容詞・動詞	→ 「になる」・「される」

ただし、誤用の原因は、品詞や自他の相違のみではない。全体的に見ると、中国語の形容詞と動詞に関わらず、「になる」を使う可能性がある。「される」は客体変化形容詞・動詞の場合に使いやすいが、非変化形容詞や主体変化形容詞・動詞でも「される」を使う可能性がある。したがって、両言語の語の種類のずれというより、「になる」を使う原因は、「変化」を感じるためであり、「される」を使う原因は、外部からの働きかけや影響を感じるためであると考えられる。(4) の通りである。

- (4) ① 「NP+漢語+了」 = 「NP がある状態になった」 → [NP が漢語になる]
 ↓ ↓
 ② 「外的な原因による NP の変化」 → [NP が漢語される]

最後に、中国語話者を対象とする教育への応用と関連づけ、中国語の知識を活かす可能性を検討した。主な目標として、「する」の正用を促し、「になる」と「される」の誤用を減らすことである。そのため、(5) のような規則を提示した。

- (5) ① “了” と “没” で言える
 → 「になる」を使わないと教える。
 ※例外の少数の語は、明示的に教える。

② [NP1+V+NP2] で言える

→ a. 「される」が使える語（他動詞）をリストアップして教える。

→ b. a 以外の場合、すべて「する」を使うと教える。

つまり、(5) ①の規則では、中国語の変化形容詞と変化動詞の場合、基本的に日本語のサ変動詞と対応するため、「になる」を使わないと教えると、「になる」の誤用を減らすことにつながると望まれる。例外の場合もあるが、少数の語であり、明示的に教えれば良い。(5) ②の規則では、中国語の客体変化形容詞と客体変化動詞の場合、「される」が使える語、即ち他動詞のリストを提示し、中国語の論理に沿って「される」を使ってもいいと教えてから、それらの語以外の場合、外的な原因を感じても「される」ではなく、「する」を使うと教えると、自動詞と自他両用における「する」の使用が確保できると予想した。そして、(5) の規則に基づき、語数で計算した結果、カバー率がかなり高いことがわかったため、母語知識を活かした指導対策の実行可能性が示唆された。

(二) 調査篇の結論

調査研究の目的は、対照分析に基づいた予測の妥当性を検証し、予測できないことの有無を確認することにある。主として、母語の働き方を明らかにすることに焦点を当てた。そのため、3種類のアンケート調査（三者択一テスト、複数選択テスト、自然さ判断テスト）を実施し、フォローアップインタビューを取り入れて、中国語話者による使用状況と使用意識を考察した。また、学習環境とレベルの要因も考慮に入れ、主に上級学習者を対象にして検討したが、中国語環境（JFL）と日本語環境（JSL）の比較、上級学習者と超級学習者の比較を通して、環境とレベルによる変容を考察した。

調査の結果は、中国語話者による漢語動詞の習得における母語の働き方について、①全体的な使用傾向と母語の関係、②母語の潜在的な知識の働き、③諸要因における母語の働きの位置付け、④環境とレベルによる母語の働きの変容、⑤日本語母語話者の使用状況との比較という5つの面からまとめる。

<1>全体的な使用傾向と母語の関係

中国語の「変化」を表す語は、5つの種類に分けられたと述べたが、それぞれの用法が異なるため、対応する日本語の漢語動詞の使用において、中国語におけるタイプによって異なる傾向が見られた。しかも、3種類のアンケート調査の結果とも、同じような傾向を示して

いる。具体的には、(6) の通りである。

(6) 「中国語の用法と漢語動詞の使用状況の相関性」

a. 非変化形容詞	变得干燥	乾燥になる	>	乾燥する
b. 主体変化形容詞	混乱了	混乱になる	≡	混乱する
c. 主体変化動詞	下降了	下降になる	≡	下降する
d. 客体変化形容詞	普及了	普及になる	=	普及される
e. 客体変化動詞	增加了	増加になる	<	増加される

<2>母語の潜在的な知識の働き

FI の結果によると、中国語話者は中国語の用法を意識しながら漢語動詞を使用するのではなく、事象の捉え方が主な判断基準であるということがわかった。(7) のように、「変化」を感じると「になる」を使い、「働きかけや影響」を感じると「される」を使うというのは、対照分析篇での予測と一致した。なお、「する」を使うのは、「単純状態」や「人の動作や感情」を感じる場合であるということであり、即ち「する」＝「変化なし」という発想があることがわかった。それは、五味ほか (2006) で言う「「する」＝他動性」、庵 (2010) で言う「「する」＝自然な変化」という使用意識とは異なっている。「する」には「変化」の意味がないという発想は、主に中国語環境 (JFL) の上級学習者の中で多く観察された。このグループの被験者は、「する」の正用率が日本語環境の学習者より低い傾向があるのも、「する」＝「変化なし」という発想の干渉だと考えられる。

(7) 「FI の答えから見た中国語話者の使用意識」

「になる」: 物事の状態の「変化」

「する」: 「単純状態」や「人の動作・感情」

「される」: 働きかけや影響を受ける

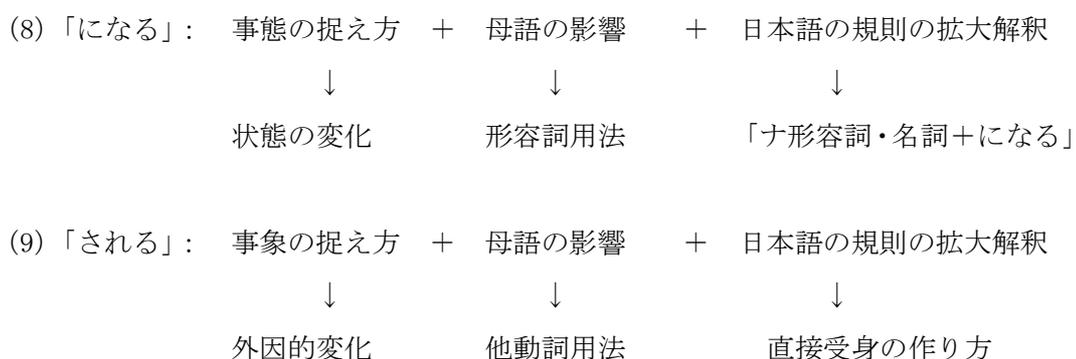
また、中国語の有形の形式による影響を受けて、「*普及になった」「*普及された」などを産出するとは考えられない。なぜなら、そういった場合、中国語では“普及+了”(普及する+た/ている) で表現することが自然であり、「なる」に当たる“变”、「される」に当たる“被”を使うと、逆に一般的な使い方ではなくなるためである。それに、有形の形式がなくても、母語における自然な形式に基づいて、日本語の形式を推測するという言語処理の過程が想定される。

このように、事象の特徴に対する解釈を判断の基準とすること、母語では有形の形式を使

わなないことから、母語の潜在的な知識に基づいた判断が働いているはずであると言える。

〈3〉諸要因における母語の働きの位置付け

アンケート調査の結果と FI の結果を合わせて考察すると、中国語話者が「になる」や「される」を使う要因は、単純に母語の影響を受けた結果ではなく、事象の捉え方に基づき、母語の潜在的な知識の働きと、及び既習の日本語の規則に対する拡大解釈という要因が相互に作用した結果であるというべきである。(8) と (9) に示した通りである。



〈4〉環境とレベルによる母語の働きの変容

中国語環境 (JFL) と日本語環境 (JSL) の比較、上級学習者と超級学習者の比較によって、正用と誤用が共存している様相が観察され、日本語に触れる機会が多くなり、日本語レベルが上達するにつれて、正用の「する」が定着し、誤用の「になる」と「される」が削除されていく過程が判明した。なお、超級に至っても、消滅しにくい誤用がある。「される」の誤用は、主に客体変化形容詞・動詞の場合に生じるのが多く、超級でも減少していない。「になる」の誤用は、動詞の場合は減少する傾向が見られ、形容詞の場合は減少する傾向が見られなかった。

(10) 習得の過程： 正用の「する」↑ + 誤用の「になる」と「される」↓

〈5〉日本語母語話者の使用状況との比較

自然さ判断テストの結果に基づき、超級学習者と日本語母語話者の使用を比較した。その結果、日本語母語話者が認める形式は、中国語話者もほぼ同じ程度でその形式を認めることがわかった。その一方、日本語母語話者が認めない形式は、中国語話者が認める場合がある。つまり、日本語では「する」を使う場合に、中国語話者が「する」を認めると同時に、「になる」と「される」も認めるということである。

また、1つ明らかな相違点が観察された。つまり、自他両用の場合、「解決、改善、拡大」など、「する」と「される」の両方が使える場合、日本語母語話者は「される」より「する」の方を使いやすいのに対して、中国語話者は「する」より「される」の方を使いやすい点がある。このことは、教育上では、自他両用動詞と自動詞は同じく「する」を使うことを取り扱う必要性が示唆された。

総じて言えば、調査篇では、中国語話者による漢語動詞の習得上の困難点、及び母語の働き方を解明した。困難点は、「する」の産出であり、「になる」と「される」の誤用を抑制することである。母語の働き方として、潜在的な母語知識が働いており、しかも、その働きが諸要因における1つであり、全体的には事象の捉え方に基づき、母語の働きと日本語の規則の拡大解釈とも同時に作用すると考えられる。教育上では、事象の特徴を表現意図として明確に示した上で、中国語話者の視点から、中国語の知識を適切に利用して、日本語の規則を説明するという対策を提案すると、「する」の正しい産出に役に立つと考えられる。

(三) 対策篇の結論

中国語話者を対象とする漢語動詞の教育、特に日本語環境が欠けた JFL の学習者のために、漢語動詞（「漢語＋する」）の正しい産出ができ、効率的に学習できるように、指導試案を作成した。まず、現行の教科書と指導方法に関する考察によって、以下の問題点があると指摘した。

- (11) 教科書の問題点：文法形式の導入が重視されているが、語彙自体、語彙と文法の接点、導入の時期、中国語との関係に関する説明が欠けている。
指導方法の問題点：内容 (What) より、方法 (How) が重視されている。

このような問題点に基づき、本研究では、教育内容に焦点を当て、正しい産出を目標にし、母語の知識を利用して、学習負担を最小限にする規則を作成することを試みた。具体的には、段階をおって導入する指導案を提案した。

<1>導入：中級の前半（2年前期）に、基本内容を導入する。主に、日本語の変化表現、漢語動詞の基本的特徴、中国語との品詞や自他の区別について説明する。

<2>帰納：中級の後半（2年後期）に、漢語動詞の体系的なまとめ、母語に基づいた使いやすい規則、該当する語彙リストを提示する。主な規則は、対照分析篇の予想と同じであればいい。

<3>発展：上級（3年）では、表現の精密化と言語理論的な内容の説明を目標とする。①

自他両用動詞における「する」と「される」の使い分け、②自他と受身、使役の関係、③「「なる」型言語」と「「する」型言語」、④漢語動詞における「名詞化された漢語語幹+になる」の使用などを導入すれば、日本語に対するより深い理解、専門的な文章を読むこと、書くことに役に立つと考えられる。

2. 本論文の意義

<1>言語研究上の意義

まず、他の言語の視点から漢語動詞を見ることに意義がある。本研究では、品詞や自他の文法的なズレをめぐる形態的なレベルの区別にとどまらず、「変化」という意味領域を設定し、日中両言語の同形同義語が、それぞれどのように振る舞うのかを分析した。中国語では、「変化」を表すには、形容詞・動詞に変化の実現済みを表すアスペクト助詞がついた形を使うのが基本的であり、「変化」の局面、「変化」の主体と客体といったような意味は、文全体から解釈する必要がある。一方、日本語では、「変化」を表すには、「変化」の意味が含まれた動詞の語形変化及びボイス、アスペクトなどのカテゴリーの形式との融合によって実現する。漢語動詞は、名詞的な特徴と動詞的な特徴を有するにもかかわらず、「変化」のような出来事を表すには動詞として使うのが基本である。そのため、構成的、意味的な特徴を持つ中国語を母語とする学習者にとって、漢語動詞の語幹を独立した成分として捉え、他の形式と組み合わせて使ってしまう傾向があり、動詞そのもので出来事を表すことが難しいところであると考えられる。

また、[動作主 > 対象 > 変化]という事象に関する日中語の相違点について、日本語では「対象の変化」のみに関心があり、自動詞表現を使うのが好まれる言語であり、中国語では他動詞表現、他動詞の受身表現を使うのが好まれる言語であり、中国語話者が日本語の自動詞表現を使うのが困難であるとされている(守屋 1994、小林 1996、杉村 2013 など)。本研究では、このような事象を表す際に、中国語話者による漢語動詞の使用において、「漢語+になる」と「漢語+される」の2つの形式が同時に存在する現象が観察された。中国語の他動詞による目的語前置文は、①動作主の背景化によって、対象の変化のみを描くという機能があり、②語順の変化による格交替と他動詞に含まれた変化の意味(主体動作・客体変化動詞)という2つの条件で、受身の意味も読み取れるわけである。従来の研究では、②の中国語の特徴に留まっており、①の特徴について検討しているものが少ない。

<2>方法論的な意義

まず、言語教育のための対照研究の手法を提案した。つまり、学習者の母語の視点から、問題を特定した上で、目標言語における使用可否を分析することで、使用不可の場合が学習

者にとっての困難点であり、教育上の指導のポイントであると考えられる。それにとどまらず、母語の特徴を十分に検討する必要がある。そのために、形式化されない意味的な特徴、事象の捉え方などの問題を考慮に入れることが重要である。品詞や自他の対応関係を網羅的に提示する研究が多く見られ、参考にする価値があると言えるが、学習者にとっての本当の困難点とのつながり、教育上への応用の可能性が不明であることが大きな問題点が残されている。言語教育のための対照研究は、常に学習目的の実現を考慮に入れ、余計な負担がかからず、産出のために効率的に使える規則を目指す必要がある。

また、複数の形を用いた習得研究の手法に意義がある。1つの手法を用いて調査を行う場合、他の手法に変えると結果が変わる可能性がある。複数の形で調査を行った結果が同じであれば、その結果が妥当であると言える。また、FIを取り入れた観点も重要である。対照研究に基づいた予測とは変わる場合があり、正しく形式が使えるが、その捉え方が間違っている場合がある。それが習得を阻害する重要な要因である可能性がある。

さらに、母語知識を活かした日本語教育理念の実践に意義がある。庵(2015、2016、2019など)によると、母語の転移において、正の転移の方が負の転移よりずっと大きいということが示され、母語の知識を適切に使って日本語の事実を記述し、その内容を学習者に伝えることの重要性が示唆されている。本研究では、漢語動詞における「になる」とされる」の誤用を減らし、「する」の正用を促すため、中国語の知識(簡易なテストフレーム)に基づいて規則を作成し、その実行可能性が示唆された。

〈3〉教育上への応用の意義

まず、漢語動詞の教育の欠陥の補足に意義がある。現行の教科書や指導方法の考察によると、漢語動詞は、特に同形同義の場合、「説明なし」という現状があり、その使い方を学習者自身に任せるという大きな問題点がある。上級及び超級になると、硬い内容の文章、学術的な論文を書く機会が増え、本研究で取り上げた「変化」という表現が広い範囲で使われると考えられる。そのため、正確に漢語動詞が使えるように、上級及び超級に至ったら、役に立つ面があると考えられる。

また、学習者のための規則を作成し、語彙リストを提示することで、教材の改善、教育現場の指導、学習者自身の学習などに応用できると考えられる。

3. 今後の展望

〈1〉漢語動詞の使用に関わる他の側面の考察

本研究では、中国語話者による漢語動詞の述語形式「漢語+になる／する／される」の使用に焦点を当てて考察した。それは、漢語動詞の使用実態の一角にすぎず、助詞の使い分け

(が／を)、後接するタとテイル形の使用などについては言及できなかった。今後は漢語動詞の使用の全体像を提示するために、さらに考察を深めていく。

また、本研究では「なる型」の変化を取り扱ったが、「する型」の変化については検討していない。つまり、「変化が起こること」を表す際に、「～する」を使うべきところで、「～になる」や「～される」と使う傾向があるとわかったが、それに対して、「変化を引き起こす」を表す際に、中国語話者が「～させる」を「～する」と誤用するのかどうかということである。庵(2010a)では、中国語話者による非対格自動詞の他動詞形の誤用、「借金を増大させる」→「*借金を増大する」のような現象が観察されたが、さらなる中国語の視点から考察する研究が見当たらなかった。したがって、中国語話者における「～させる」の習得上の問題を解明し、有用な対策を提案するため、本研究の手法を用いて考察することに意義があると考えられる。

さらに、同形同義語の他に、同形異義語、中国語に存在しない語などの種類の語には、本研究でとりあげた問題が起こるかどうか。例えば、「*肥大になった」「?完売された」など。今後は、これらの語も視野に入れて考察していきたい。

その他、中国以外の漢字圏の日本語学習者にも、漢語動詞の使用に関わる問題例えば、韓国語にも本研究で提起した漢語動詞が使われる(高 2017)が、韓国母語話者による使用状況を中国語話者と比べたらどうなるのか。また、中国語と英語は、自他交替の面には共通したところがあると思われるが、英語を母語とする日本語学習者の使用状況はどうなるのか。これらの課題に基づき、多言語対照の実行可能性が示唆され、各言語間の共通点と相違点を解明することで、特定の母語話者に対する適切な指導対策の提案が望まれる。

<2>言語分析の精密化と深化

本研究で取り上げた漢語動詞は、対応する中国語において、5つの種類に分けられたが、同じ種類に属する語の間に、被験者による使用傾向が異なる場合がある。それは、語彙的な意味のほか、中国語における使用頻度などが異なるといったような要因が考えられるが、詳しい考察ができなかった。また、自他両用動詞における「する」と「される」の使用の使い分けについて、日本語には明らかな区別がない場合がある。「する」がデフォルト的に使われることが明らかであるが、どのような場面に、「される」を使いやすいのか、精密な考察ができなかった。

<3>自然な産出に基づく考察

本研究では、特定の単語と文などが産出されるような環境を作ってデータを集める誘引タスク(白畑ほか 2010)の手法を用いた。そのため、被験者が1つの問題文を考えたとき

に、すでに回答した問題からの影響を受ける可能性がある。自然な産出の場合、例えば、作文や発話などから集めたデータに基づいて分析すると、どのような使用状況になるのかは疑問が残された。実際の環境で自然に産出された言語のデータは、実験の環境で集めたデータの分析に対する有益な補充である (Oshita2000) と考えられるが、今後具体的な調査の方法について検証して慎重に取り扱う必要がある。

<4>教育試案の実行効果の検証と改善

本研究の最終目標は、中国語話者を対象とする漢語動詞の教育のために、母語の知識を活かした指導対策を提案することにある。実際に、教育現場ではどのように応用すればいいのか、実際に望まれた効果があるかどうか、教育現場における実践を通して検証し、改善を求めるために工夫していきたい。

参考文献

〔日本語の文献〕

荒川清秀 (2003) 『一步進んだ中国語文法』 大修館書店.

- 庵功雄・松岡弘・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄・中西久実子・高梨信乃（2001）『中級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄（2008）「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11, .47-63.
- 庵功雄（2010a）「中国語母語話者による漢語サ変動詞のボイス習得研究のための予備的考察」『日本語／日本語教育研究』1, .103-118.
- 庵功雄（2010b）「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に—」『日本語教育』146, .174-181.
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門（第2版）』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄（2013）「「What なき How 論」のあやうさ—文法教育の必要性を問い直す」『日本語教育・日本語学の次の一手』くろしお出版, 10-18.
- 庵功雄（2015）「中国語話者の母語の知識は日本語学習者にどの程度役立つか—「的」を例に—」『汉日语言对比研究论丛』7, 168-177.
- 庵功雄（2016）「母語の知識を活かした日本語教育」に関する一考察—格枠組み (Case frame) における日英対照を例に—」『一橋日本語教育研究』4,
- 庵功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版.
- 庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版.
- 庵功雄（2019a）「意味領域から考える日本語のテンス・アスペクト体系の記述：「母語の知識を活かした日本語教育」のために」『言語文化』55, .3-18.
- 庵功雄（2019b）「テンス・アスペクトの教育」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 1 「する」の世界』ひつじ書房, 187-222.
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 井上優（2005）「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版, 83-102.
- 井上優（2012）「テンスの有無と事象の叙述様式—日本語と中国語の対象—」『日中理論言語学の新展望 2 意味論』くろしお出版, .1-26.
- 井上優（2013）『そうだったんだ！日本語 相席で黙ってられるか』岩波書店.
- 井上優（2015）「対照研究について考えておくべきこと」『一橋日本語教育研究』3, 1-12.
- 井上優（2019）「中国語の「する」と「した」と「している」」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 1 「する」の世界』ひつじ書房, 187-222.
- 井上優（2020）「意味の対照研究の難しさ」『言語と文明』18(1), .91-102.

- 王萌 (2013) 『日本人と中国人の不同意表明—ポライトネスの観点から—』 花書院.
- 大河内康憲 (1982) 「中国語の受身」 寺村秀夫他編『講座日本語学 10 外国語との対照』 明治書院, 319-332.
- 大関浩美 (2010) 『日本語を教えるための第二言語習得論入門』 くろしお出版.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって」 松本泰丈編『日本語研究の方法』 むぎ書房, 203-220.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」 『国語学』 70, 46-66.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』 風間書房.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 くろしお出版.
- 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い—」 『日本語教育』 125, 96-105.
- 木村英樹 (1997) 「“変化”と“動作”」 『橋本萬太郎記念中国語学論集』 内山書店, .185-197.
- 木村英樹 (1981) 「被動と「結果」」 『日本語と中国語の対照研究』 5, 27-46.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15, 48-63.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房.
- 侯仁鋒 (1997) 「同形語の品詞の相違についての考察」 『日本学研究』 6 北京日本学研究中心, 78-88.
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—」 文芸言語研究 言語篇(29), 41-56.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房.
- 五味政信・今村和宏・石黒圭 (2006) 「日中語の品詞のズレ: 二字漢語の動詞性をめぐって」 『一橋大学留学生センター紀要』 9, 3-13.
- 崔婷 (2017) 『中国語結果補語文における目的語前置現象の意味と構文』 東京外国語大学博士学位論文.
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』 大修館書店.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』
- 白川博之 (2002b) 「記述的研究と日本語教育—「語学的研究」の必要性和可能性—」 『日本語文法』 2(2), 62-80.
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010) 『第二言語習得研究 理論から研究法まで』 研究社.
- 渋谷勝己 (1988) 「中間言語研究の現状」 『日本語教育』 (64), 176-190.

- 須賀一好・早津恵美子編著（1995）『動詞の自他』ひつじ書房.
- 杉村泰（2013）「対照研究から見た日本語教育文法—自動詞・他動詞・受身の選択—」『日本語学—』32（7）, .40-48.
- 石堅・王建康（1984）「日中同形語の文法的ズレ」中川正之・荒川清秀編『日本語と中国語の対照研究別冊—日文中訳の諸問題』日中語対照研究会, 57-82.
- 張志剛（2014）『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版.
- 張麟声（2011）『新版中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社.
- 陳昭心（2009）「中国語を母語とする日本語学習者にとって「変化」とは何か—「消える」「閉まる」の使用文脈を手がかりに—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』58, 227-234.
- 陳夢夏（2019）「二字漢字語における日中対照分析の枠組みの提案」『一橋日本語教育研究』7, 15-27.
- 陳毓敏（2002）「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得—同形同義語の文法的ズレに焦点を当てて—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』, 63-68.
- 陳毓敏（2009）「中国語母語話者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組みの提案—意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して—」『日本語科学』25, 105-117.
- 寺村秀夫（1976）「ナル」表現と「スル」表現-日英「態」表現の比較」国語シリーズ別冊4『日本語と日本語教育—文字・表現編』国立国語研究所, 49-68.
- 寺村秀夫（1982）「態-格の移動と述語の形態との相関-」『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 中川正之（1985）「日本語と中国語の対照研究—日中対照研究会の紹介を兼ねて—」『日本語学』7, 94-104.
- 中川正之（1992a）「特集・外から見た日本語 語構成」『月刊言語』21(1), 28-33.
- 中川正之（1992b）「類型論から見た中国語・日本語・英語」大河内康憲編集『日本語と中国語の対照研究論文集 上』くろしお出版, 3-22.
- 中川正之（1995）「単語の日中対照」『日本語学』5, 64-71.
- 中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』岩波書店.
- 中島悦子（2007）『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』おうふう.
- 日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店.
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版.
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院.
- 西尾寅弥（1954）「動詞の派生について-自他对立の型による-」『国語学』17, 国語学会（西

- 尾寅弥『現代語彙の研究』1988, 明治書院, に所収).
- ネウストプニー, J, V (1994) 「日本研究の方法論: データ収集の段階」『待兼山論叢. 日本学篇』28, 1-22.
- 野田尚史 (1991) 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスとの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版.
- 野村雅昭 (1999) 「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊会 (編)『日本語研究と日本語教育』明治書院, 1-23.
- 早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」京都大学言語学研究会『言語学研究』6, 79-109.
- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」日本言語学会『言語研究』95, 231-256.
- 早津恵美子 (1990) 「有対他動詞の受身表現について」『日本語学』(9)5, 67-83.
- 文化庁 (1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局.
- 益岡隆志 (1987)『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版.
- 三浦昭 (1984) 「日本語から中国に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53, 102-112.
- 三上章 (1953)『現代語法序説』くろしお出版から再版 (1972) .
- 水谷信子 (1985)『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版.
- 三宅登之 (2009) 「行為連鎖の観点から見た中国語の“被”構文」東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集』13, . 33-64.
- 三宅登之 (2010) 「日本語との対照から見た中国語のアスペクト」東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集』15, . 193-213. 宮島達夫 (1989) 「動詞の意味範囲の日中比較」宮島達夫 (1994)『語彙論研究』むぎ書房に再録.
- 森篤嗣 (2012) 「使役における体系と現実の言語使用—日本語教育文法の視点から—」『日本語文法』12-1, . 3-19.
- 守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に—」『講座日本語教育 (第 29 分冊)』, 151-165.
- 山岡俊比古 (1997)『第 2 言語習得研究』桐原ユニ.
- 山岡俊比古 (2004) 「第 2 章 認知から見た言語習得」『第二言語習得研究の現在』大修館書店.
- 熊薇 (2012) 「サ変動詞と対応する中国語の品詞性」『国際文化学』(25) , 43-56.
- 楊高郎 (2007) 「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について—二字漢語動詞を中心に—」『筑波日本語研究』(12) , . 65-88.
- 楊凱榮 (2018)『中国語学・日中対照論考』白帝社.

- 李楓 (2016) 『現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法—コーパス研究の日本語教育への応用—』神戸大学博士学位論文。
- 劉倩卿 (2020) 「中国語話者による漢語動詞の使用に関する一考察—「変化」に関わる動詞を中心に—」『中国語話者のための日本語教育研究』11, pp. 112-127.
- 劉倩卿 (2021 印刷中) 「「変化」に関わる漢語動詞の日中対照研究—中国語話者のための日本語教育の観点から—」『一橋大学日本語教育研究』9, 105-120.

[中国語の文献]

- 范晓 (1994) 「“N 受+V” 句略说」《语文研究》2, 7-12.
- 郭锐 (1993) 「汉语动词的过程结构」《中国语文》6, 410-419.
- 郭锐 (1997) 「过程与非过程」《中国语文》3, 162-171. (和訳版: 于康・張勤 (2000) 編『中国語言語学情報 テンスとアスペクト I』好文出版, 291-348)
- 龚千言 (1980) 「现代汉语里的受事主语句」《中国语文》5, 335-344.
- 胡欣・王禹 (2006) 「日语基础词汇的学习与场景教学」《国际关系学院学报》4, 18-21.
- 金立鑫 (2002) 「词尾“了”的时体意义及其句法条件」《世界汉语教学》1, 35-43.
- 井上优・黄丽华 (2007) 「从否定形式看汉语与日语的体」张黎・古川裕・任鹰・下地早智子 主编《日本现代汉语语法研究论文选》, 20-45.
- 李泉 (1994) 「现代汉语“形+宾”现象考察」《中国人民大学学报》4, 78-86.
- 刘月华・潘文娉・故韡 (2001) 实用现代汉语语法 (增订本) 商务印书馆.
- 刘勋宁 (2002) 「现代汉语句尾“了”的语法意义」《世界汉语教学》61 (3), 70-79.
- 马庆株 (1988) 「自动词和非自动词」《中国语言学报》3, 157-180.
- 杉村博文 (2006) 「句尾助词“了”的语义扩张及其使用条件」、《汉语教学学刊 (第2辑)》
- 沈家煊 (2009) 「我看汉语的词类」《语言科学》8 (1), 1-12.
- 王还 (1983) 「英语和汉语的被动句」《中国语文》6, 409-418.
- 杨峻 (2011) 「日语精读课中词汇学习活动设计方案」《佳木斯教育学院学报》3, 395-396.
- 许雪华 (2016) 《汉日同形词的实证性研究》北京外国语大学博士学位论文.
- 于康・張勤 (2000) 『中国語言語学情報 2 テンスとアスペクト』好文出版社.
- 张斌 (2010) 《现代汉语描写语法》商务印书馆.
- 张国宪 (1995) 「现代汉语的动态形容词」《中国语文》3, 221-229.
- 张国宪 (1995) 「现代汉语形容词的体及形态化过程」《中国语文》6, 403-413.
- 张国宪 (2000) 「现代汉语形容词的典型特征」《中国语文》5, 447-458.
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆.
- 朱桂荣 (2011) 「日语词汇教学的设计与实践」《日语教育与日本学研究论丛 第五辑》, 93-107.

[英語の文献]

- Ellis, R. (1994) *The study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Cheng, Lisa Lai-Shen, and C.-T. James Huang(郑礼珊、黄正德). 1994. On the argument Structure of resultative compounds. In honor of William S-Y. Wang: *Interdisciplinary studies on language and language change*, ed. by Matthew Y. Chen and Ovid J. L. Tzeng, Taipei: Pyramid Press. 187-221.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* (2nd Edition) . Routledge.
- Krashen. S. D. and Terrell. T. D. (1983) *The Natural Approach*. Pergamon.
- Lado, R. (1957) *Linguistics Across Culture: Applied Linguistics for Language teachers*. University of Michigan.
- Lado, R. (1964) *Language Teaching: A Scientific Approach*. McGraoHill.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge University Press.
- Oshita, H. (2000) “What is happened may not be what appears to be happening: a corpus study of ‘passive’ unaccusatives in L2 English.” *Second Language Research* 16 : 4, pp.293-324.
- Perlmutter, D. M. (1978) *Impersonal Passive and Unaccusative Hypothesis*. Berkeley Linguistic Society4, pp.157-189.
- Selinker, L. (1972) *Interlanguage*. *Applied Linguistics* 10-3, 209-231.
- Schachter, J. (1974) *An error in error analysis*, *Language Learning* 24:2, 205-214.
- Wardhaugh, R. (1970) *The contrastive analysis hypothesis*. *TESOL Quarterly*17, 473-480.

調査資料

中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 (2016) 《现代汉语词典 (第7版)》 商务印书馆.

松村明編 (2019) 『大辞林 (第4版)』三省堂.

国際交流基金・日本国際教育協会 (2007) 『日本語能力試験出題基準(改訂版)』(第4版),
凡人社.

北京大学汉语语言学研究中心现代汉语语料库 (CCL)

http://ccl.pku.edu.cn:8080/cc1_corpus/index.jsp?dir=xiandai

北京语言大学现代汉语语料库 (BCC)

<http://bcc.blcu.edu.cn>

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp>

NINJAL-LWP for TWC

<https://tsukubawebcorpus.jp>

NINJAL-LWP for BCCWJ

<https://nlb.ninjal.ac.jp>

付録 I 質的調査の文法テスト

次の文の () の中で適切なものに○をつけてください。

(*下記の選択肢の「～される」は**受身**です。尊敬と自発を考えないでください。)

1. 紫外線を浴びると、肌が乾燥 (①になります ②します ③されます)。
2. 風邪薬で症状が緩和 (①になりました ②しました ③されました)。
3. 現状が複雑すぎて、頭が混乱 (①になりました ②しました ③されました)。
4. 現代社会では、マスコミ、雑誌、書物などさまざまな情報が氾濫 (①になりました ②しました ③されました)。
5. 今回の問題で両国関係が成熟 (①になりました ②しました ③されました)。
6. 二人の意見が初めて一致 (①になりました ②しました ③されました)。
7. 今回の研修で、自分が成長 (①になりました ②しました ③されました)。
8. 労働力需要に対して、労働力供給が不足 (①になりました ②しました ③されました)。
9. この問題をめぐり、組織された政治勢力が分裂 (①になりました ②しました ③されました)。
10. 昭和期に入ると、洋服は急速に普及 (①になりました ②しました ③されました)。
11. 経済の急速な発展にともなって、情報、通信技術も進歩 (①になりました ②しました ③されました)。
12. 貴美子の一言で、電話の向こうが沈黙 (①になりました ②しました ③されました)。
13. 六時間に及ぶ大手術は、成功 (①になりました ②しました ③されました)。
14. 都市では、西洋風の生活様式が流行 (①になりました ②しました ③されました)。
15. 明治元年の戦火にあって、町は一時荒廃 (①になりました ②しました ③されました)。
16. これは明らかに事実と矛盾 (①になりました ②しました ③されました)。
17. 自分に自信が持て、講義内容も充実 (①になりました ②しました ③されました)。
18. 10月1日から受信料免除の対象が拡大 (①になりました ②しました ③されました)。
19. 比率が前年よりやや下降 (①になりました ②しました ③されました)。
20. 明治5年に、新橋～横浜間に日本初の鉄道が開通 (①になりました ②しました ③されました)。
21. 戦況の悪化で工事が中止 (①になりました ②しました ③されました)。
22. 抵抗らしい抵抗もできぬうちに、城が孤立 (①になりました ②しました ③されました)。
23. これで、全ての悩みが解決 (①になりました ②しました ③されました)。
24. 秦の時代に、文字が統一 (①になりました ②しました ③されました)。
25. 広いウィンドウでも表でも文字幅が固定 (①になります ②します ③されます)。

26. インターネットでいろんな情報が公開 (①になりました ②しました ③されました)。
27. 新しい事業の持つビジネスチャンスに興奮 (①になりました ②しました ③されました)。
28. 申し込み期間が重複 (①になった ②した ③された) 場合、抽選とします。
29. 6年前と比べると体力、肝機能が低下 (①になりました ②しました ③されました)。
30. わずか一時間で、今日の撮影が終了 (①になりました ②しました ③されました)。
31. 資源ごみの収集日の変更 (①になりました ②しました ③されました)。
32. 初めての出場ですますます緊張 (①になりました ②しました ③されました)。
33. 35歳の時に不況によって失業 (①になりました ②しました ③されました)。
34. テロ事件で、空港が閉鎖 (①になりました ②しました ③されました)。
35. その費用をかけることで、使用可能期間が延長 (①になりました ②しました ③されました)。
36. わたしはそう言ってしまってから、少し後悔 (①になりました ②しました ③されました)。
37. 我が国の企業における情報環境が改善 (①になりました ②しました ③されました)。
38. 2年前の会社の夏休みに、夢が実現 (①になりました ②しました ③されました)。
39. 右腕の骨が折れているらしいです。たぶん、倒れた時に骨折 (①になった ②した ③された) んじゃないか。
40. 白内障手術のおかげで、視力は回復 (①になりました ②しました ③されました)。

ご協力いただき、どうもありがとうございました！

付録Ⅱ 量的調査の自然さ判断テスト

以下の文において、A、B、Cの形が自然かどうかを判断してください。例のように、書い

- どちらかというとな自然： 不自然：
19. 明治5年に新橋～横浜間に鉄道が (A 開通になった B 開通した C 開通された)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
20. 昔に比べて格段と美容外科の技術も (A 進歩になりました B 進歩しました C 進歩されました)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
21. 彼が来るという知らせを受けて、気持ちが (A 動揺になっています B 動揺しています C 動揺されています)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
22. 1～2杯のコーヒーを飲むと、頭痛が (A 緩和になる B 緩和する C 緩和される)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
23. ホームページは全面にリニューアルし、内容も (A 充実になった B 充実した C 充実された)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
24. 気にしないようにしているのに、そう思えば思うほど、そこに意識が (A 集中になって B 集中して C 集中されて) しまう。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
25. 転職によって全ての悩みが (A 解決になった B 解決した C 解決された)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
26. 目薬を使用して一週間程度で症状が (A 改善になった B 改善した C 改善された)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
27. これにより情報の閲覧と検索が (A 容易になる B 容易する C 容易される)。
 自然： どちらかというとな自然：
 どちらかというとな自然： 不自然：
28. 2004年10月、自動車業界で名を馳せる3つの会社が (A 合併になった B 合併した C

JLPT レベル	語	日本語		中国語	
		例文	自他	例文	類型
2	一致	意見が一致する	自	看法一致	非変化形
2	乾燥	空気が乾燥する	自	空气开始变得干燥了	非変化形
2	低下	能力が低下する	自	能力低下	非変化形
2	矛盾	二人の話が矛盾する	自	这两个因素有点矛盾	非変化形
1	繁盛	商売が繁盛する	自	经济繁盛	非変化形
1	憤慨	七海が憤慨した	自	宝庆很是愤慨	非変化形
1	密集	住宅が密集している	自	人口十分密集	非変化形
2	平均	売上げが平均している	自	收入平均	非変化形
1	窮乏	生活が窮乏する	自	生活已经那么‘穷乏’	非変化形
1	悲観	前途を悲観する	他	试验失败了，但他并不悲观	非変化形
1	楽観	事態を楽観している	他	现代大多数哲学家都变得乐观了	非変化形
2	抽象	認識が抽象されている	他	内容变得抽象起来。	非変化形
3	失敗	プロジェクトが失敗した	自他	减肥失败了	主変化形
2	緊張	1. 私が緊張してきた 2. 両国間の緊張が高まる 3. 筋肉が緊張する	自	1. 我越来越紧张了 2. 局势更加紧张了 3. 肌肉紧张	主変化形
2	合格	全員が無事合格した	自	我考试合格了	主変化形
2	混雑	周辺の道路が混雑する	自	公路上人车混杂	主変化形
2	混乱	頭の中が混乱している	自	我大脑瞬间混乱了	主変化形
2	失望	彼は失望した	自	他很快就失望了	主変化形
2	成功	手術が成功した	自	手术成功了	主変化形
2	対立	意見が対立する	自	两人意见对立起来了。	主変化形
2	発達	今は技術が発達している	自	现在技术发达了	主変化形
2	流行	スカートが流行する	自	这种服装又流行起来了	主変化形
1	後悔	私は後悔しました	自	我后悔了	主変化形
1	絶望	私たちは絶望しました	自	我们都绝望了	主変化形
1	成熟	1. 稲が成熟する 2. 機運が成熟する	自	1. 果实成熟了 2. 条件成熟了	主変化形
1	氾濫	1. 川が氾濫した 2. 情報が氾濫している	自	1. 小河已经泛滥了 2. 唯心主义泛滥了	主変化形

1	腐敗	1. 食品が腐敗する 2. 政治が腐敗しています	自	1. 水果腐败了还拿出来卖 2. 政治腐败	主変化形
1	膨張	空間が膨張している	自	空间膨胀	主変化形
1	飽和	市場が飽和する	自	市场已经饱和了	主変化形
1	没落	家が没落した	自	家族没落了	主変化形
2	進歩	技術が進歩している	自	技术进步了	主変化形
1	興奮	たちまち私は興奮しました	自	大家顿时兴奋了起来	主変化形
1	自立	精神的に自立する	自	毕业了，马上能够自立了	主変化形
1	沈黙	しばらく洋平は沈黙した	自	他又沉默了	主変化形
1	疲労	心身とも疲労する	自	他感到身心都疲劳了	主変化形
2	活躍	政界で活躍する	自	他在舞台上更加活跃了	主変化形
4	安心	それで私は安心しました	自	这下我就安心了	主変化形
2	独立	子供が独立しました	自	孩子独立了	主変化形
2	下降	支持率が下降する	自	支持率下降了	主変化動
2	激増	都市の人口が激増する	自	学生人数激增了 26 倍	主変化動
2	合流	1. 青谷川と真倉川が合流する 2. 途中で友人と合流した	自	1. 嫩江从伊勒呼里山千里南下, 与松花江双水合流 2. 两派合流了	主変化動
2	失業	会社が倒産して失業する	自	成千的工人失业了	主変化動
2	失恋	彼が失恋した	自	他像是失恋了	主変化動
2	死亡	被害者が死亡した	自	受害人已经死亡	主変化動
2	蒸発	1. 水分が蒸発する 2. 突然妻が蒸発した	自	1. 水分蒸发了 2. 中介公司一夜间卷款蒸发了	主変化動
2	成長	子が立派に成長する	自	孩子们也成长了	主変化動
2	接近	1. 台風が接近する 2. 力量が接近してきた	自	1. 台风接近了 2. 双方立场都接近了	主変化動
2	前進	税制改革は大幅に前進した	自	我们的工作大大前进了	主変化動
2	断水	水道が断水した	自	岛上断水了	主変化動
2	停電	大雨が降って、2回停電した	自	晚上，停电了	主変化動
2	変化	状況が変化している	自	现在情况变化了	主変化動
1	後退	景気が後退した	自	这一观点同过去相比已经后退了	主変化動
1	出血	足が出血した	自	胳膊出血了	主変化動

1	出現	症状が出現する	自	“课程”一词，我国早在古代就出现了	主変化動
1	上昇	失業率が上昇した	自	产量大幅度上升	主変化動
1	勝利	決勝戦で勝利した	自	这一战终于胜利了	主変化動
1	進化	生物が進化しました	自	猴子进化了	主変化動
1	静止	ビデオの画像が静止した	自	画面静止了	主変化動
1	退化	脚力が退化する	自	翅膀退化了	主変化動
1	窒息	水につけると窒息します	自	他窒息了	主変化動
1	沈殿	その白いものが完全に沈殿した	自	水里的杂质沉淀了	主変化動
1	沈没	漁船が沈没した	自	船沉没了	主変化動
1	墜落	宇宙船が墜落した	自	敌机坠落了	主変化動
1	停滞	事務が停滞した	自	经济发展停滞了	主変化動
1	当選	国会議員に当選する	自	他又一次当选了	主変化動
1	到達	通知が到達した	自	书信都到达了	主変化動
1	敗北	我が方は全面的に敗北した	自	自己完全败北了	主変化動
1	破産	事業に失敗して破産した	自	企业 / 计划破产了	主変化動
1	発育	根が発育している	自	机体发育了	主変化動
1	発芽	種が発芽した	自	种子发芽了	主変化動
1	破裂	水道管が破裂した	自	水管破裂了	主変化動
1	沸騰	1. 水が一瞬沸騰した 2. 議論が沸騰する	自	1. 锅里的水沸腾了 2. 体育场沸腾了	主変化動
1	変遷	時代が変遷する	自	时代变迁了	主変化動
1	滅亡	インカ帝国が滅亡した	自	一个王朝灭亡了	主変化動
1	結晶	鉱物が結晶している	自	到五六十度产品就结晶了	主変化動
1	傾斜	背筋が前に傾斜している	自	天平倾斜了	主変化動
2	延期	選挙が延期された	他	博览会延期了	主変化動
2	骨折	うでの骨が骨折した	自他	胳膊骨折了	主変化動
2	終了	センター試験が終了した	自他	比赛已经終了	主変化動
1	発病	患者が発病した	自他	患者发病了	主変化動
1	発生	事故が発生した	自他	不幸的事故发生了	主変化動
1	破損	商品が破損していました	自他	此书封面已经破損了	主変化動

1	負傷	住民4人が負傷した	自他	有几个同志负伤了	主变化動
2	感動	私は本当に感動した	自	我感动了	客变化形
1	荒廃	森林が荒廃している	自	土地都荒废了	客变化形
1	孤立	1. 島が孤立している 2. 一人で孤立してしまう	自	1. 湖心的小岛孤立了 2. 这样敌人就孤立了	客变化形
1	重複	説明が重複する	自	有些名字漏掉了,有些名字重复了	客变化形
1	調和	自然界の生き物は、環境と調和しています。	自	色彩调和了	客变化形
1	動揺	その知らせに彼の心は動揺した	自	她有些动摇了	客变化形
1	繁栄	世界の経済は今後も繁栄していく	自	经济繁荣了,生活就更好了	客变化形
3	安定	生活が安定している	自	生活总算安定了	
2	普及	携帯電話が普及した	自	现在电话普及了	客变化形
1	確定	内容が確定しました	自他	内容确定了	客变化形
2	集中	1. 人口が集中している 2. 意識が集中する	自他	1. 人口集中了 2. 精力集中了	客变化形
1	充実	内容がさらに充実した	自他	具体的内容充实了	客变化形
1	分散	力が分散している	自他	力量分散了	客变化形
1	公開	情報が公開されています	他	所有的事情都公开了	客变化形
1	誇張	表現が誇張されている	他	话是夸张了,但不无道理	
2	統一	基準が統一されている	他	标准统一了	客变化形
1	緩和	症状が緩和された	他	症状缓和了	客变化形
1	固定	ウィンドーの位置が固定された。	他	形式基本固定了	客变化形
1	閉鎖	工場が閉鎖されています	他	门紧紧闭锁	客变化形
2	開通	鉄道が開通した	自	铁路开通了	客变化動
2	成立	強大な国が成立した	自	次年三月,人民文学出版社成立了	客变化動
2	通過	予算案が通過した	自	宪法终于通过了	客变化動
2	発展	経済が発展している	自	9年多来,我们的经济发展了	客变化動
2	悪化	投資環境が悪化している	自	下半年的外贸环境恶化了	客变化動
1	分裂	1. 党が二つに分裂する	自	1. 党派分裂了	客变化動

		2. 細胞が分裂する		2. 细胞分裂了	
1	変動	物価が変動する	自	一个地区价格变动了,会影响另一个地区	客変化動
1	命中	高射砲の弾が命中した	自	九发子弹都命中了	客変化動
2	増加	海産物の生産も増加した	自	粮食产量增加了	客変化動
2	増大	一時期は仕事の量が増大しました	自	工程量增大了	客変化動
1	拡散	放射性物質が大気中に拡散する	自	毒素已经扩散了	客変化動
2	拡張	血管が拡張している	自他	血管扩张了	客変化動
1	合併	同業のB社と合併した	自他	好几个厂子都合并了	客変化動
1	減少	輸入量が減少している	自他	进口额减少了	客変化動
1	復活	その制度が復活した	自他	奄奄一息的工厂又复活了	客変化動
2	解決	すべての問題が解決した	自他	问题解决了	客変化動
2	回復	手術後視力が回復した	自他	老人的视力恢复了	客変化動
2	拡大	土地の使用範囲が拡大した	自他	劳动保险基金的使用范围扩大了	客変化動
2	完成	作品が完成した	自他	作品完成了	客変化動
2	混合	複数の成分が混合している	自他	三种液体混合了	客変化動
2	実現	彼女の夢が実現しました	自他	这个愿望今天终于实现了	客変化動
2	停止	エンジンが停止した	自他	时间似乎已经停止了	客変化動
2	解散	衆議院が解散した	自他	比赛一结束,队伍就解散了。	客変化動
2	縮小	事業を縮小する	自他	招聘的范围缩小了	客変化動
1	結合	分子が結合する	自他	经济和文化很好地结合起来了	客変化動
1	復興	各種の産業が復興する	自他	这个地区的工业也复兴了	客変化動
1	中断	試合が一時中断する	自他	比赛中断了	客変化動
1	確立	管理体制が確立した	自他	民主制度确立了	客変化動
1	分離	資本と経営が分離している	自他	教育和劳动分离了	客変化動
2	改善	環境が格段に改善した	自他	生态环境改善了	客変化動
1	喪失	会員資格が喪失された	他	选举资格早都已经丧失了	客変化動
1	変革	政治体制が変革された	他	制度变革了	客変化動
2	延長	閉店時間が延長された	他	营业时间延长了	客変化動
2	開始	日本での販売が開始された	他	音乐会开始了	客変化動

3	中止	計画が中止された	他	计划中止了	客変化動
2	変更	出版社の名称が変更された	他	厂名变更了, 产品还是老产品	客変化動
1	破壊	自然環境が破壊されている	他	生态破坏了	客変化動
2	分解	脂肪が分解されます	他	水分解了, 又汇合了	客変化動
3	圧縮	データが圧縮された	他	空气压缩了 / 规模压缩了	客変化動
2	解放	奴隷が解放された	他	奴隶解放了	客変化動
2	開放	市場が開放されている	他	体育馆开放了	客変化動
2	拡充	業務内容が拡充される	他	近年的业务是比以前扩充了	客変化動
2	強化	インターネットの規制が強化された	他	治安力量也强化了	客変化動
2	消耗	体力が消耗された	他	能量有一半都消耗了	客変化動
2	冷凍	鳥肉が冷凍されている	他	食物冷冻后, 有助于杀死一些病菌	客変化動
1	解除	通行禁止が解除された	他	现在禁令解除了	客変化動
1	改良	製造方法が改良された	他	耕种方法改良了	客変化動
1	革新	技術が革新された	他	技术革新了	客変化動
1	形成	多様なネットワークが形成された	他	灵感迸发, 一个新方案形成了	客変化動
1	合成	タンパク質が合成された	他	早在 1980 年, 靛蓝就合成了	客変化動
1	再現	当時の姿が再現されている	他	昔日的院子在眼前再现了	客変化動
1	削減	教育予算が削減されている	他	经费削减了	客変化動
1	振興	伝統文化が振興されている	他	农业振兴了	客変化動
1	増強	免疫力が増強された	他	免疫力增强了	客変化動
1	打開	事態が打開される	他	局面打开了	客変化動
1	達成	目標が達成された	他	近期的工作目标达成了	客変化動
1	廃棄	施設は廃棄されている	他	工厂已经废弃了	客変化動
1	爆破	列車が爆破された	他	玻璃杯爆破了	客変化動
1	暴露	彼の本性が暴露されている	他	叛徒的嘴脸彻底暴露了	客変化動
1	混同	両者が混同されている	他	分好类的垃圾一上车又混同了	客変化動
1	中和	胃酸が中和される	他	酸碱中和了	客変化動
2	満足	条件が満足されている	他	这些条件都满足了	客変化動

付録Ⅳ 教育資料の語彙リスト

◆ 「になる」の使用可否の規則に該当する語の一覧

<p>“了”、“没” が使えない</p>	<p>・「になる」が使える</p> <p><ナ形容詞> (58 語)</p> <p>有名, 簡単, 特別, 偉大, 确实, 可能, 貴重, 巨大, 謙虚, 重大, 重要, 純粹, 新鮮, 率直, 単純, 透明, 特殊, 独特, 微妙, 有効, 優秀, 有利, 容易, 幼稚, 一樣, 円滑, 円満, 活発, 簡易, 頑固, 簡素, 強硬, 強烈, 厳密, 巧妙, 自在, 迅速, 盛大, 切実, 大胆, 多様, 忠実, 著名, 頻繁, 明白, 明瞭, 明朗, 猛烈, 勇敢, 優美, 有力, 良好, 露骨, 妥当, 貧乏, 膨大, 軽快, 失礼</p> <p>・「になる」が使えない</p> <p><サ変動詞> (14 語)</p> <p>一致, 低下, 矛盾, 繁盛, 憤慨, 密集, 平均, 窮乏, 不足, 乾燥, 悲観, 樂觀, 抽象, 謙遜</p>
<p>“了”、“没” が使える</p>	<p>・「になる」が使える</p> <p><ナ形容詞> (4 語)</p> <p>明確、豊富、健全、温暖</p> <p><サ変動詞> (4 語)</p> <p>変更、中止、廃止、延期</p> <p>・「になる」が使えない</p> <p><サ変動詞> (149 語)</p> <p>合格, 混雑, 混乱, 成功, 対立, 発達, 流行, 成熟, 氾濫, 腐敗, 膨張, 飽和, 没落, 進歩, 緊張, 失望, 後悔, 絶望, 興奮, 自立, 沈黙, 疲労, 活躍, 安心, 独立, 失敗,</p> <p>下降, 激増, 合流, 失業, 失恋, 死亡, 蒸発, 成長, 接近, 前進, 断水, 停電, 変化, 後退, 出血, 出現, 上昇, 勝利, 進化, 静止, 退化, 窒息, 沈殿, 沈没, 墜落, 停滞, 当選, 到達, 敗北, 破産, 発育, 発芽, 破裂, 沸騰, 変遷, 滅亡, 結晶, 傾斜, 発生, 骨折, 終了, 発病, 破損, 負傷,</p> <p>感動, 荒廃, 孤立, 重複, 調和, 動揺, 繁栄, 安定, 普及, 確定, 集中, 充実, 分散, 公開, 誇張, 統一, 緩和, 固定, 閉鎖,</p> <p>開通, 成立, 通過, 発展, 悪化, 分裂, 変動, 命中, 増加, 増大, 拡散, 拡張, 合併, 減少, 復活, 解決, 回復, 拡大, 完成, 混合, 実現, 停止, 解散, 縮小, 結合, 復興, 中断, 確立, 分離, 改善, 中和, 圧縮, 解放, 開放, 拡充, 強化, 消耗, 冷凍, 解除, 改良, 革新, 形成, 合成, 再現, 削減, 振興, 増強, 打開, 達成, 廃棄, 爆破, 暴露, 混同, 中止, 変更, 延長, 破壊, 変革, 分解, 開始, 喪失, 満足</p>

◆ 「される」の使用可否の規則に該当する語の一覧

<p>[NP2+V+了] と [NP1+V+NP2] が使える</p>	<p>・「される」を使う</p> <p><他動詞> (38) 語</p> <p>圧縮, 解放, 開放, 拡充, 強化, 消耗, 冷凍, 解除, 改良, 革新, 形成, 合成, 再現, 削減, 振興, 増強, 打開, 達成, 廃棄, 爆破, 暴露, 混同, 中止, 変更, 延長, 破壊, 変革, 分解, 開始, 喪失, 満足, 公開, 誇張, 統一, 緩和, 固定, 閉鎖</p> <p>・↑これらの語以外、「する」を使う</p> <p><自動詞> (20) 語</p> <p>感動, 荒廃, 孤立, 重複, 調和, 動揺, 繁栄, 安定, 普及</p> <p>開通, 成立, 通過, 発展, 悪化, 分裂, 変動, 命中, 増加, 増大, 拡散</p> <p><自他両用動詞> (24) 語</p> <p>確定, 集中, 充実, 分散</p> <p>拡張, 合併, 減少, 復活, 解決, 回復, 拡大, 完成, 混合, 実現, 停止, 解散, 縮小, 結合, 復興, 中断, 確立, 分離, 改善, 中和</p>
<p>[NP2+V+了]が使える が、[NP1+V+NP2]が使 えない</p>	<p>・「される」が使えない</p> <p><自動詞> (65) 語</p> <p>合格, 混雑, 混乱, 成功, 対立, 発達, 流行, 成熟, 氾濫, 腐敗, 膨張, 飽和, 没落, 進歩, 緊張, 失望, 後悔, 絶望, 興奮, 自立, 沈黙, 疲労, 活躍, 安心, 独立</p> <p>下降, 激増, 合流, 失業, 失恋, 死亡, 蒸発, 成長, 接近, 前進, 断水, 停電, 変化, 後退, 出血, 出現, 上昇, 勝利, 進化, 静止, 退化, 窒息, 沈殿, 沈没, 墜落, 停滞, 当選, 到達, 敗北, 破産, 発育, 発芽, 破裂, 沸騰, 変遷, 滅亡, 結晶, 傾斜, 発生, 骨折</p> <p><自他両用動詞> (5) 語</p> <p>失敗, 終了, 発病, 破損, 負傷</p> <p>・「される」が使える</p> <p><他動詞> (1) 語</p> <p>延期</p>

謝 辞

本論文の執筆のあたり、多くの方々にお世話になりました。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

博士後期課程の指導教官である一橋大学の庵功雄先生には大変お世話になりました。ご多忙ながらも、いつも研究の発想、論文の書き方までご丁寧にご指導いただきました。先生のご指導無くして論文の完成まで研究ができませんでした。庵先生のご指導のもとで研究できることは光栄の極みです。先生に教えていただいた「真正さを求める」、「学習者の目線に立つ」といった理念を一生の宝物にし、研究者・教育者として問い続けて、努めてまいりたいと思います。心より深くお礼申し上げます。

博士後期課程の副指導教官である一橋大学の太田陽子先生には、いつもゼミでお世話になっており、研究の方法論、教育上への応用の理念について、貴重なご指摘とご助言を賜りました。今後の研究と教育の実践に活かしたいと思います。心より深く感謝いたします。

研究生時代に、東京外国語大学の望月圭子先生、佐野洋先生、三宅登之先生、川村大先生、早津恵美子先生、麗澤大学の井上優先生、東京大学の尾上圭介先生は、私を研究の道に導いてくださり、この場を借りて深く感謝いたします。

本論文の調査には、多くの方々に協力していただきました。皆様のおかげで、論文の完成に至りました。ここで皆様にお礼申し上げます。

本論文のネイティブチェックにあたってくださった一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程の三好優花さまには、ご丁寧にご指摘ご訂正いただき、深く感謝いたします。

最後に、長い留学生生活を後押ししてくれて、全力で私を支えてくれた両親に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。